

ME GU MI
目久美遺跡

IX・X

2003. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

序

米子市は、鳥取県の西部、日本海側に位置し、山陰の商都と称される鳥取県西部の中核都市です。米子市では道路建設等、交通網の整備が急速に進められ、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、この地域の歴史を考えるうえで重要な遺跡が数多く発見されています。

本書は、平成13年度から平成14年度にかけて実施した、米子市目久美町に所在する目久美遺跡の第9次・第10次発掘調査報告書です。目久美遺跡は、昭和8年に新加茂川の開削工事中に発見され、山陰地方を代表する縄紋、弥生時代の遺跡として、周知されています。また昭和57年には山陰地方で初めて弥生時代の水田跡が確認され注目を集めました。このほかにも保存状態のよい遺物が数多く出土し、当時の人々の暮らしを探る上での貴重な資料を数多く提供しています。

今回実施しました第9次・10次調査では、弥生時代の水田跡のほか、縄紋時代に、かつてこの地が海であったことを示す資料を得ることができました。これらの成果は、今後の研究における重要な資料になるものと思われます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたって、多大なご理解とご協力を頂きました、地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました方々、関係各位に心から御礼を申し上げます。

平成15年（2003年）3月

財団法人 米子市教育文化事業団
理事長 山岡 宏

例 言

1. 本書は、鳥取県が計画する、都市計画道路車尾目久美町線道路改良工事に伴い、平成13・14年度に米子市目久美町内で実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 本書における方位は、全て真北を示し、表記した座標値は、国土座標第V系の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
4. 本書に掲載した第2図は、平成7年8月1日、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」を加筆して使用した。
5. 本書に掲載した第3図の地形図は、昭和63年10月修正米子境港都市計画図（米子市）を複写して掲載している。
6. 調査の実施に当たって、空中写真撮影業務の一部を株式会社ワールドに、出土遺物の保存処理を吉田生物研究所、古環境研究所に、自然科学分析を古環境研究所、文化財調査コンサルタント、吉田生物研究所の各社にそれぞれ委託した。
7. 発掘調査によって作成された記録及び出土遺物は、米子市教育委員会が保管している。
8. 本書は、平木、佐伯が分担して執筆し、佐伯が編集作業を行った。
9. 現地調査及び報告書作成には多くの方々のご指導、ご協力をいただいた。明記して感謝いたします。
(敬称略) 井上智博 上原真人 扇崎由 国田俊雄 斎野裕彦 下江健太 中川寧 中森祥 西尾克巳
浜田真人 濱田竜彦 濱隆造 別所秀高 松井一明 光谷拓実 山内紀嗣 山田昌久

凡 例

1. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗り、その他の遺物は断面を白抜きで示した。
2. 本文、挿図及び写真図版中の遺物番号は一致する。
3. 遺跡の略号は、第9次調査がME9、第10次調査（第1工区）がME10、第10次調査（第2工区）がME10-2である。
4. 石器の重量測定には、新光電子社製DJ-3000を使用した。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経緯 (佐伯)	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	2
第2章 目久美遺跡の位置と環境 (佐伯)	3
第1節 目久美遺跡の位置	3
第2節 目久美遺跡の歴史的環境	3
第3節 猿ヶ土手の伝承	6
第3章 目久美遺跡第9次調査 (平木)	9
第1節 調査の経過と方法	9
第2節 調査区内の堆積	10
第3節 縄紋時代後期から弥生時代前期の遺構と遺物	19
第4節 弥生時代中期から後期の遺構と遺物	36
第5節 古墳時代以降の遺構と遺物	37
第6節 小結	38
第4章 目久美遺跡第10次調査 (第1工区) (平木)	41
第1節 調査の経過と方法	41
第2節 調査区内の堆積	41
第3節 縄紋時代の調査	46
第4節 弥生時代の遺構	59
第5節 遺物包含層	76
第6節 古墳時代以降の遺構と遺物	90
第7節 小結	91
第5章 目久美遺跡第10次調査 (第2工区) (佐伯)	99
第1節 調査の経過と方法	99
第2節 調査区内の堆積	100
第3節 縄紋時代前期から後期の調査	102
第4節 縄紋時代晩期から弥生時代中期中葉の調査	105
第5節 弥生時代中期の調査	109
第6節 古墳時代前期の調査	111

第7節	古墳時代後期の調査	112
第8節	奈良時代から近代の調査	114
第9節	遺構に伴わない遺物	115
第10節	小結	120
第6章	特論	123
第1節	目久美遺跡第8～10次調査における古環境解析（渡邊・三瓶・澤井）	123
第2節	目久美遺跡第10次調査S D 0 4に見られる古流向について（田中）	155
第3節	目久美遺跡第9次調査出土木製品の樹種調査結果（汐見・岡田）	159
第4節	目久美遺跡第10次調査出土木製品の樹種調査結果（吉田生物研究所）	161
第5節	目久美遺跡第10次調査出土の盾表面の赤色顔料について（本吉・岡田）	163
第6節	目久美遺跡第9次・10次調査における種実同定（古環境研究所）	164

写真図版

報告書抄録

第1章 調査の経緯

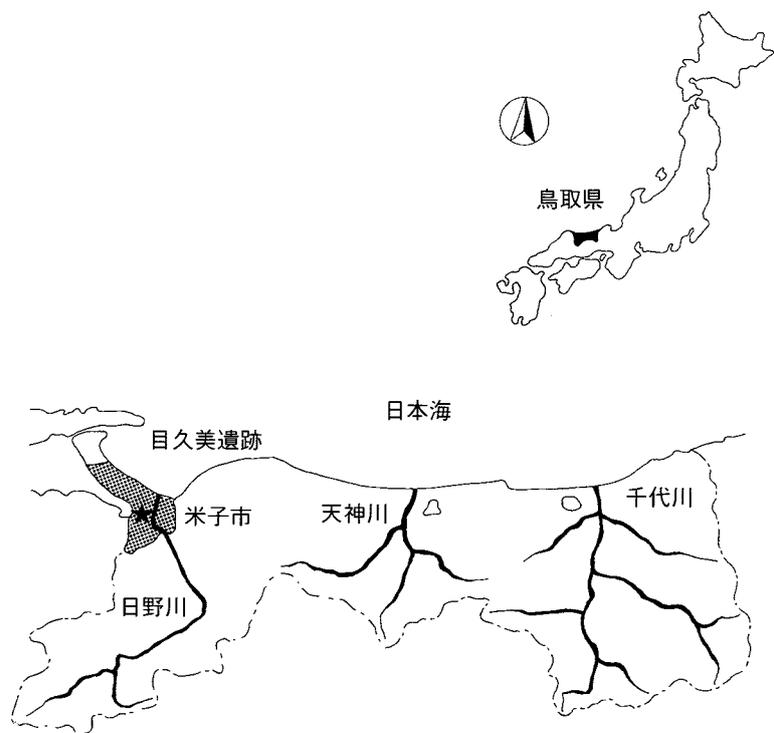
第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県により進められている、都市計画道路車尾目久美町道路改良工事を原因とする、埋蔵文化財の保護を目的としたものである。

この都市計画道路車尾目久美町道路改良工事については、これまでに路線上に所存する遺跡の取り扱いについて関係機関で協議され、平成7年度より長砂第3遺跡、長砂第4遺跡、目久美遺跡第5次調査、目久美遺跡第6次調査、目久美遺跡第8次調査の各事業が財団法人米子市教育文化事業団により実施されている。

今回実施した第9次・第10次調査地点については、米子市教育委員会により、平成12年度に実施された試掘調査の結果、遺物・遺構の存在が確認されたため、この地点における遺跡の存在が明らかとなった。

このため鳥取県米子土木は、米子市教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会に提出し、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を実施することとなった。



第1図 米子市の位置

第2節 調査の体制

発掘調査は以下の体制で行われた。

平成13年度（第9次調査）

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

理事長 森田 隆朝（米子市長）

埋蔵文化財調査室

室長 妹澤佐智夫

次長 矢倉 紀夫

調査担当 主任 平木 裕子

臨時職員 遠本富代 篠田明子 福嶋昌子 森田静香 森井あづさ

平成14年度（第10次調査）

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

理事長 森田 隆朝（米子市長）平成14年5月28日まで

山岡 宏（米子市教育長）平成14年5月29日より

埋蔵文化財調査室

室長 妹澤佐智夫

次長 矢倉 紀夫

調査担当 主任 平木 裕子（第1工区）

調査員 佐伯 純也（第2工区）

臨時職員 遠本富代 篠田明子 福嶋昌子 森田静香 森井あづさ

第2章 目久美遺跡の位置と環境

第1節 目久美遺跡の位置

目久美遺跡は、鳥取県米子市目久美町に所在する縄紋時代から近世の複合遺跡である。

米子市は、総面積99.46km²、人口約14万人を有する鳥取県西部の中核都市であり、古代の行政区分では、伯耆国会見郡、汗入郡に属する地域であった。

地形的には、米子市の東側に位置する大山（標高1,729m）の造山活動によって形成された火山灰台地と、市の中心を北流する日野川の沖積作用によって形成された米子平野部と弓ヶ浜半島部に大別される。

遺跡は、JR米子駅の東南約500mの地点に位置し、遺跡の南側に位置する行者山（標高128m）から伸びる丘陵裾部一帯に展開しているものと考えられる。第10次調査地点の南西部には、行者山から伸びる小規模な丘陵が存在し、第9次調査地点北東部に所在する小丘陵との接点に当たる。この二つの丘陵を結ぶ道路は、現在、猿ヶ土手と呼ばれる堤防状の高まりがあり、南側に所在する池ノ内集落との境界となっている。現在の目久美遺跡周辺は、旧国鉄鉄道学園の校地建設によって、南西部にあった小丘陵が削平されたほか足尾山から伸びる独立丘陵も姿を消し、多く見られた水田も市街化してその数を減らしている。

第2節 目久美遺跡の歴史的環境（第2図）

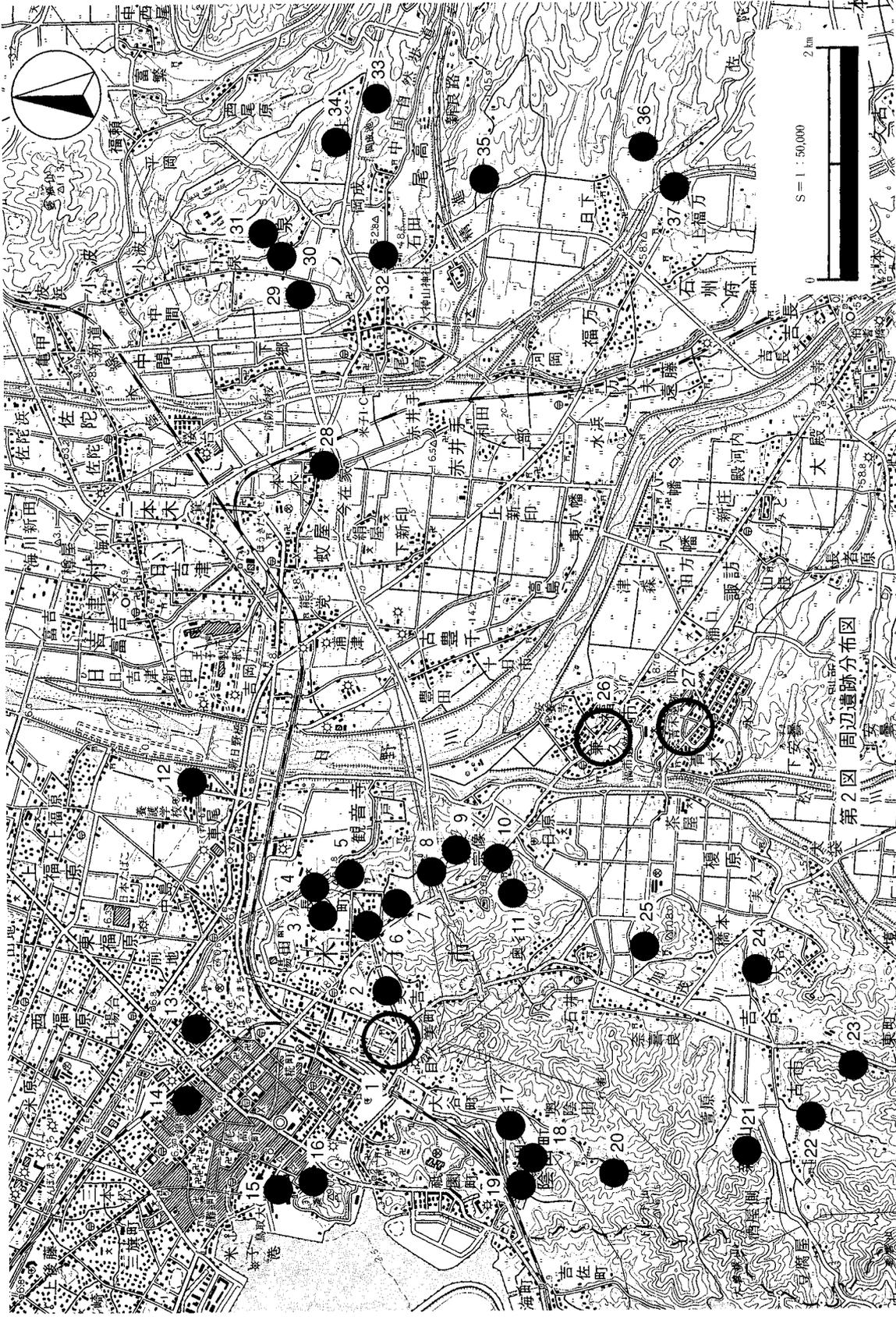
縄紋時代

米子市内では、旧石器時代から縄紋時代草創期に該当する遺跡は確認されていないが、尖頭器の出土例が奈喜良遺跡（25）、陰田第6遺跡（18）、橋本徳道西遺跡（24）などで確認されており、断片的ながら目久美遺跡の周辺で、狩猟を基盤とする人間の活動があったことを窺わせる。縄紋時代早期には、大山の西麓、標高75m付近の微高地上に位置する上福万遺跡（37）、泉中峰・泉前田遺跡（30、31）、新山山田遺跡（21）で押型紋土器が確認されており、これらが米子市内最古の集落遺跡と考えられる。前期の遺跡は、目久美遺跡のほか、陰田第9遺跡（17）、吉谷銭神遺跡（23）、中期には目久美遺跡、陰田第7遺跡（19）、後期には目久美遺跡、喜多原第4遺跡（34）、古市河原田遺跡（22）があり、これらの遺跡から土器や石器などの遺物が出土している。縄紋時代の遺構に関する類例は、落とし穴状の土坑以外は少なく、配石・集石遺構、貯蔵穴などが見つかっている程度に過ぎない。また目久美遺跡第8次調査では、縄紋時代前期に形成されたと見られる波食台が検出されており、縄紋時代の海面変動に関する資料が得られている。

弥生時代

縄紋時代晩期から弥生時代前期には、海退によって生じた低湿地を利用した農耕が行われていたらしく、目久美遺跡をはじめとして、長砂第4遺跡（3）、米子城跡第21遺跡（15）などの低湿地遺跡で弥生時代前期の粘土層から、プラントオパールを検出例が見られる。また、このころから急激に集落の数が増加しており、集落の選地にあたって、低湿地に隣接する地点が好んで選ばれたためであろう。遺跡数の増加も、各地に分散する低湿地の開発に伴って進行した現象と考えられる。中期には、前葉段階の資料は少なく、目久美遺跡、長砂第1遺跡（6）、古市河原田遺跡（22）などにみられるが、中期中葉から後葉にかけて、集落の規模が拡大する一方で、陰田第6遺跡（18）や、青木遺跡（27）のように、丘陵部に集落を形成する動きが見られる。後期には、日野川右岸の尾高浅山遺跡（35）、日下寺山遺跡（36）のような丘陵の高所に環濠を巡らす遺跡が出現し、政治的な緊張状態のあったことが推察される。今のところ日野川左岸地域では、こうした環濠遺跡は見つかっていないものの、集落の立地や規模が縮小するなどの変化が起こっており、政治的な様相についても興味を持たれる。

- 1・口久美遺跡
- 2・池ノ内遺跡
- 3・長砂第4遺跡
- 4・長砂第3遺跡
- 5・水道山古墳
- 6・長砂第1遺跡
- 7・長砂第2遺跡
- 8・東宗像遺跡
- 9・東宗像古墳群
- 10・宗像前田遺跡
- 11・宗像古墳群
- 12・上福原上新田遺跡
- 13・博芳町遺跡
- 14・錦町第1遺跡
- 15・米子城跡21次
- 16・米子城跡33次
- 17・陰田第9遺跡
- 18・陰田第6遺跡
- 19・陰田第7遺跡
- 20・陰田広畑遺跡
- 21・新山田遺跡
- 22・古市河原田遺跡
- 23・吉谷銭神遺跡
- 24・橋本徳道西遺跡
- 25・奈喜良遺跡
- 26・福市遺跡
- 27・青木遺跡
- 28・今在家下井ノ上遺跡
- 29・尾高御建山遺跡
- 30・泉中峰遺跡
- 31・泉前田遺跡
- 32・尾高城跡
- 33・岡成第9遺跡
- 34・喜多原第4遺跡
- 35・尾高浅山遺跡
- 36・日下寺山遺跡
- 37・上福万遺跡



第2図 周辺遺跡分布図

目久美遺跡で本格的な水田遺構が形成されるのが弥生時代中期以降である。第1次調査では、3面の水田が確認されたほか、木製の耕作具、石包丁、石鍬などの遺物が出土している。目久美遺跡では、後期に入ると、遺物の出土量が減少する。第6次調査では弥生時代中期末までに堆積した洪水砂層とそれを掘り込んだ幅6m、深さ3mの水路跡が出土しており、その水路もその後の洪水で埋もれている状況が確認されている。また目久美遺跡の東側に隣接する池ノ内遺跡(2)では、弥生時代後期より水田の耕作が始まっており、耕作地が移動しているものと考えられる。このような状況から、弥生時代後期初頭段階の中海沿岸の地において、何らかの自然災害が起り、集落が移動を余儀なくされた可能性が考えられており、陰田第6遺跡(18)などの中期集落の多くが丘陵部に立地している事実とも関連があるものと考えられる。

また加茂川中流に位置する宗像前田遺跡(10)では、川の流れをまとめるために作られたと見られる大規模な堰が見つかり、加茂川中・下流域の集落の水源に関わる施設と考えられる。流域には、目久美遺跡を始めとして、東宗像遺跡(8)、長砂第3遺跡(4)、米子城跡21次調査地点(15)など中期の遺跡が点在しており、これらの集落間関係についても一考を促す資料である。

これまでの目久美遺跡の調査では、調査された地点が水田部とそれに面した微高地部分のみであり、人々が居住した地点が判明していない。おそらく水田に面した丘陵の上部や斜面などに居住していたものと考えられるが、そこまでは調査の手が及んでおらず、目久美遺跡の全体像を明らかにする手がかりはつかめていない。

古墳時代以降

目久美遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての遺物は、少量ながらも出土しており、近隣に該期の遺跡が存在するものと考えられる。ただ遺構は見つかっておらず、実態については不明である。周辺には、弥生時代後期から古墳時代後期の水田遺構が検出された池ノ内遺跡(2)、古墳時代中期の集落が長砂第3遺跡(4)で見ついている。古墳については、目久美遺跡の東1kmの地点に八神鏡が出土したことで知られる水道山古墳(5)があり、さらに南側には、宗像古墳群(11)、東宗像古墳群(9)などの群集墳がみられる。

古代には、目久美遺跡のある米子平野西部は、和名抄に記載のある「会見郡半生郷」に属する地域と考えられている。ただし、これまでに半生郷の存在を裏付ける直接的な資料は得られておらず、その範囲については不明である。遺跡の動向としては、飛鳥・奈良時代の遺跡は、米子市内各所に散在しているが、特に奈良時代後半期に集落の数、規模とも増加する傾向が示されている。また製鉄に関連する遺跡が陰田広畑遺跡(20)などで見つかり、この時期の集落の特色と言える。目久美遺跡では、第5次調査で墨書土器が出土しているほか木簡、人形などが見つかり、近隣に奈良・平安期の施設が存在しているものと考えられる。また平安時代後期段階の資料はあまり見つかっておらず、遺跡としての連続性が掴みにくい状況である。

中世の様相は、西伯耆に関連する文献史料が少なく不明な部分が多いが、尾高城跡(32)の調査で、鎌倉時代の在地領主の屋敷とみられる遺構が見つかり、室町時代には、伯耆国守護代の山名氏一族がこの地を代々支配していたが、応仁の乱以降の戦火は山陰にも飛び火しており、大永4年には、出雲の尼子氏が西伯耆に侵入し、さらなる混乱が続いていた。16世紀末に至って、吉川広家が西伯耆の領主として港山に米子城の築城を始め、朝鮮出兵や大阪夏の陣など、社会的に不安定な状況が続いていたことから、築城はなかなか進展しなかったようである。

近世には、1600年に中村一忠が西伯耆の領主となり、この地を支配したが、1610年から加藤貞泰、池田由之(1617年)へと国替えが続いた後、1632年に鳥取藩主となった池田光仲の家老荒尾氏が米子城預かりとなり、以後明治維新まで荒尾氏によって統治された。また18世紀以降は、米子城郭内の空屋敷や海浜部などの砂丘地が新田開発され、農業生産の基盤が整備された。長砂から目久美にかけての地域でも、地元の豪商、大寺屋による新田開発が行われ、整然とした水田風景が広がっていたものと考えられる。

近代には、廃藩置県により、鳥取県が設置されたものの、明治9年には、鳥根県と合併され、明治14年に再び鳥取県が再設置された。また第9次調査地点の北東部に所在する丘陵裾部には、大正13年に開通した法勝寺電車

の軌道が設置されており、西伯町や米子市南郊の住民の足として昭和42年まで活躍していた。現在は、米子市道笑町に客車が展示保存され、地域の交通を担った法勝寺電車の歴史を今に伝えている。

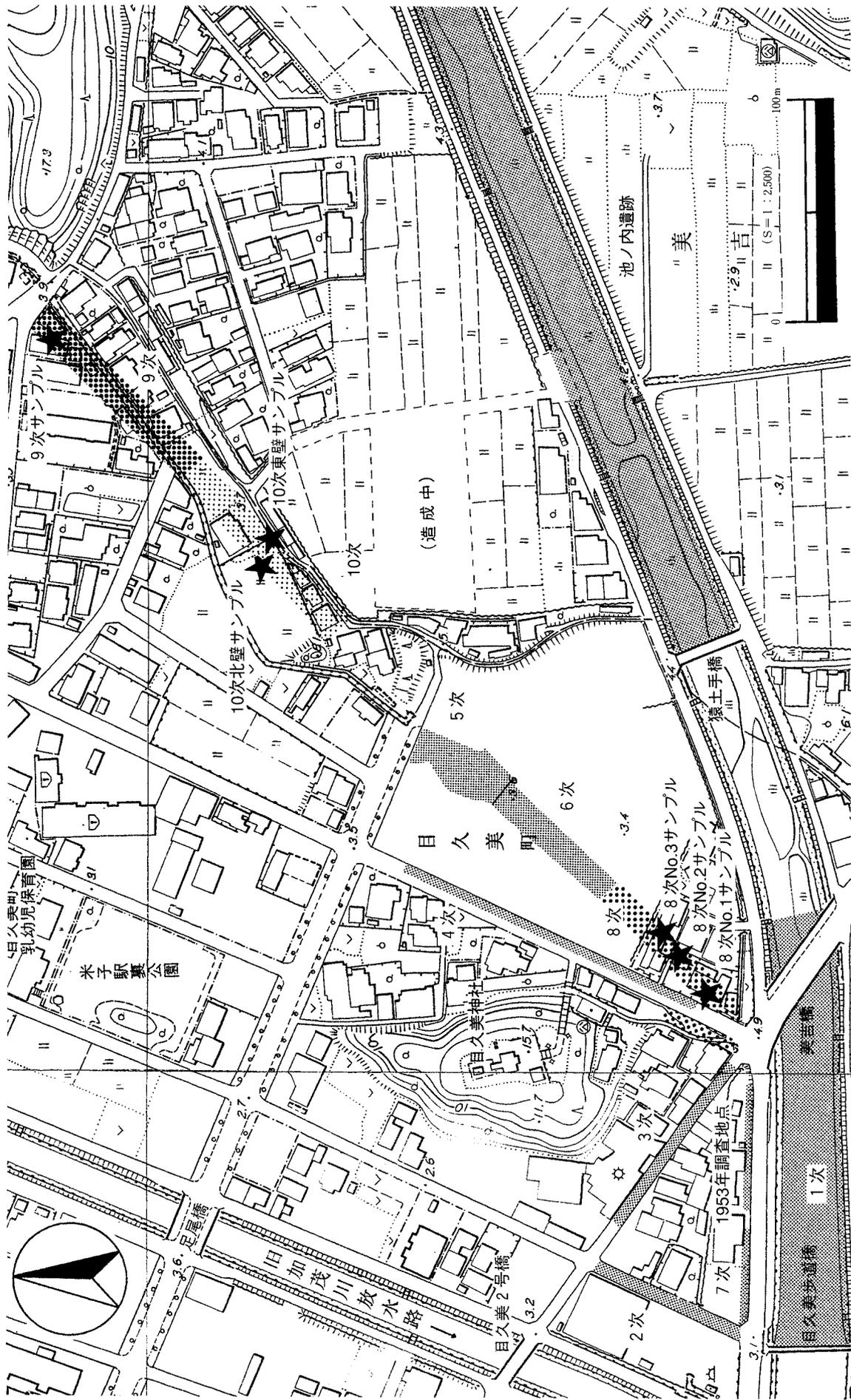
第3節 猿ヶ土手の伝承

調査地点にはかつて、猿ヶ土手と呼ばれる堤防があったという伝承が伝わっている。話の内容は、「洪水に困った村人が、朝一番にここを通った者を人柱にして埋めようと決め、その次の日の朝に、たまたまそこを通りがかった猿回しを人柱にして埋めた」というものである。この話がいつの時代から伝えられたものかは定かではないが、米子市内には、他にも米子城を建てるに当たって人柱を埋めたという伝承も伝わっており、明治頃にはこうした話が人々の間で流布していたものと考えられる。これまでの調査では、加茂川下流域の長砂、目久美付近において、大規模な洪水の痕跡を検出しており、また明治時代にも、大規模な洪水により多数の死者が出たという記録もあることから、猿ヶ土手の人柱伝承も、度々この地を襲った洪水と、それに対抗した人たちの苦勞の跡を伝えるものと考えられる。

参考文献

- 1955年 「目久美」 佐々木古代文化研究室
- 1973年 「国道9号線バイパスに伴う埋蔵文化財分布調査報告書」 鳥取県教育委員会
- 1974年 「中小河川新加茂川放水路改修に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」 鳥取県遺跡調査会
- 1984年 「陰田」 米子市教育委員会
- 1985年 「東宗像遺跡」 鳥取県教育文化財団
- 1986年 「池ノ内遺跡」 米子市教育委員会
- 1986年 「上福万遺跡」 鳥取県教育文化財団
- 1986年 「目久美遺跡」 米子市教育委員会
- 1988年 「米子市下水道祇園第一幹線工事に伴う発掘調査報告書目久美遺跡」 米子市教育委員会
- 1990年 「長砂第1・2遺跡」 米子市教育委員会
- 1991年 「目久美遺跡一下水道目久美町地内枝線その4工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一」 米子市教育委員会
- 1993年 「岡成第9遺跡」 米子市教育文化事業団
- 1994年 「泉中峰・泉前田遺跡」 鳥取県教育文化財団
- 1995年 「目久美遺跡Ⅳ」 米子市教育文化事業団
- 1996年 「新修米子市史 第十三巻 資料編写真」 米子市史編纂協議会
- 1996年 「錦町第1遺跡」 米子市教育文化事業団
- 1996年 「陰田遺跡群」 鳥取県教育文化財団
- 1996年 「宗像前田遺跡」 米子市教育文化事業団
- 1998年 「米子城跡21遺跡」 鳥取県教育文化財団
- 1998年 「目久美遺跡Ⅴ・Ⅵ」 米子市教育文化事業団
- 1998年 「萱原・奥陰田Ⅱ」 米子市教育文化事業団
- 1998年 「長砂第3・4遺跡」 米子市教育文化事業団
- 1999年 「目久美遺跡Ⅶ」 米子市教育文化事業団
- 1999年 「長砂第3遺跡」 米子市教育文化事業団

- 2000年 「新修米子市史 第五卷 民俗編」 米子市史編纂協議会
2000年 「古市遺跡群 2」 鳥取県教育文化財団
2001年 「吉谷銭神遺跡 I」 米子市教育文化事業団



第3図 日久美遺跡調査地点 (星印はサンプル採取地点を示す)

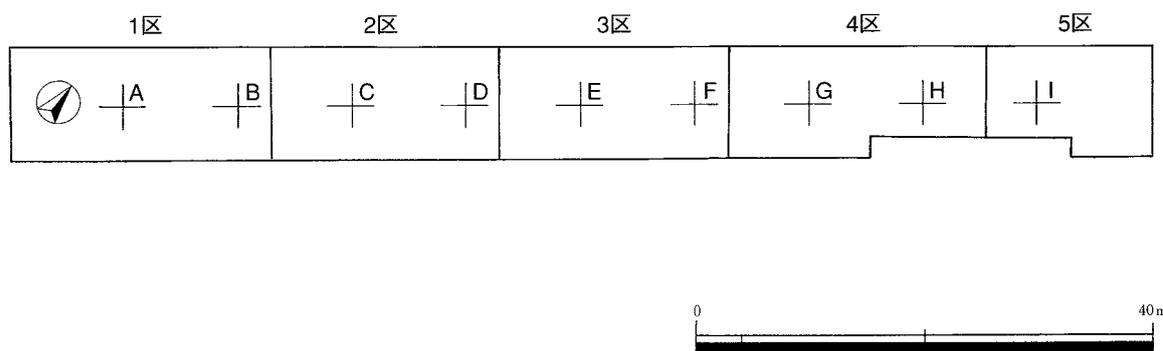
第3章 日久美遺跡第9次調査

第1節 調査の経過と方法

現地調査は、平成13（2001）年5月1日に開始し、平成13（2001）年12月14日まで行った。調査面積は1000㎡で、現地表面から約3.6mの深さまで掘り下げた。調査地は、南側に位置する行者山から伸びる小丘陵と、東側から伸びる小丘陵に挟まれた谷間に位置する。調査地の東側には標高30mの独立丘陵が存在し、調査地の南西約100mの地点においても日久美遺跡5次・6次の調査地（註1）とを隔てる丘陵が僅かに残っている。調査地は、標高3.8mの平坦地であり、近年まで宅地として利用されていたが、昭和40（1960）年代頃までは、一帯には水田が広がっていたものと考えられる。

地表面から深さ約90cmまでは、客土による埋立上であったため、調査はトレンチの周囲に長さ8mの矢板を打ち込み、安全を確保した上で、重機によって上層の埋立土を除去した後、1面ずつ人力にて掘り下げていく方法をとった。調査区の区割りは、矢板のH鋼を設置するために、調査地を5分割して南西側を1区とし、5区まで設定して各区をそれぞれ掘り下げることとなった。このため各区を面的に把握することが困難であった。1区から3区は南東側の矢板に沿って、4区から5区は北西側の矢板に沿ってそれぞれ土層観察用に畔を残した状態で掘り下げながら調査し、主だった層では自然科学分析も行った。また調査中には、かなりの湧水があったため、周囲に排水溝を巡らせてから調査することとなった。

遺物の取り上げ、遺構の実測については、トータルステーションを使用した。調査の結果、弥生時代前期から近世に至る遺構面を確認し、土坑、水路、水田跡等を各面で検出した。また遺物としては、縄紋土器・弥生土器、陶磁器、木製品、石器等の遺物が多量に出土した。



第4図 調査区設定図 (図中のA～Iは、各遺構図に対応する)

第2節 調査区内の堆積 (第5図)

調査地は、南側に位置する行者山から伸びる小丘陵と、東側に存在する独立丘陵に挟まれた地形であったと考えられる。土層観察は、1区から3区では調査区の南東側(第5-2・3図)、4区から5区では北西側(第5-1図)で行った。当初南東側では独立丘陵に続く岩盤を検出できるのではないかと想定していたが、地表面から約3.5mまで掘り下げたが、岩盤を検出することはできなかった。調査区内の堆積は、全域でほぼ同じ堆積状況を示しており、一時期洪水堆積がみられるが、全体的にはほぼ水平に堆積しており、安定した状況であったと考えられる。

- | | |
|--------|-----------------------|
| 第 1 層 | 造成時の埋立土。黄色の真砂土。 |
| 第 2 層 | 灰色粘土 |
| 第 3 層 | 黄灰色粘土 |
| 第 4 層 | 砂粒を含む黒色粘土層。 |
| 第5-1層 | 砂 |
| 第5-2層 | 粘土混り砂 |
| 第5-3層 | シルト |
| 第5-4層 | シルト粘土交互層 |
| 第5-5層 | シルト砂交互層シルト |
| 第 6 層 | 暗灰黒色粘土(水田:弥生時代中期から後期) |
| 第 7 層 | 濃暗黒色粘土 |
| 第 8 層 | 灰色粘土(縄紋時代晩期~弥生時代前期) |
| 第 9 層 | 黒色粘土 |
| 第10-1層 | 第2砂層 |
| 第10-2層 | 第2砂層 |
| 第 11 層 | 暗黒灰粘土 |

第1層は現代の造成による埋立土で、第2~3層は近・現代の堆積層と思われる。

第4層は黒色粘土に砂が比較的多く含まれる層で、耕作土であったと思われる。この層が堆積した時期は不明であるが、中世以降のものと思われる。

第5層は洪水による堆積層で、シルト、砂、粘土が交互に堆積している。一部では20~30cmの川砂が堆積している地点もみられることから、急激に堆積した時期もあったものと考えられる。

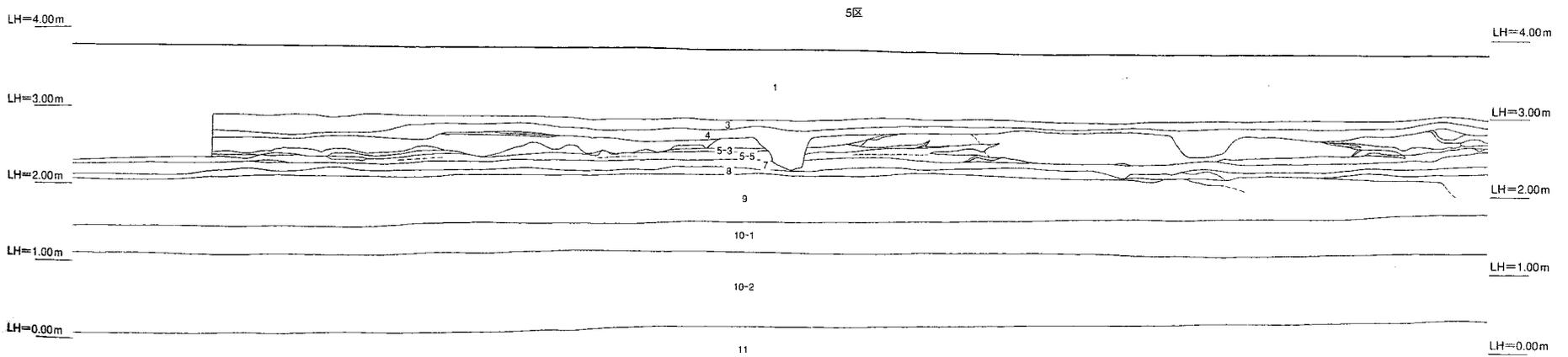
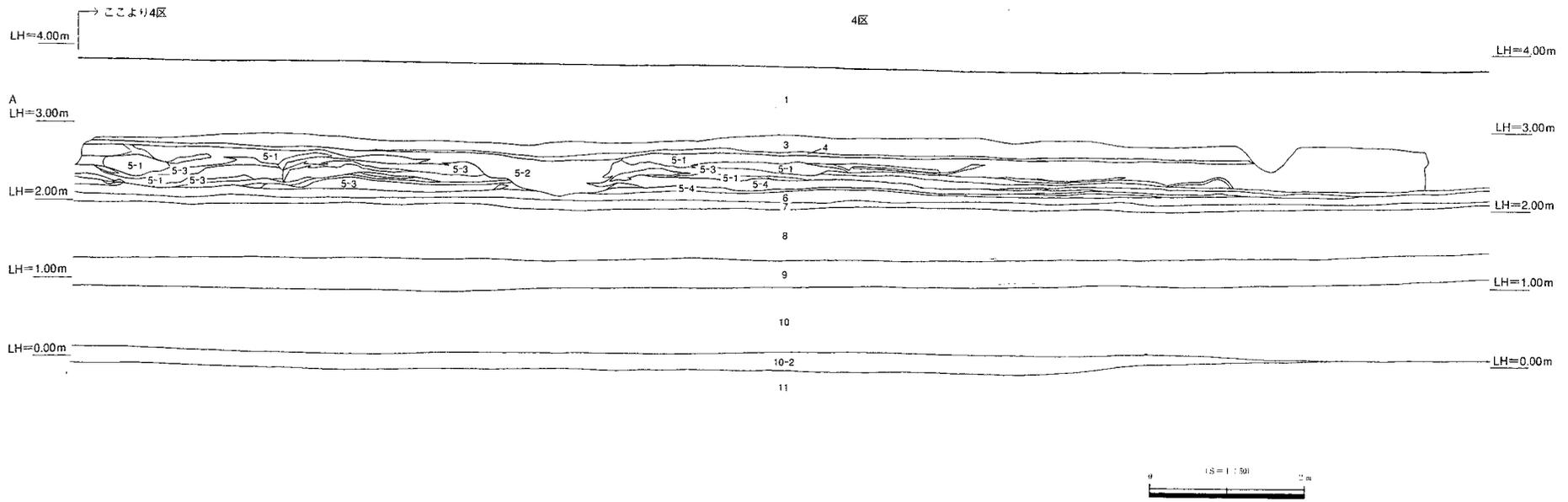
第6層の暗灰黒色粘土層は弥生時代中期から後期の堆積層で、水田に伴うものと思われる畦畔状の遺構を検出している。

第7層は腐食土を多量に含む層で、上位層の影響を受けたものか。

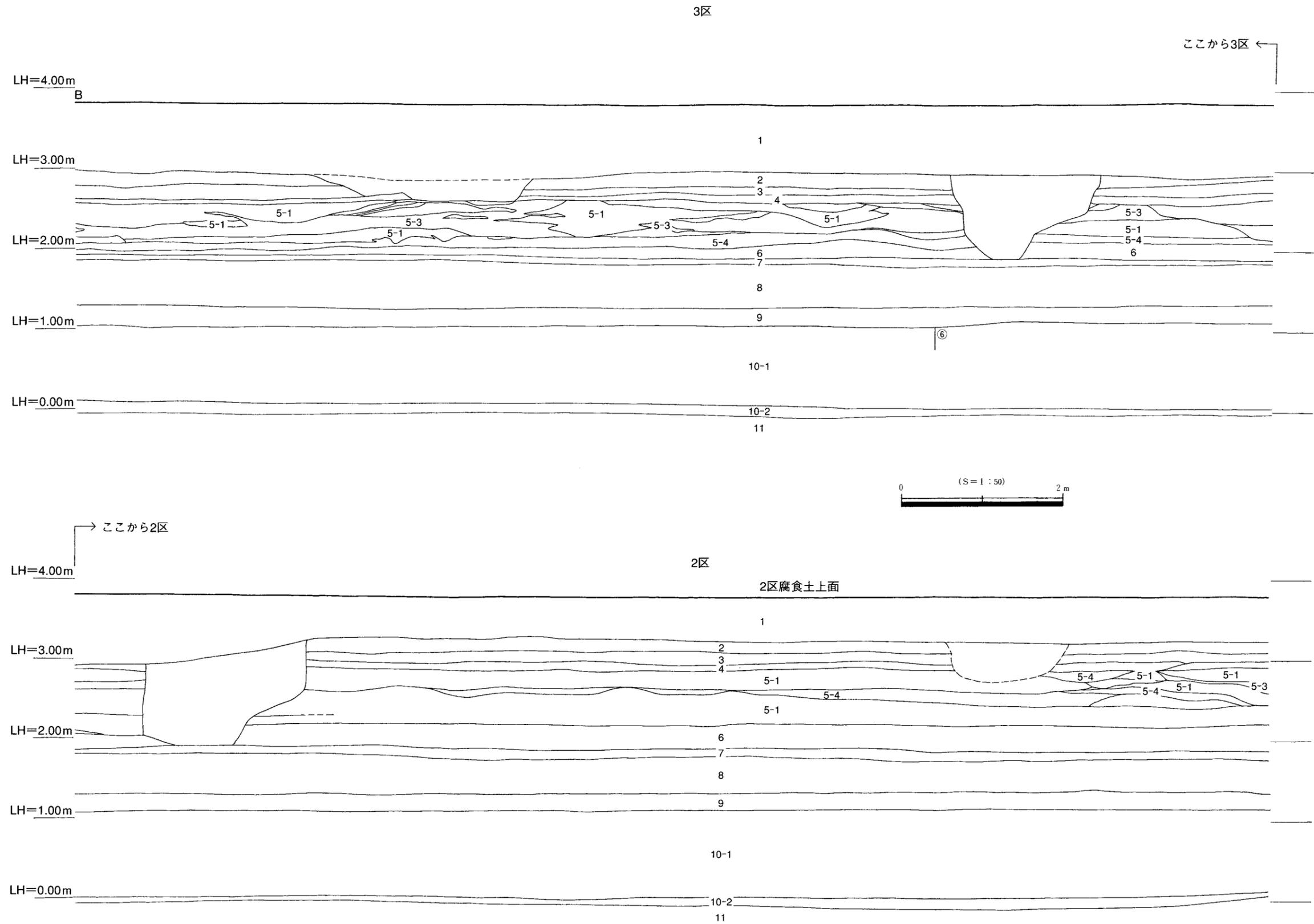
第8層の灰色粘土は縄紋時代晩期から弥生時代前期の堆積層で、約65cmの堆積がみられる。上面で畦畔状の高まりを検出しており、水田耕作土の可能性も考えられる。

第9層は上位層の影響を受けたものか。第10層は約1mの砂の堆積で、砂州の発達により形成されたものと考えられる(参照第6章第1節)。また第10-1層と第10-2層の間には、暗黒灰粘土が約1~2cm程度堆積している部分が見られる。

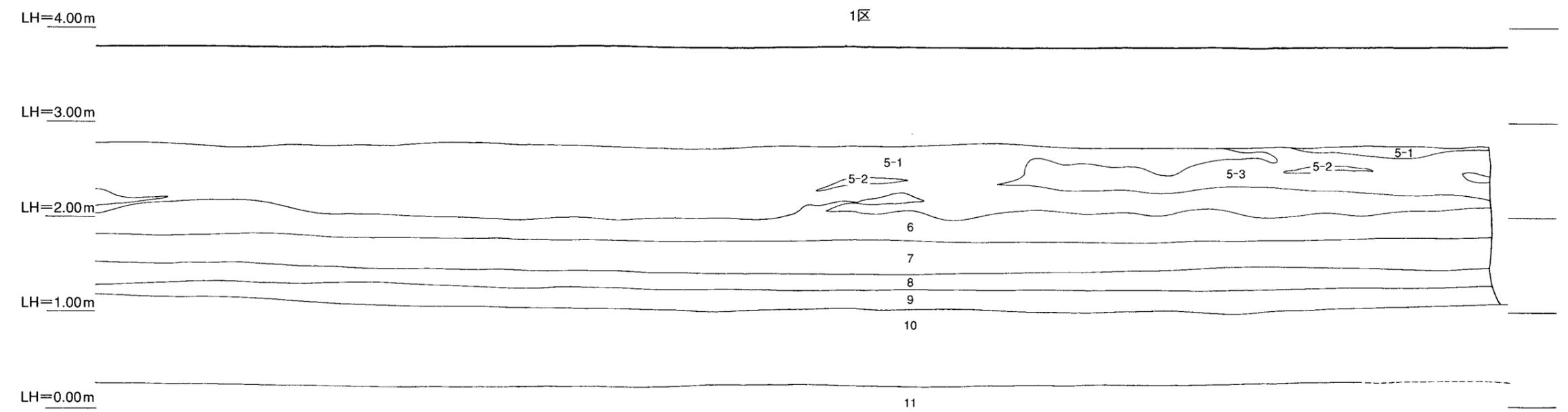
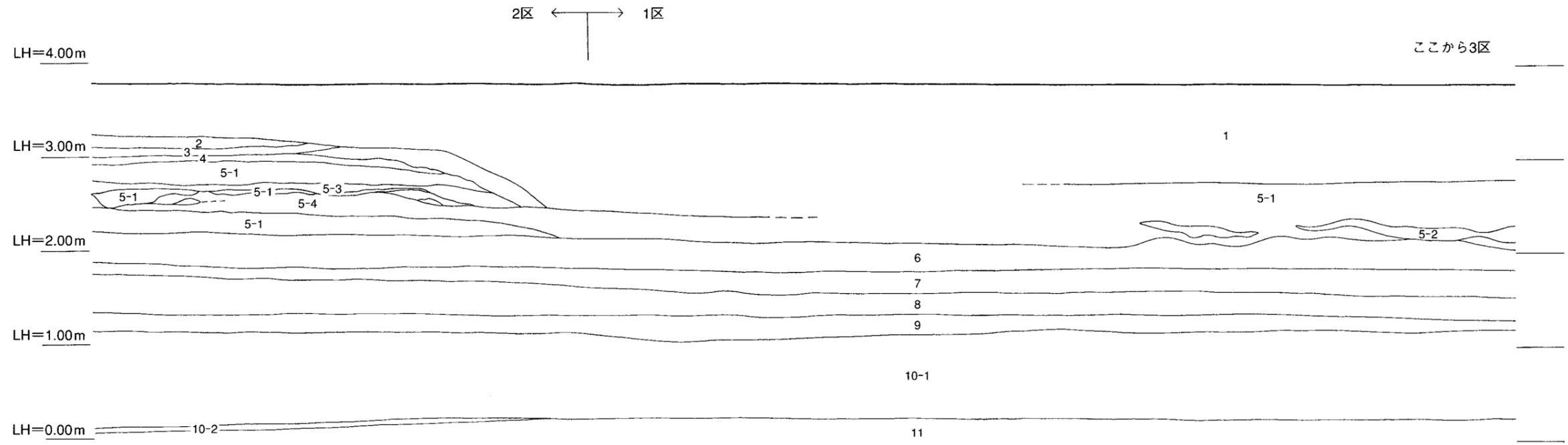
第11層は、縄紋時代の海成層である。



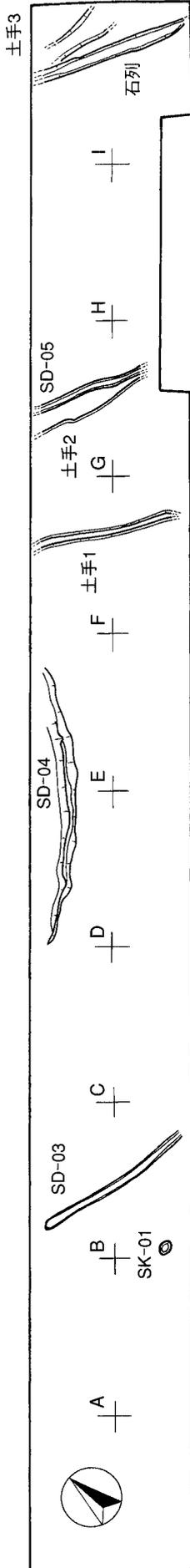
第5-1図 4・5区北西側土層断面図



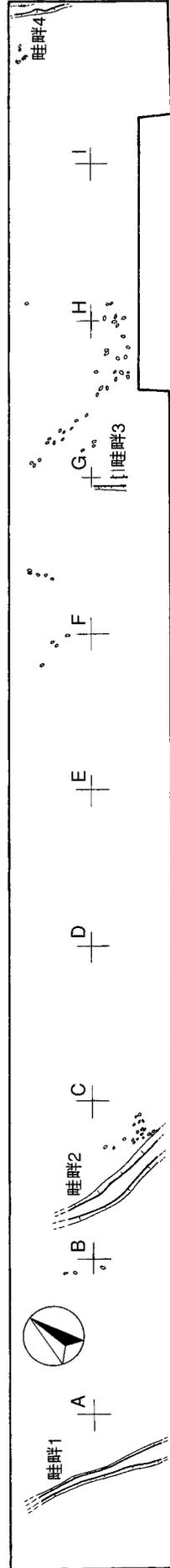
第5-2図 2~3区南東側土層断面図



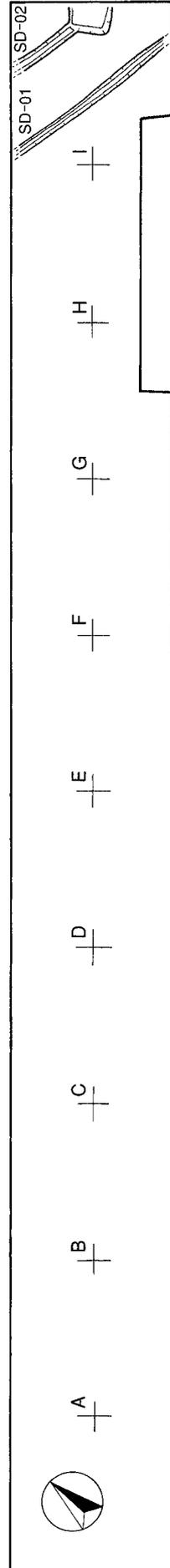
第5-3図 1・2区南東側土層断面図



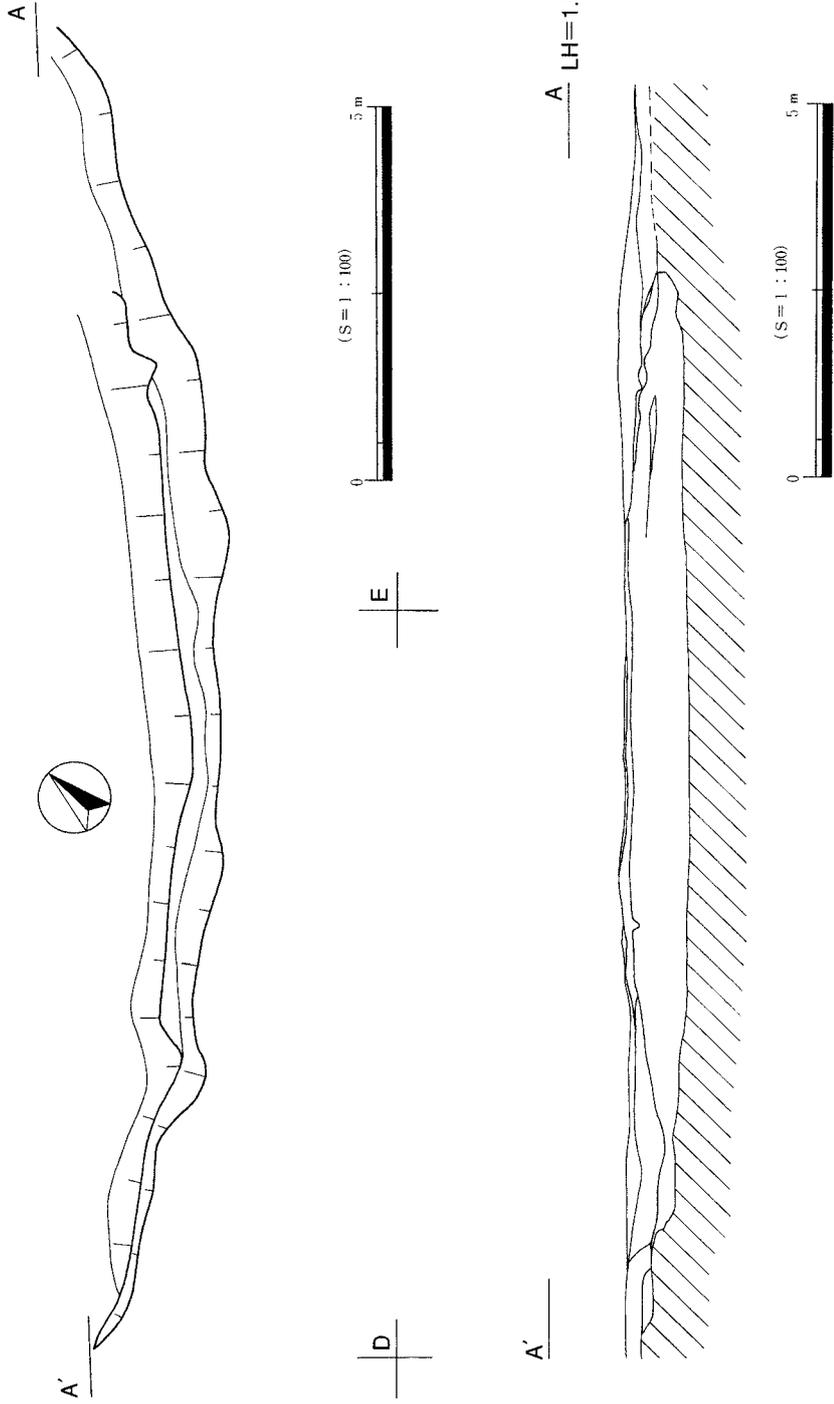
第6-1-1 図 縄紋時代晩期～弥生時代前期の遺構



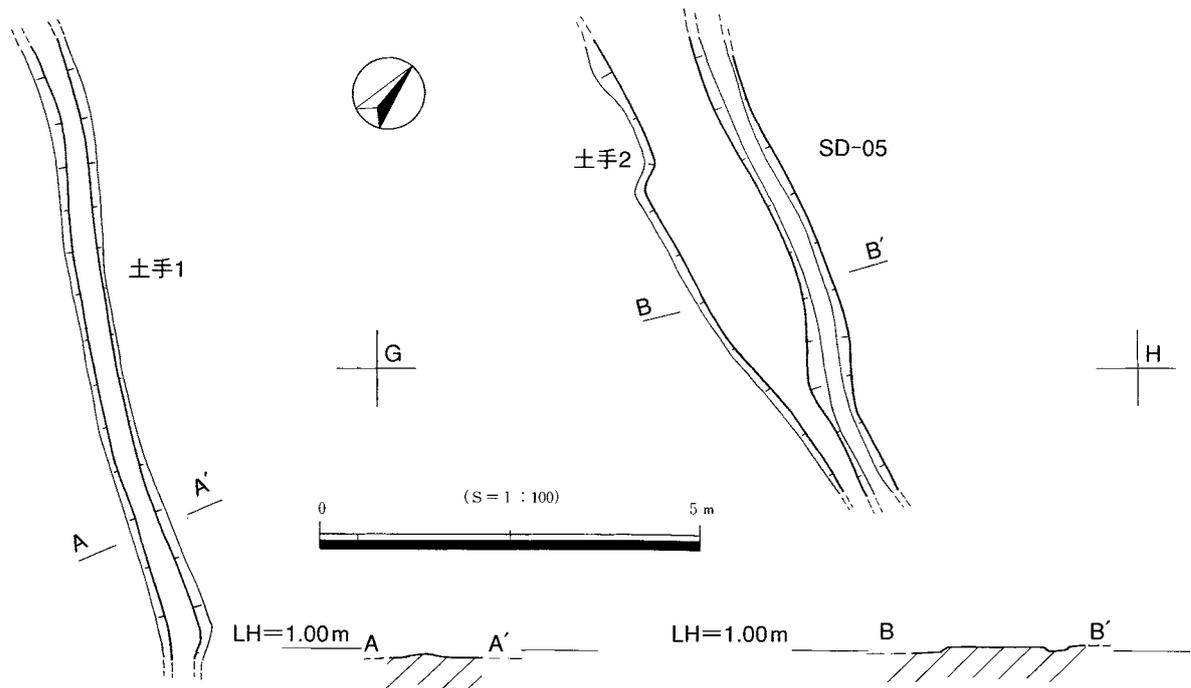
第6-2 図 弥生時代中期～弥生時代後期の遺構



第6-3 図 古墳時代以降の遺構



第7図 SD-04 平面図および断面図



第8図 土手1、2・SD-05平面図および断面図

第3節 縄紋時代後期から弥生時代前期の遺構と遺物 (第6-1図)

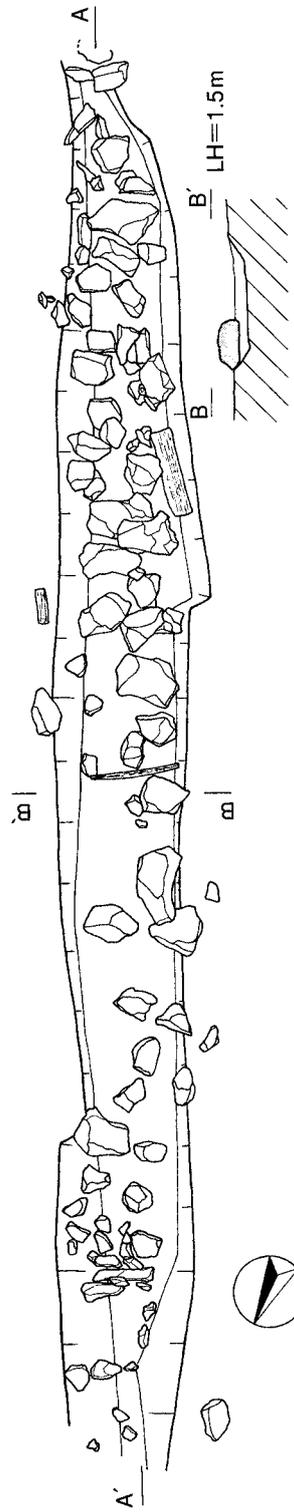
縄紋時代後期の遺構と思われるものは、1区の第2砂層上面で検出した土坑(SK-01)のみである。縄紋時代後期から弥生時代前期の遺構としては、3区で水路状の遺構(SD-04)と4区で畦畔状の遺構および溝状の遺構を、5区で畦畔状の遺構と石列を検出した。

SK-01 (第6-1図)

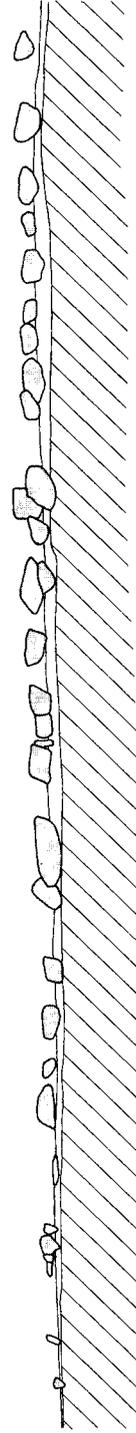
第2砂層上面で検出した、長径90cm、短径62cm、深さ14cmの土坑である。土坑内からは出土遺物が無く、遺構の性格は不明である。

SD-04 (第7図)

3区の北西部で、北東から南西方向に向かって伸びる水路の岸部と思われる遺構を検出した。検出したのは長さ約7m、深さ約40cmの水路状遺構の南東部で、水路の幅や流水方向は不明である。遺構内からは摩滅した土器が数点出土しているが、時期を特定できるものはなかった。しかしながら、第9層を掘り込んでいることから、縄紋時代後期から弥生時代前期にかけて流れていたものと思われる。この水路の堆積状況をみると、内部が均質な砂で埋まっていることから、短期間のうちに埋没したと思われる。



A' _____ LH=2.00m _____ A



0 _____ 2 m
(S = 1 : 100)

第9図 5区石列平面図および断面図

土手状遺構（土手1～3）（第8図）

4区および5区で検出しているが、いずれも東西方向を向く。4区で検出された土手1は、幅30cm、高さ8cmである。この土手は、土手2、土手3と比べて幅が狭いことから畦畔の可能性も考えられる。土手2は一部が崩れているが、最大幅65cm、高さ6cmで、北側に後述するSD-05が平行していることから、土手のような役割であったと考えられる。5区で検出された土手3は、幅1.3m、高さ4cmと幅が比較的広い。（5区は山裾に近く、他の区と多少堆積状況が異なっていたため層的な比較は難しいが、後述する石列が土手1、土手2と同じ時期と考えられることから、石列の下層から検出された土手3は時期的にはやや古いものと思われる。）

溝状遺構（第6-1、8図）

SD-03 1区～2区にかけて検出した。幅55cm、深さ12cmで断面は逆台形を呈する。

SD-05 4区で検出した土手2と並行する。幅35cm、深さ8cmで、断面は逆台形を呈する。

石列（第9図）

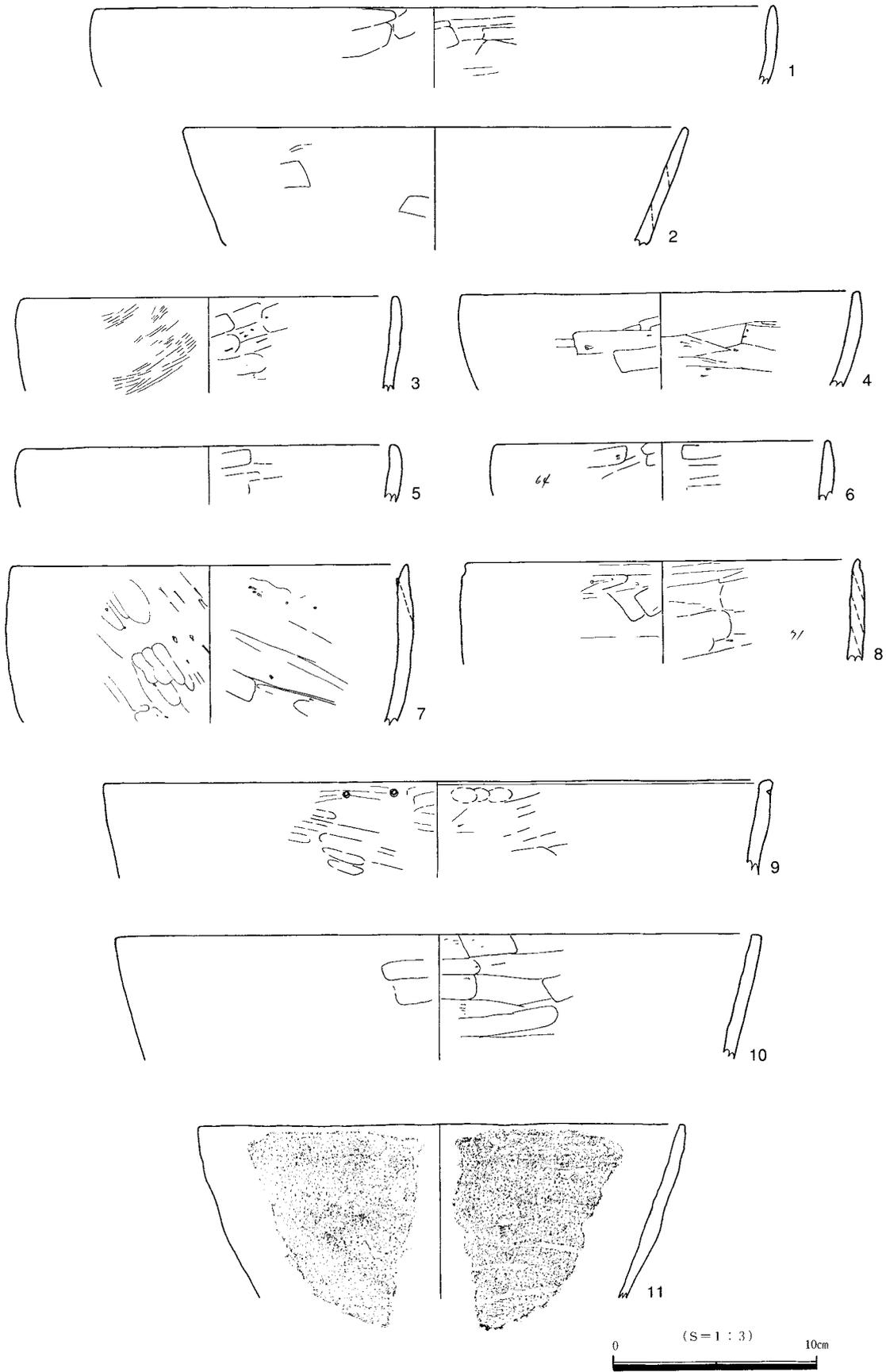
5区で検出した。径20～30cm程の石を中心として、大きいものでも40cm程度の石が東西方向に並ぶ。石と石の間や、石の近くに板状の木片なども埋まっていた。使用されている石は角張った自然石で、検出当初は南東部にある小丘陵からの転落も考えていたが、石を取り除いたところ、地面が幅30～90cm、深さ10cmの溝状に掘り込まれていたことから、人為的な遺構と考えられる。遺構の一部を検出したのみであるため、石列の性格については不明である。

遺物（第10図～第17図）

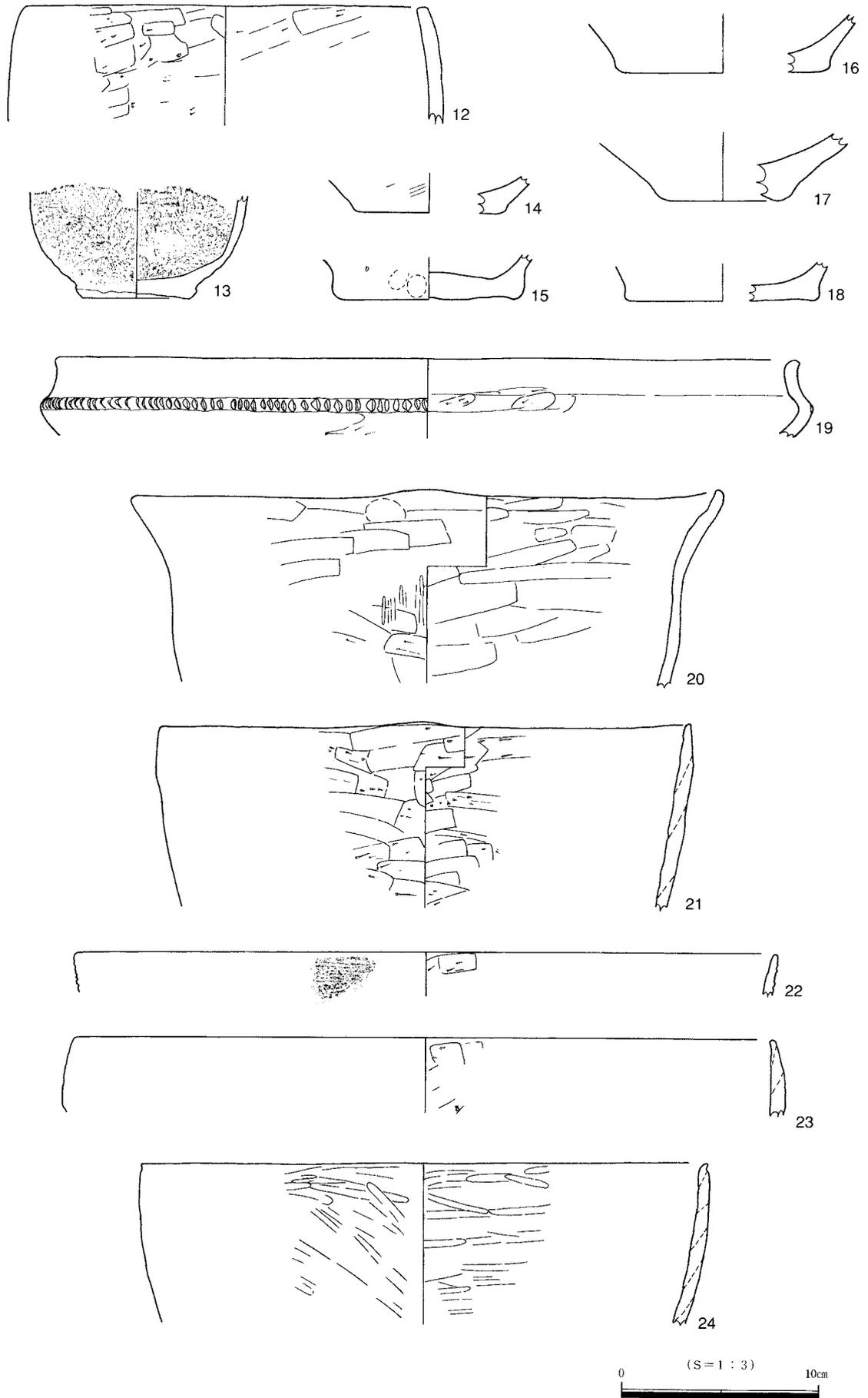
第10～第12図は縄紋時代後期の遺物である。第2砂層中からの出土遺物であることから、流れ込みと思われる。第10図は第2砂層の上層からの出土遺物で、粗製の深鉢あるいは浅鉢形土器の口縁部と底部である。第11図、第12図は第2砂層の下層からの出土遺物で、No.20、21は口縁部が波状を呈する。No.19は口縁部が内傾する鉢形土器でくびれ部に刻目を施す。No.25も深鉢形土器で、口縁端部を丸く処理する。No.28、29は隆帯を持つ鉢形土器の破片である。

今回の調査では、第7層、8層で遺物が集中して出土している。第13図はその状況を示したものであるが、そのほとんどは小片で、実測可能なものは少なかった。

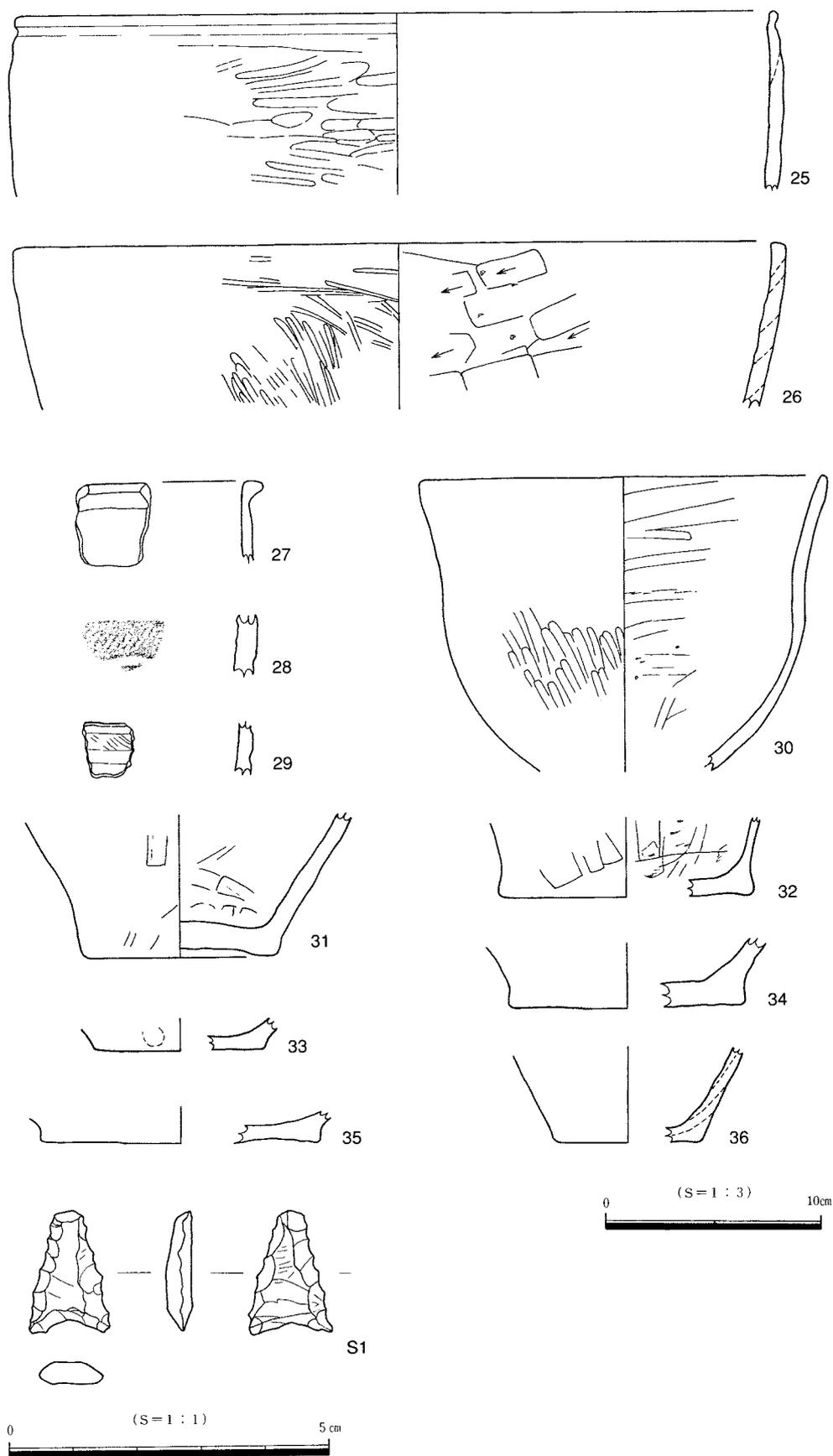
第14図、第15図は、第8層の灰色粘土層から出土した遺物で、No.37～No.43は粗製の鉢形土器の口縁部で、No.43には端部に刻目が施されている。No.44～No.48は突帯紋土器の深鉢形土器で、No.48以外は突帯に刻目を施す。またNo.46は口縁が波状を呈し、端部には刻目を施す。No.49～No.51は甕形土器で、No.49は口縁部が大きく外反し、口縁端部と肩部に刻目を施す。No.50は口縁部が短く外反し、口縁端部に刻目を施す。No.51は口縁部が大きく外反する。No.53は口縁部を欠くが、壺形土器の底部と考えられる。No.54～No.58は甕形土器の底部である。第15図～第17図は第7層濃暗黒色粘土層出土の土器である。No.59は粗製の深鉢形土器の口縁部、No.60～No.65は甕形土器で、口縁部は短く外反する。No.66は弥生中期後葉の甕形土器の口縁である。No.68～No.71は甕形土器の底部で、No.68は内面に刳圧痕が残る。S2は打製石斧で、刃部が欠損している。S3は摺石、Q1～Q3は土錘である。



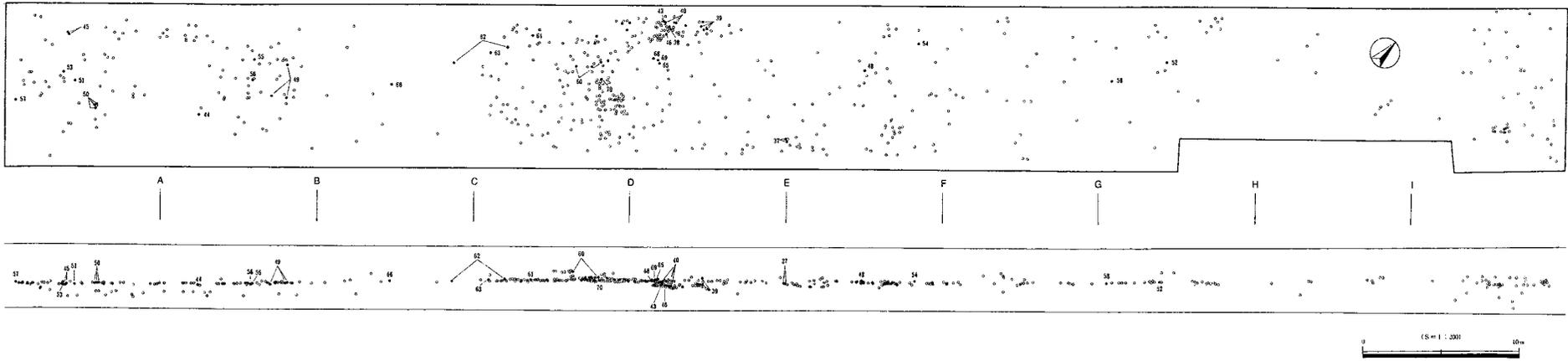
第10図 遺物実測図



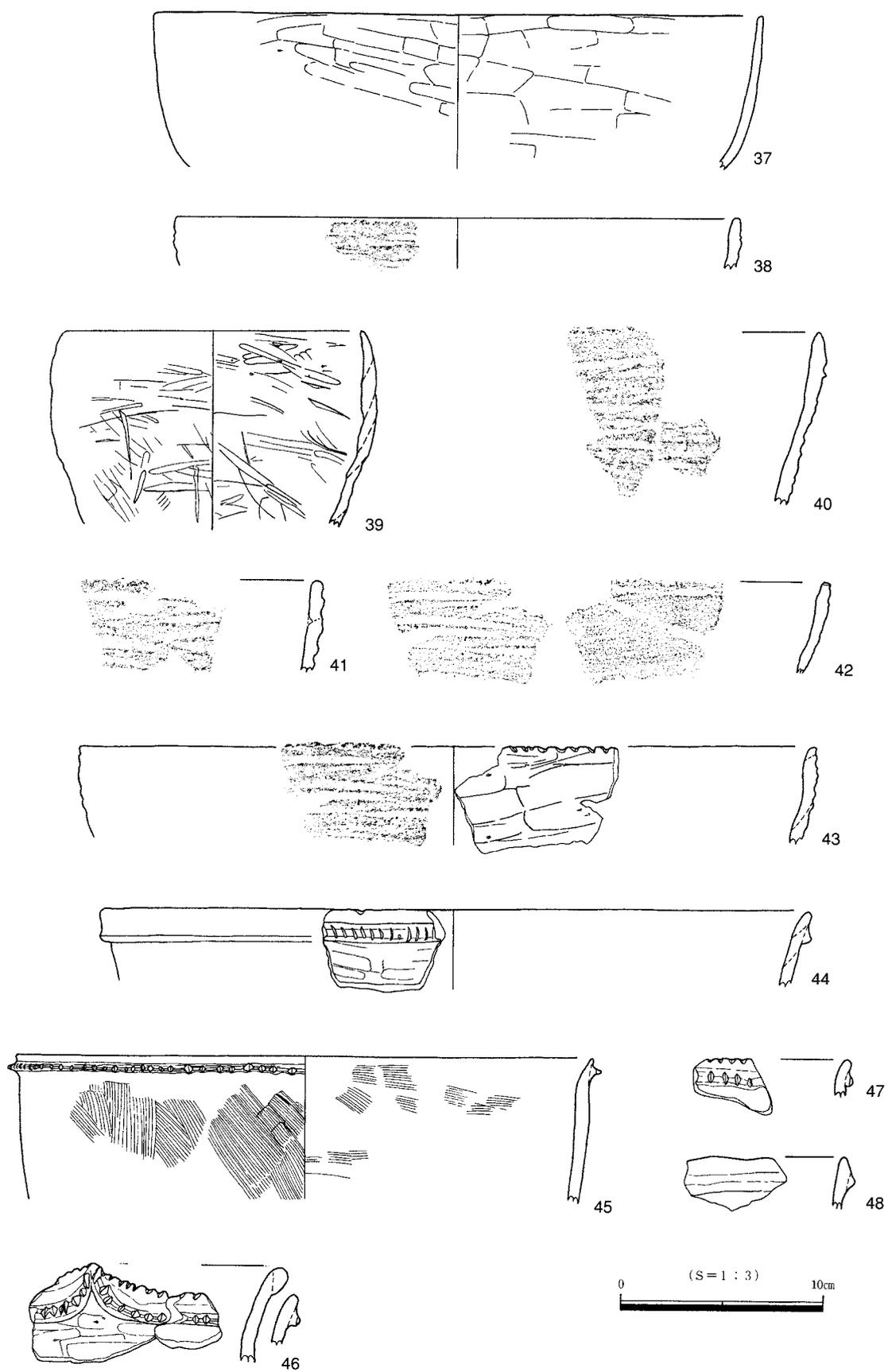
第11図 遺物実測図



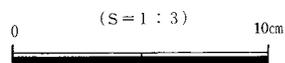
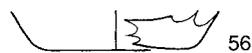
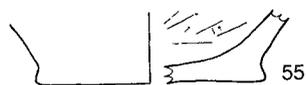
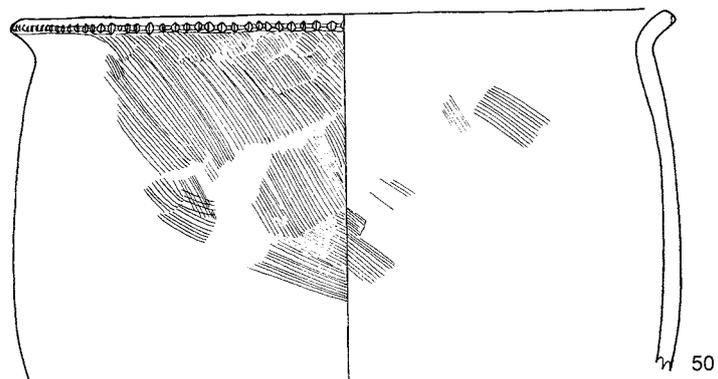
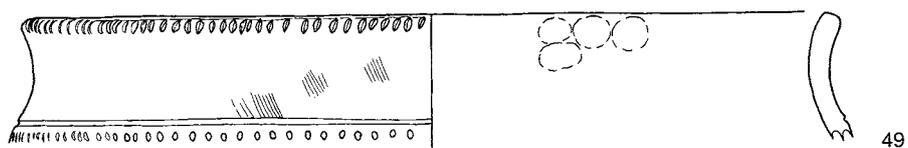
第12図 遺物実測図



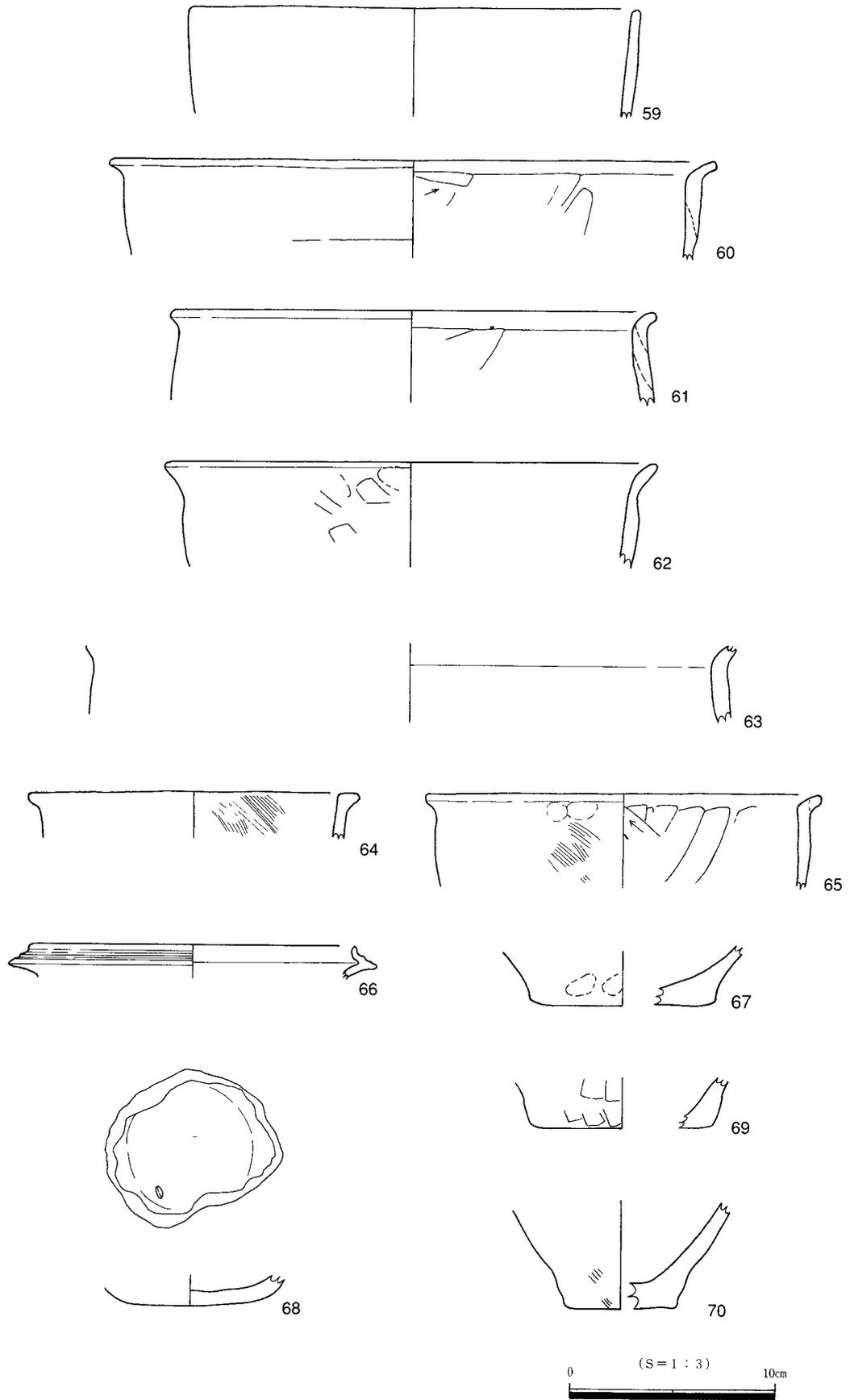
第13図 遺物出土状況図



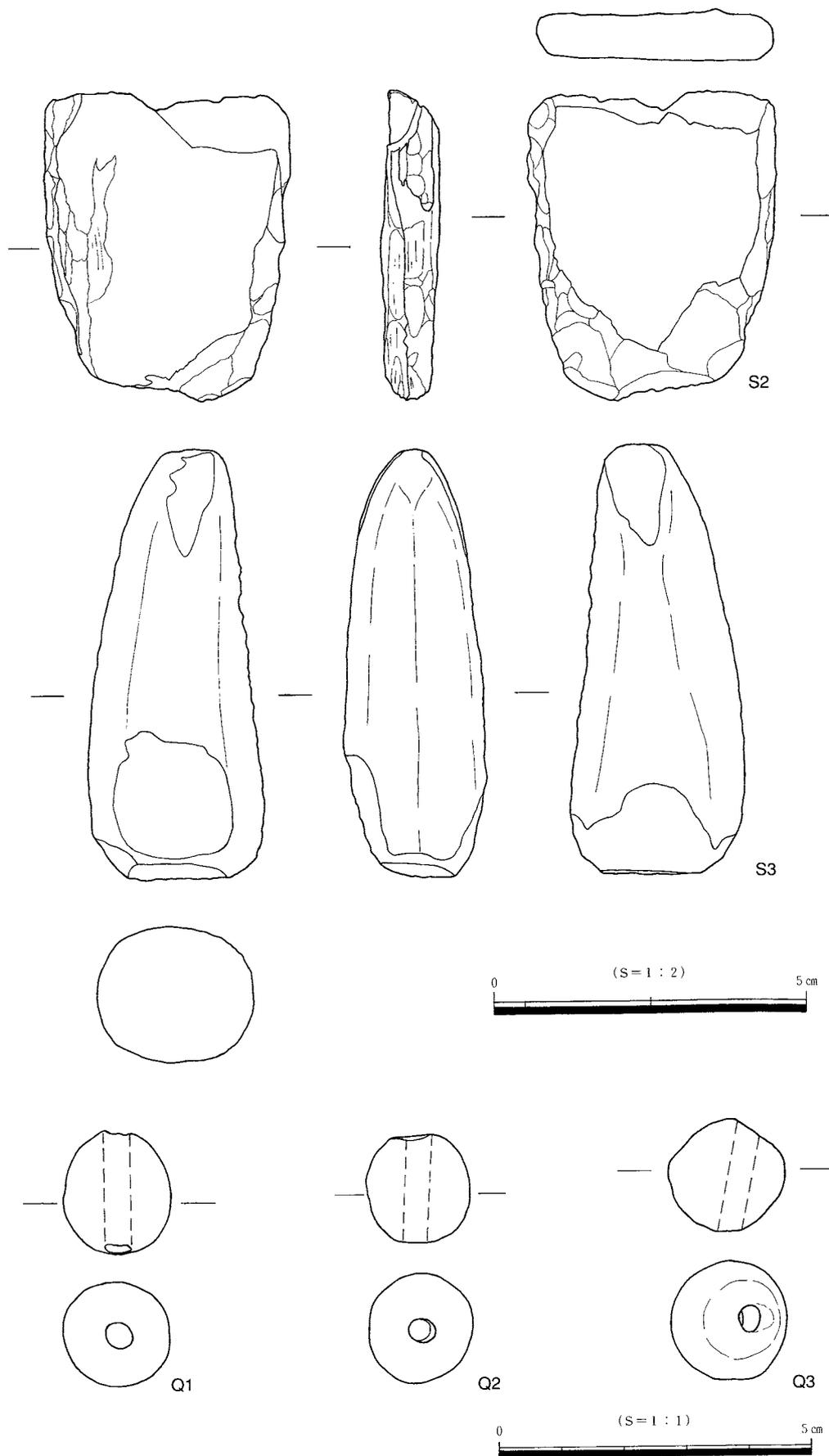
第14図 遺物実測図



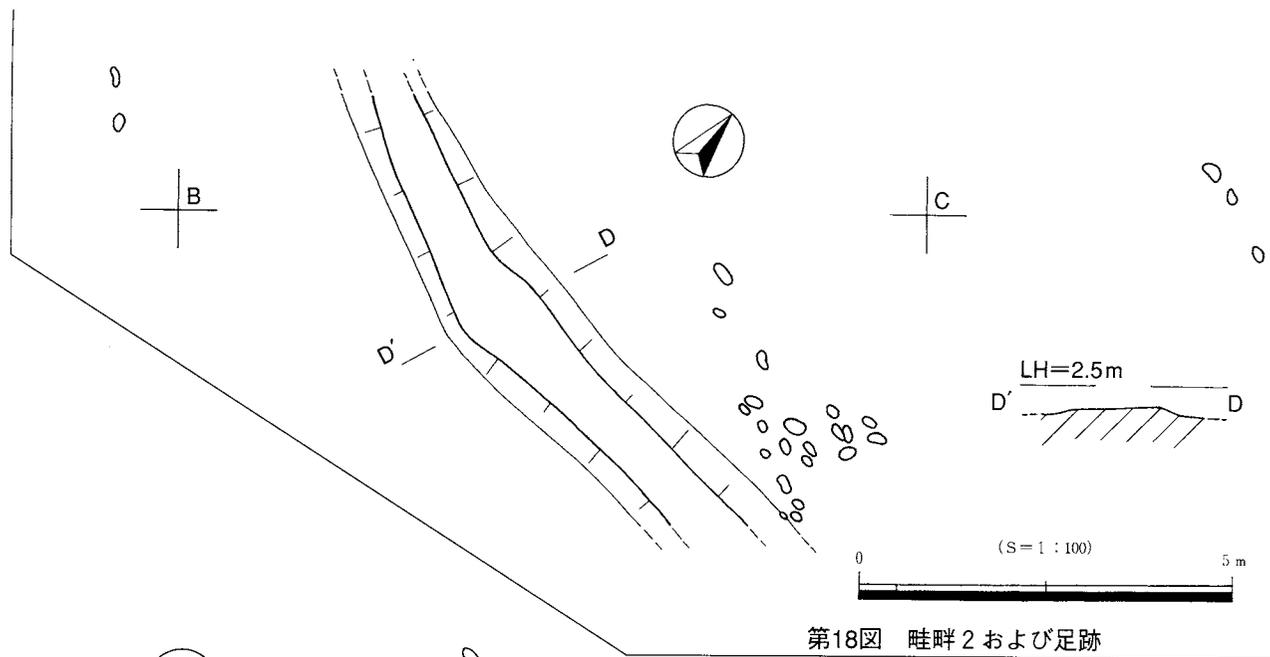
第15図 遺物実測図



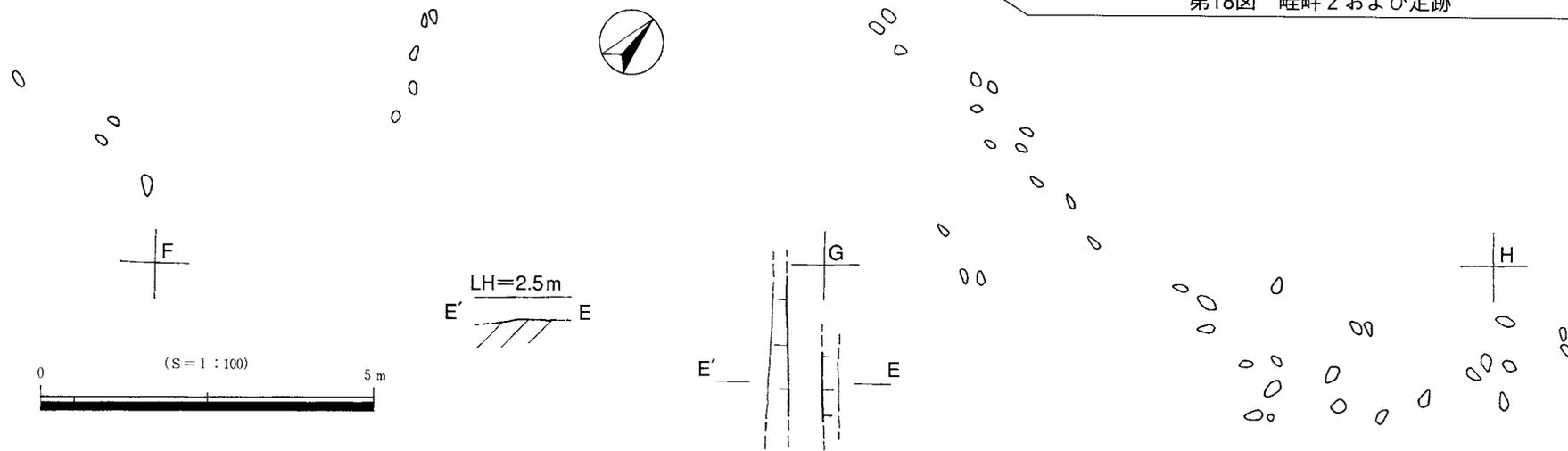
第16図 遺物実測図



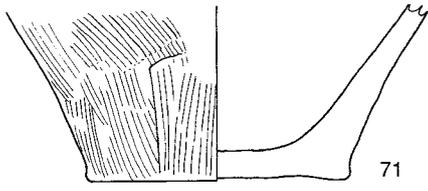
第17図 遺物実測図



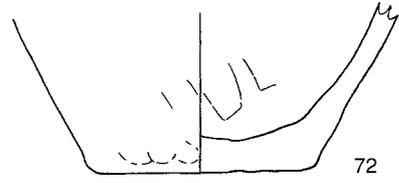
第18図 畦畔2 および足跡



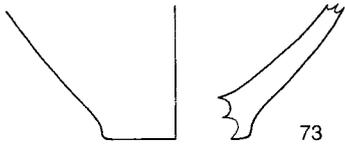
第19図 畦畔3 および足跡



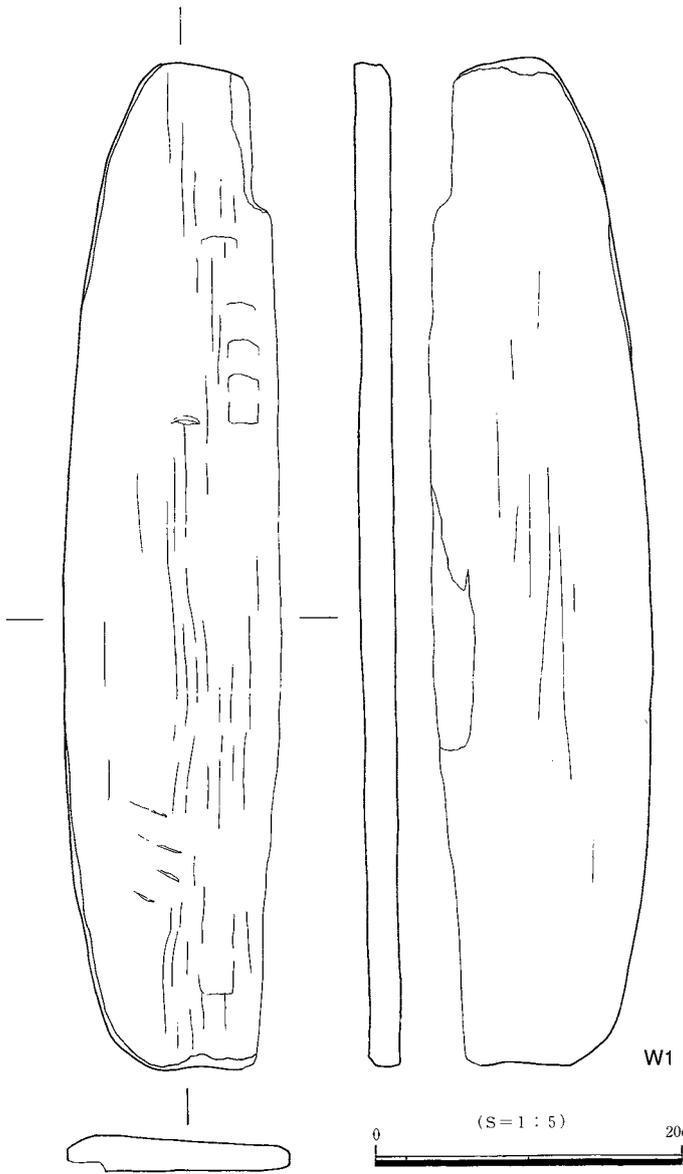
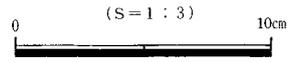
71



72

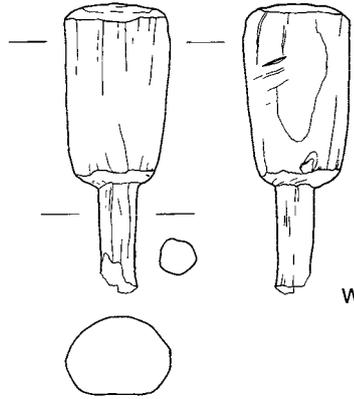


73



W1

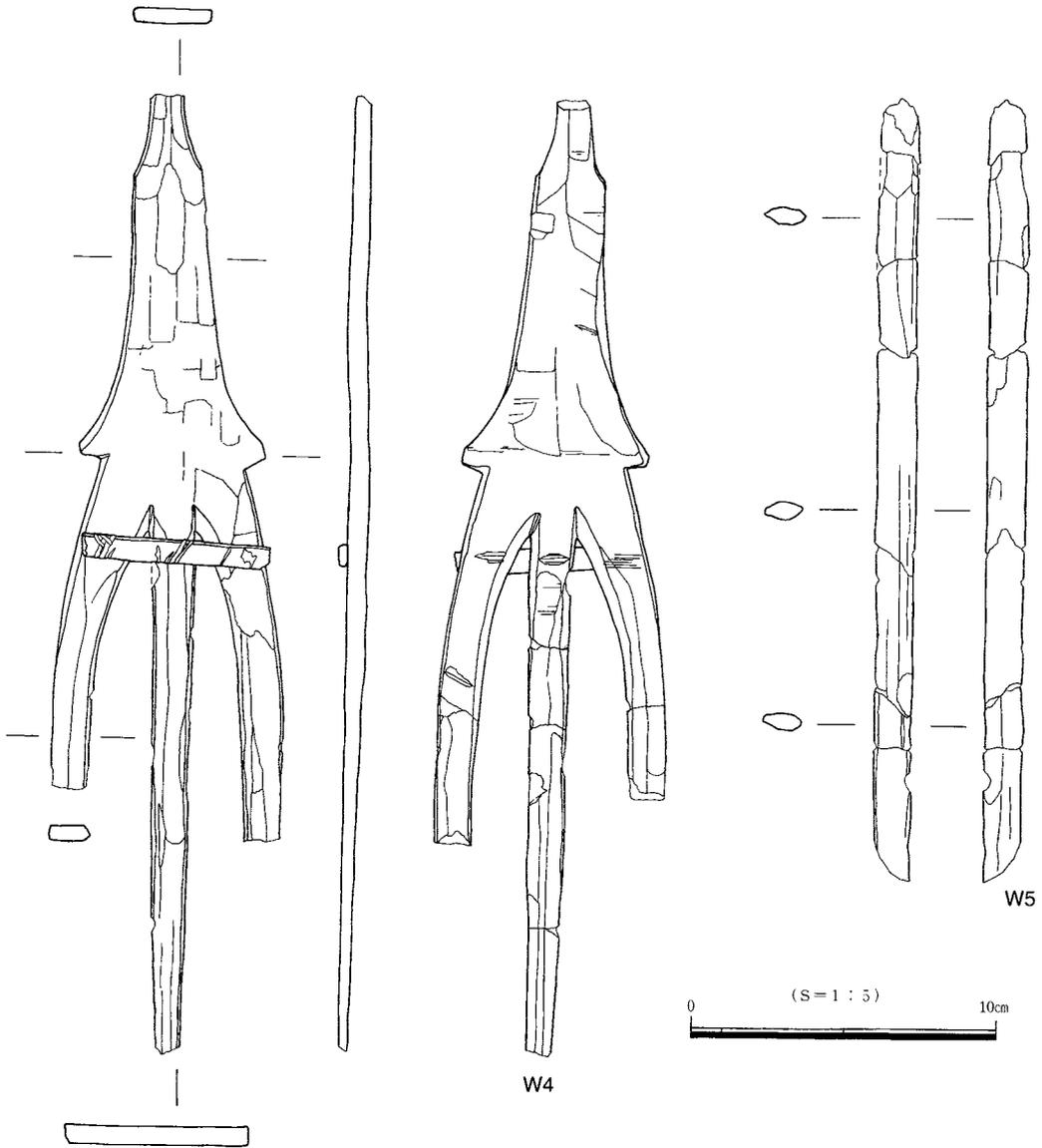
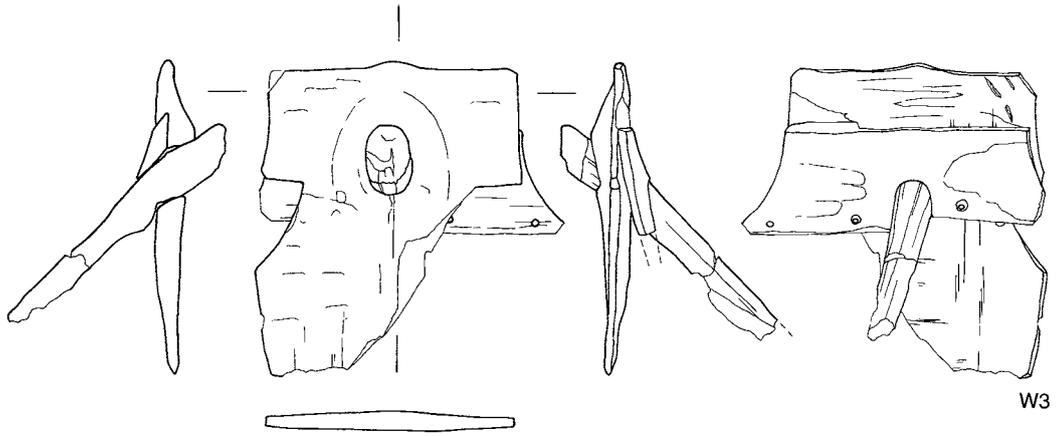
(S=1:5) 20cm



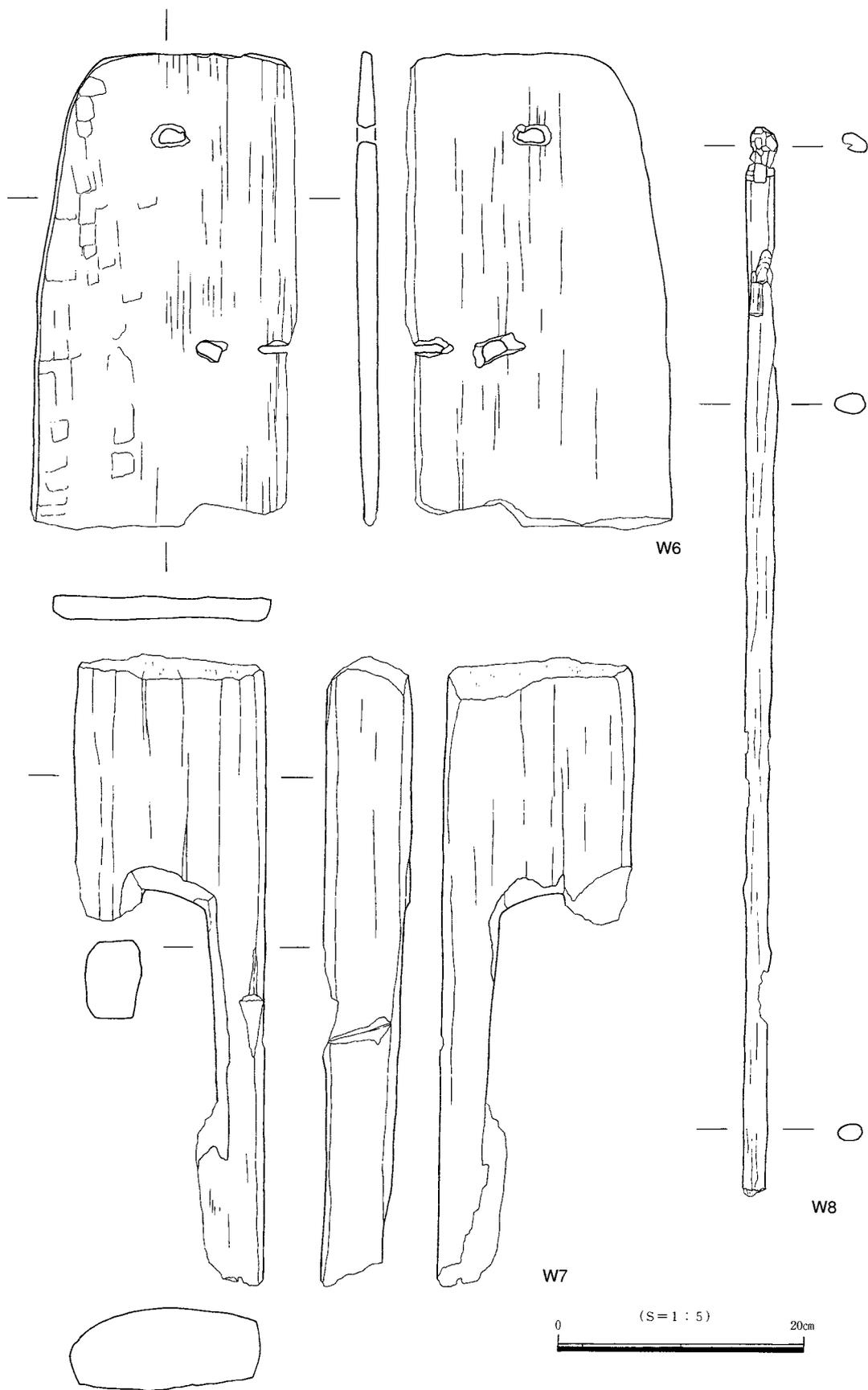
W2

(S=1:5) 10cm

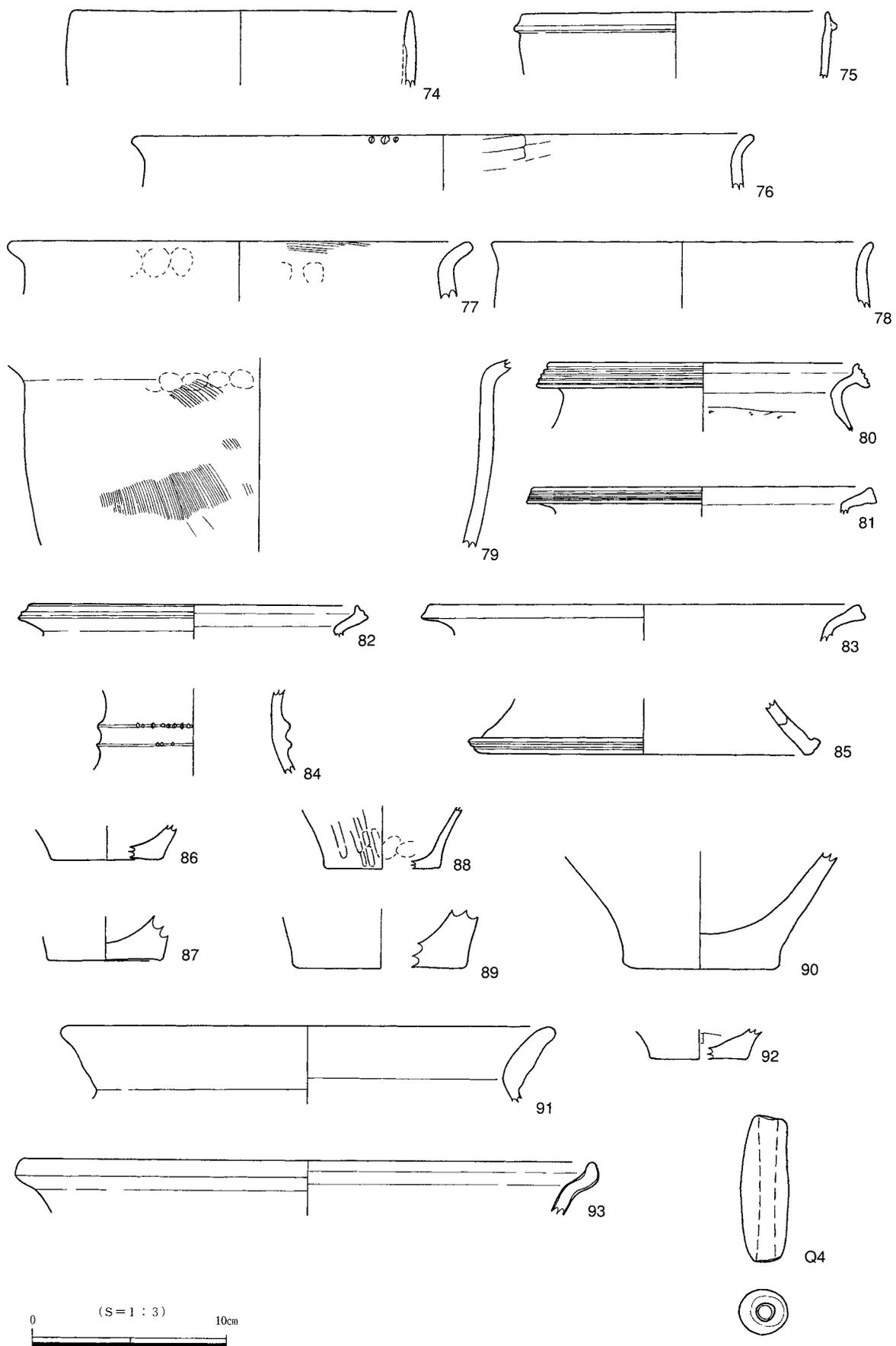
第20図 遺物実測図



第21図 遺物実測図



第22図 遺物実測図



第23図 遺物実測図

第4節 弥生時代中期から後期の遺構と遺物 (第6-2図)

弥生時代後期の遺構としては、第6層暗灰黒色粘土層の上面で畦状遺構と足跡を検出した。またこの層からは、木製農具等も出土していることから、稲作が行われていたことは十分考えられる。このことは自然科学分析の結果(第6章第1節参照)からも明らかとなっている。

畦畔状遺構(畦畔1~4)(第18・19図)

1区、3区および5区で検出した。方向はいずれも東西方向に伸びる。1区の畦畔1が幅0.6~1.2m、高さ23cm、1区の畦畔2が幅55~80cm、高さ10cm、3区の畦畔3が幅約50cm、高さ4cm、5区の畦畔4が幅1m、高さ9cmである。

足跡(第18・19図)

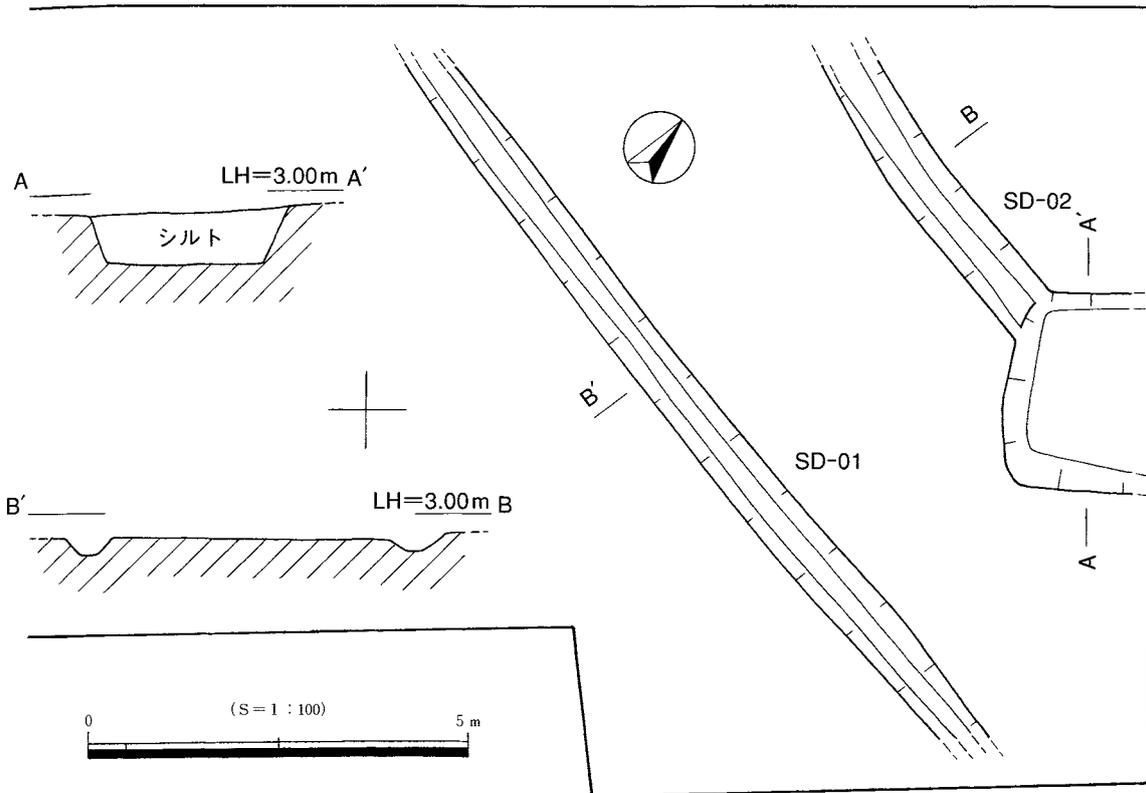
1区、3区、4区および5区で検出した。いずれも畦畔に近接した状態で検出されている。特に3区~4区で検出された足跡は、南東方向に向かって歩いたように並んでいた。

この遺構面の土層には第3層、第1砂層として厚い砂の堆積がみられることから、この水田は短時間のうちに埋没したものと考えられる。この砂層から出土した実測可能な遺物は、弥生時代前期から中期にかけての遺物がやや多く見られるが、No.91、No.92のような土師器と共に須恵器片なども出土していることから、この水田が埋まったのは古墳時代中期以降と考えられる。

遺物(第20~23図)

第20~22図は、第6層の暗灰黒色粘土から出土した遺物で、甕の底部(No.71~No.73)が出土したほか、木製品が出土している。木製品のW1、W7は用途不明の板材で建築材か。W2は横槌、W3は直柄式広鋤、W4は膝柄式又鋤、W5は又鋤の刃部と思われる。W2の横槌は自然木の一端を柄として加工したものである。柄は中央よりややずれた位置に付いている。W3の広鋤は、刃部と共に幅19cm、長さ7.4cm、厚さ1.2cmの泥除けが柄についたままの状態出土した。泥除けには円孔が3ヶ所残っており、2枚の板を繋げて使用していたと思われる。W4の鋤は刃が最長35cm残るナスビ形の三又鋤で、刃部の根元には幅1.6cm、長さ12.6cm、厚さ0.6cmの角棒が刃部を扶むようにして固定されていた痕跡が残る。これと同様の角棒が近くで検出されていることから、鋤を両側から扶むようにして取付け、刃を補強していたと思われる。W6は田下駄か。長さ39.6cm、幅10.8cm、厚さ2cmの板材に3ヶ所の円孔が残る。W8は有頭棒である。

第23図は第5-1層、第1砂層の出土遺物で、No.74は粗製の深鉢形土器、No.75は突帯紋土器の深鉢形土器である。No.76~No.79は弥生前期の甕形土器で、No.76は口縁端部に刻目が残る。No.80~No.83は甕の口縁部、No.84は壺の頸部、No.85は高坏の脚部、No.86~No.90は甕の底部で、いずれも弥生時代中期中葉から後葉のものである。No.91は土師器の甕口縁部片、No.92は土師器の甕底部である。No.93の青磁、およびQ4の土錘は現代の用水路付近からの取上げ時に混入したものと考えられる。



第24図 SD-01・02実測図

第5節 古墳時代以降の遺構と遺物 (第6-3図)

5区の第5-1層、第1砂層の上面で2条の溝状遺構を検出した。いずれも遺構内から遺物が検出されなかったため、正確な時期は不明である。

溝状遺構 (第24図)

SD-01

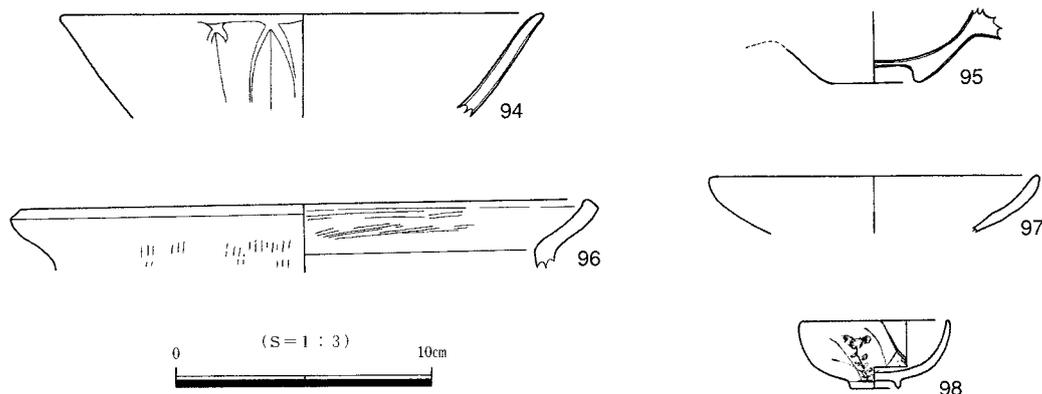
調査区を東西方向に横断する幅35cm、深さ12cmの溝状遺構。

SD-02

調査区を東西方向に横断する幅38cm、深さ10cmの溝で、西端は矢板によって切られているが、東部は一辺約1.3m、深さ40cmの枡状の施設に繋がっている。

遺物 (第25図)

遺構に伴うものはない。その他の遺物として、第2層砂粒を含む黒色粘土層で、陶磁器等の遺物を検出した。No.94は青磁の碗、No.95は器種不明の青磁製品、No.96、No.97は土師質の鍋と皿である。No.98は肥前産の小杯である。



第25図 遺物実測図

第6節 小結

今回の調査では弥生時代の水田畦畔、水路、縄紋時代晩期から弥生時代前期の石列、土手状遺構等を検出した。今回、調査した地点の縄紋時代後期の環境は、中海の沿岸部に位置し、縄紋時代晩期頃になると、砂州の発達により湿地が形成され始め、これが現在の「池ノ内」地区に相当するものと考えられる。そして弥生時代前期頃には今回の調査地から池ノ内側に向かって、丘陵と丘陵の間に水田が広がっていた可能性が考えられる（第6章第1節参照）。遺物としては、縄紋土器、弥生土器を中心に多くの遺物が出土しているが、稲作に伴う遺物として、木製の農耕具が出土している。その中で注目したいのは、泥除けの付いた鍬である。泥除けの出土例としては、県内でも青谷上寺地遺跡（註2）で見られるなど類例は少なくないが、鍬に泥除けが付いたままの状態で検出されるのは稀である。次にナスビ形鍬の刃部を補強するための添木が付いたものが出土しているが、これについては他に類例を見いだせなかった。今回こうした状況が初めて確認されたが、今までにも同様のものは無かったのか、添木と分離しているため気付かれていないのではないかと、という可能性も考えられる。今後そういった観点から調査を行うと共に、今までに出土した資料を再度見直してみる必要があるのではないだろうか。

註1 1998年 「目久美遺跡V・VI」 財団法人米子市教育文化事業団文化財調査報告書25

註2 2001年 「青谷上寺地遺跡3」 鳥取県教育文化財団調査報告書72

2002年 「青谷上寺地遺跡4」 鳥取県教育文化財団調査報告書74

土器一覽表

番号	挿入番号	種別	層位	法量			調整	色調	胎土	備考
				口径	残存底径	底径				
1	10	鉢(縄紋土器)	2 S	33.4	3.9		内外共ケズリ	内)暗褐色 外)暗灰褐色	密 0.5~2mm大砂粒含	
2	10	鉢(縄紋土器)	2 S	25.6	5.9		内外共ケズリ	暗褐色	やや粗 0.5~1mm大砂粒含	
3	10	鉢(縄紋土器)	2 S	18.4	4.7		内外共ケズリ	暗褐色	密 細砂粒多く含	
4	10	鉢(縄紋土器)	2 S	19.0	4.8		内外共ケズリ	暗灰褐色	やや粗 0.5~2mm大砂粒含	
5	10	鉢(縄紋土器)	2 S	18.0	2.9		内)ケズリ 外)ナデ	暗褐色	密 0.5mm大砂粒含	
6	10	鉢(縄紋土器)	2 S	16.3	2.9		内外共ケズリ	暗灰褐色	密 0.5mm大砂粒含	
7	10	鉢(縄紋土器)	2 S	19.0	7.9		内外共ケズリ	淡灰褐色	やや粗 0.5~2mm大砂粒含	
8	10	鉢(縄紋土器)	2 S	19.3	5.1		内外共ケズリ	暗灰褐色	密 1.5mm大砂粒含	
9	10	鉢(縄紋土器)	2 S	32.6	4.8		内外共ケズリ	暗灰褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
10	10	鉢(縄紋土器)	2 S	31.0	6.3		内外共ケズリ	暗褐色	やや粗	
11	10	鉢(縄紋土器)	2 S	24.1	8.8		内外共	暗灰褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
12	10	鉢(縄紋土器)	2 S	19.4	6.0		内外共ケズリ	暗灰褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
13	10	底部(縄紋土器)	2 S		10.5	5.4	内外共ケズリ	暗灰褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
14	10	底部(縄紋土器)	2 S		1.9	7.0	内)ナデ 外)ハケ目	暗褐色	密 0.5~1.5mm大砂粒多く含	煤付着
15	10	底部(縄紋土器)	2 S		2.3	9.4	調整不明	褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
16	10	底部(縄紋土器)	2 S		3.0	10.3	調整不明	暗灰褐色	密 2mm大砂粒含	
17	10	底部(縄紋土器)	2 S		3.5	5.6	内)ナデ	暗褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	炭化物付着
18	10	底部(縄紋土器)	2 S		2.0	9.4	調整不明	暗褐色	密	
19	11	鉢(縄紋土器)	2 S	37.4	4.1		内外共ケズリ I)縁部ナデ	暗灰褐色	密 0.5~4mm大砂粒含	
20	11	鉢(縄紋土器)	2 S	29.2	10.1		内外共ケズリ	暗灰褐色	やや粗 細砂粒多く含	
21	11	鉢(縄紋土器)	2 S	26.6	9.5		内外共ケズリ	暗灰褐色	やや粗	
22	11	鉢(縄紋土器)	2 S	35.4	2.1		内)ケズリ 外)ハケ目	暗褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
23	11	鉢(縄紋土器)	2 S	35.0	3.8		内)ケズリ 外)炭化物付着	内)暗灰褐色 外)暗褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
24	11	鉢(縄紋土器)	2 S	28.6	8.3		内外共ケズリ	暗灰褐色	やや粗 1mm大砂粒含	炭化物付着
25	11	鉢(縄紋土器)	2 S	35.0	8.5		調整不明	暗灰褐色	粗 0.5~1mm大砂粒含	炭化物付着
26	12	鉢(縄紋土器)	2 S	34.6	7.8		内外共ケズリ	暗灰褐色	やや粗 4mm大砂粒含	
27	12	鉢(縄紋土器)	2 S		3.9		調整不明	暗褐色	密 1mm大砂粒含	
28	12	鉢(縄紋土器)	2 S		2.8		内)ケズリ 外)刺突文	暗褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
29	12	鉢(縄紋土器)	2 S		2.4		内)ナデ 外)ハケ目	暗褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
30	12	鉢(縄紋土器)	2 S	18.4	13.9		内外共ケズリ	暗褐色	やや粗 細砂粒多く含	炭化物付着
31	12	底部(縄紋土器)	2 S		6.7	8.3	内)ケズリ 外)ハケ目	暗褐色	やや粗 1mm大砂粒含	
32	12	底部(縄紋土器)	2 S		1.5	8.0	調整不明	暗褐色	密 細砂粒多く含	
33	12	底部(縄紋土器)	2 S		1.5	12.5	調整不明	暗褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
34	12	底部(縄紋土器)	2 S		3.7	11.0	内外共ケズリ	暗褐色	密 0.5mm大砂粒含	
35	12	底部(縄紋土器)	2 S		3.3	10.6	調整不明	暗灰褐色	密 1~1.5mm大砂粒含	
36	12	底部(縄紋土器)	2 S		4.5	6.6	内)ナデ	暗褐色	密 0.5mm大砂粒含	
37	14	鉢(縄紋土器)	HN	29.4	7.7		内外共ケズリ	内)暗灰褐色 外)暗褐色	やや粗 0.5~1mm大砂粒含	
38	14	鉢(縄紋土器)	HN	27.1	2.5		内外共ケズリ	暗褐色	密 2mm大砂粒含	黒斑
39	14	鉢(縄紋土器)	HN	14.5	9.8		内外共ケズリ	淡灰褐色	やや粗 1mm大砂粒含	
40	14	鉢(縄紋土器)	HN		8.1		内外共ケズリ	暗褐色	密 2mm大砂粒含	黒斑
41	14	鉢(縄紋土器)	FS		4.6		内外共ケズリ	褐色	密	黒斑
42	14	鉢(縄紋土器)	HN		4.5		内外共ケズリ	暗褐色	密 2mm大砂粒含	黒斑
43	14	鉢(縄紋土器)	HN	35.2	4.8		内外共ケズリ	暗褐色	密 3mm大砂粒含	黒斑
44	14	甕(弥生土器)	HN	34.8	3.8		内)ナデ 外)ケズリ	淡灰褐色	やや粗 0.5~1.5mm大砂粒含	
45	14	甕(弥生土器)	HN	28.2	7.3		内外共ハケ目	淡褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	煤付着
46	14	甕(弥生土器)	HN		4.8		内外共ケズリ	淡灰赤褐色	やや粗 0.5~1mm大砂粒含	
47	14	甕(弥生土器)	HN		3.1		内外共ナデ	淡赤褐色	密	
48	14	甕(弥生土器)	HN		2.5		調整不明	淡褐色	やや粗 1.5mm大砂粒含	
49	15	甕(弥生土器)	HN	30.8	5.0		内)ナデ 外)ハケ目	淡褐色	密 1mm大砂粒含	煤付着
50	15	甕(弥生土器)	HN	25.2	14.3		内外共ハケ目	内)淡灰褐色 外)灰褐色	やや粗 0.5~1mm大砂粒含	
51	15	甕(弥生土器)	HN	12.6	2.0		内外共ナデ	淡橙褐色	密 砂粒多く含	
52	15	壺(弥生土器)	HN	18.6	2.1		内外共ナデ	淡灰褐色	密 4mm大砂粒含	
53	15	底部(弥生土器)	HN		16.3	8.2	内外共ハケ目	淡灰褐色	やや粗 0.5~1mm大砂粒含	炭化物付着
54	15	底部(弥生土器)	HN		1.7	9.4	調整不明		密	
55	15	底部(弥生土器)	HN		2.8	9.0	内)ケズリ	暗灰褐色	密 1~2mm大砂粒含	
56	15	底部(弥生土器)	HN		1.5	5.4	内外共ナデ	褐色黒斑	密 3mm大砂粒含	
57	15	底部(弥生土器)	HN		2.5	7.0	内外共ケズリ	暗灰褐色 内)暗褐色	密 1~2mm大砂粒含	
58	15	底部(弥生土器)	HN		2.9	9.0	内)ナデ 外)ハケ目	外)褐色 淡灰褐色	密 1mm大砂粒含	
59	16	鉢(弥生土器)	FS	11.2	5.3		調整不明	内)暗褐色 外)暗灰褐色	やや粗 1mm大砂粒含	
60	16	甕(弥生土器)	FS	27.0	4.8		内)ケズリ	暗灰褐色	やや粗 0.5~3mm大砂粒含	
61	16	甕(弥生土器)	FS	23.2	4.5		内)ケズリ	内)暗灰褐色 外)淡褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
62	16	甕(弥生土器)	FS	23.4	5.1		外)ケズリ	淡褐色	密 1mm大砂粒含	
63	16	甕(弥生土器)	FS		3.8			内)淡褐色 外)淡黄褐色	密 1~1.2mm大砂粒含	
64	16	甕(弥生土器)	FS	14.0	2.2		内)ハケ目	淡黄褐色	密 1mm大砂粒含	
65	16	甕(弥生土器)	FS	16.8	4.6		内)ケズリ 外)ハケ目	暗灰褐色	やや粗 0.5~1mm大砂粒含	黒斑
66	16	甕(弥生土器)	FS	15.6	1.6		ナデ	黄灰色	密	

2 S・・・第10層第2砂層 HN・・・第8層灰色粘土 FS・・・第7層濃暗黒色粘土

番号	挿図番号	種別	層位	法量			調整	色調	胎土	備考
				口径	残存高	底径				
67	16	底部(弥生土器)	F S		1.6	6.2	内外共ナデ	内)暗灰褐色 外)淡褐色	密 1mm大砂粒含	
68	16	底部(弥生土器)	F S		3.0	9.0		内)暗褐色 外)褐色	密 0.5mm大砂粒含	
69	16	底部(弥生土器)	F S		2.5	8.6	ケズリ	灰褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	黒斑
70	16	底部(弥生土器)	F S		5.3	5.0	内)ナデ 外)ハケ目	淡褐色	密	
71	20	底部(弥生土器)	Y S		7.0	9.9	内)ナデ 外)ハケ目	淡黄褐色	やや粗 1mm大砂粒含	煤付着
72	20	底部(弥生土器)	Y S		6.8	8.6	ケズリ	淡黄褐色	やや粗 1mm大砂粒含	煤付着
73	20	底部(弥生土器)	Y S		5.3	5.9			密 0.5~1mm大砂粒含	
74	23	甕(弥生土器)	1 S	17.3	1.4		ナデ・ケズリ	暗褐色	密	
75	23	甕(弥生土器)	1 S	15.6	3.4			灰褐色	やや粗	
76	23	甕(弥生土器)	1 S	31.4	2.9		内外共ナデ	灰褐色	密 0.5~1mm大砂粒含	
77	23	甕(弥生土器)	1 S	23.4	3.1		内)ハケ目 外)ナデ	褐色	密 1.5~4mm大砂粒含	
78	23	甕(弥生土器)	1 S	19.4	3.4		内外共ナデ	淡灰褐色	密 1mm大砂粒含	
79	23	甕(弥生土器)	1 S		10.5		内)ナデ 外)ハケ目	淡褐色	密 1~1.5mm大砂粒含	
80	23	甕(弥生土器)	1 S	15.8		3.5	内)ナデ・ケズリ 外)ナデ	褐色	やや粗 0.5~1mm大砂	
81	23	甕(弥生土器)	1 S	17.3	3.9		内外共ナデ	淡褐色	やや粗 0.5~1mm大砂粒含	
82	23	甕(弥生土器)	1 S	16.8	1.6			褐色	密	
83	23	甕(弥生土器)	1 S	22.0	1.9		内外共ナデ	褐色	密 4mm大砂粒含	
84	23	甕(弥生土器)	1 S		4.4		内)ナデ・ケズリ 外)ナデ	淡灰褐色	密 1~1.5mm大砂粒含	
85	23	高坏(弥生土器)	1 S		2.9	16.4	内外共ナデ	灰褐色	密	
86	23	底部(弥生土器)	1 S		1.8	5.8	内外共ナデ	暗褐色	密 細砂含	
87	23	底部(弥生土器)	1 S		2.4	5.7	内外共ナデ	内)暗褐色 外)淡褐色	密 0.5mm大砂粒含	
88	23	底部(弥生土器)	1 S		3.2	6.0	内)ナデ 外)ケズリ	暗灰褐色	密 1mm大砂粒含	
89	23	底部(弥生土器)	1 S		6.1	8.0	内外共ナデ	淡灰褐色	やや粗 0.5~1.5mm大砂粒含	黒斑
90	23	底部(弥生土器)	1 S		3.1	8.8	内外共ナデ	褐色	密 1.5~2mm大砂粒含	
91	23	甕(土師器)	1 S	24.8	4.0		内外共ケズリ	褐色	やや粗 1mm大砂粒含	
92	23	坏(土師器)	1 S		1.6	5.0	内)ケズリ 外)ナデ底糸切り	淡褐色	密	
93	23	(青磁)	1 S	29.2	2.8			緑釉		
94	25	碗(青磁)	KN	18.7	3.4			灰色がかった緑		
95	25	皿(青磁)	KN		2.8	3.2		灰色		
96	25	甕(土師質)	KN	22.2	2.7		口縁ハケ目・ナデ	淡褐色	やや粗 2mm大砂粒含	
97	25	皿(土師質)	KN	12.6	2.3		ナデ	淡褐色	密	
98	25	杯(磁器)	KN	5.8	2.7	1.6		青味がかった白		

F S・・・第7層濃暗黒色粘土 Y S・・・第6層暗灰黒色粘土 1 S・・・第5層第1砂層 KN・・・第4層黒色粘土

石器一覧表

番号	種別	層位	法量				番号	種別	層位	法量		
			長さ	幅	厚み	重量				口径	残存高	底径
S 1	石鏃	2 S	2.0	1.3	0.4	0.8	Q 1	土玉	F S	4.1	3.4	3.4
S 2	石斧	F S	10.1	8.0	1.9	220.6	Q 2	土玉	F S	3.5	3.4	3.6
S 3	播石	F S	14.0	5.6	4.9	480.6	Q 3	土玉	F S	3.7	3.9	3.7
							Q 4	土錘	1 S	5.1	1.7	1.6

その他の遺物一覧表

木製品一覧表

No.	器種	層位	法量			備考	No.	器種	層位	法量			備考
			最大長	最大幅	最大厚					最大長	最大幅	最大厚	
W 1	板材	水田	67.0	14.3	2.3	スギ科スギ属スギ	W 5	柄	水田	52.4	2.6	1.4	ツバキ科ナツツバキ属
W 2	横槌	水田	19.3	6.9	6.9	ヤブツバキ	W 6	田下駄	水田	39.6	10.8	2.0	スギ科スギ属スギ
W 3	鋏	水田	20.8	19.0	4.0	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W 7	建築材	水田	52.0	15.6	7.0	ブナ科シイ属
W 4	鋤	水田	64.0	15.0	1.4	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W 8	有頭棒	水田	177.2	5.0	4.0	ツバキ科サカキ属サカキ

第4章 目久美遺跡第10次調査（第1工区）

第1節 調査の経過と方法

現地調査は、調査対象地の西側半分の地点（400㎡）を第1工区として平成14（2002）年4月26日に開始し、平成14（2002）年8月8日まで行った。調査では、現地表面から約4.5mの深さまで掘り下げた。調査地は9次調査の西側に隣接しており、9次調査地と同様に調査前は標高約3.8mの平坦地であり、宅地として利用されていたが、昭和40年代頃までは水田が広がっていたものと考えられる。調査地の西側には、目久美遺跡第5次・6次調査地とを隔てるように小丘陵が延びている。しかし堆積状況を見ると、北東方向には下層で若干緩やかな傾斜がみられるが、むしろ北西から南東方向で顕著な傾斜を成して堆積している状況であった。これは砂州の影響を受けていると思われる（参照第6章第1節）。またこの小丘陵の岩盤の一部を検出した。岩盤は約50度の角度で傾斜した後、20～30度の角度で傾斜が伸びているところまで確認しているが、その後はそれほど遠く離れない地点で、急激に落ち込むと思われる。

調査は、試掘調査および9次調査の結果を踏まえて、地表面から約1mの深さで堆積している埋立土を重機によって除去した後、周囲に鋼矢板を打ち込み安全を確保した上で、北側および東側の矢板際に断面観察用の畔を残しながら、層位ごとに人力にて掘り下げていく方法をとった。矢板の変形を防ぐためにH鋼を設置した。調査にあたり湧水が予想されたため、周囲に排水溝を巡らせながら調査することにした。

中近世の遺構面の調査後、流水路（SD-04）を確認したため、これまでの調査成果をまとめて6月15日に現地説明会を開催し、調査の概要を公開した。現地説明会終了後は、再び層位ごとに掘り下げていった。

遺物の取り上げ、遺構の実測については、トータルステーションを使用した。調査の結果、縄紋時代から近世に至る遺構面を確認し、溝状遺構、流水路、足跡等を検出した。また、縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、木製品、石器等の遺物が出土した。また平成14年度より実施された学校週5日制の開始に伴い、月1度の割合で米子市内の小学校高学年生を対象とした「遺跡教室」を開催し、調査員による歴史資料や埋蔵文化財調査の体験的な講習を行った。

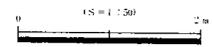
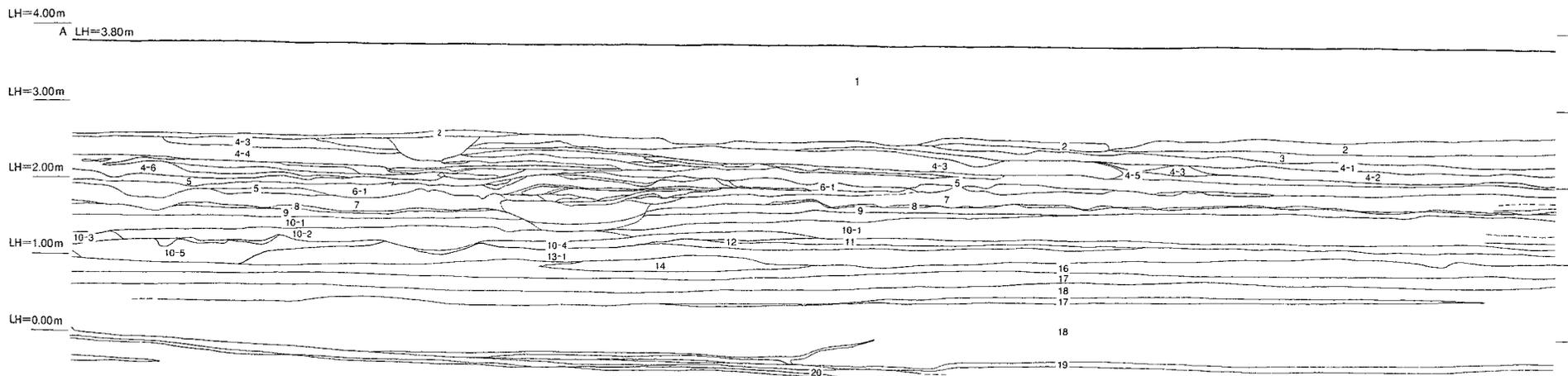
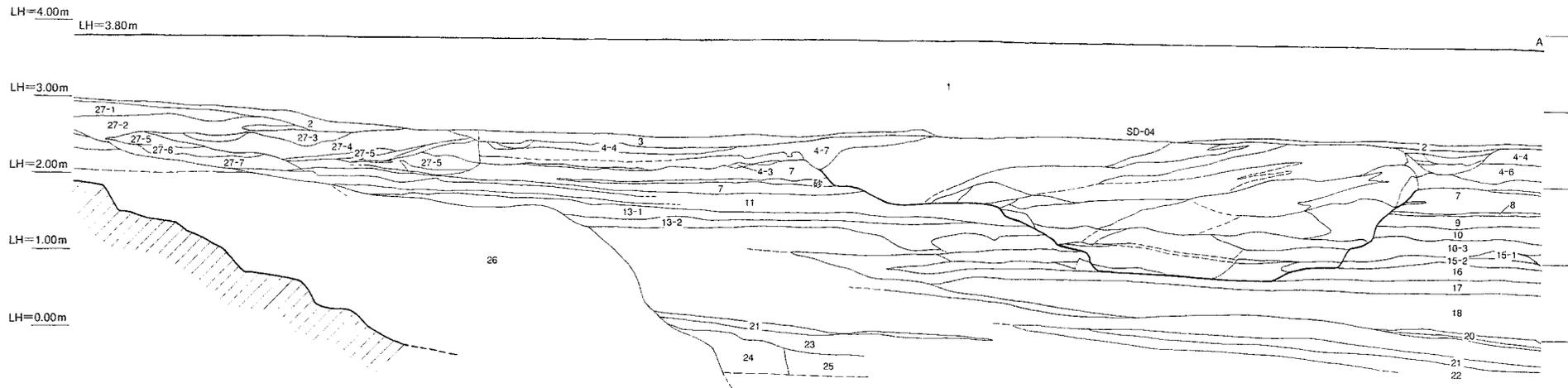
第2節 調査区内の堆積（第26・27図）

本調査区の堆積状況は、西側が小丘陵の山裾の位置していることと、砂州の影響によりやや南東方向に傾斜しているが、基本的に各層は水平方向に堆積しており、縄紋時代後期～晩期と、弥生時代中期以降に洪水堆積がみられるほかは、比較的安定した堆積であった。

- 第1層 造成時の埋立土。バラスが混ざる。黄色の真砂土。
- 第2層 砂粒を含む黒色粘土層。
- 第3層 暗茶色粘土（砂粒混）
- 第4-1層 微砂・シルト交互層（シルト強）
- 第4-2層 暗灰色粘土
- 第4-3層 砂層
- 第4-4層 微砂・シルト交互層
- 第4-5層 微砂・シルト交互層（砂強）
- 第4-6層 シルト
- 第5層 暗灰色粘土

- 第6-1層 微砂・シルト交互層（砂粒強）
- 第6-2層 砂混白色粘土
- 第7層 灰色粘土 暗灰色粘土
- 第8層 白色粘土
- 第9層 黒灰色粘土（腐食物混）
- 第10-1層 黒灰色粘土
- 第10-2層 黒灰色粘土（倒木等多量に含む）
- 第10-3層 黒灰色粘土（10-2に砂混じる）
- 第10-4層 やや白い黒灰色粘土
- 第10-5層 黒灰色粘土（砂・腐食物混じる）
- 第11層 黒色粘土
- 第12層 やや白い暗濃茶粘土
- 第13-1層 暗濃茶粘土
- 第13-2層 暗濃茶粘土（砂含む）
- 第14層 暗灰色粘土（砂粒多量に混）
- 第15-1層 濃茶黒色粘土
- 第15-2層 濃茶黒色粘土（砂混）
- 第16層 砂層（暗灰色粘土混）
- 第17層 暗灰色粘土（砂粒混）
- 第18層 砂層
- 第19層 暗灰色粘土（シルト混）
- 第20層 暗灰色粘土（腐食物多量に混）
- 第21層 濃茶色粘土（砂混）
- 第22層 濃茶色粘土
- 第23層 青灰色砂混り粘土
- 第24層 青灰色砂（貝殻混）
- 第25層 青灰色砂
- 第26層 礫溜層
- 第27-1層 暗黄灰色砂
- 第27-2層 黒灰色砂
- 第27-3層 黄色砂
- 第27-4層 淡茶色砂
- 第27-5層 淡褐色砂
- 第27-6層 濃茶色砂
- 第27-7層 黒灰色粘土混砂
- 第28層 濃茶色粘土

第2層、第3層は中世から現代に至る層で、一部欠落している部分が見られるが、元々は調査地の全体に堆積していたと思われる。第4層は洪水の堆積層で、短い周期で何度も洪水が起こったことを示す細かい堆積状況となっている。第5層から第10層は弥生時代中期の堆積層と考えられる層で、比較的安定した堆積状況を示しているが、第7層との間に若干の洪水堆積層（第6層）がみられることから、少なからず洪水の影響を受けていたことが窺われる。第11層から第15層までは弥生時代前期の堆積層と考えられる。第16層から第26層は縄紋時代後期



第26-1 圖 北西側土層断面図

から晩期の堆積層である。縄紋時代晩期には粘土層の間に、砂の堆積（第16、18層）が見られる。特に第18層の砂の堆積は深さ1 m近くあり、大規模な洪水が頻発したことによる堆積層と考えられる。第27層は遺物包含層で弥生時代中期から近世までの遺物が多量に含まれている。第20層から下位の層は縄紋時代の海成層で、第28—9層の濃茶色粘土には多量の貝殻が含まれていた。



第26-2図 北東側土層断面図

第3節 縄紋時代の調査

第16層の砂層から下位の層は、縄紋時代の堆積層と考えられる。トレンチの西側では丘陵からの転落と見られる、礫を多量に含む青灰色粘土の堆積（第26層）が、岩盤から約2.2～2.3mの厚さで見られ、この層中より後述する縄紋時代の遺物が多く出土している。第23層から25層の青灰色系の堆積層は、この礫層の影響を受けた層で、調査地の南東方向になるにつれてこの層は見られなくなり、変わって濃茶色粘土（第22層）の厚い堆積層となる。

遺構（第28図） 遺構としては足跡と土坑を検出した。

足跡 第19層の腐食物混り暗灰色粘土を除去した最下層の暗灰色粘土層の上面において、足跡を2ヶ所検出した。1ヶ所は西から東に向かって一直線に並び、もう一方はほぼ南西から北東に向かっているが、前者の足跡ほど整然と並んではいなかった。

土坑（SK-01）（第27図） 土坑の規模は、長径90cm、短径70cm、深さ25cmで、土坑内には暗濃茶粘土混じりの砂が堆積し、砂層中にはドングリが多量に含まれていた。こうした状況から、この遺構は貯蔵穴と考えられる。

遺物 遺構に伴う遺物は検出されなかったが、各層で遺物を検出した。

第29図～第34図は第26層の礫溜からの出土遺物で、No.1～4は深鉢で、No.5はNo.4の底部と見られる。No.6、No.8、No.9は深鉢と考えられる破片で、No.8は刻目を施した粘土紐を貼付ける。No.9は補修用の円孔が残る。

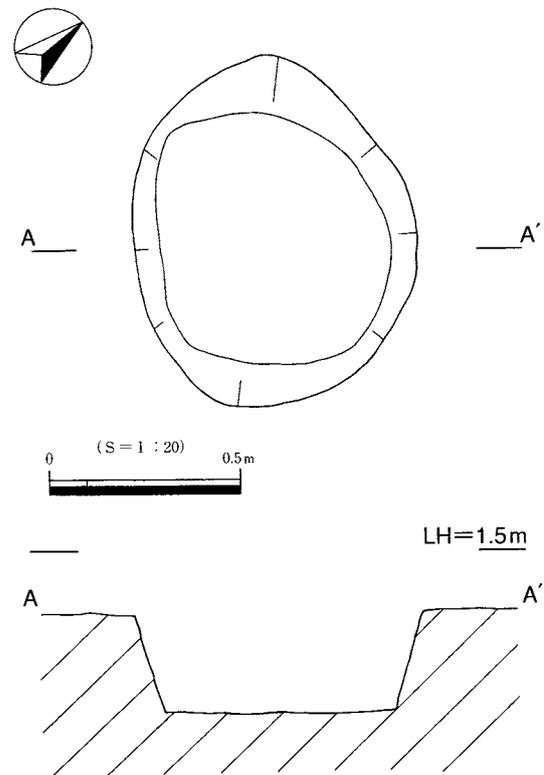
No.10、No.14、No.15、No.18～No.22は粗製の深鉢かあるいは浅鉢形の土器である。No.11～No.13は縄紋時代前期のものである。No.14、No.15は同一個体と思われる小形の浅鉢形土器である。No.24は口縁端部が外反する縄紋時代晩期の土器である。No.26～29は深鉢形土器の底部である。No.32～No.41は粗製の深鉢かあるいは浅鉢形の土器で、礫溜層の上層から出土した遺物である。S1は石鏃、S2、S3は搔器、S4はスクレイパーで石材はS4のサスカイト以外は黒曜石である。S5は敲石、S6～S21は打欠石錘である。

第35図は第22層の最下層濃茶色粘土層から出土した遺物で、No.41、No.42は口縁部が外反する縄紋時代晩期の土器である。No.44、No.45は粗製の深鉢形土器である。No.43は口縁部が大きく外反する浅鉢形土器で、No.47は底部である。

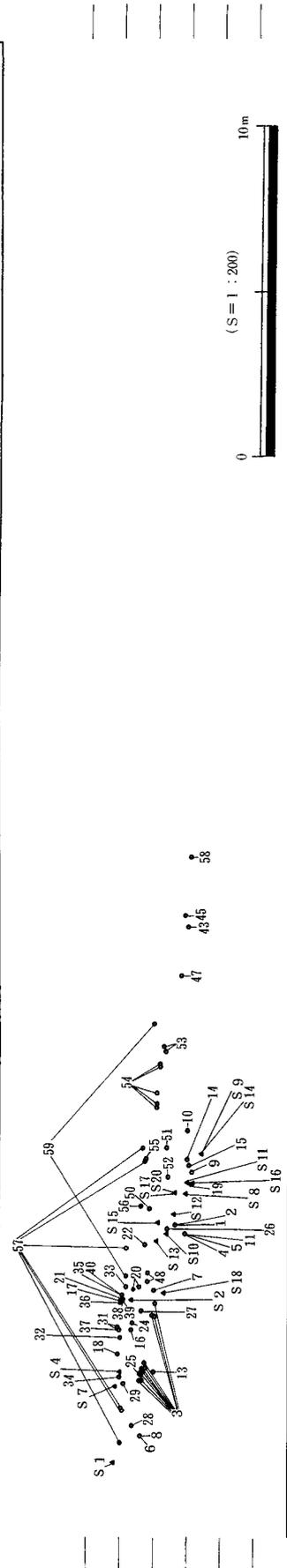
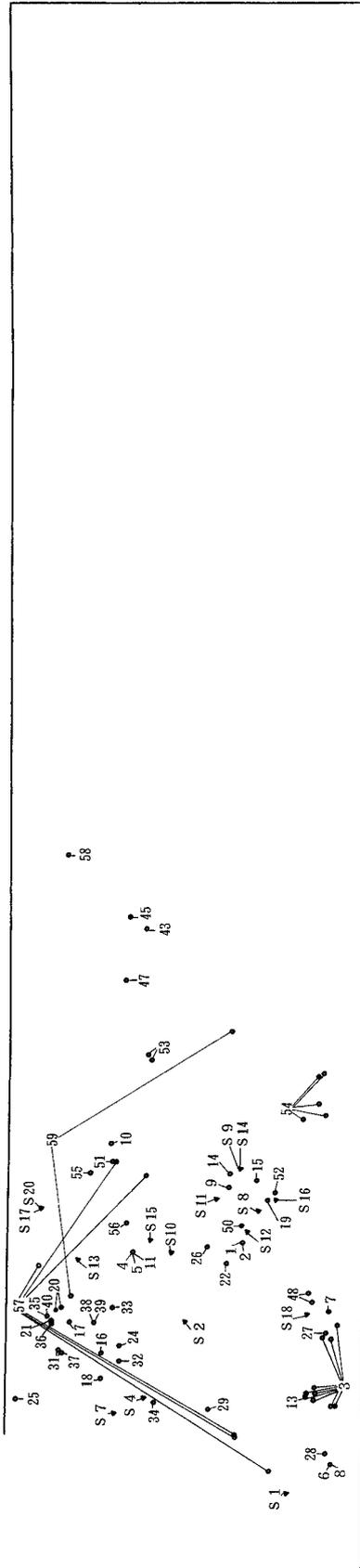
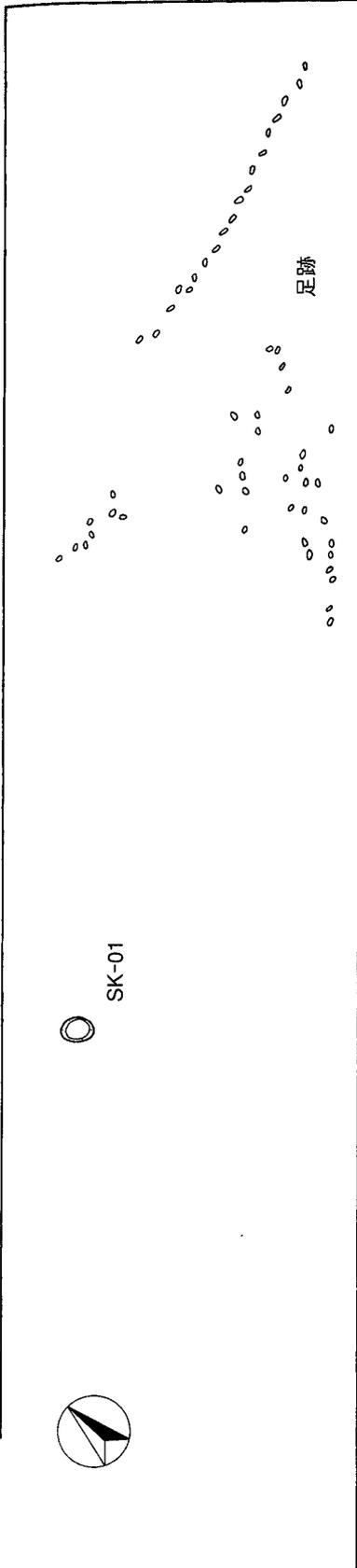
第36図は第23層の青灰色砂層下層の出土遺物で、No.48は波状の口縁を呈し、二枚貝による調整痕が残る。それ以外は粗製の深鉢形土器である。

第37図は第23層青灰色砂層の上層出土遺物で、No.55～No.56は粗製の浅鉢形土器、No.57は口縁端部が外反する縄紋時代晩期の土器、No.58は浅鉢形土器で、胴部に沈線紋を施す縄紋時代後期中葉のものである。No.59は底部である。

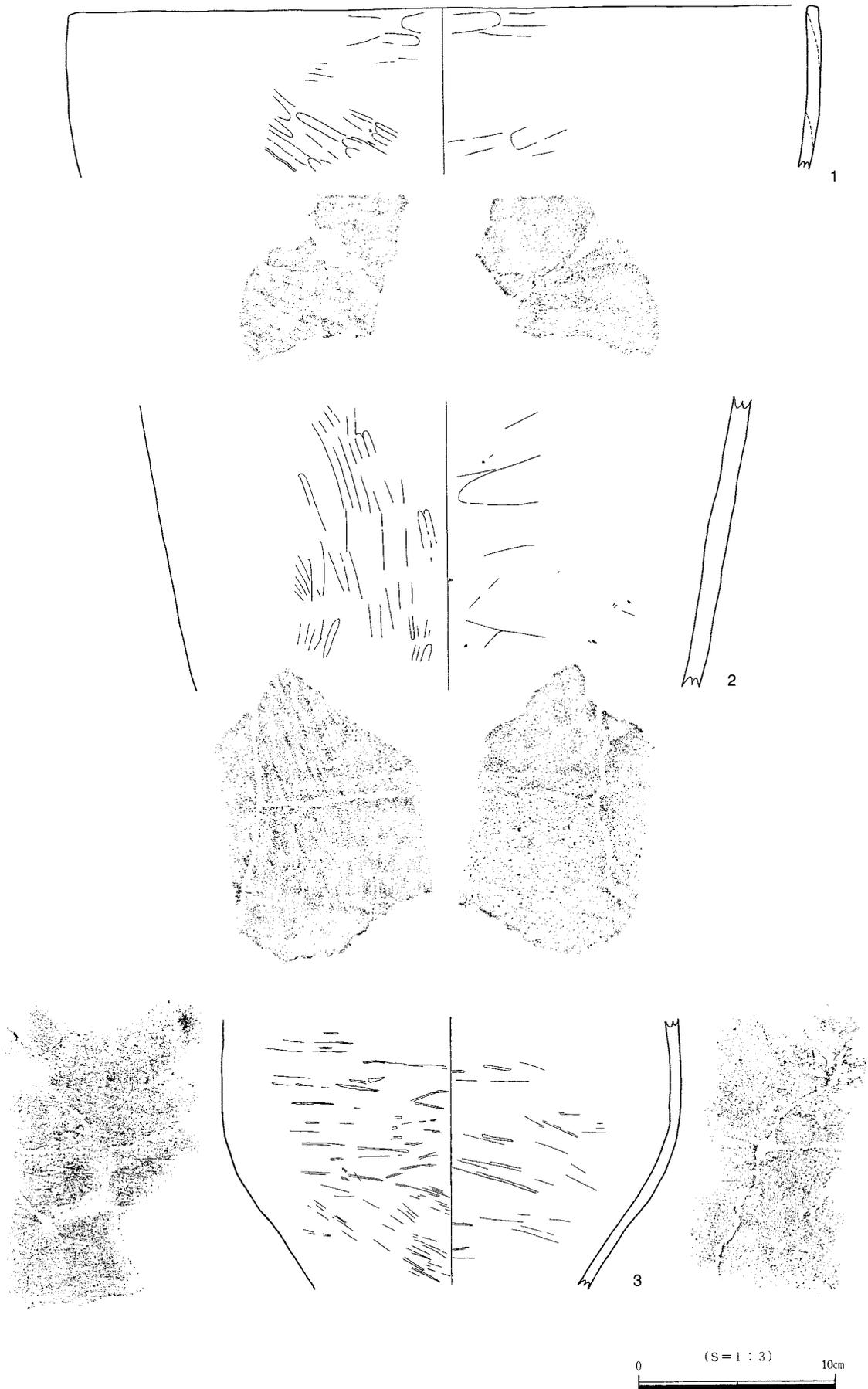
第38図は出土地点不明の遺物で、No.60～No.62は浅鉢形の土器と見られる。No.69は元住吉山式土器の深鉢である。



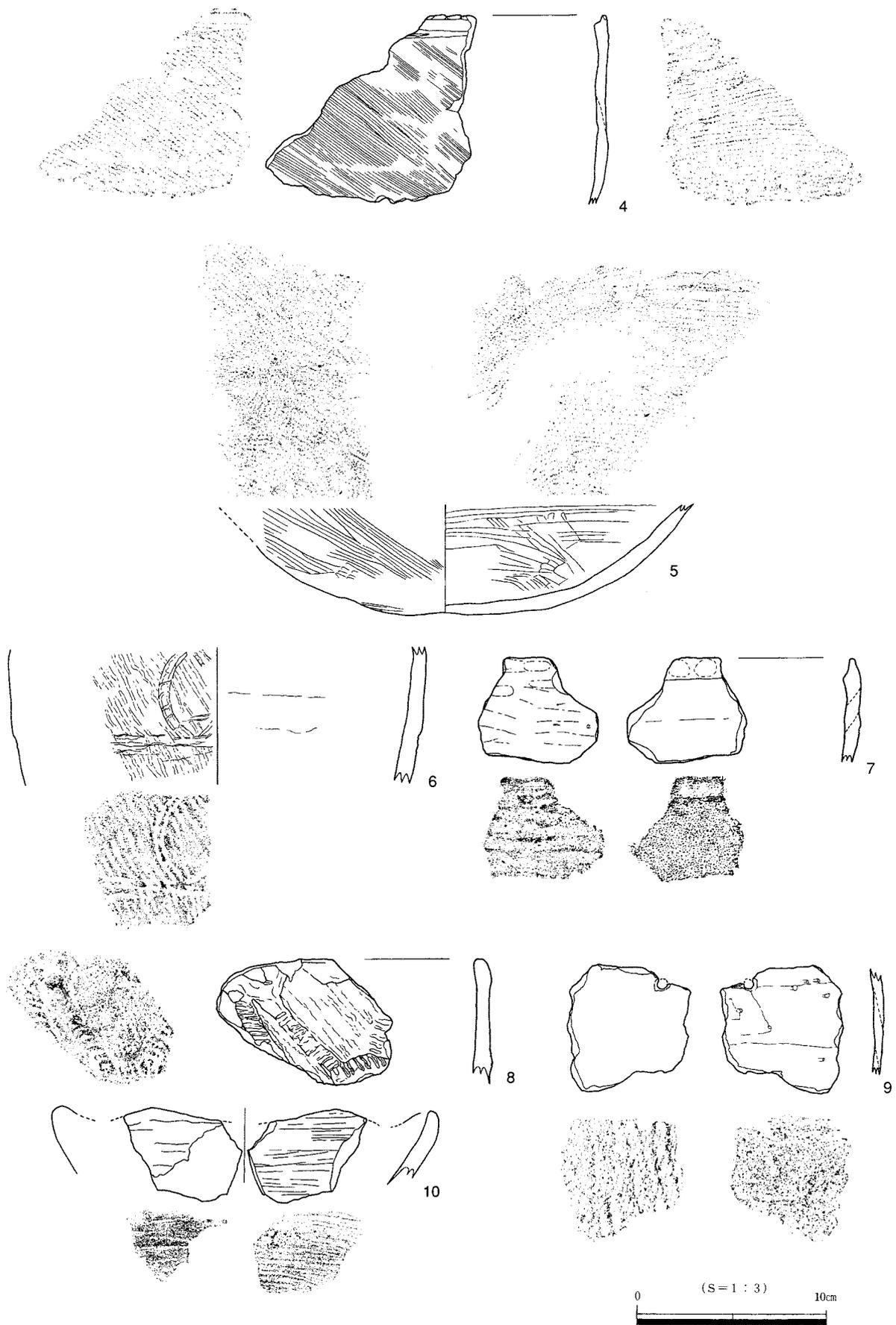
第27図 SK-01 平面図および断面図



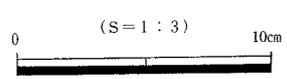
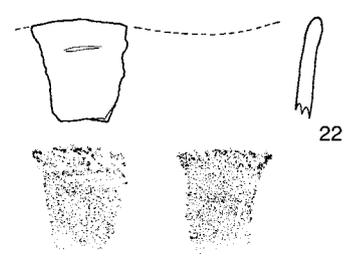
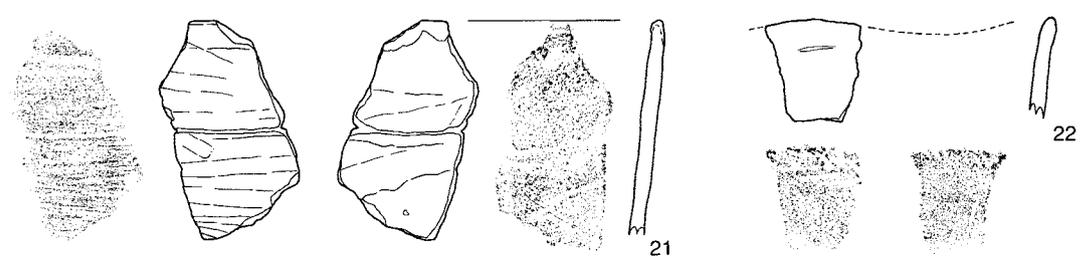
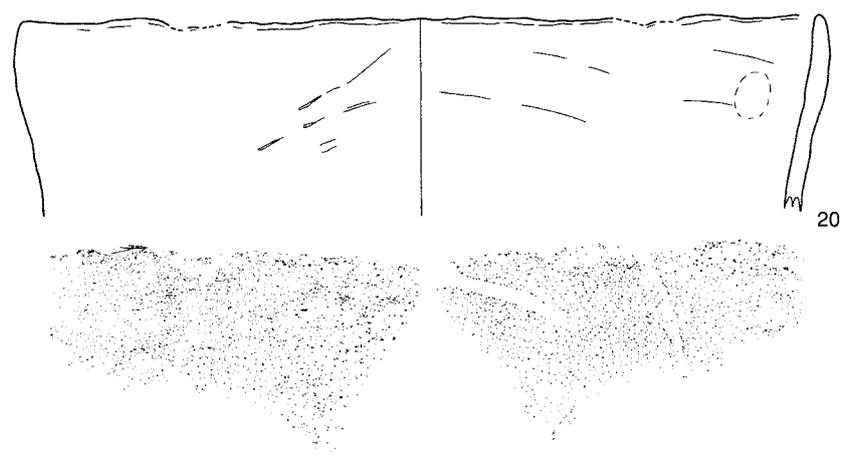
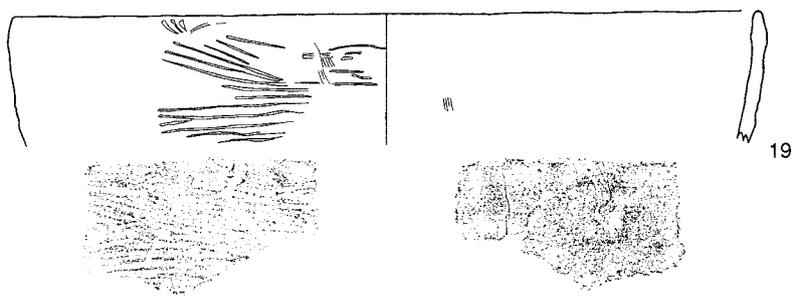
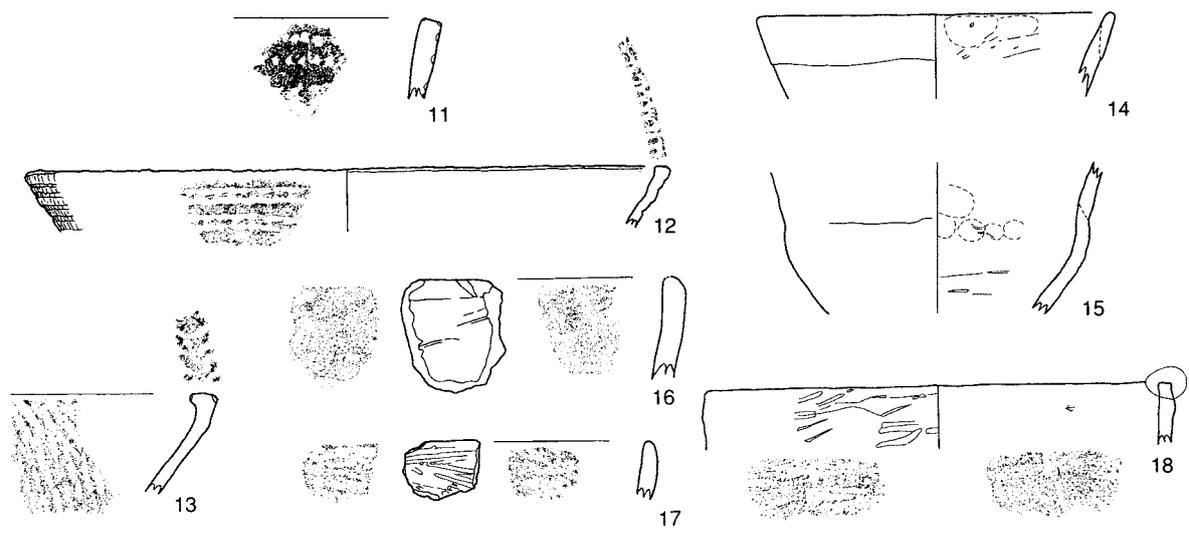
第28図 縄紋時代の遺構平面図および遺物出土状況



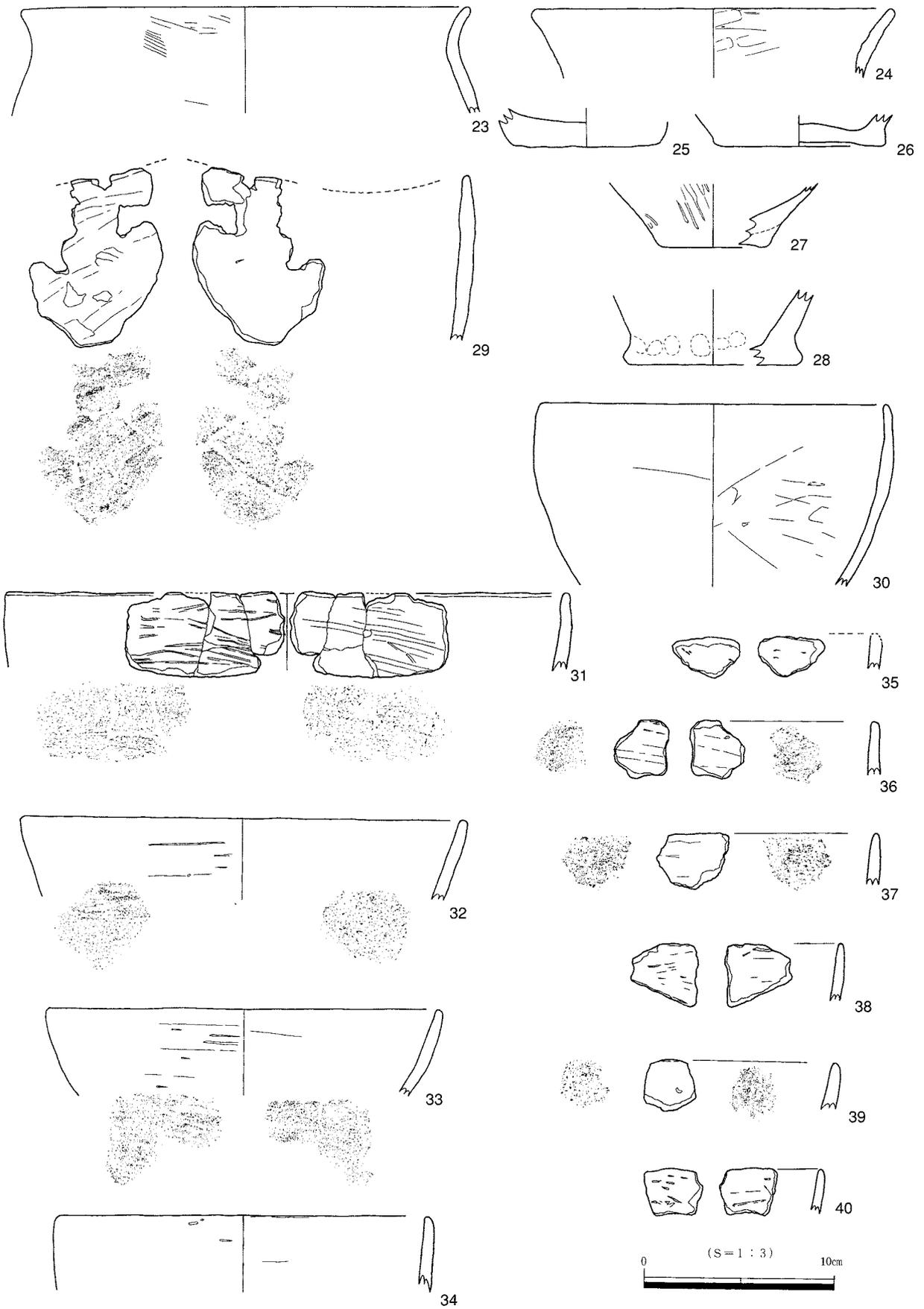
第29図 遺物実測図 (R D)



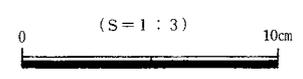
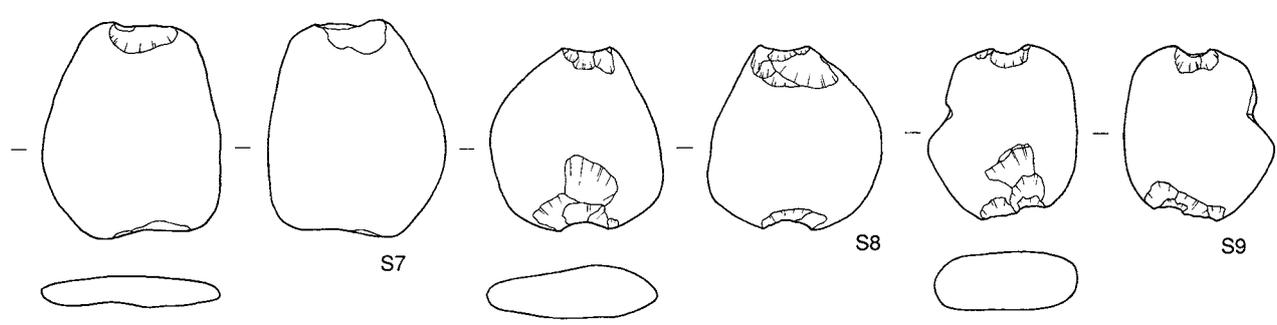
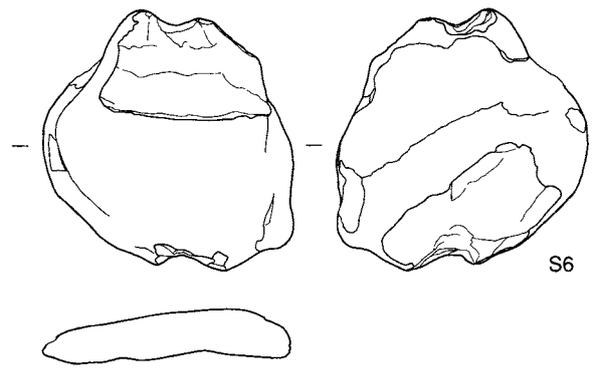
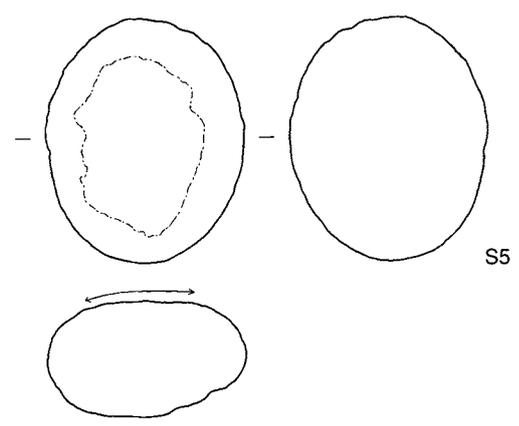
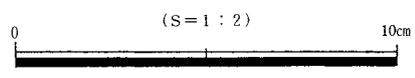
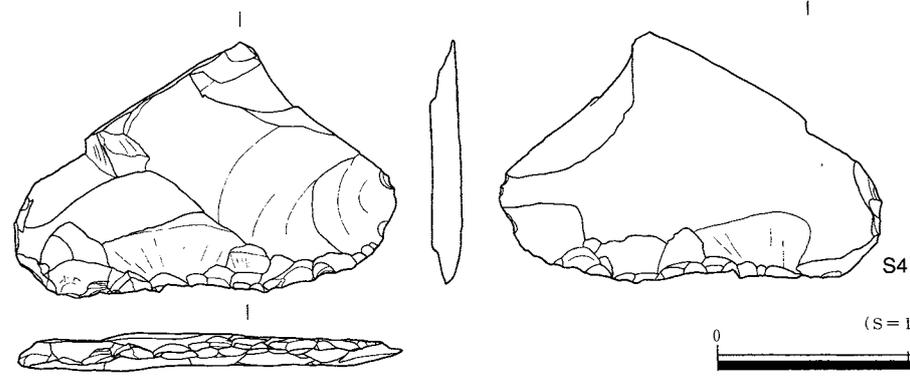
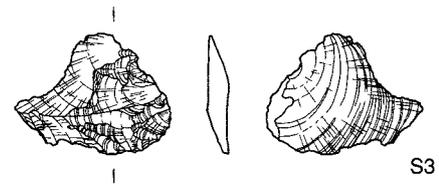
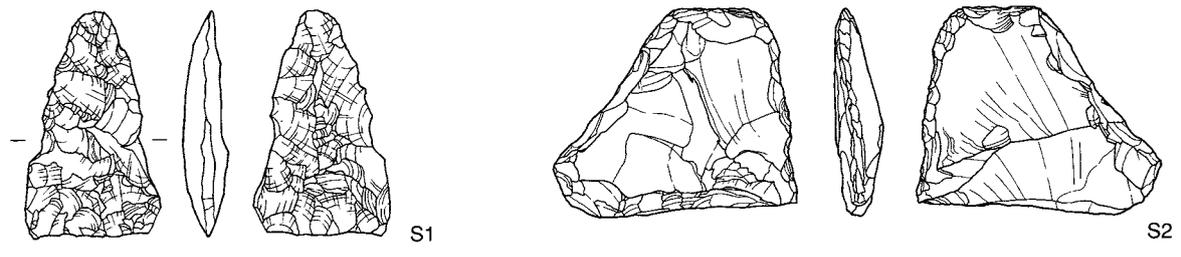
第30図 遺物実測図 (R D)



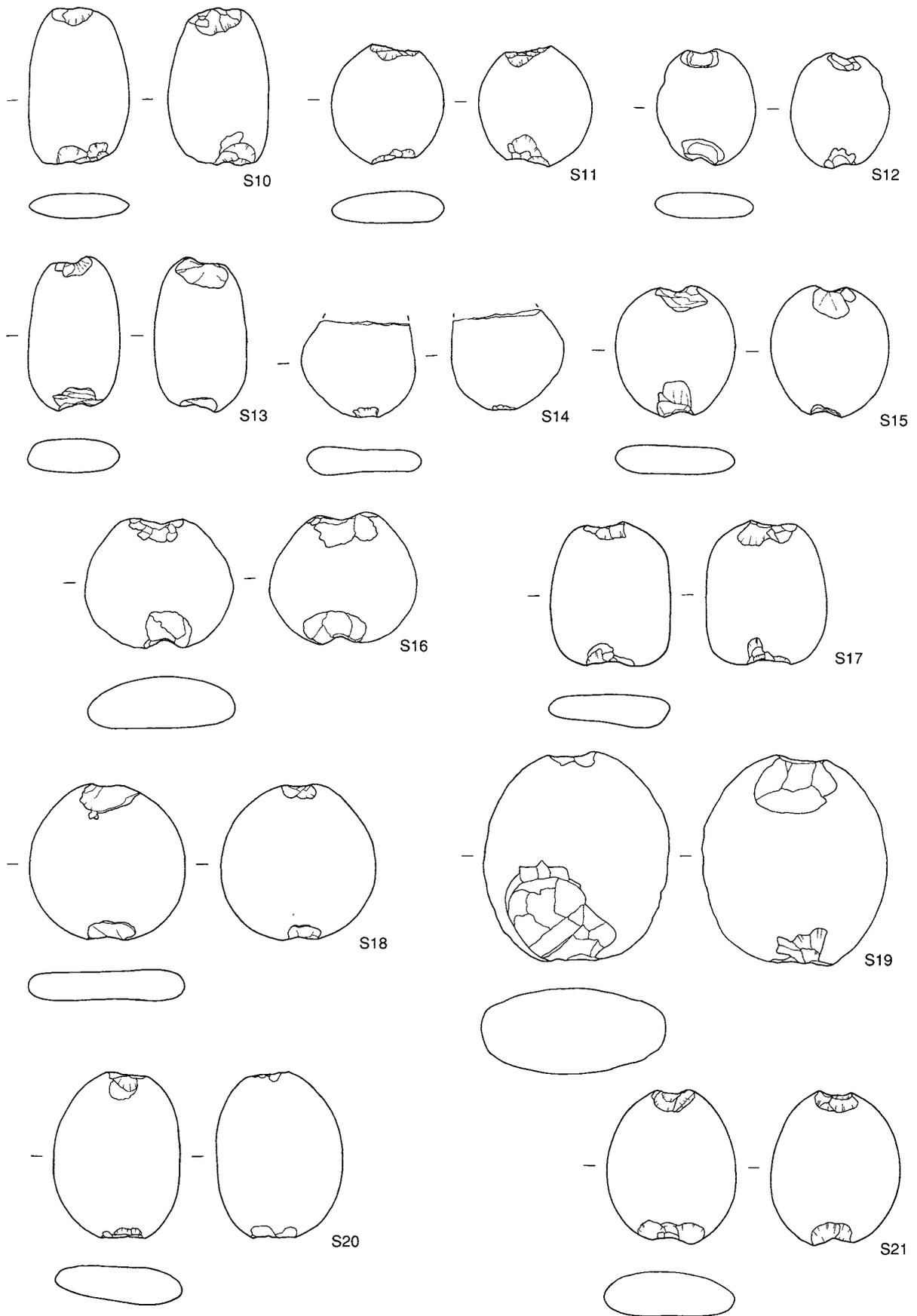
第31図 遺物実測図 (R D)



第32図 遺物実測図 (R D)

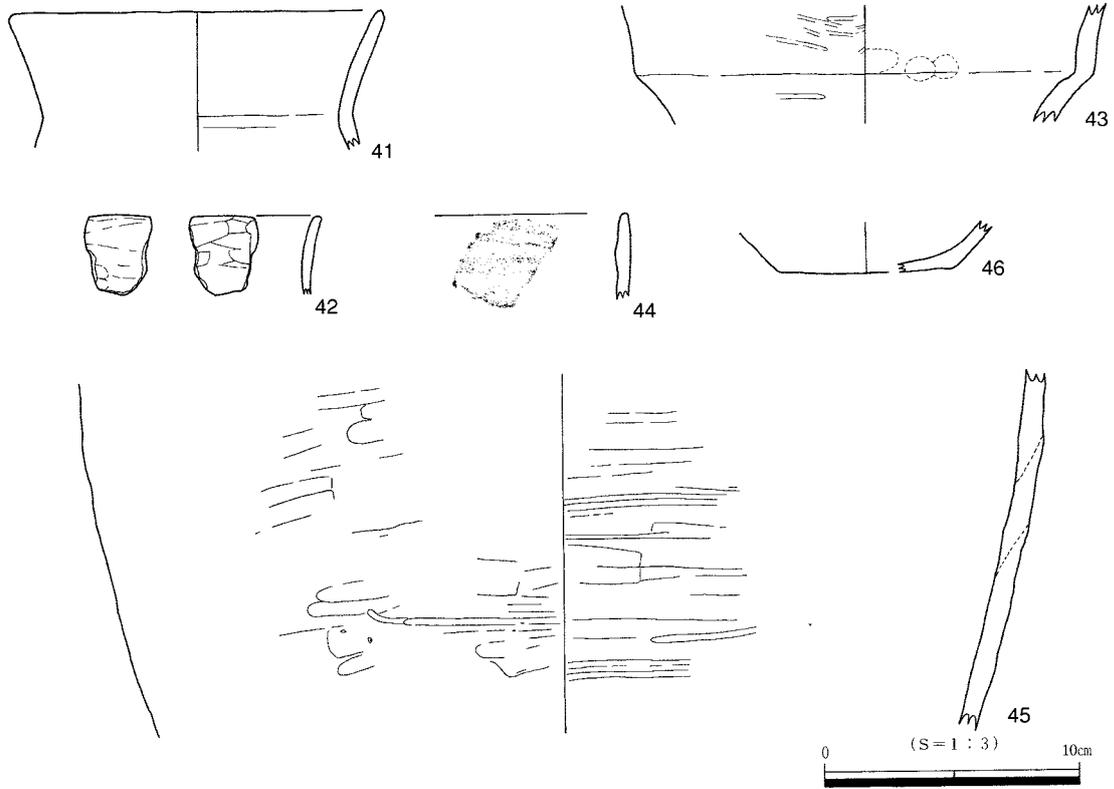


第33図 遺物実測図 (RD)

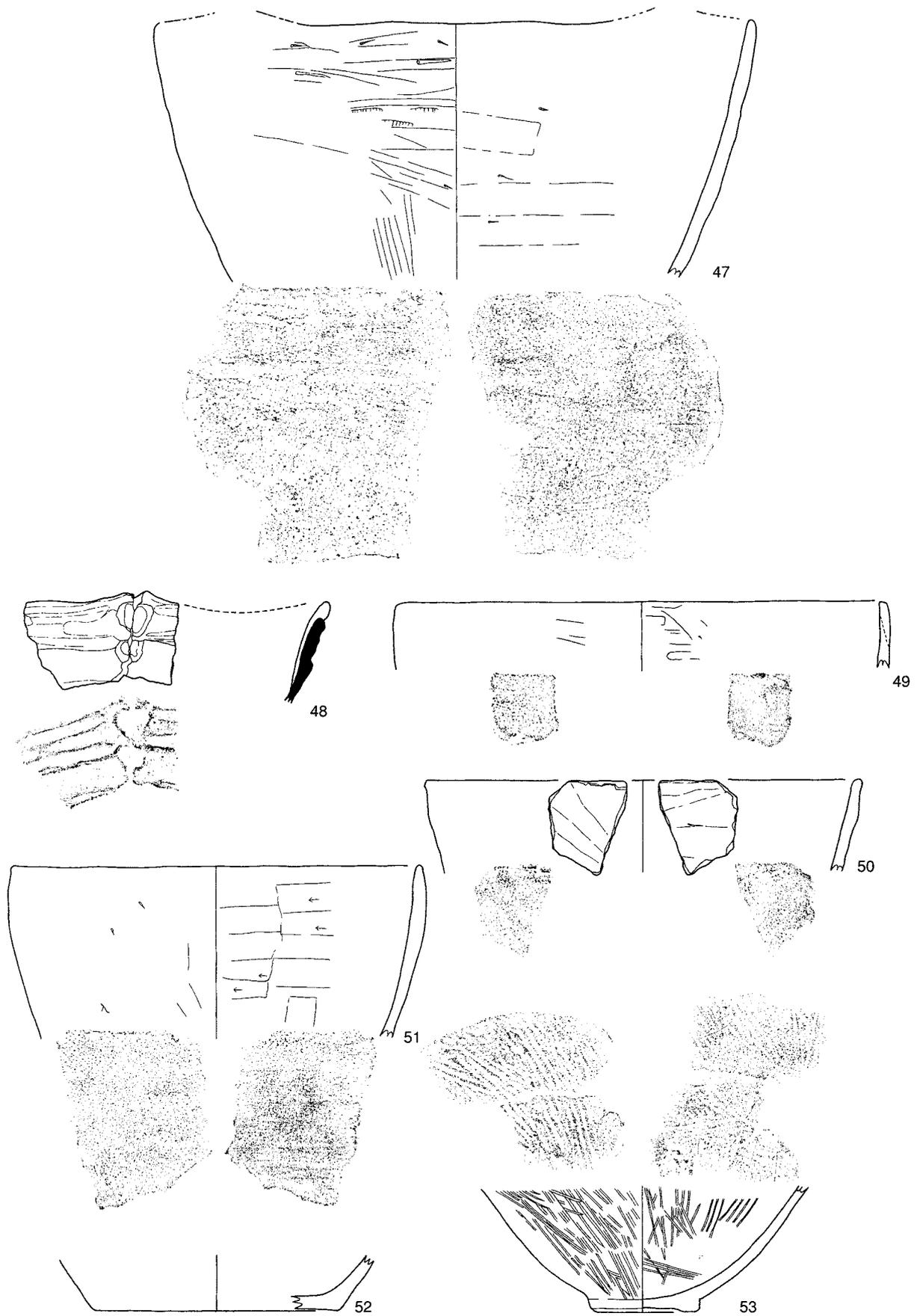


0 (S=1:3) 10cm

第34図 遺物実測図 (RD)

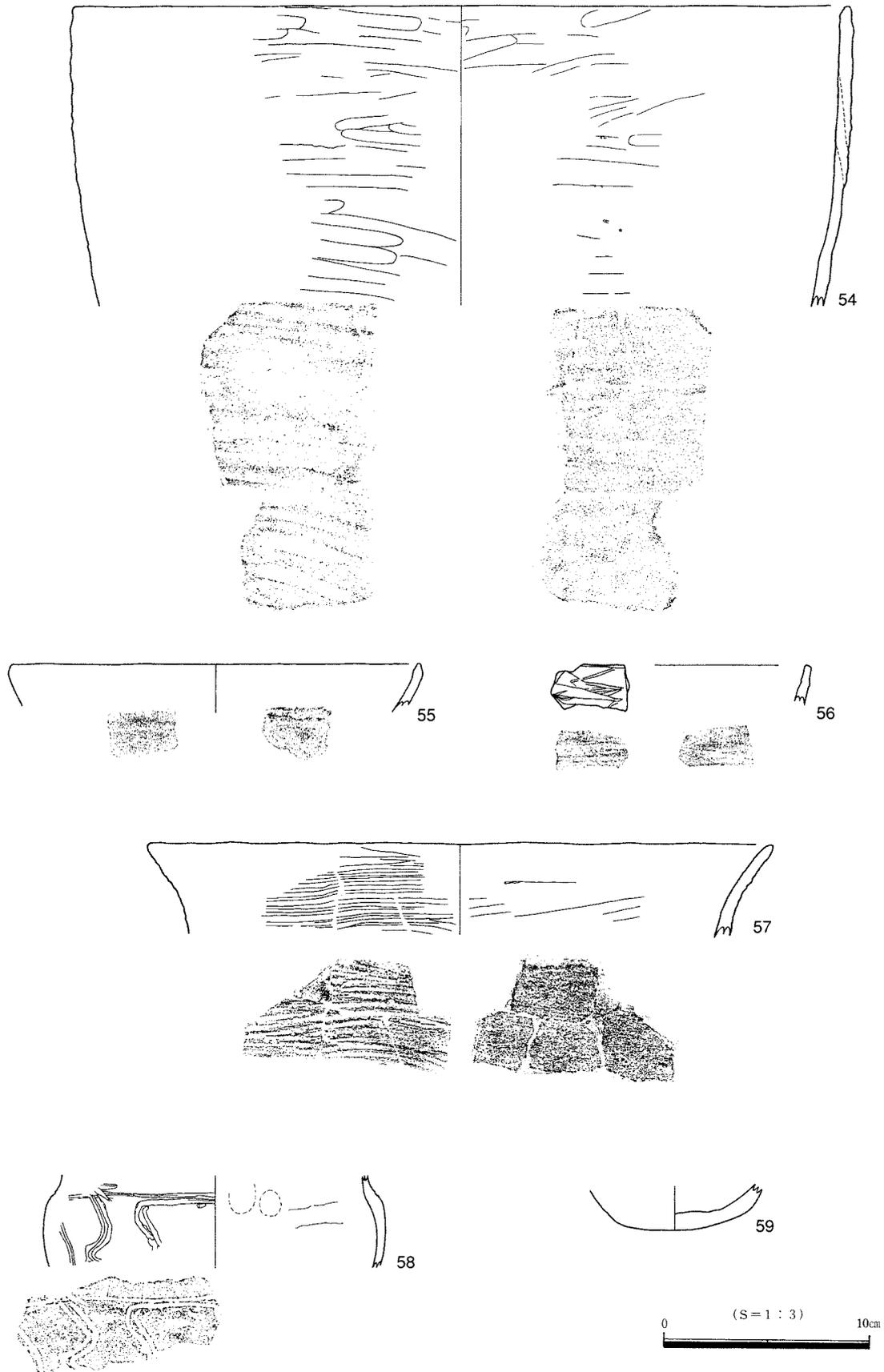


第35図 遺物実測図 (C N)

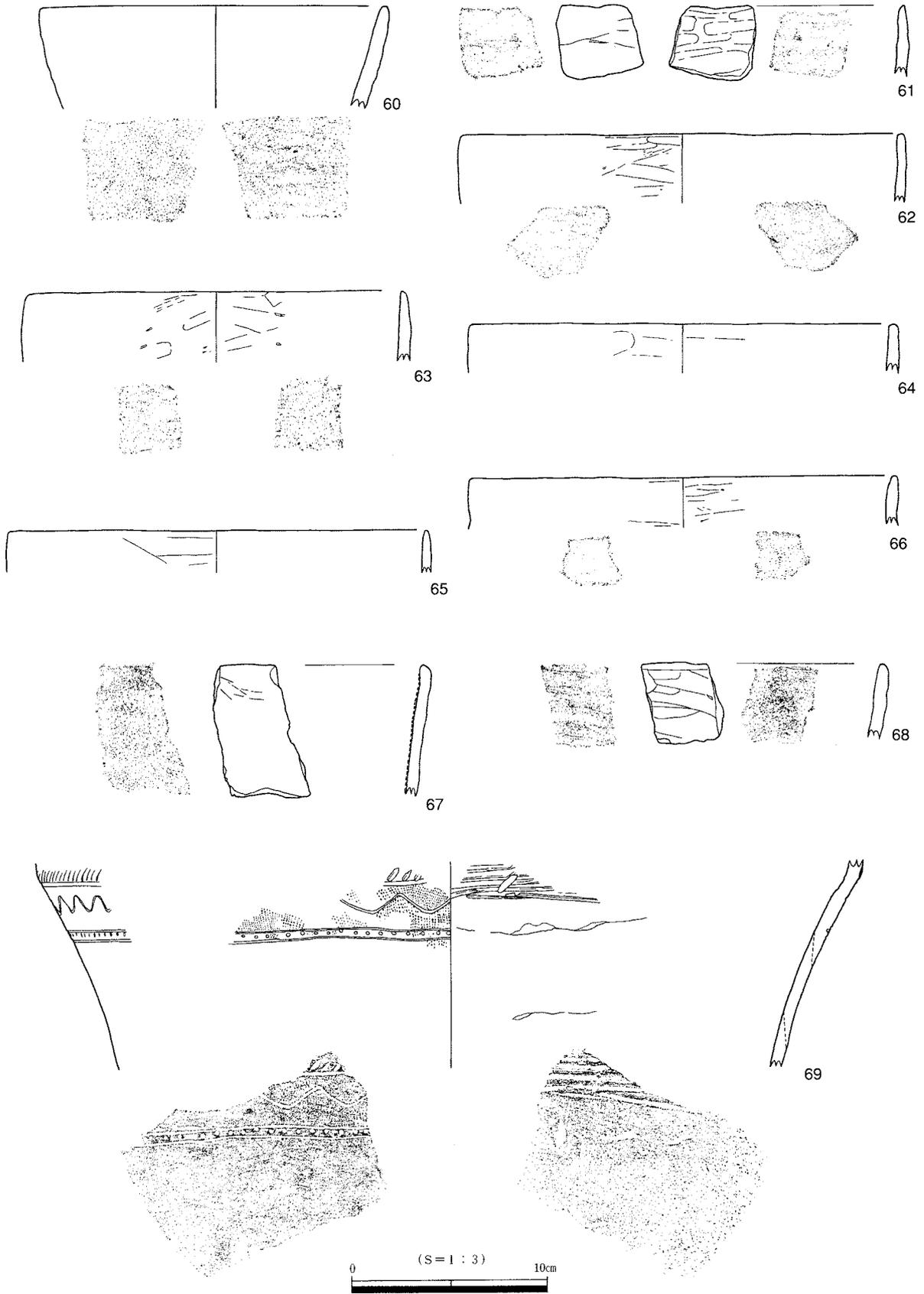


第36図 遺物実測図 (SH)

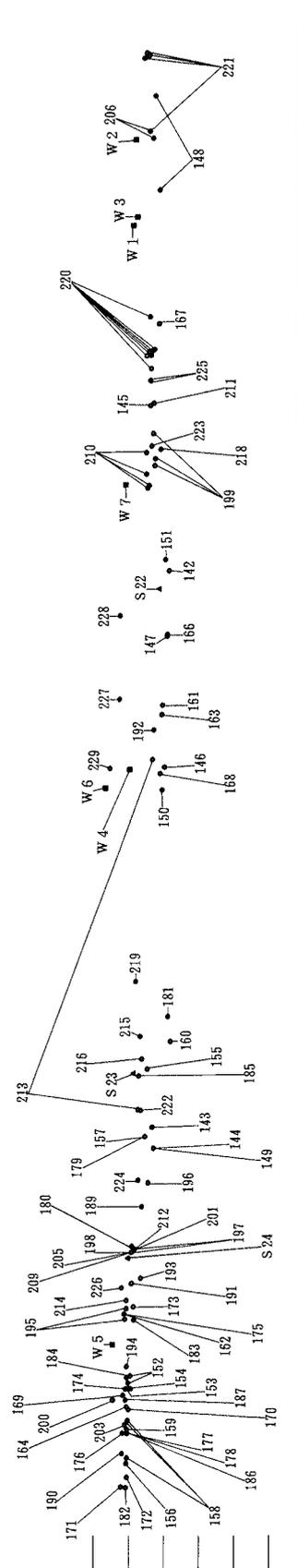
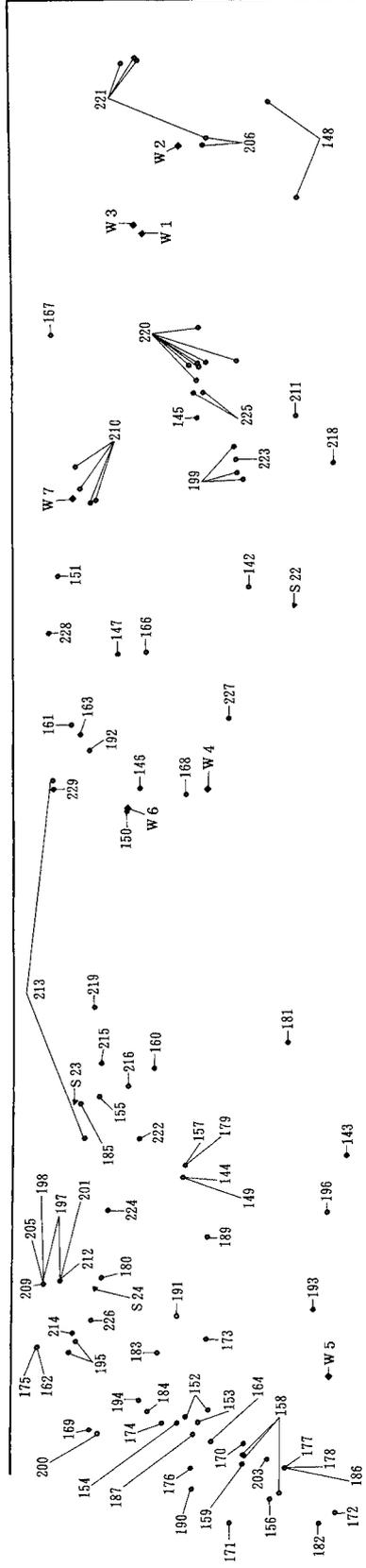
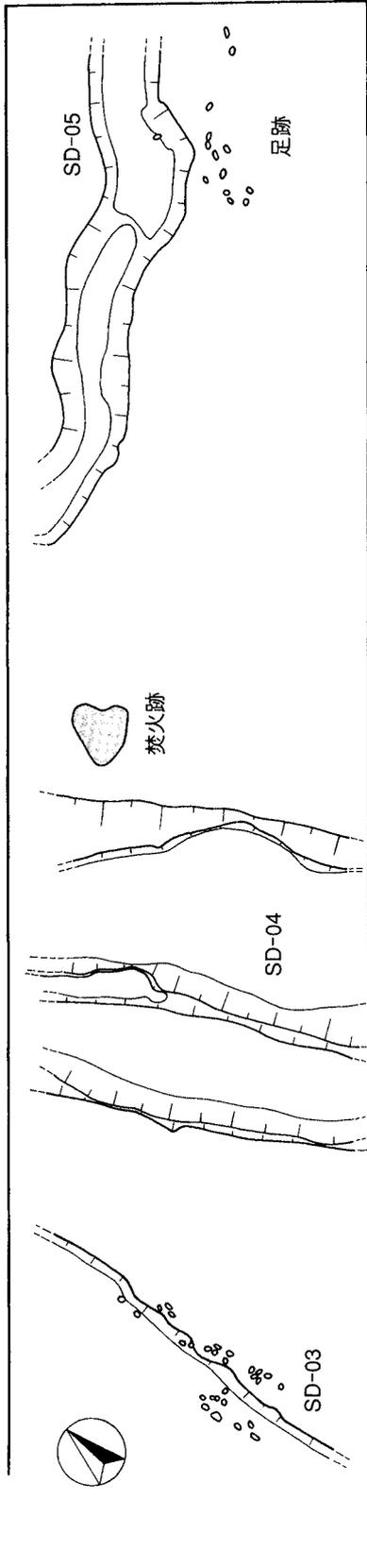
0 (S=1:3) 10cm



第37図 遺物実測図 (SH)



第38図 遺物実測図 (表採)



第39図 弥生時代の遺構平面図および遺物出土状況図

第4節 弥生時代の遺構

弥生時代前期の遺構は、W区の第2砂層面上面において土坑SK-01を検出し、中期の遺構としては、第8層上面にて足跡、焚火跡状遺構、溝状遺構SD-05、流水路SD-04の各遺構を検出した。遺構に伴う遺物は、流水路SD-04から多くの土器が出土している。

足跡（第39図）

S区の北東隅で検出した。足跡はほぼ南西から北東に向かって並ぶ。

焚火跡状遺構（第39図）

S区SD-04の北東側で確認した。直径約1.5mの範囲で地面が赤く変色し、周囲に炭化した自然木が数本散布している状況から、焚火跡と判断したものである。

溝状遺構SD-05（第39図）

調査地の北東隅から西側にかけて検出した。西側は比較的良い状態で検出できたが、北東側では南東側の肩部が流れた状態で、平面的には不明瞭であったが、断面には砂が盛り上がった状態で堆積した溝の状態を観察することができた。規模は幅2m、最深部で35cmの深さである。水流の方向は不明である。

流水路SD-04（第40図）

調査地中央よりやや西側で、調査地を北西から南東方向に横断するようにして伸びる水路を検出した。水路の規模は、幅8.2m、深さ1.25mである。南西側は肩部より50cm下がった位置に、幅約1.5mのテラス状の段を作り、更に掘り込んだ状態で検出した。当初は左右対称の幅6m程度の規模であったものが、何らかの理由で拡張されたものと思われる。南東側の底床部が「V」字状に落込んでいて、底面には人頭大の石が張り付いていた。一見人為的な遺構に見えたが、テラスや壁面にも同様の石が幾つかみられたことから、自然に流れ込んだ可能性が高いものと考えた。

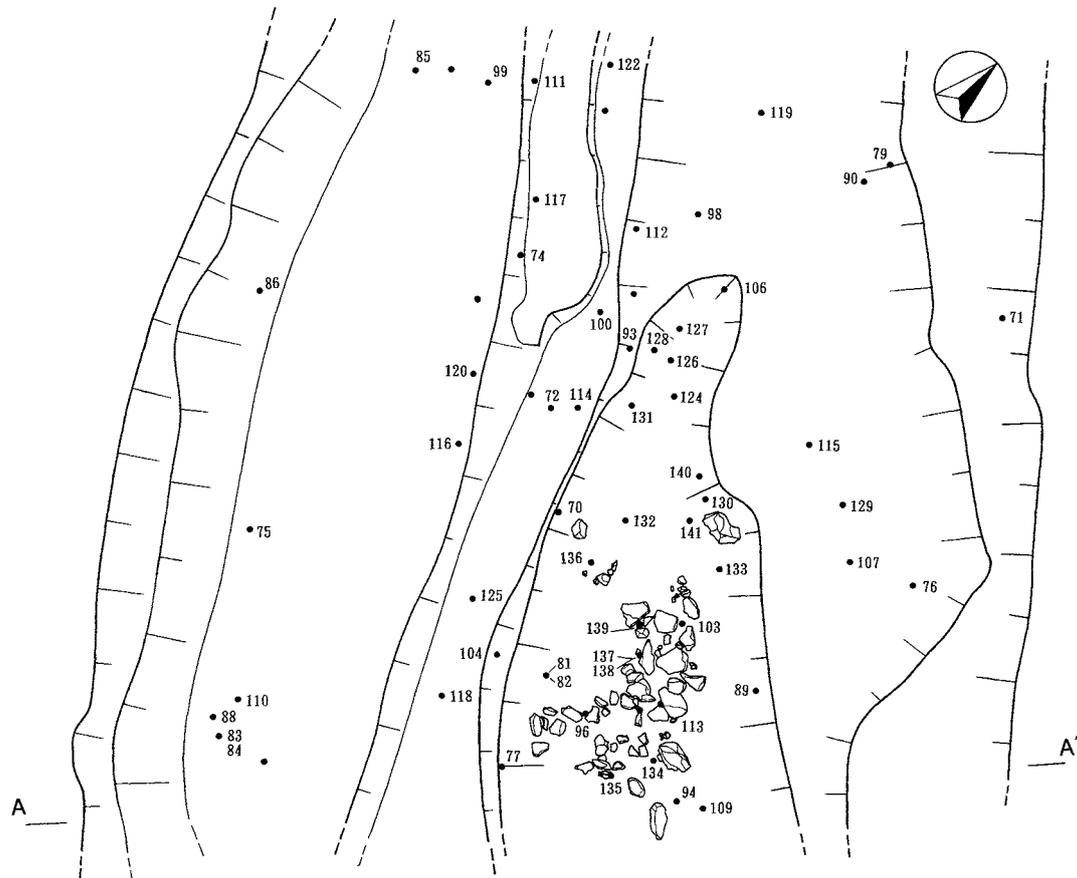
流水路は、逆台形の断面を呈し、壁面には水による浸食の痕跡の他、足跡状の小穴が幾つも見られた。流水路の中は細砂から粗砂までの各砂粒が互層を成し（第26図土層断面図参照）、肩部より50cm盛り上がった状態で堆積し、同時に遺物も数点混入していた。堆積状況をみると、正確な回数は不明であるが数度にわたる大きな洪水によって埋まったようである。流水方向は基本的には北西から南東方向であるが、逆方向に流れていた時期もあったようである。（参照第6章第3節）

SD-04出土遺物（第41図～第43図） No.70～No.78は上層から出土した遺物で、No.70は突帯紋土器で、口縁部端部に接して断面三角形の突帯がつく。No.71～No.74は如意形口縁の甕形土器で、No.71は口縁端部に刻目を施す。No.77は「L」字状口縁をもつ甕形土器で、口縁端部に刻目を施し、口縁部直下に沈線紋が巡る。No.75は口縁部下に断面三角形の貼付突帯をもつ。No.76は「く」の字に広がる口縁をもつ甕である。

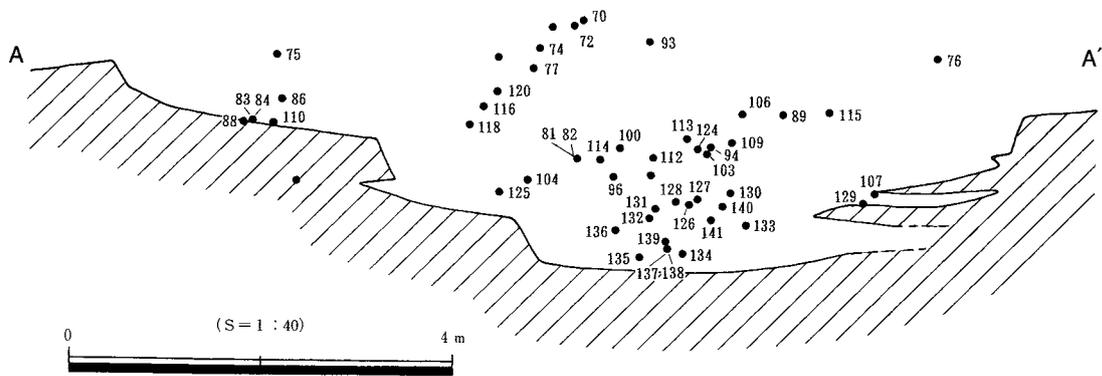
No.79～No.124は中層からの出土遺物で、No.79は刻目突帯紋土器で、口縁部端部に接する位置に断面三角形の突帯がつく。No.80～No.85は如意形口縁の甕形土器で、No.80には口縁下部に4条の沈線が施される。No.86は「L」字状口縁をもつ甕形土器で、口縁端部に刻目を施し、胴部上半に櫛描紋が巡り、さらにその下に三角形のスタンプ紋が施される。No.87～No.89は無頸壺の口縁部である。No.90～No.101は弥生時代中期の甕形土器で、No.90～No.93は頸部に指頭圧痕貼付突帯を施す。No.103～No.109は壺形土器で、No.103～No.106は口縁端部に刻目か沈線紋を施す。No.108、No.109は壺の頸部で貝殻による刺突紋や沈線を施す。No.119～No.124は高環である。

No.125～No.131は下層から出土した遺物で、No.125、No.126は甕形土器、No.127は壺形土器である。

No.132～No.141は水路底床部の石列内から出土した遺物で、No.132、No.134は如意形口縁の甕形土器、No.135～No.137は壺形土器である。

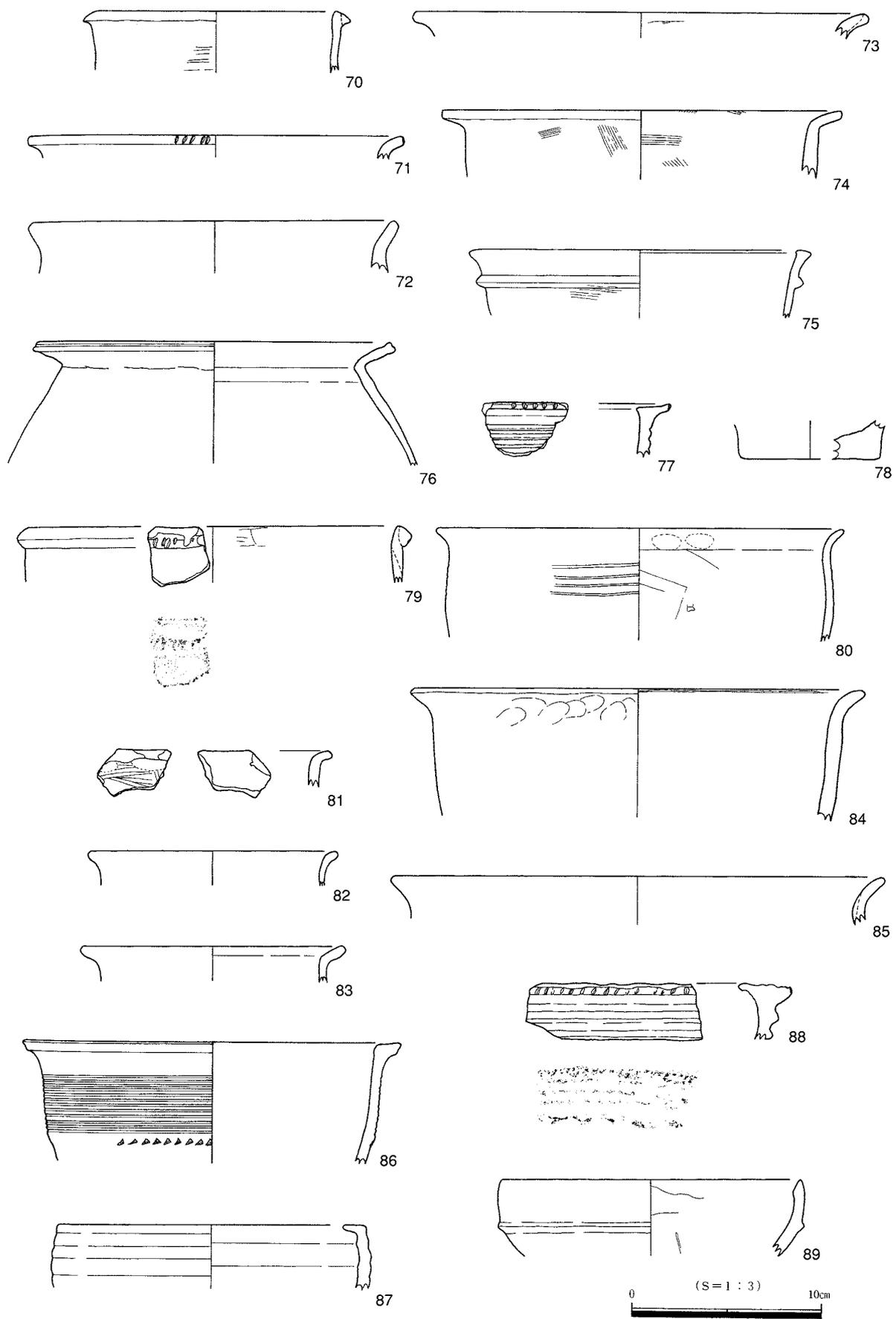


LH=4.00m

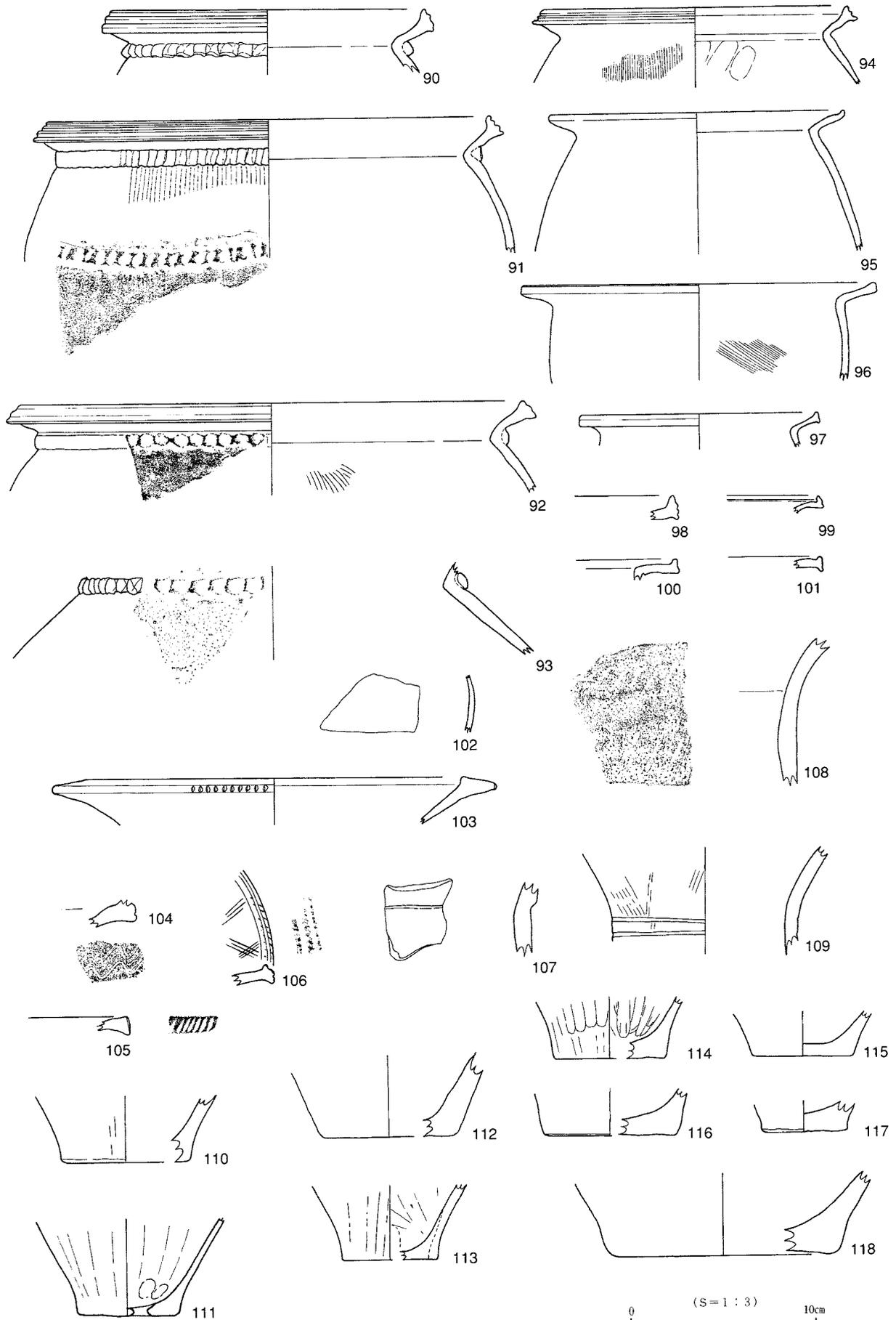


第40図 S D-0 4 平面図および断面図

※土層は第5-2図参照



第41図 遺物実測図 (SD-04)

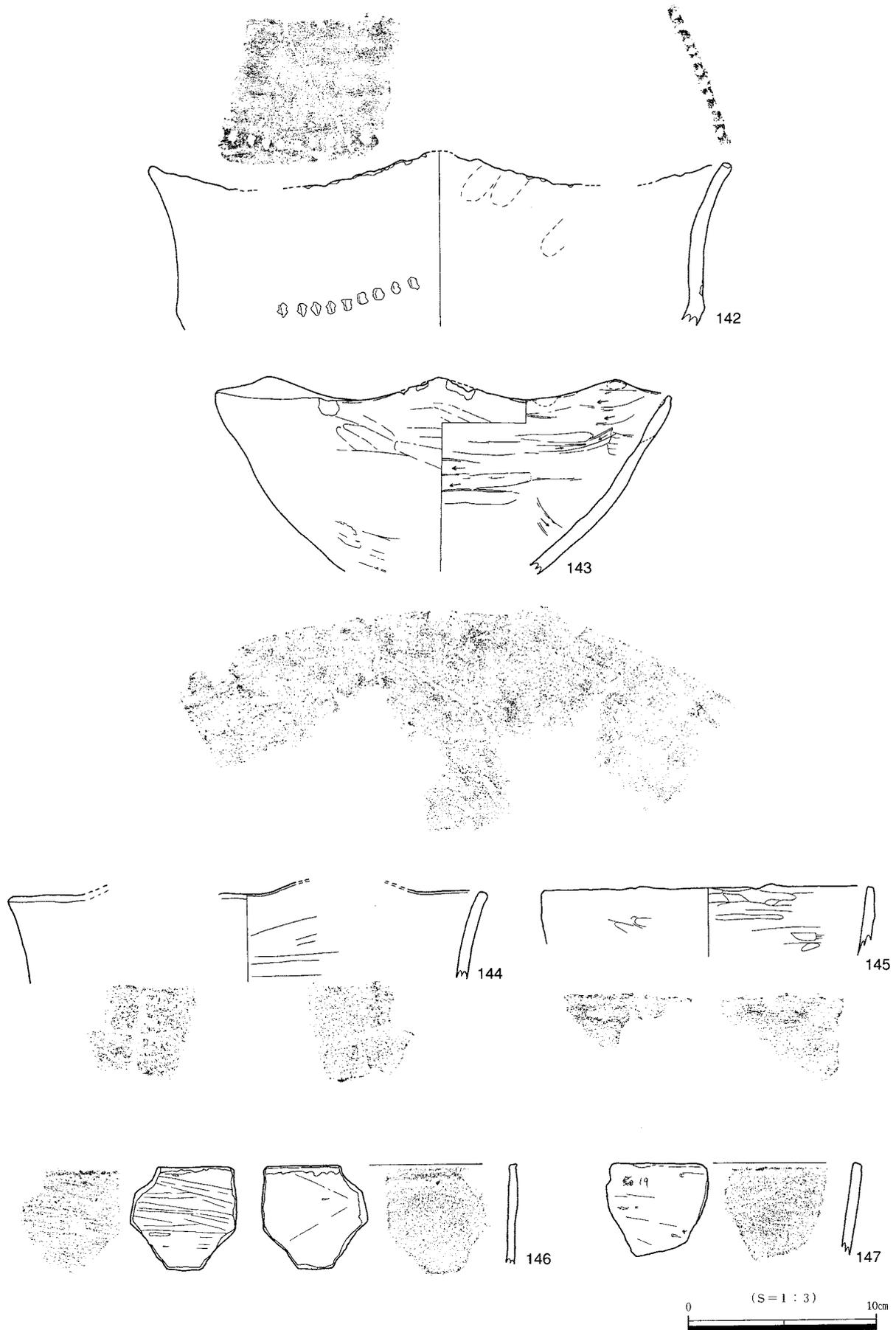


第42図 遺物実測図 (SD-04)

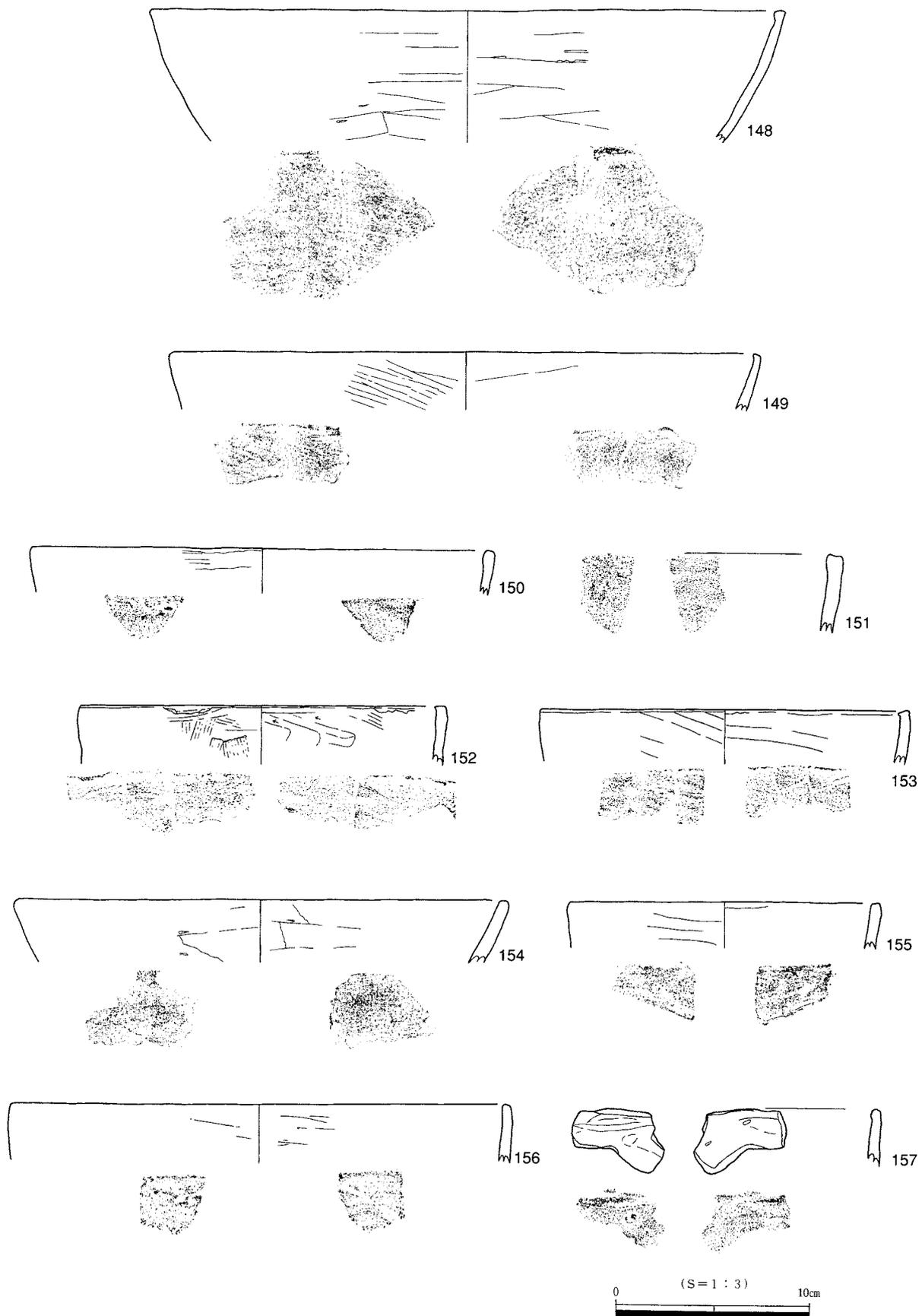
(S=1:3)
0 10cm



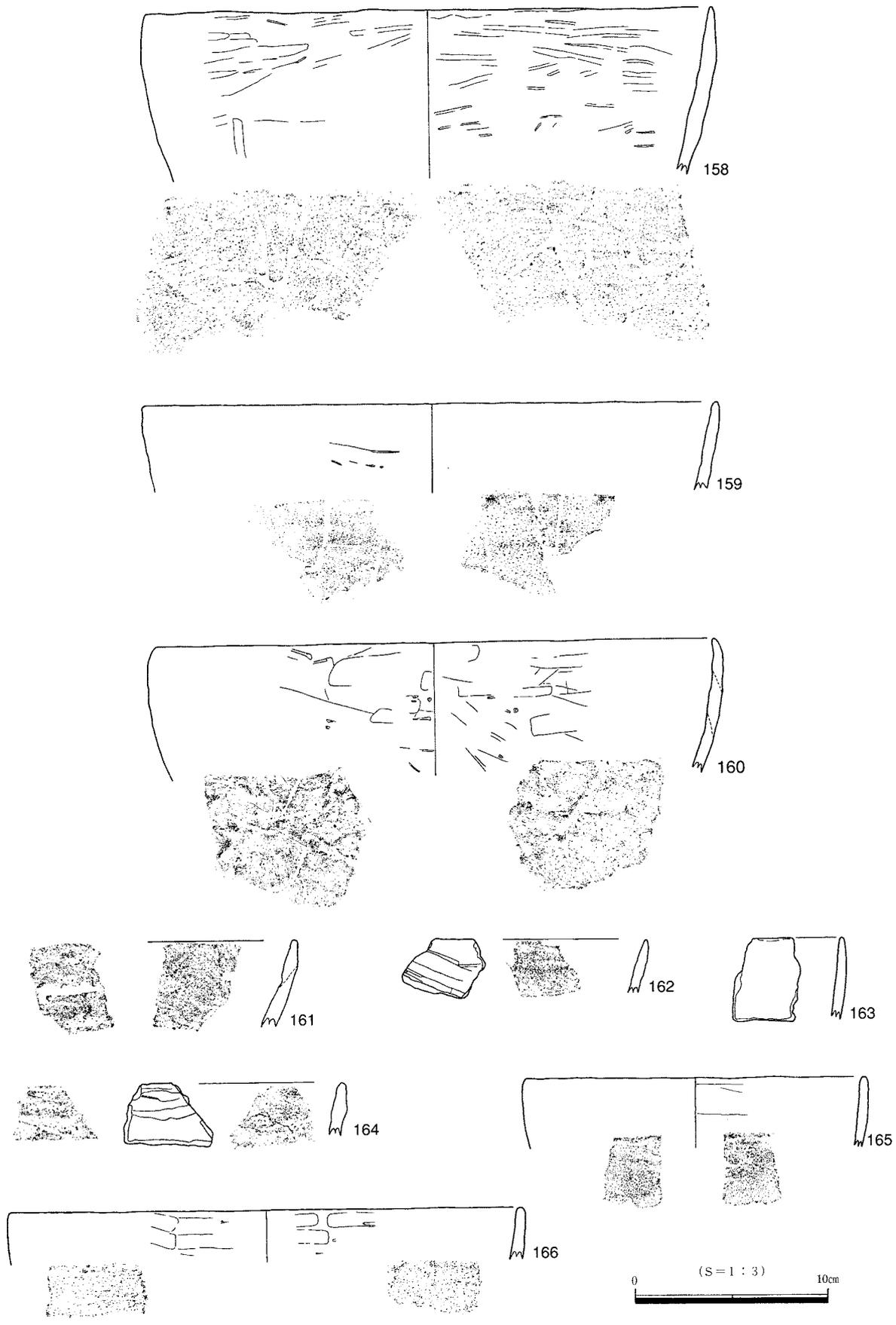
第43图 遺物実測図 (SD-04)



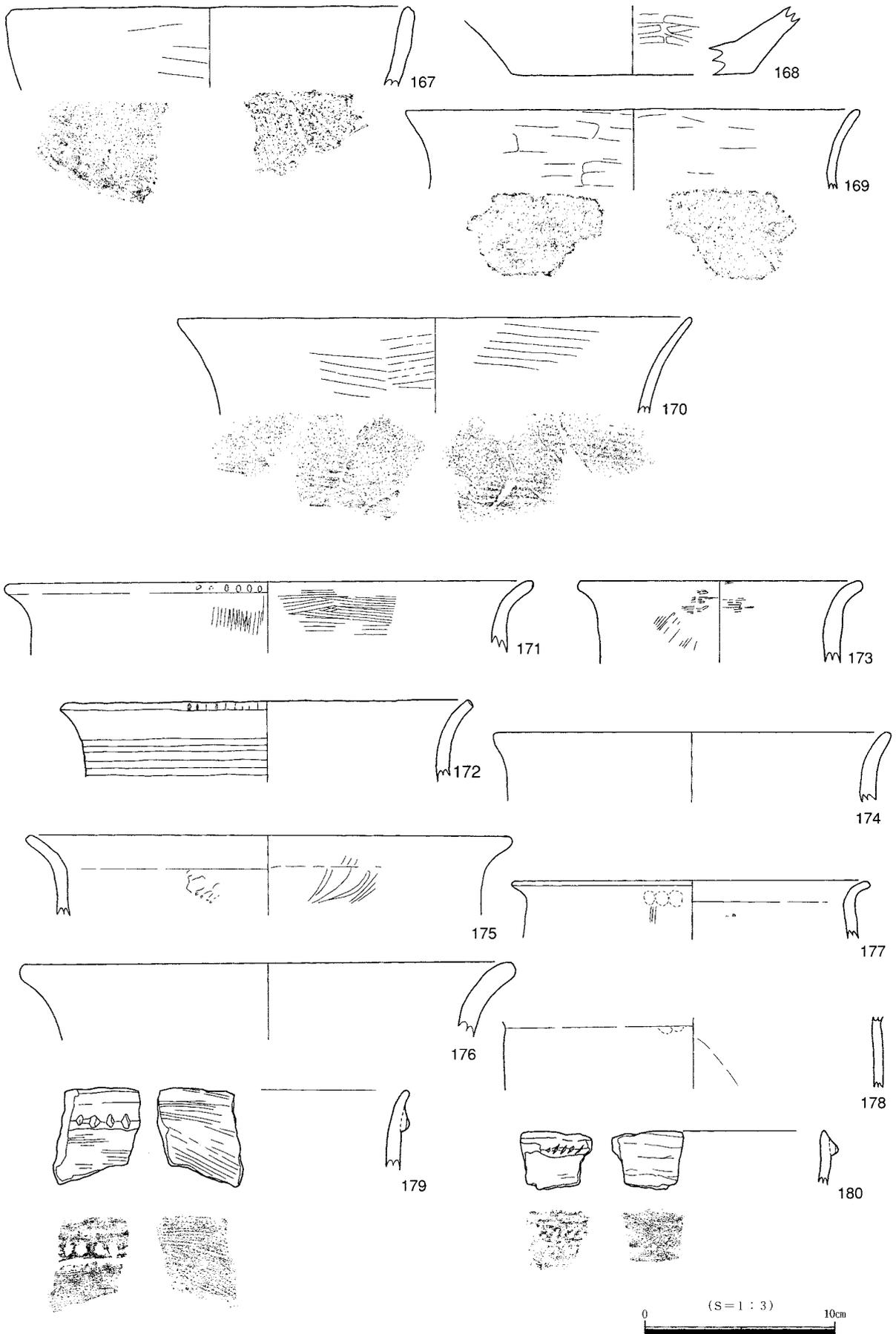
第44図 遺物実測図 (KC)



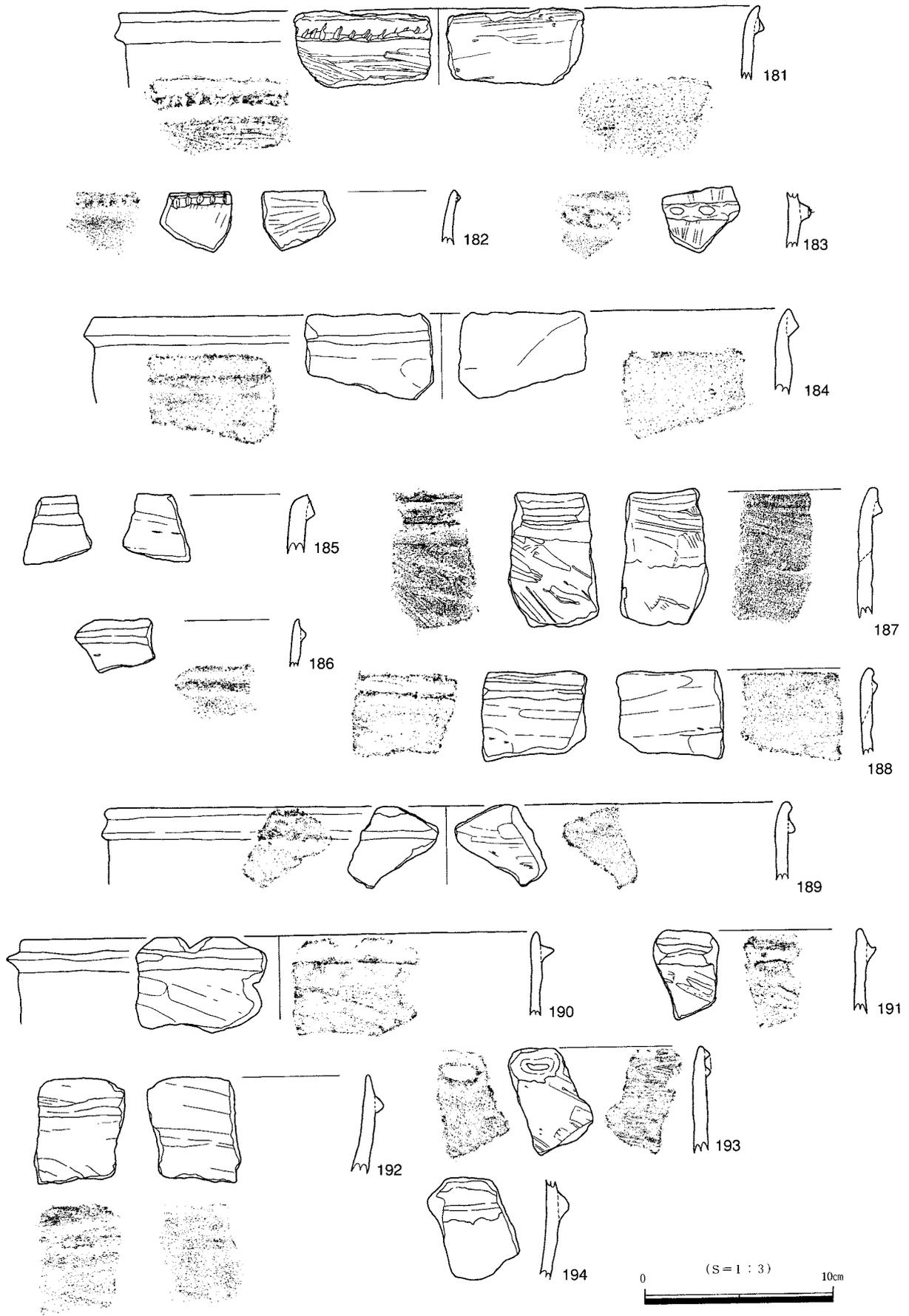
第45図 遺物実測図 (K C)



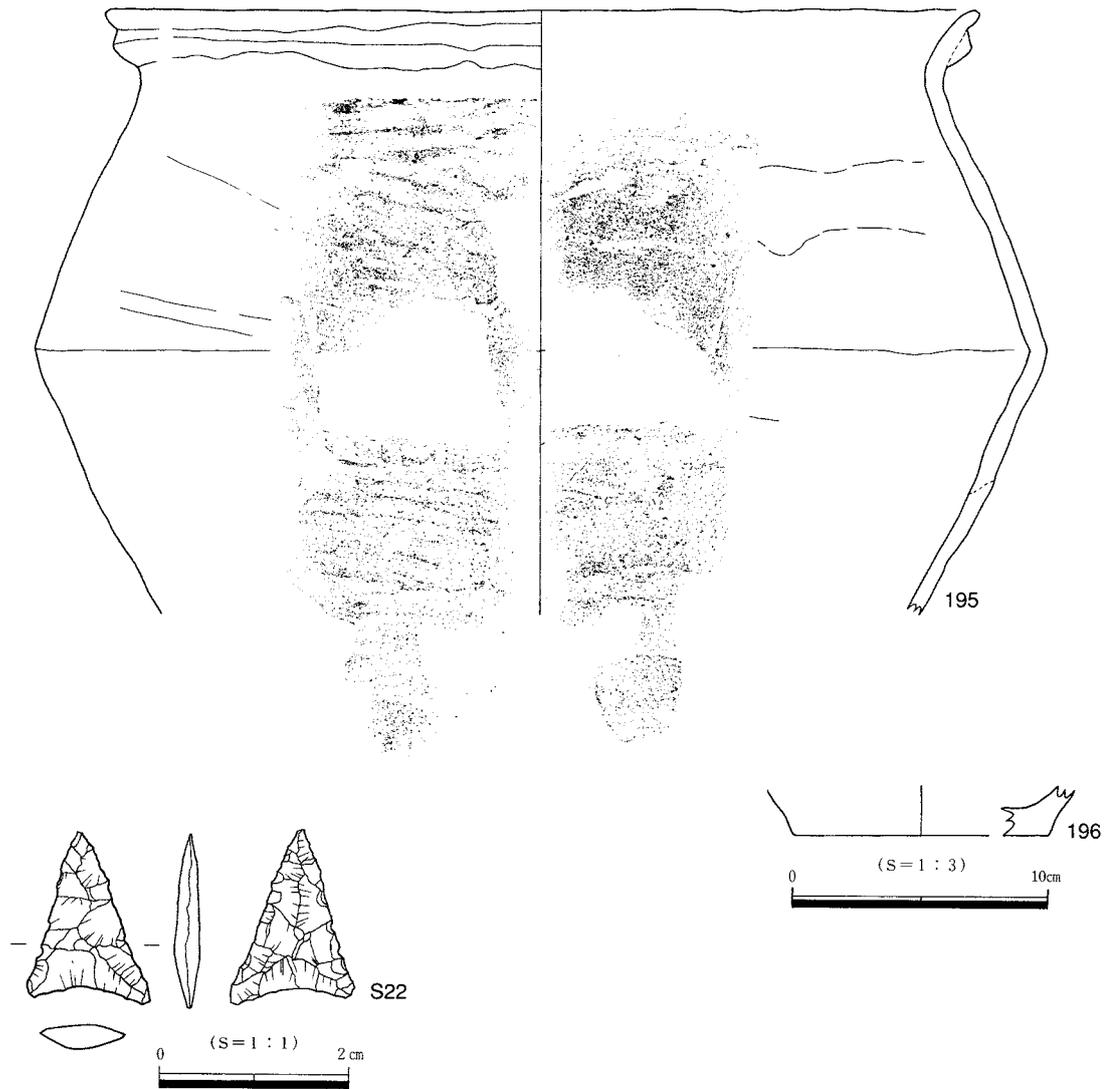
第46図 遺物実測図 (K C)



第47図 遺物実測図 (KC)



第48図 遺物実測図 (KC)

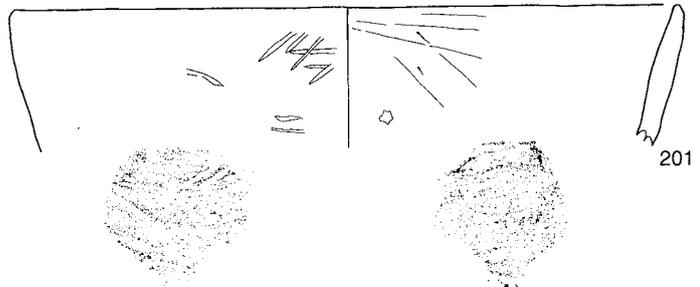
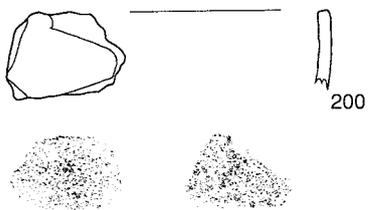
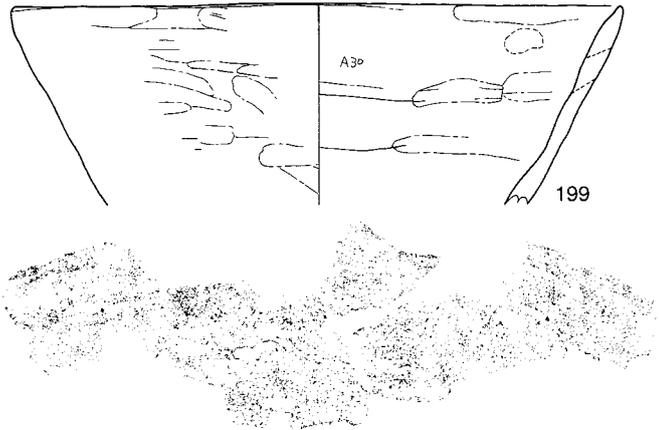
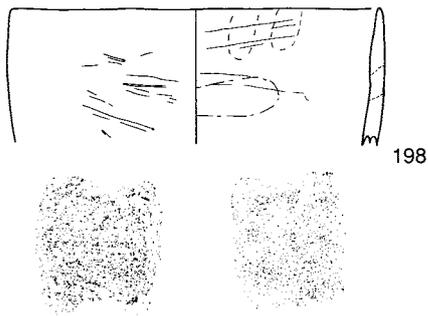
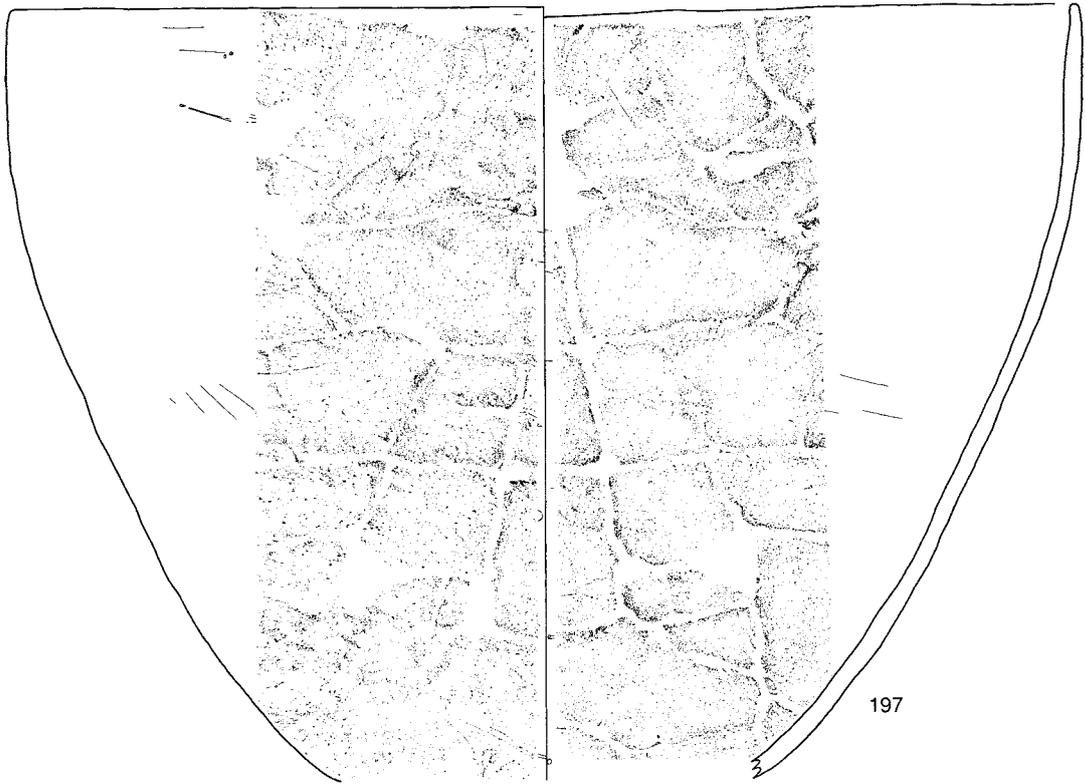


第49図 遺物実測図 (K C)

遺構外遺物

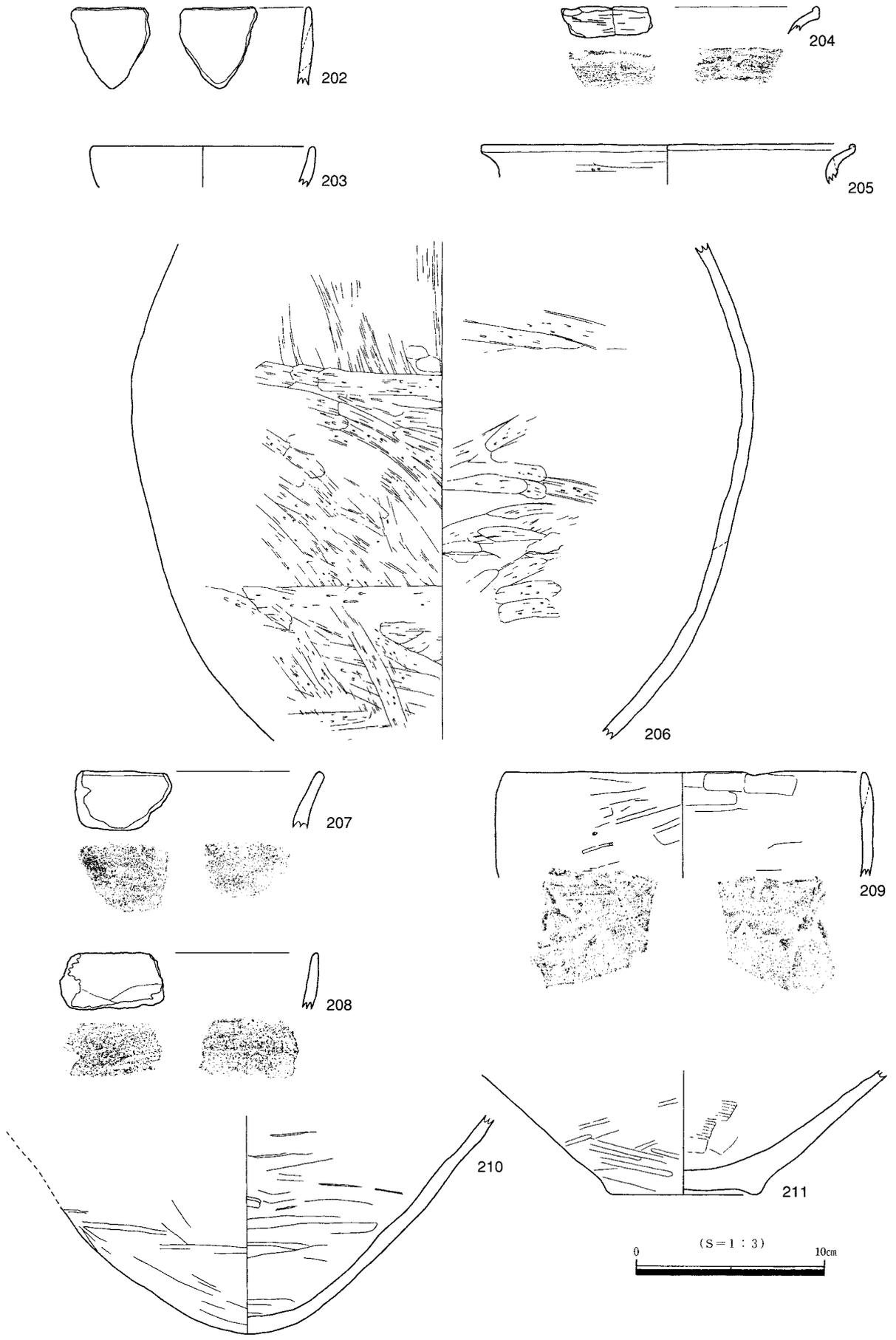
第44図～第49図は第13層の暗濃茶色粘土層から出土した遺物で、No.142は方形のスタンプ紋がつく。No.143～No.167は粗製の深鉢かあるいは浅鉢形の土器である。No.169、No.170は口縁端が外反する縄紋晩期の土器である。No.171～No.178は弥生時代前期の土器で、如意形口縁の甕形土器である。No.171、No.172は口縁端部に刻目が施され、後者は頸部直下に沈線紋を施す。No.176は壺形土器の口縁部である。No.179～No.183は刻目突帯紋土器である。No.182以外は口縁部端部からやや下がった位置に突帯がつき、その断面形は三角形かあるいはやや下がり気味の三角形である。No.184～No.195は無刻目の突帯紋土器で、No.184、No.185が口縁部端部に接して突帯がつくほかは、口縁からやや下がった位置につく。断面形は三角形かあるいはやや下がり気味の三角形である。No.193は口縁端部に丸い粘土帯を張り付ける。No.195は、胴部が大きく張り、口縁部は外反する、壺と甕を折衷したような形態である。S22は黒曜石製の石鏃である。

第50図～53図は第11層の黒色粘土層から出土した遺物で、No.197～No.206は粗製の深鉢かあるいは浅鉢形の土器である。No.204、No.205は恐らく同一固体で、口縁部は外反し端部は直立する。No.207～No.210は第11層と第10層との境界から出土した土器で、No.208、No.209は粗製の深鉢形土器、No.207は口縁部が外反する縄紋時代晩期の土器である。No.212～No.214は刻目を持つ突帯紋土器である。いずれも口縁端部からやや下がった位置に突帯がつき、その断面形は三角形かあるいは丸形である。No.215～No.220無刻目の突帯紋土器で、No.220以外は口縁端部からやや下がった位置に突帯が付き、その断面形は三角形かあるいはやや下がり気味の三角形である。No.214、No.215は

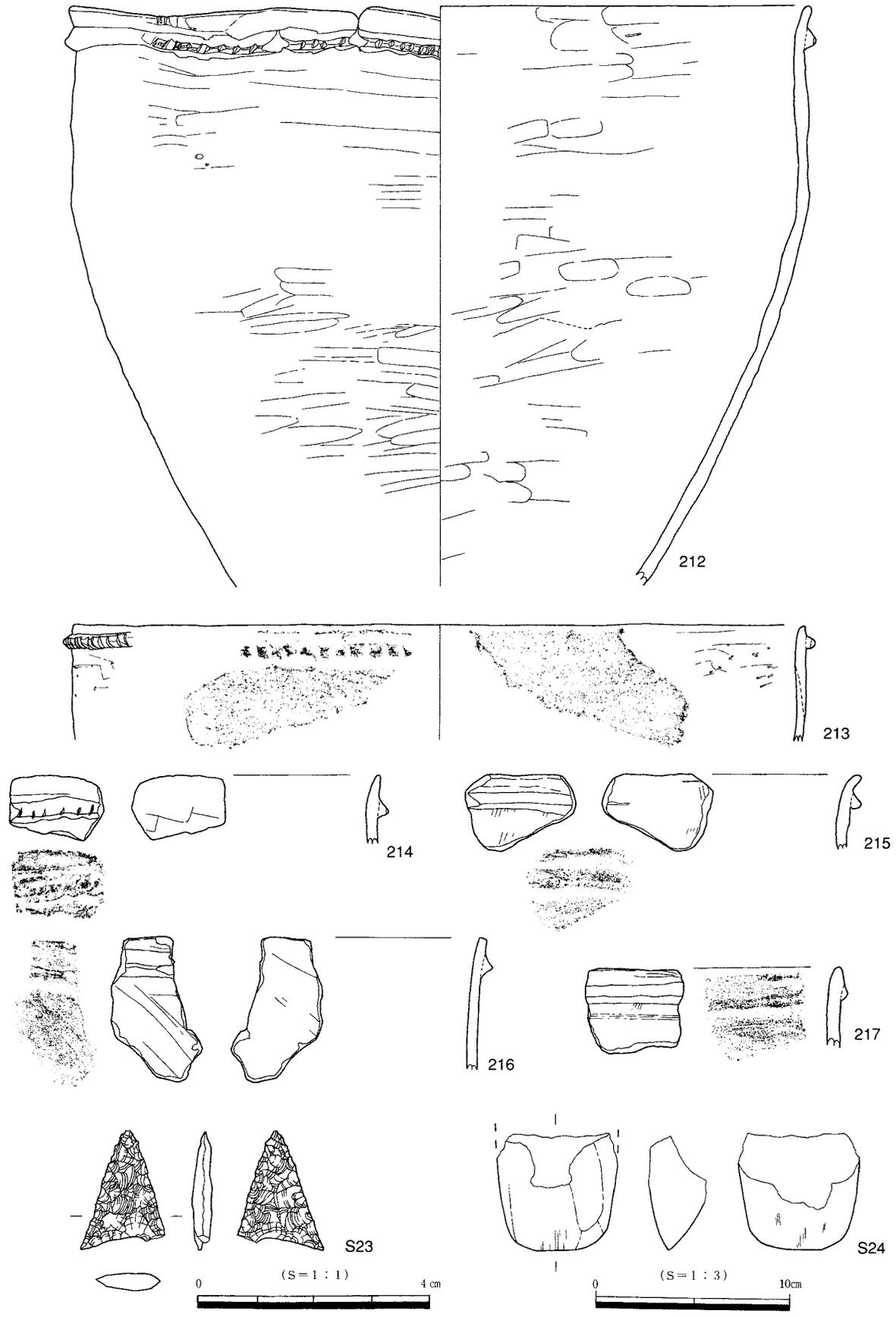


0 (S=1:3) 10cm

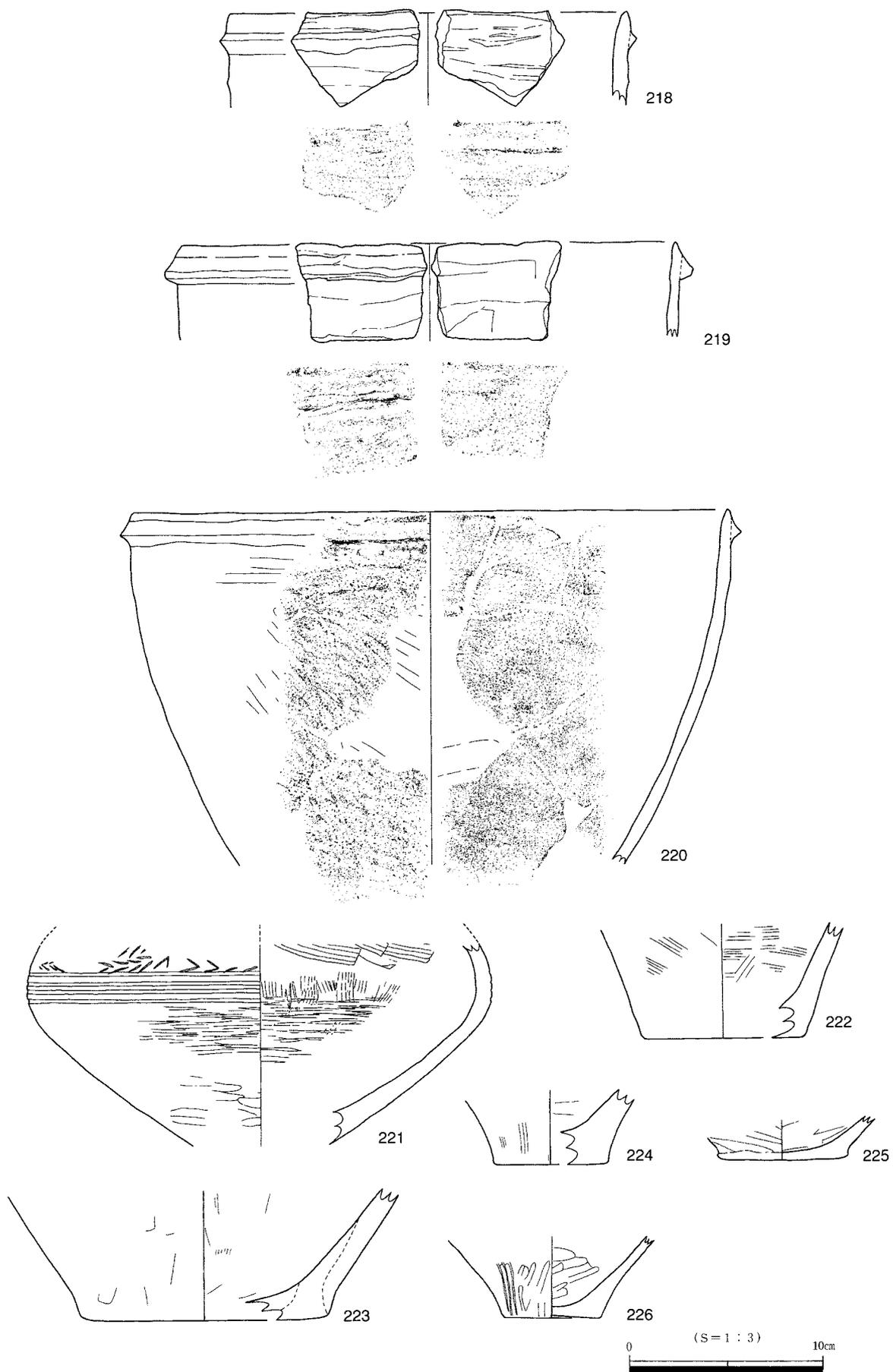
第50図 遺物実測図 (KN)



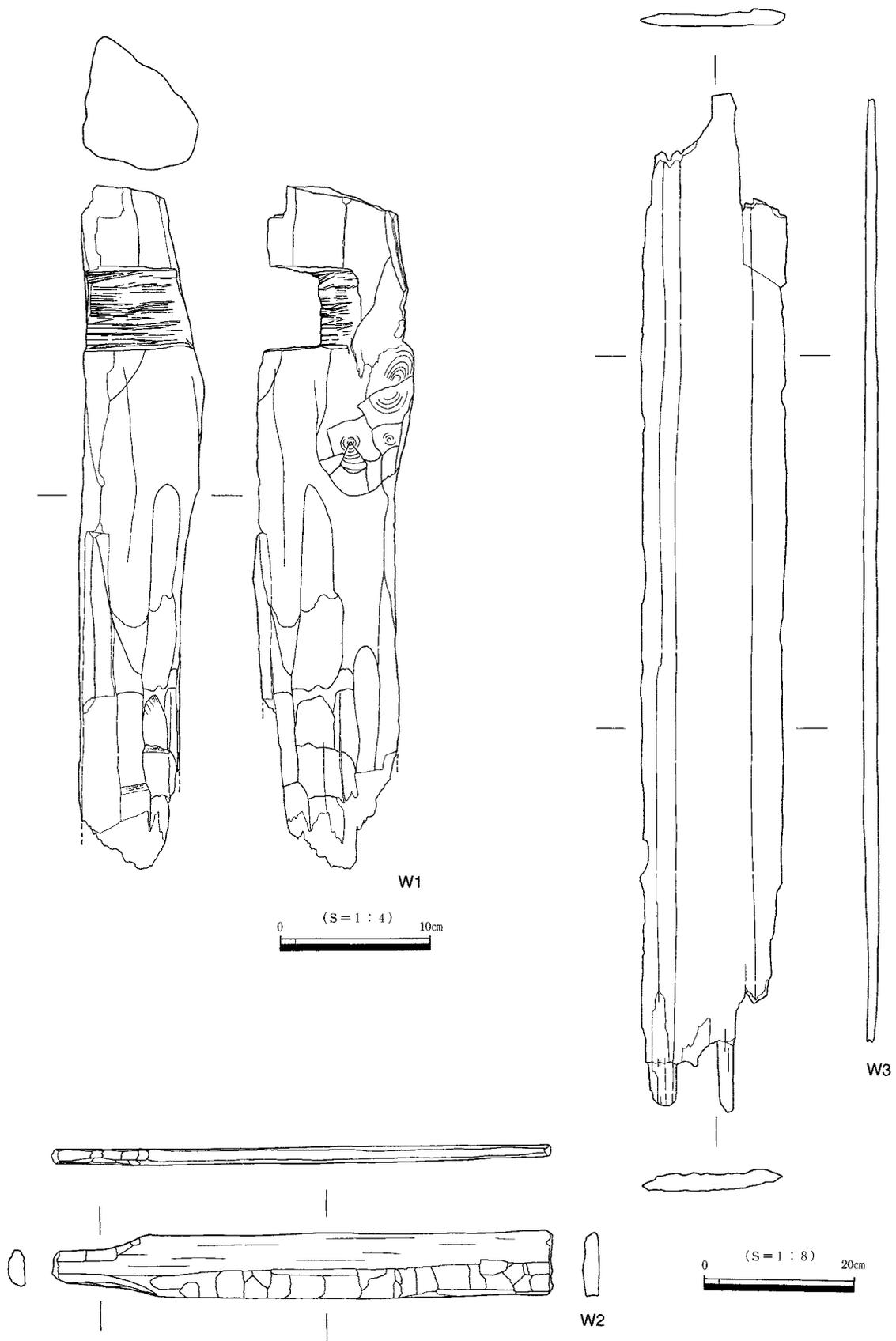
第51図 遺物実測図 (KN)



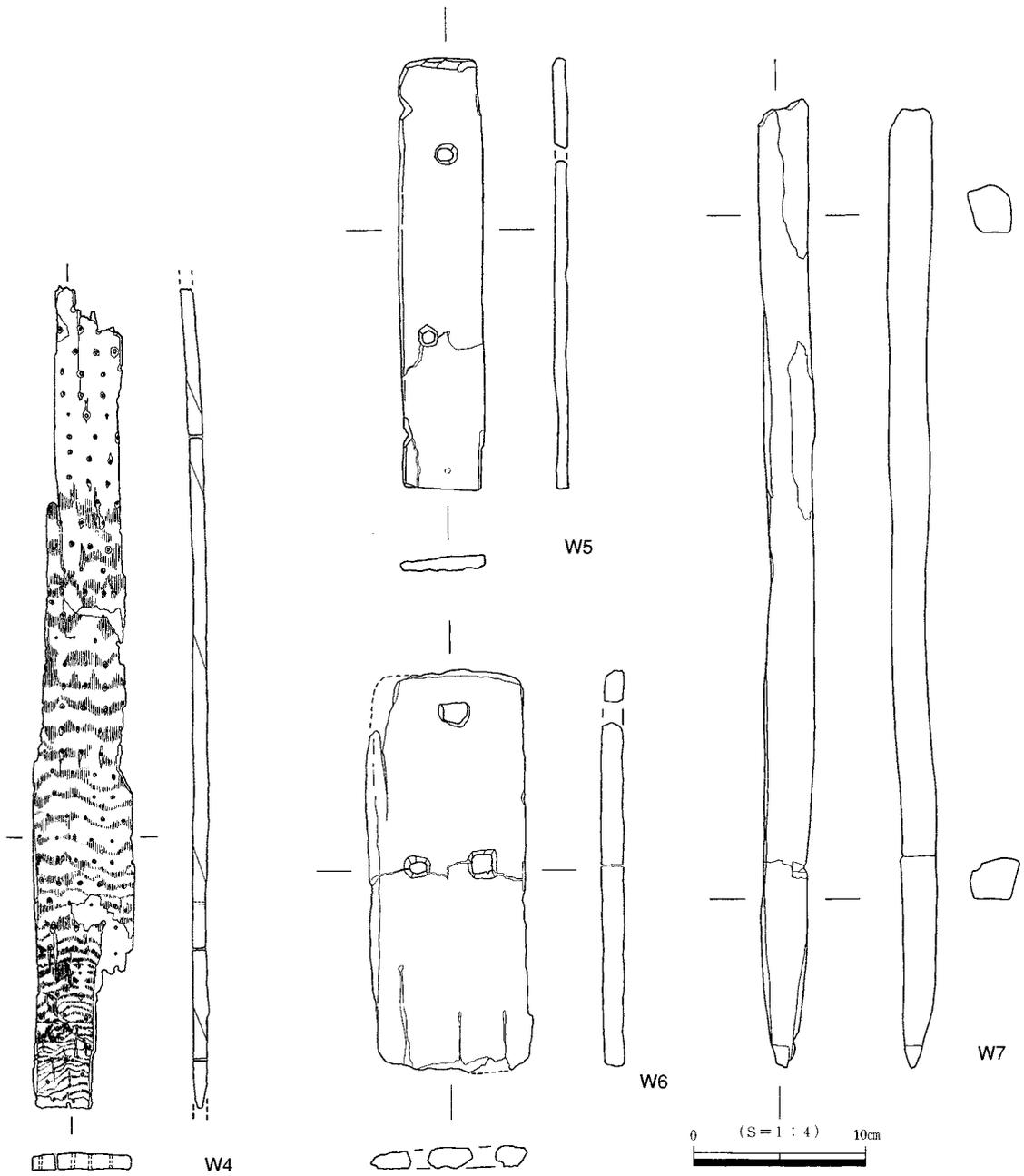
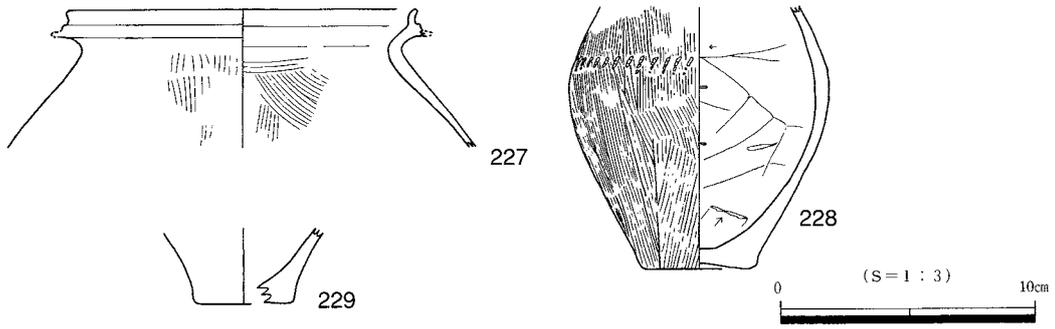
第52図 遺物実測図 (KN)



第53図 遺物実測図 (KN)



第54図 遺物実測図 (KH)



第55図 遺物実測図 (K Z)

口縁端部が若干外反する。No.221は壺形土器で、胴部に4条の沈線を施し、その上部に綾杉紋を施す。S.23は黒曜石製の石鏃、S.24は磨製石斧である。

第54図のW.1～W.3は、第10層黒灰色粘土の比較的安定した層から出土した遺物で、いずれも建築材と思われる。

第55図は第4層の洪水堆積層から出土した遺物で、No.227は甕形土器で弥生時代中期後葉、No.228は小形の甕形土器で、No.229は底部片である。W.4はモミ製の盾で、補強のために紐で綴じる小孔が約1cm間隔に並ぶ。表面には朱が塗られている（参照第6章第5節）。目久美遺跡6次調査（註1）で出土したものと同様のものと考えられる。W.5、W.6は大足の部材、W.7は杭である。

第5節 遺物包含層（第56図）

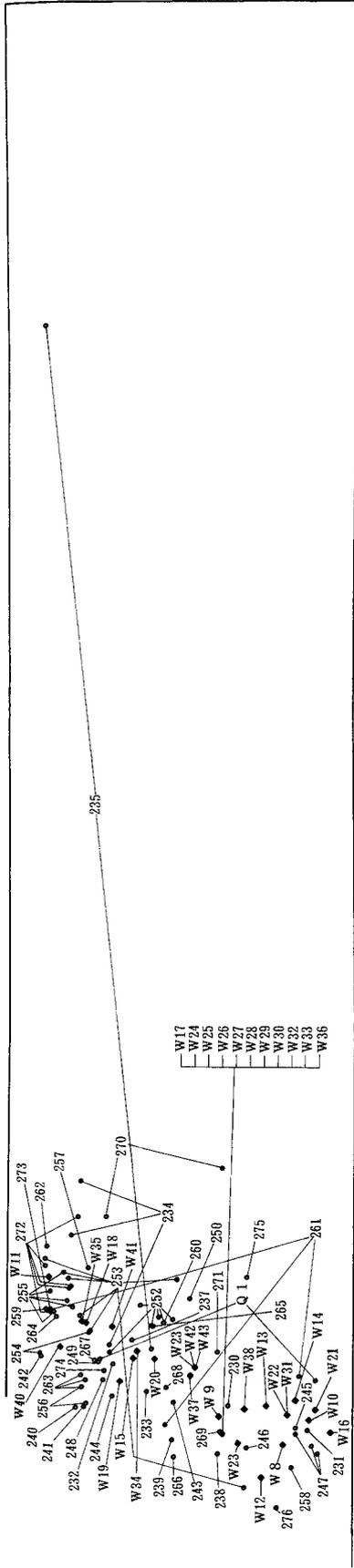
第58～68図は山裾の遺物包含層（第27層）から出土した遺物である。S.D-04の南西4mのところに南北に走る土手状の高まりがあり、丘陵との間が溝状の落込みとなり、その中に土器がたまった状態で集中して出土した。この土手状の高まりが自然のものか、人為的なものかは判断できなかった。この土手状の高まりは南方向側では流れてしまっていた。

No.230～No.237は下層からの出土遺物で、弥生時代中期中葉から後葉の甕形土器である。Q.1は土製の紡錘車である。W.8～W.10はナスビ形膝柄鍬の刃部で、いずれも3本刃であったと思われる、W.8は2本、W.9、W.10はそれぞれ1本が残る。W.11、W.14は柱材、W.12は大足、W.13は三角形の切り込みがみられるが用途は不明である。

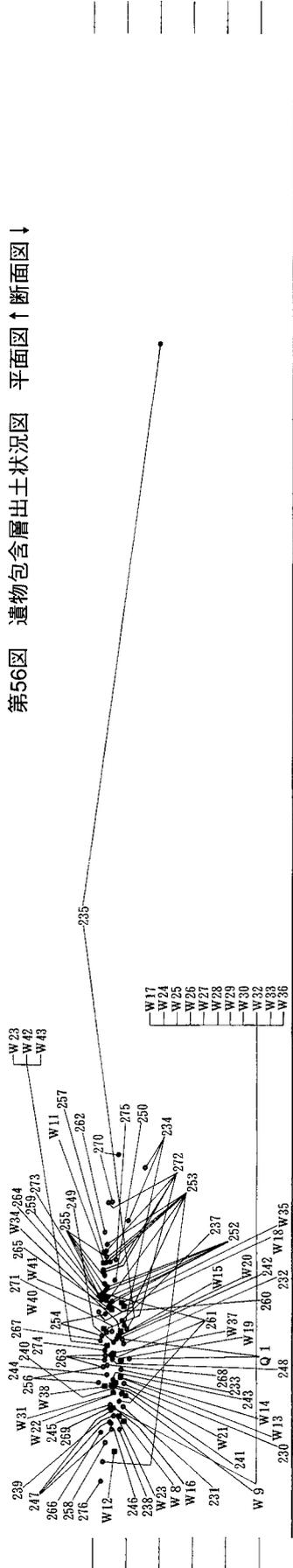
No.238～No.249は中層からの出土遺物で、No.239は弥生時代中期、No.240は弥生時代後期の甕形土器である。No.243～No.245は土師器の甕形土器である。No.246は台付壺で、口径8.3cm、高さ5cmのやや下脹れの無頸壺に、底径9.4cm、高さ4.7cmの脚を付けたブランディーグラス状の形態を成す。No.247は小形丸底壺、No.249は小形壺、No.248は高坏口縁部である。S.25は黒曜石製の搔器である。W.15、W.16は二又の鍬、W.16～W.20は鍬の刃部である。W.21は広鍬、W.23は端部に加工痕が残るが用途は不明である。W.22、W.24～W.36は杭である。

No.250～No.276は上層からの出土遺物で、No.248、No.251は弥生時代中期の甕形土器、No.253～No.264は土師器で、No.253は小型壺、No.252～No.254は土師器の甕形土器で、このうちNo.252は複合口縁を呈し、その他は「く」の字に屈曲する口縁部を呈す。No.260は土師器の小壺、No.261は短頸壺である。No.257～No.259は土師器の高坏、No.262は坏、No.263高台付坏、No.264は皿である。No.265～No.274は須恵器で、No.265～No.267は坏蓋、No.268～No.270は坏身で、No.268は反りを持ち、No.270は底部に糸切り痕が残る。No.271～No.273は輪状つまみを有する蓋である。No.274は横瓶である。No.275、No.276は埴輪片である。Q.2は銅製の耳環である。W.37は杭、W.42は有頭棒、W.41、W.43、W.46は鋤の刃、W.44は広鍬、W.40は円形で桶の底、W.38、W.45は建築材と思われる。W.39、W.47は用途不明である。

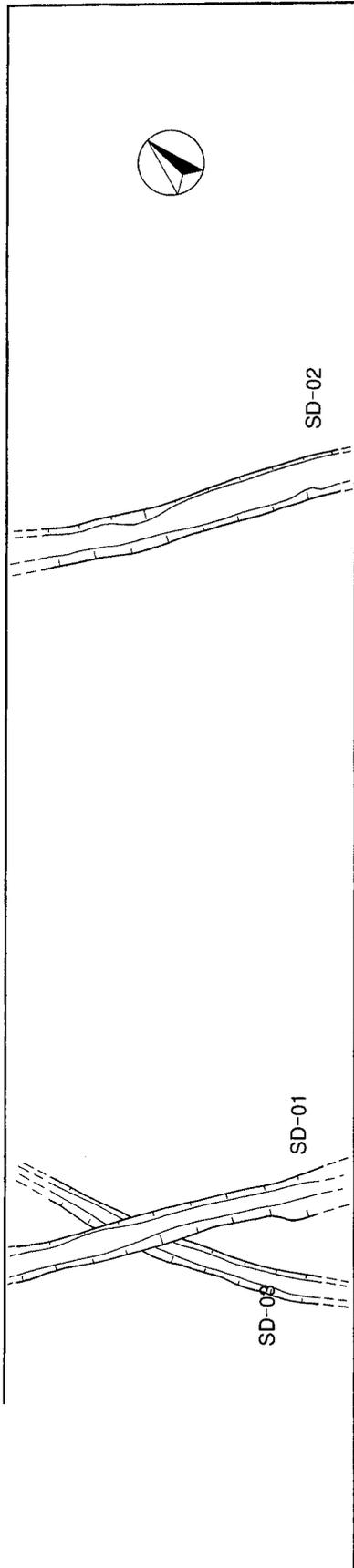
以上のように層位毎にみても、各層では時期的にほとんどまとまりがなく、時期的にも幅があることから、これらの遺物は丘陵上にあったものが転落し、再堆積したものと考えられる。



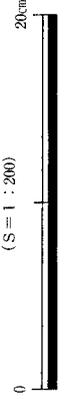
第56図 遺物包含層出土状況図 平面図 ↑ 断面図 ↓



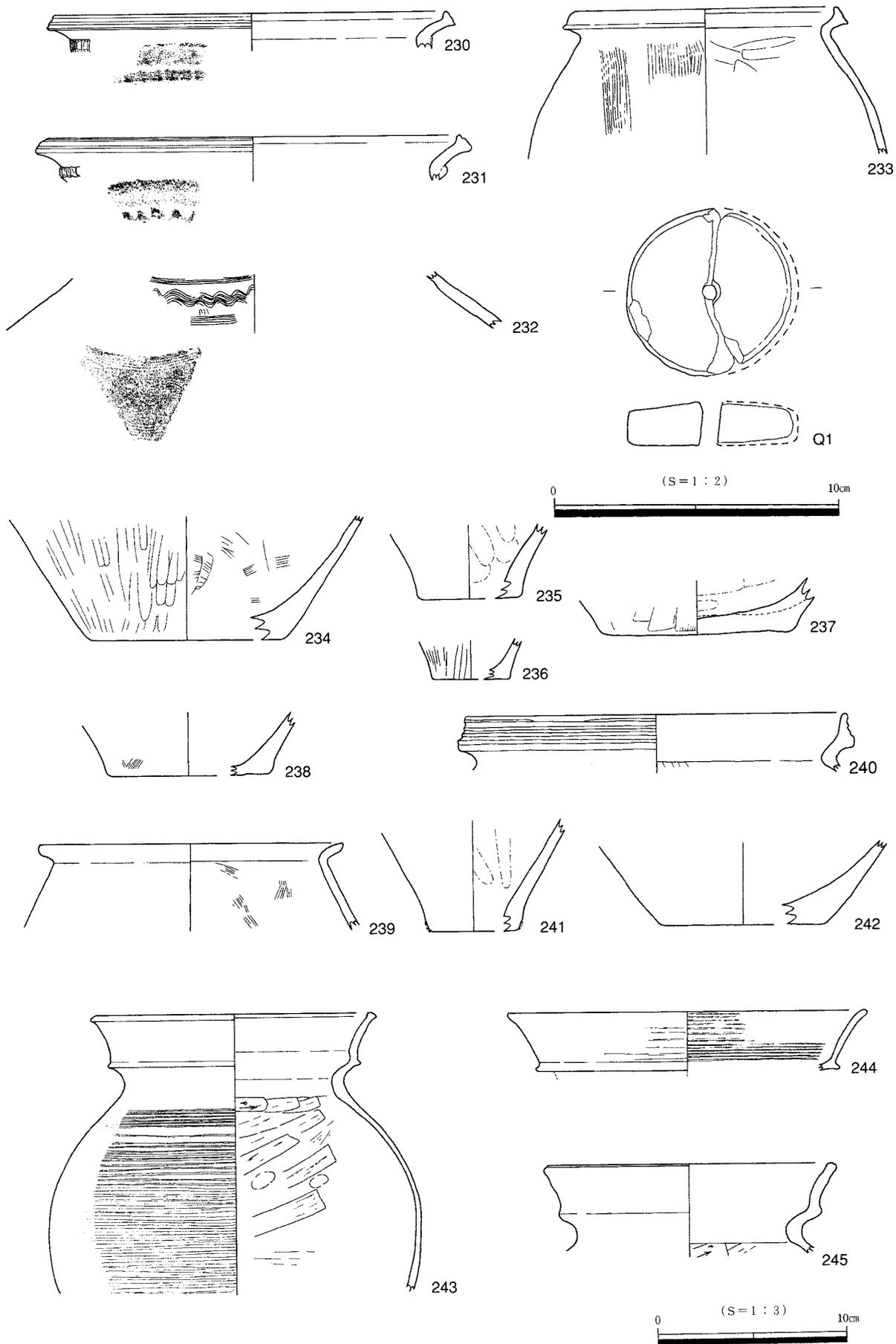
LH=0.00m



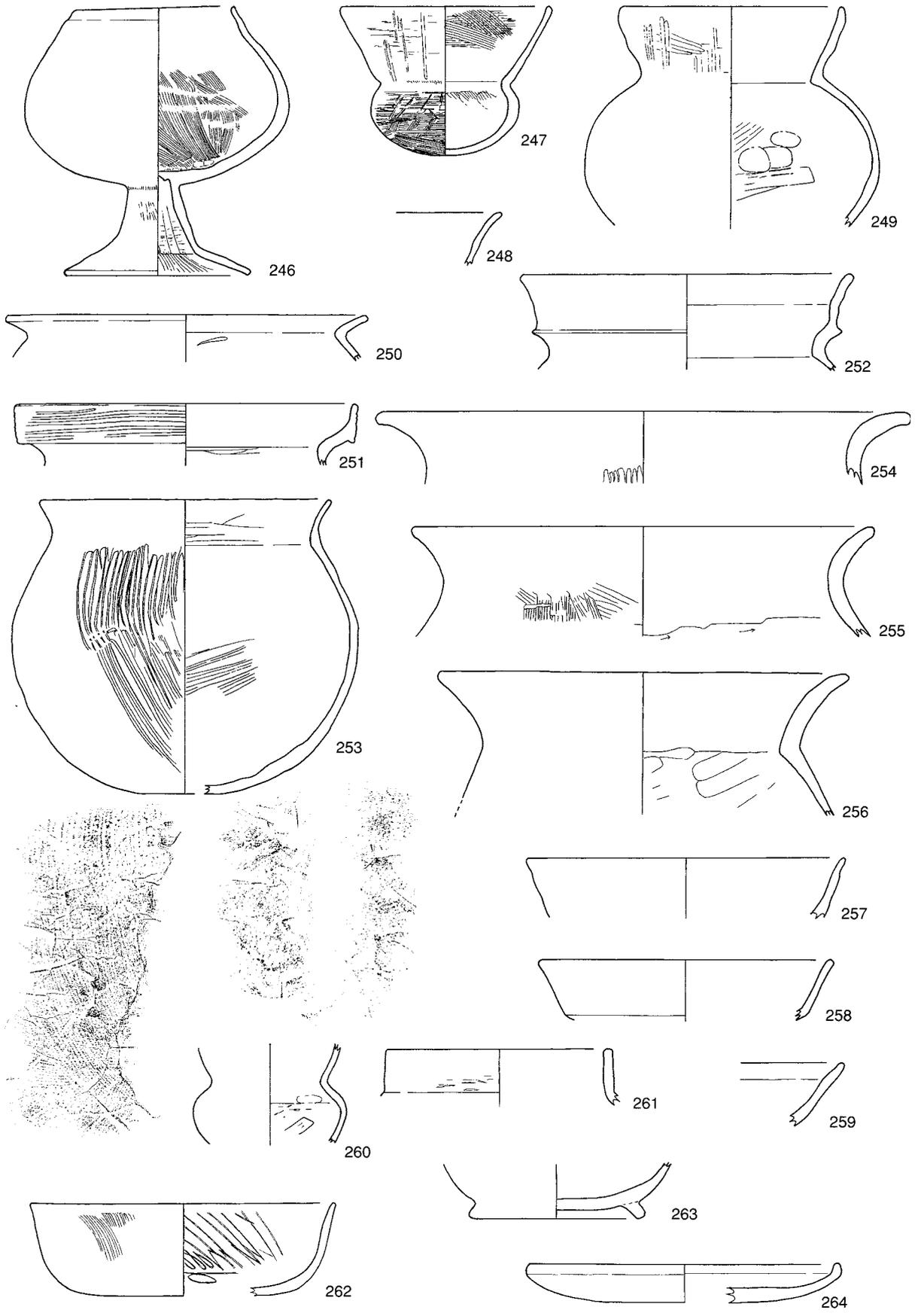
(S = 1 : 200)



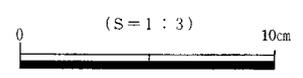
第57図 古墳時代以降の遺構図

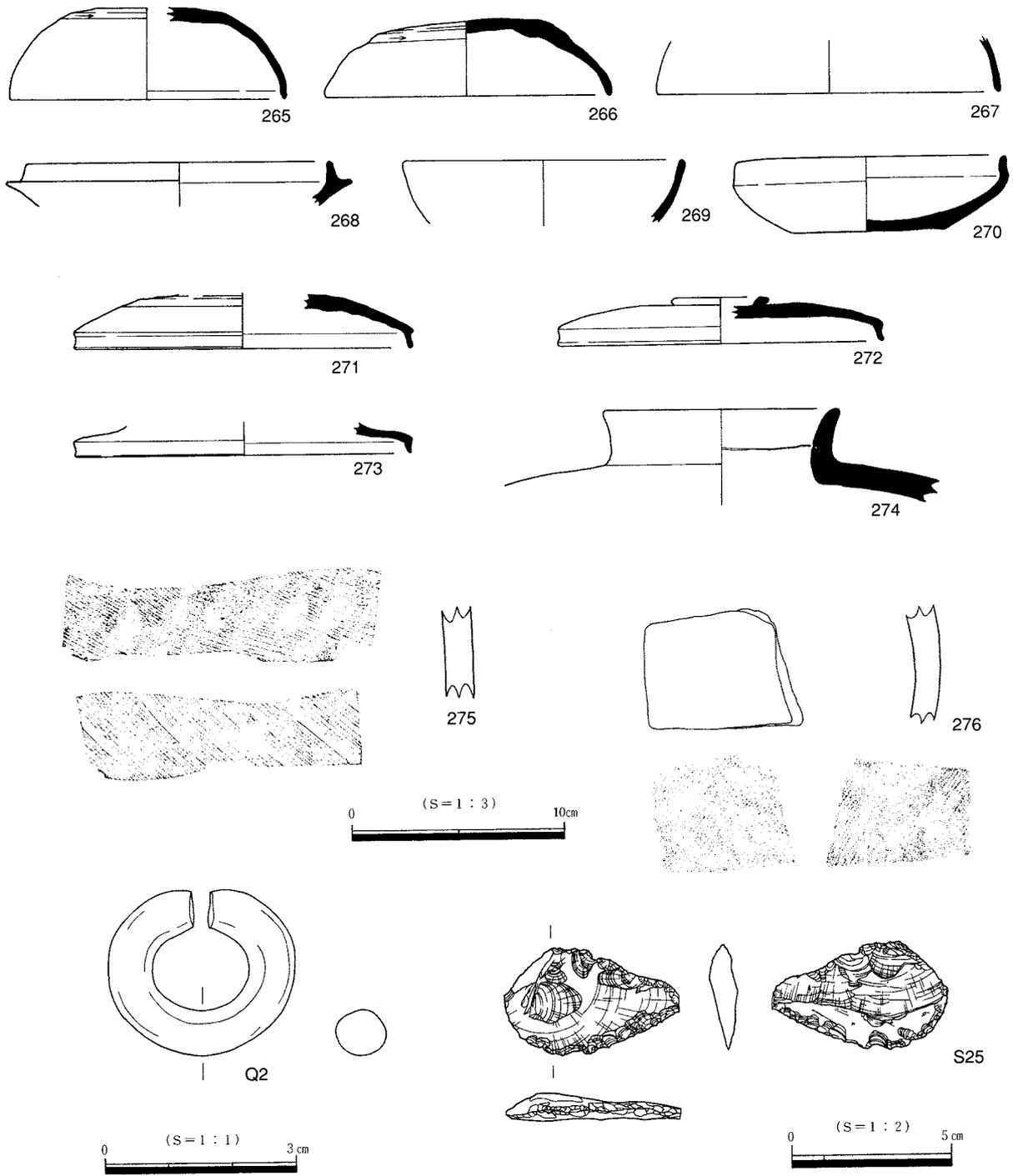


第58図 遺物実測図 (D D)

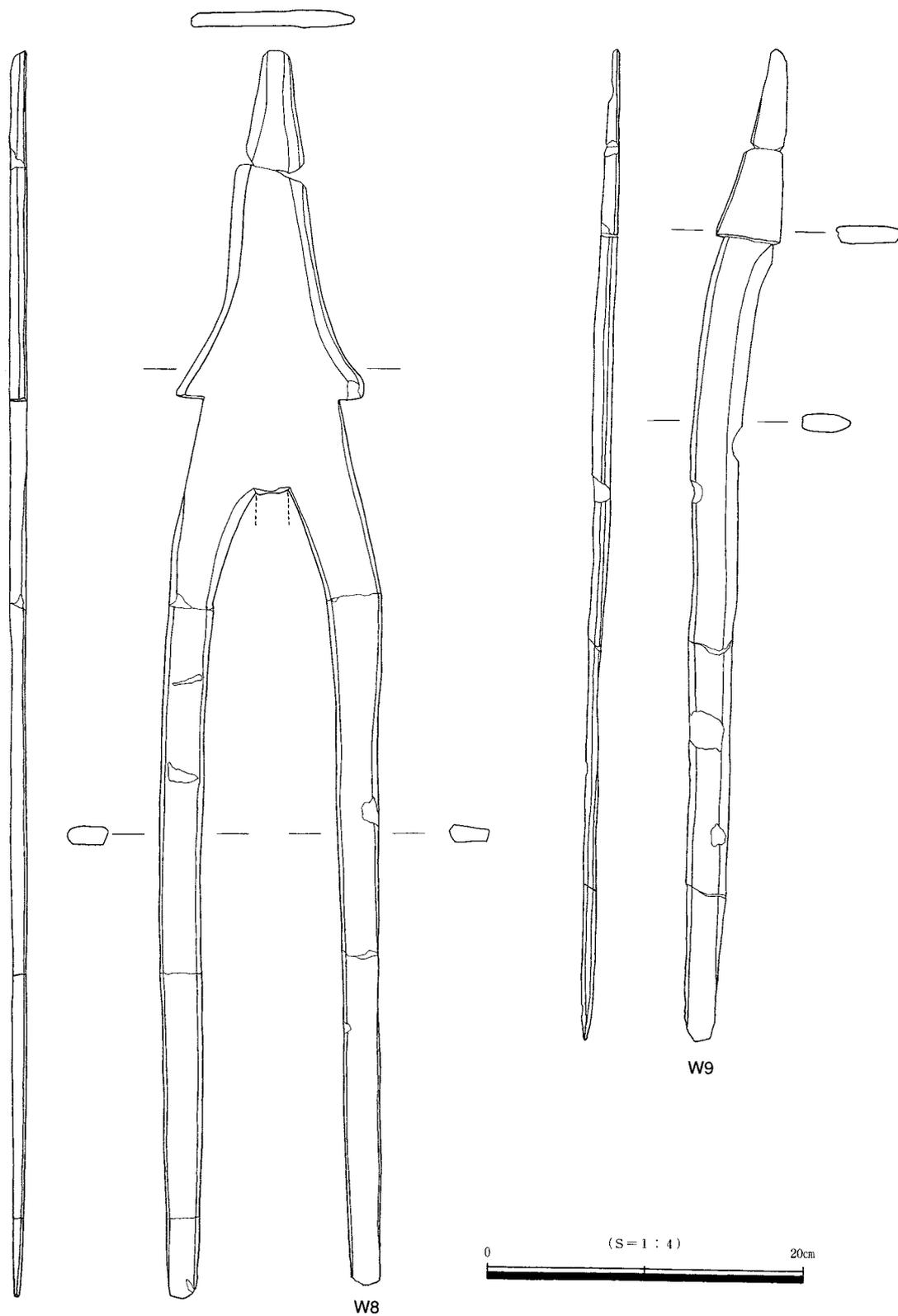


第59図 遺物実測図 (D D)

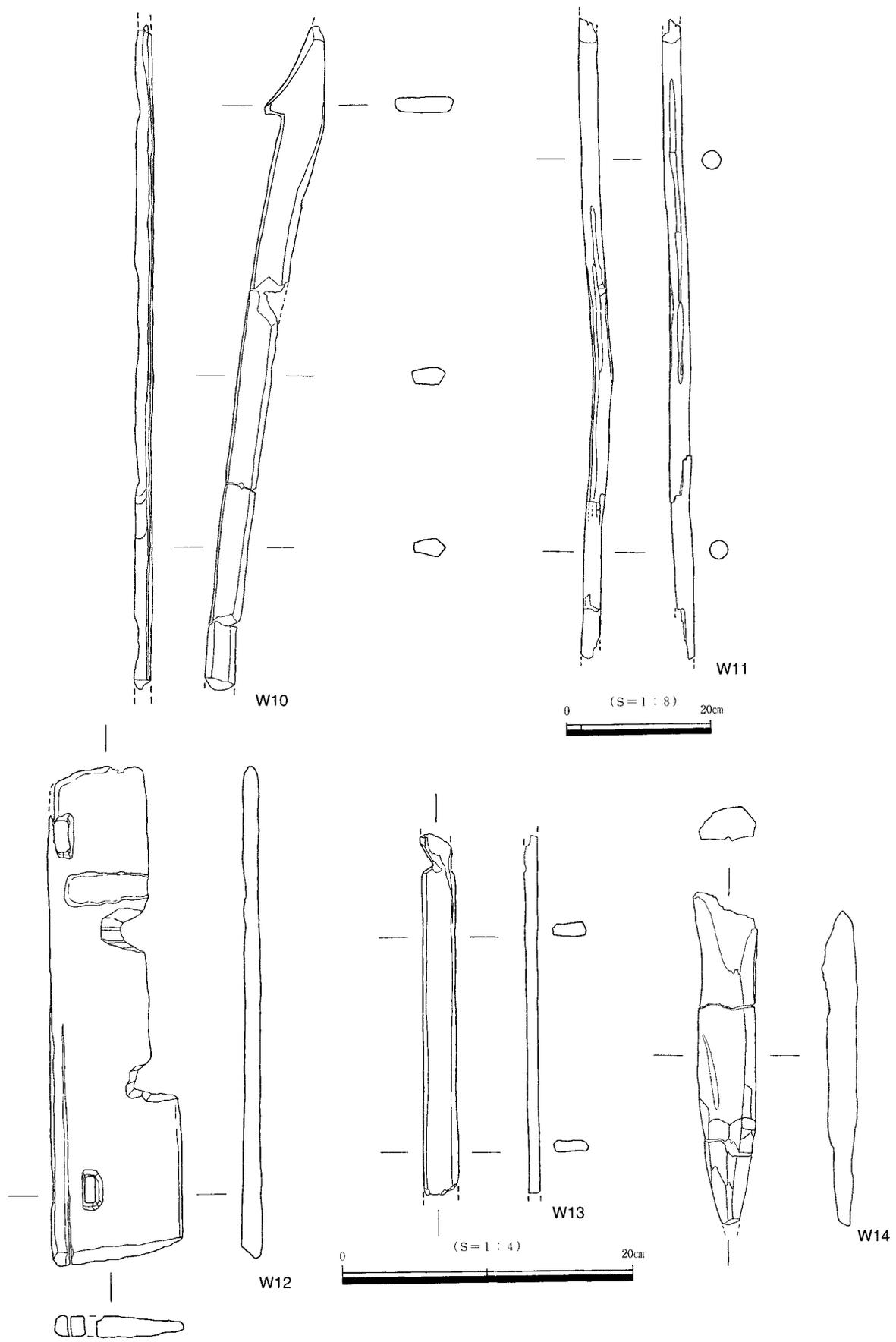




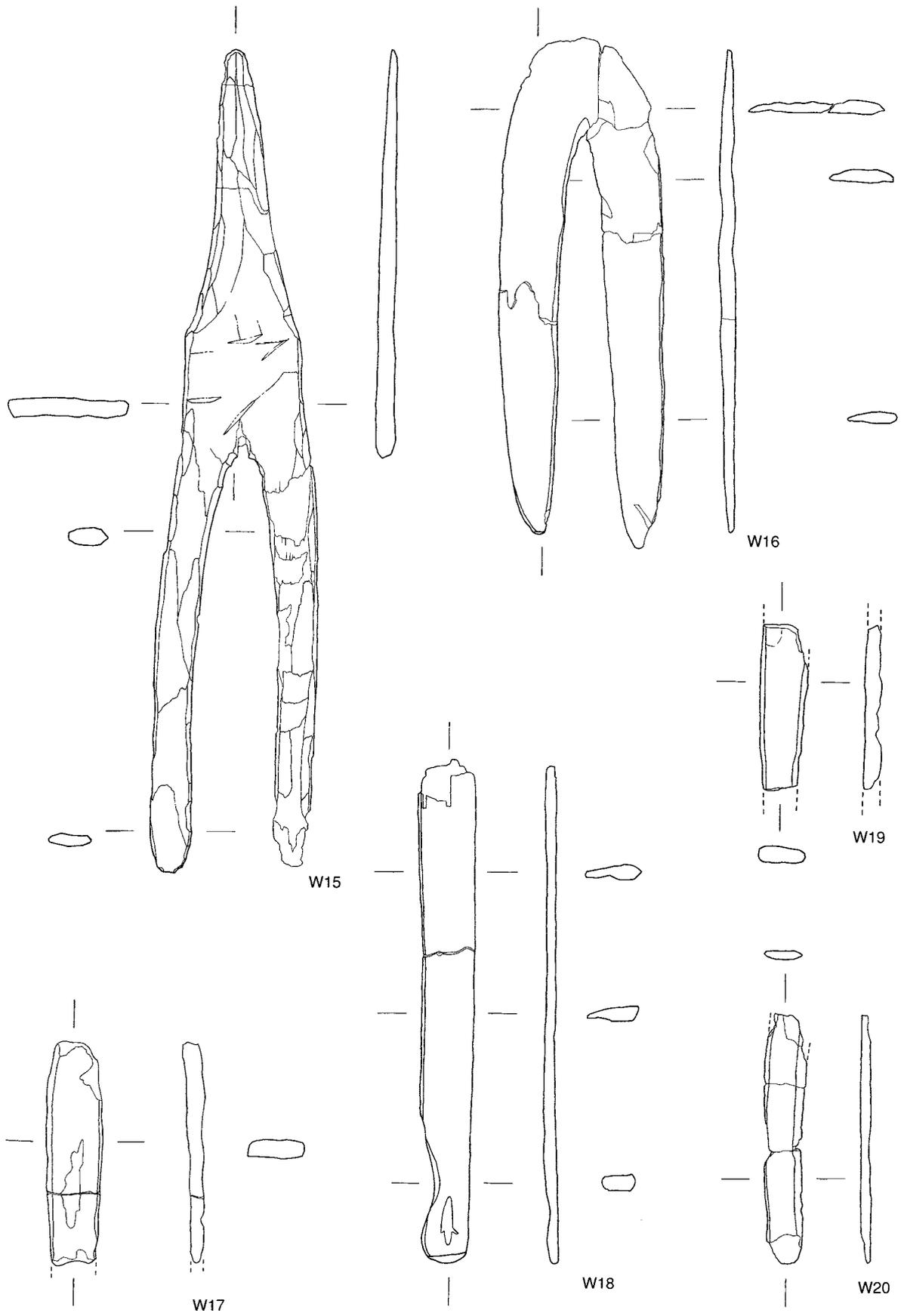
第60図 遺物実測図 (D D)



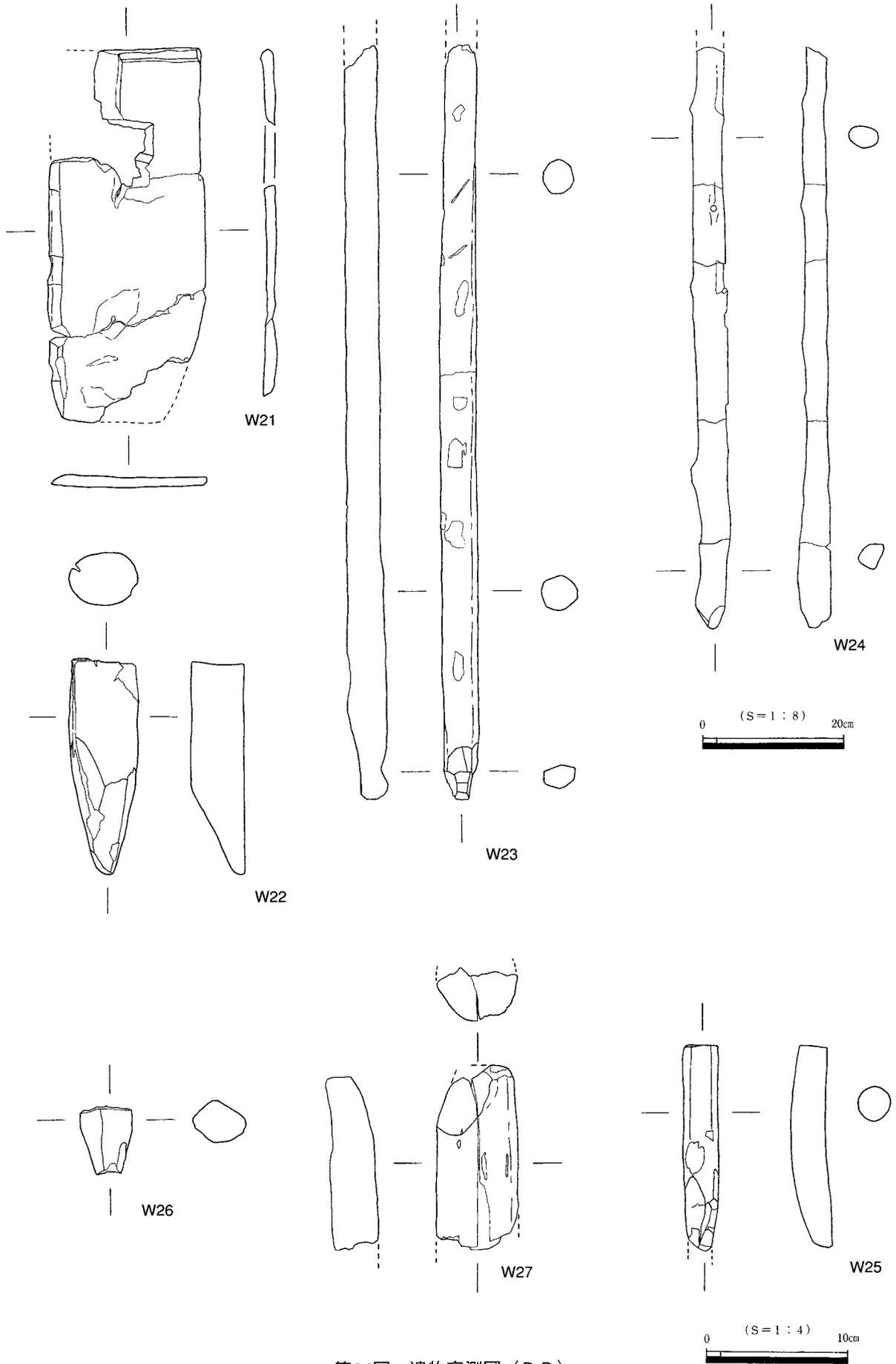
第61図 遺物実測図 (D D)



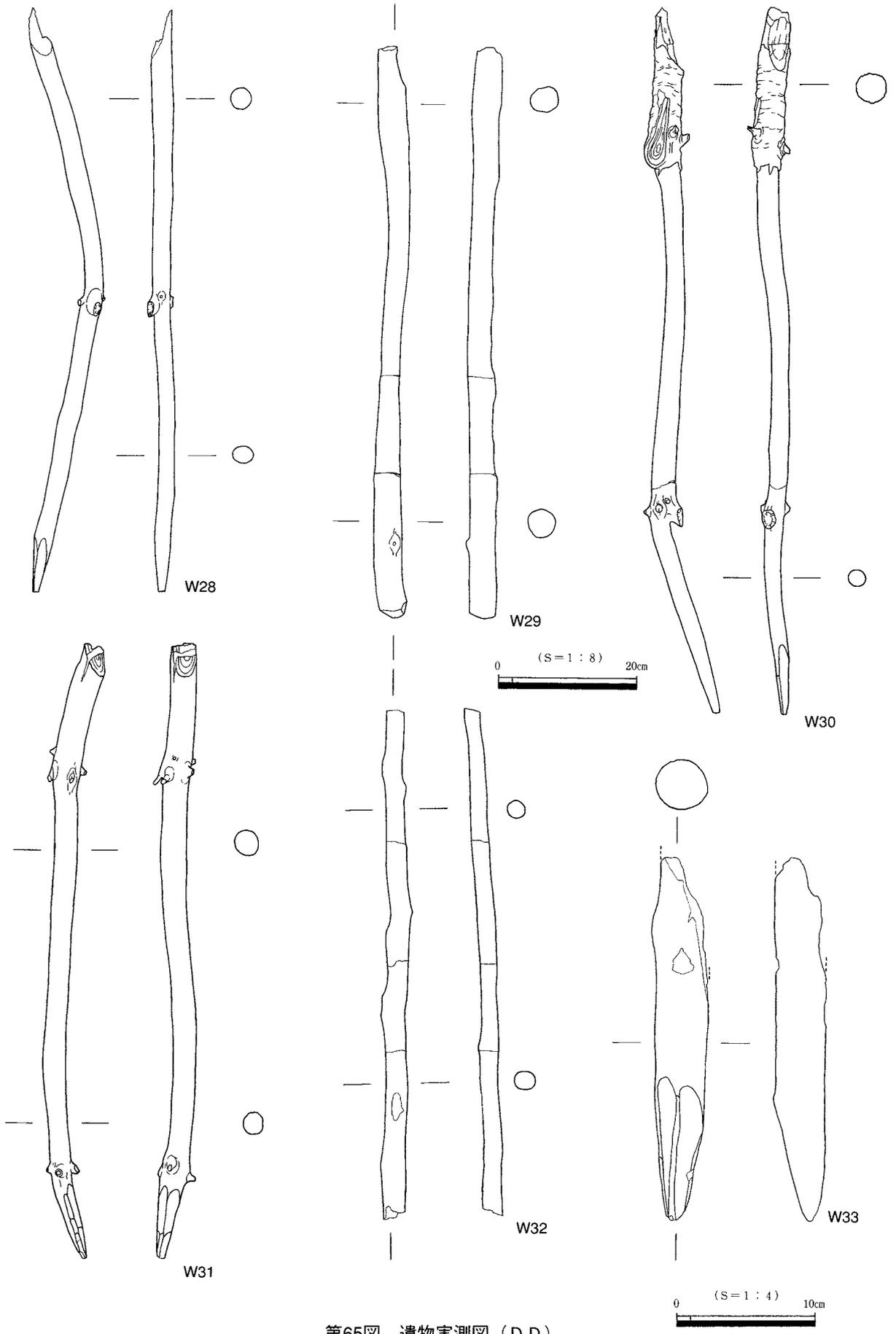
第62図 遺物実測図 (D D)



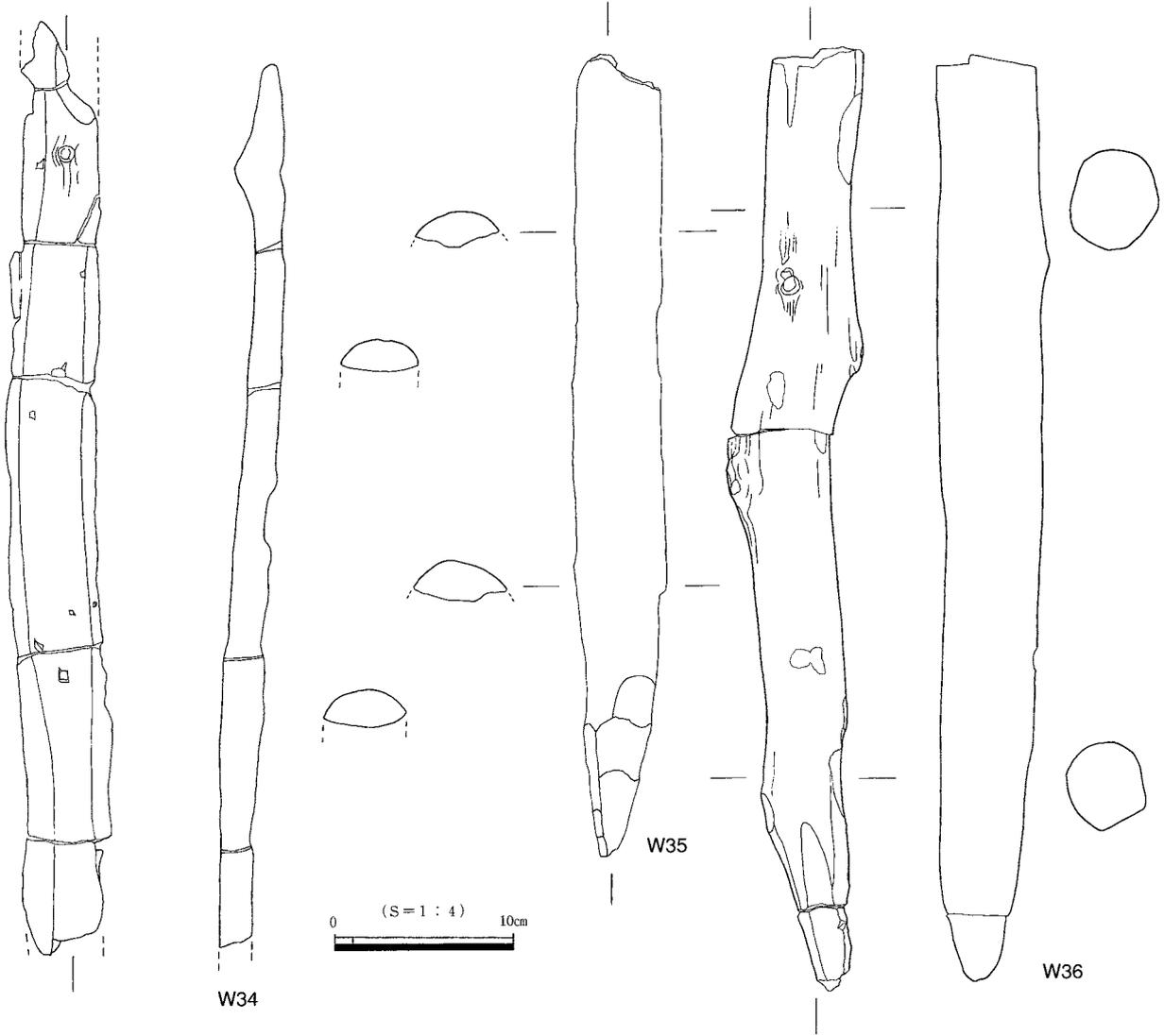
第63図 遺物実測図 (DD)



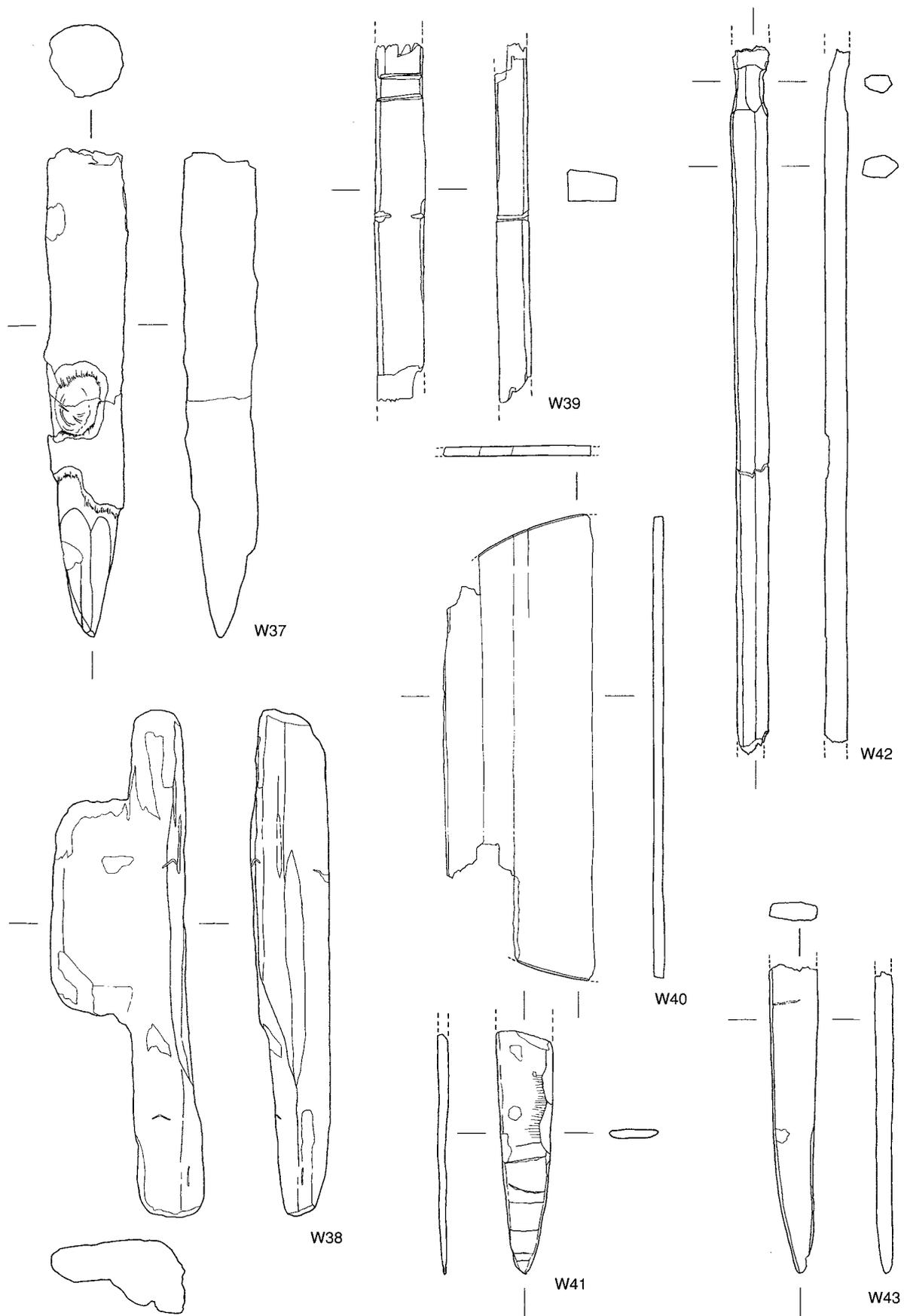
第64図 遺物実測図 (D D)



第65図 遺物実測図 (D D)

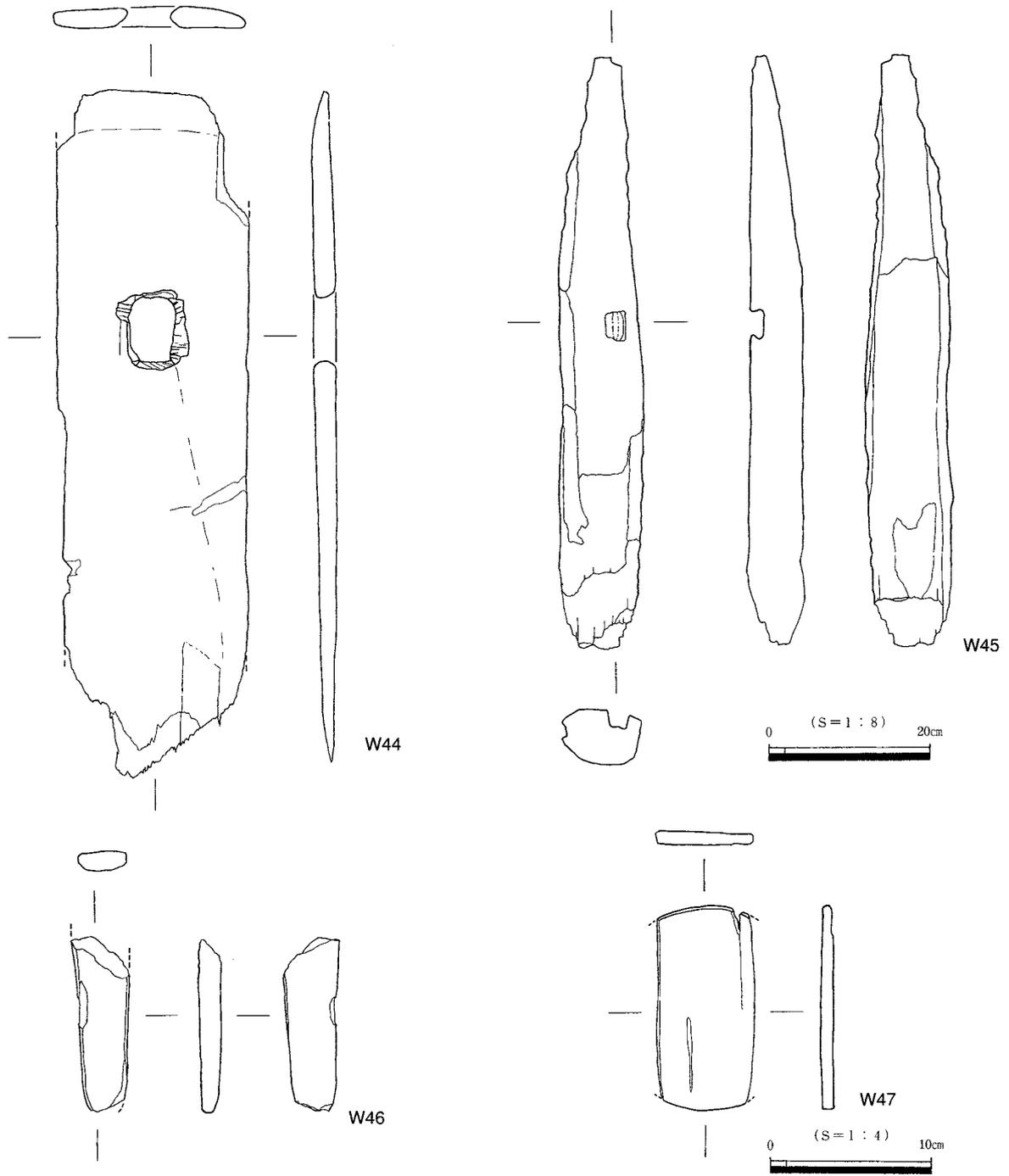


第66図 遺物実測図 (D D)

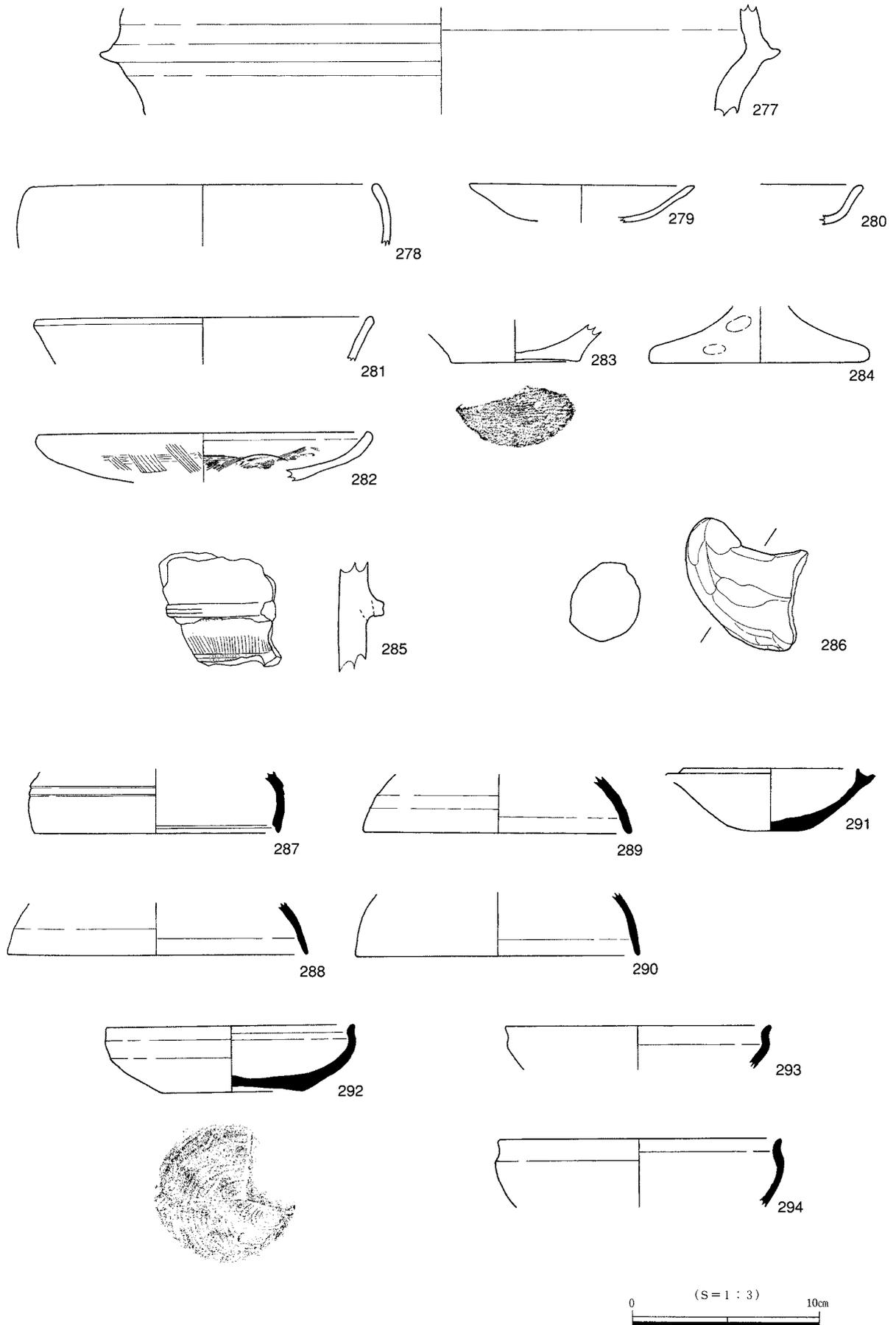


第67図 遺物実測図 (D D)

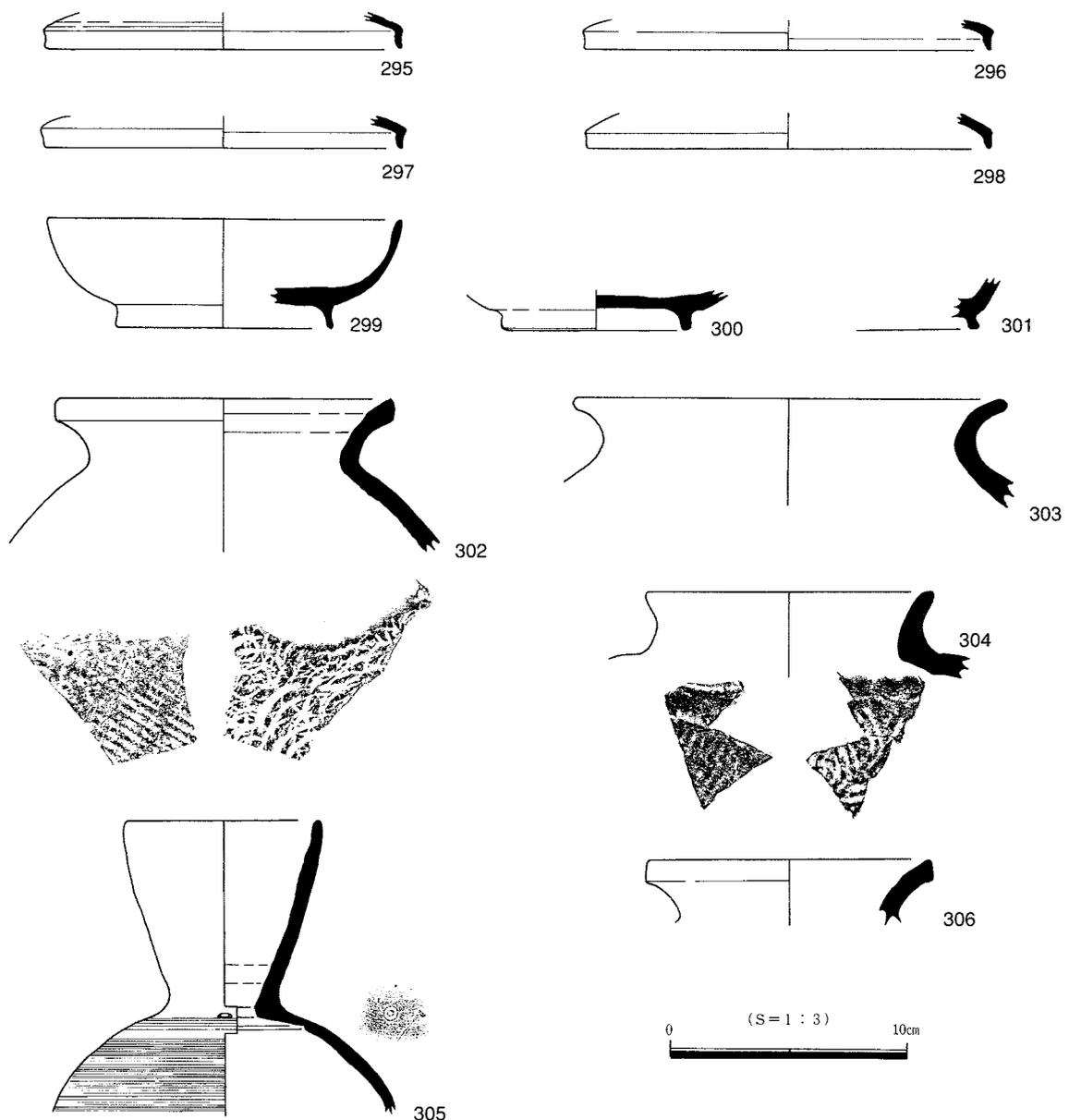
(S = 1 : 4)
0 10cm



第68図 遺物実測図 (D D)



第69図 遺物実測図 (K S)



第70図 遺物実測図 (K S)

第5節 古墳時代以降の遺構 (第57図)

第3層の暗茶色粘土層を掘り込む溝状遺構を3条検出した。いずれも洪水の堆積層まで掘り込んでいる。この層の時期を明確にする出土遺物はなく、正確な時期は不明である。

溝状遺構 (SD-01)

W区で検出した。北西から南東方向に伸びている。幅50~60cm、深さ20cmで、底面が南東方向に傾斜していることから、水はこの方向に向かって流れていたものと考えられる。

溝状遺構 (SD-02)

S区で検出した。北西から南東方向に伸びている。幅60cm前後、深さ15cmで、底面が南東方向に傾斜していることから、水はこの方向に向かって流れていたものと考えられる。

溝状遺構（SD-03）

W区のSD-01の下層において検出した。南北方向に伸びている。幅40cm前後、深さ15cmで、南東方向に傾斜していることから、水はこの方向に向かって流れていたものと考えられる。

遺構外遺物 第69図～70図は第2層黒色砂混り粘土層出土遺物で、No.277～No.286は土師器で、No.277は甕形土器、No.278は碗、No.280、No.281は坏、No.282は皿、No.283は坏底部、No.284は高坏脚部、No.286は甕形土器の把手、No.285は埴輪片、No.287～No.306は須恵器で、No.287～No.290坏蓋、No.291～No.294は坏身で、No.291は反り、No.292は底部に糸切り痕が残る。No.295～No.298は輪状つまみの付く蓋、No.299～No.301は高台付坏、No.302～No.304は甕形土器、No.305、No.306壺形土器である。

第6節 小 結

今回の調査において検出した水路SD-04と、目久美遺跡第5次・6次調査で検出された水路SD-04とは、その様相からほぼ一連の水路と考えられる。しかしながら今回の調査では、双方の流路がどのようにして接続するのかまでは分からなかった。また目久美遺跡5・6次調査で検出されたSD-04では弥生時代後期までの遺物がみられたのに対して、今回検出したSD-04は弥生時代中期までの遺物しかみられなかったことから、目久美遺跡第5次・6次調査で検出されたSD-04よりも若干早い時期に埋没した可能性も考えられる。

今回の調査で出土した遺物の中で、特に注目されるのは、第59図、No.246のブランディーグラス形の台付無頸壺である。このような形状のものは山陰地方でも幾つか類例が見られる。鳥取県内では大柵遺跡（註2）、下張坪遺跡（註3）で同形のものが出土しているほか、秋里遺跡（註4）、青谷上寺地遺跡（註5）などでもこれに近い形状のものが見られる。島根県でも勝負遺跡（註6）で出土しているほか、時代は遡るが原山遺跡（註7）でも近い形状のものが出土している。また山陰地方以外では、近畿地方でも越前塚遺跡、宗円堂遺跡（註8）などで見られるほか、北陸地方でも幾つかの類例を見いだすことができる（註9）。現状ではまだこの形態の壺形土器の起源となる地域を明らかにすることは出来ないが、今後分布状況などを調査することで、伝播経路などが明らかになるものと考えられる。

註1 1998年 「目久美遺跡V・VI」 （財）米子市教育文化事業団文化財報告書25

註2 1983年 「大柵遺跡」 鳥取市教育委員会

註3 1996年 「秋里遺跡」 （財）鳥取市教育福祉振興会

註4 1998年 「下張坪遺跡」 倉吉文化財調査報告書第88集 鳥取県倉吉市教育委員会

註5 2001年 「青谷上寺地遺跡3」 鳥取県教育文化財団調査報告書72

註6 1998年 「勝負遺跡」 島根県教育委員会

註7 1979年 「原山遺跡」 島根県立博物館調査報告書

註8 1994年 「越前塚遺跡」 滋賀県教育委員会

1994年 「宗円堂遺跡」 滋賀県教育委員会

1981年 「弘川遺跡」 滋賀県教育委員会

註9 1991年 「角谷遺跡」 三方町文化財調査報告書第10集 福井県三方町教育委員会

1996年 「高橋セボネ遺跡」 石川県野々市町教育委員会

1998年 「下黒谷遺跡」 福井県埋蔵文化財調査報告書第40集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

2000年 「小松市平面梯川遺跡」 （財）石川県埋蔵文化財センター

2002年 「粟生シモデ遺跡」 石川県羽咋市教育委員会

土器一覽表

遺物 番号	挿図 番号	種 別	層位	法 量 (cm)			焼成	色 調	胎 上	調 整	備 考
				口径	残存高	底径					
1	29	鉢(縄紋土器)	R D	37.0	8.5		やや粗	淡灰褐色	密1mm大砂粒含	内外共ケズリ	
2	29	鉢(縄紋土器)	R D		14.3		やや粗	淡灰褐色	密1.5mm大砂粒多く含	内外共ケズリ	
3	29	鉢(縄紋土器)	R D		13.8		良好	暗灰色	密白砂粒含	内外共擦痕後ナデ	
4	30	鉢(縄紋土器)	R D		10.0		良好	暗緑褐色	密3mm大砂粒多く含	外)条痕 内)ナデ	
5	30	鉢(縄紋土器)	R D		5.6		良好	暗灰褐色	密	内外共条痕	
6	30	鉢(縄紋土器)	R D		7.2	22.0	良好	暗褐色	密0.3~4.5mm大砂粒含	外)縄紋・半裁竹管文 内)ナデ	
7	30	鉢(縄紋土器)	R D		4.9		軟質	暗茶灰色	密0.5~1mm大砂粒多く含	外)ケズリ 内)ナデ	
8	30	鉢(縄紋土器)	R D		6.4		良好	暗灰褐色	密0.3~2.5mm大砂粒含	外)条痕・太い刻目貼付突帯 内)ナデ	
9	30	鉢(縄紋土器)	R D		6.8		良好	暗灰褐色	密0.5~3.5mm大砂粒含	外)縄紋 内)擦痕	
10	30	鉢(縄紋土器)	R D	19.5	4.0		良好	暗褐色	密細砂粒含	内外共条痕	
11	31	碗(縄紋土器)	R D		3.4		良好	暗褐色	密細砂粒含	外)刺突文 内)擦痕	
12	31	碗(縄紋土器)	R D	25.0	2.3		良好	暗灰黒色	密	外)半裁竹管文 内)ナデ	
13	31	碗(縄紋土器)	R D		3.9		良好	暗褐色	密細砂粒少量含	外)縄紋 内)ナデ	円孔
14	31	鉢(縄紋土器)	R D		3.9		良好	褐色	密白砂粒含	外)ナデ 内)擦痕後ナデ	
15	31	鉢(縄紋土器)	R D		2.4		良好	灰褐色	密0.3~2.5mm大砂粒含	外)磨き 内)ナデ	
16	31	鉢(縄紋土器)	R D	13.6	3.3		硬質	暗緑褐色	密1~3mm大砂粒多く含	外)ナデ? 内)擦痕後ナデ	
17	31	鉢(縄紋土器)	R D		5.8		良好	暗緑褐色	密0.5mm大砂粒含	外)縄紋 内)ナデ	
18	31	鉢(縄紋土器)	R D	18.2	2.5		良好	灰褐色	密	外)ケズリ 内)ナデ	
19	31	鉢(縄紋土器)	R D	28.8	5.3		良好	褐色	密	外)ハケ目 内)ナデ	
20	31	鉢(縄紋土器)	R D	31.0	7.7		良好	灰褐色	密砂粒含	外)ケズリ 内)擦痕後ナデ	
21	31	鉢(縄紋土器)	R D		8.7		良好	暗褐色	密	内外共ケズリ	
22	31	鉢(縄紋土器)	R D		4.1		良好	暗灰褐色	密0.3~2mm大砂粒含	口縁縄目 内)ナデ	
23	32	鉢(縄紋土器)	R D	23.4	5.7		良好	灰褐色	密1mm大砂粒多く含	外)ナデ・ハケ目 内)ナデ	
24	32	鉢(縄紋土器)	R D	18.6	3.7		良好	灰褐色	密0.5~3mm大砂粒含	外)ナデ 内)擦痕後ナデ	
25	32	鉢(縄紋土器)	R D		2.1	7.6	良好	褐色	密0.5~2mm大砂粒含	内外共調整不明	
26	32	鉢(縄紋土器)	R D		1.7	9.0	軟質	暗緑褐色	密0.5~1mm大砂粒含	外)ナデ内調整不明	
27	32	鉢(縄紋土器)	R D		3.4	5.0	良好	外)黒褐色 内)暗褐色	密0.5~1.5mm大砂粒含	外)条痕 内)ナデ	
28	32	鉢(縄紋土器)	R D		4.0	8.8	軟質	暗褐色	密0.5~4mm大砂粒多く含	内外共ナデ	
29	32	鉢(縄紋土器)	R D		8.8		良好	暗褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
30	32	鉢(縄紋土器)	R D	18.0	9.6		良好	暗灰褐色	密0.5~3mm大砂粒含	内外共ケズリ	
31	32	鉢(縄紋土器)	R D	29.5	4.1		良好	灰褐色	密細砂粒含	外)ケズリ口縁ナデ 内)貝殻ケズリ	
32	32	鉢(縄紋土器)	R D	23.0	4.3	23.6	良好	暗灰褐色	密	外)擦痕後ナデ口縁ナデ 内)調整不明	
33	32	鉢(縄紋土器)	R D	20.4	4.7	20.8	良好	暗褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
34	32	鉢(縄紋土器)	R D	19.2	4.1		良好	暗褐色	密0.5mm大砂粒多く含	外)ケズリ 内)ナデ・ケズリ	
35	32	鉢(縄紋土器)	R D		1.8		良好	灰褐色	密砂粒含	内外共ナデ	
36	32	鉢(縄紋土器)	R D		2.3		良好	暗褐色	密	調整不明	
37	32	鉢(縄紋土器)	R D		2.8		良好	暗褐色	密0.3~3mm大砂粒含	内外共ナデ	
38	32	鉢(縄紋土器)	R D		3.0		良好	外)外黒褐色 内)灰褐色	密砂粒含	内外共ナデ	
39	32	鉢(縄紋土器)	R D		2.8		良好	暗褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
40	35	鉢(縄紋土器)	R D		2.3		良好	暗灰色	密3mm大砂粒含	内外共擦痕後ナデ	
41	35	鉢(縄紋土器)	C N		5.6		良好	暗褐色	密0.5~1mm大砂粒多く含	内外共ナデ	
42	35	鉢(縄紋土器)	C N		3.1		良好	暗褐色	密1mm大砂粒多く含	内外共擦痕後ナデ	
43	35	鉢(縄紋土器)	C N		4.7		良好	外)淡褐色 内)淡橙褐色	密1mm大砂粒含	外)擦痕 内)ナデ	
44	35	鉢(縄紋土器)	C N		4.4		良好	暗褐色	密0.5mm大砂粒含	外)擦痕後ナデ 内)ナデ	
45	35	鉢(縄紋土器)	C N		13.8		やや粗	灰色一部赤灰色 橙灰色	密1.5mm大砂粒多く含	内外共ケズリ	
46	35	鉢(縄紋土器)	C N		2.0	6.5	良好	暗褐色	密0.5mm大砂粒多く含	内外共ナデ	
47	36	鉢(縄紋土器)	S H	31.0	13.6	31.6	良好	外)黒色 内)灰褐色	密	内外共擦痕後ナデ 炭化物付着	
48	36	鉢(縄紋土器)	S H		5.5		硬質	暗灰褐色	密0.5~1.5mm大砂粒多く含	外)二枚貝による 内)ナデ	
49	36	鉢(縄紋土器)	S H	24.8	3.5		良好	暗灰褐色	密細砂粒多く含	内外共ケズリ	
50	36	鉢(縄紋土器)	S H	22.7	4.9	23.0	良好	黒褐色	密	内外共擦痕後ナデ口縁ナデ	
51	36	鉢(縄紋土器)	S H	21.2	9.2	22.0	良好	黒褐色	密	外)調整不明 内)擦痕後ナデ	
52	36	鉢(縄紋土器)	S H		2.0	12.8	良好	暗緑褐色	密0.5~1mm大砂粒多く含	内外共ナデ	
53	36	鉢(縄紋土器)	S H		6.7	5.0	良好	暗褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
54	37	鉢(縄紋土器)	S H	37.2	15.0		良好	灰褐色	密砂粒多く含	外)擦痕後ナデ 内)ナデ	
55	37	鉢(縄紋土器)	S H	19.8	2.4	20.2	良好	黒色	密	内外共ナデ	

R D・・・第26層礫溜層 C N・・・第22層濃茶色粘土層 S H・・・第23層青灰色砂層

遺物 番号	押岡 番号	種 別	層位	法 量 (cm)				焼成	色 調	胎 土	調 整	備 考
				口径	残存高	底径	径					
56	37	鉢(縄紋土器)	SH		2.0			良好	灰褐色	密	外)擦痕後ナデ 内)ナデ	
57	37	鉢(縄紋土器)	SH	29.8	4.5			良好	灰褐色	密砂粒含	外)ケズリ 内)貝殻ナデ	
58	37	壺(縄紋土器)	SH		4.6		16.8	良好	暗褐色	密	外)太い沈線による曲線文 内)擦痕後ナデ	
59	37	鉢(縄紋土器)	SH		2.2	2.2		良好	暗褐色	密1mm大砂粒含	内外共ナデ	
60	38	鉢(縄紋土器)	表採	18.0	5.3		18.0	良好	暗灰色	1mm大の砂粒含む	内外共ナデ	
61	38	鉢(縄紋土器)	表採		3.7			良好	暗灰褐色	密細砂粒多く含	内外共ケズリ	
62	38	鉢(縄紋土器)	表採	22.0	3.6			良好	暗灰褐色	密細砂粒含	外)ケズリ 内)ナデ	
63	38	鉢(縄紋土器)	表採	19.0	3.6			良好	暗灰褐色	密0.5~1.5mm大砂粒多く含	内外共ケズリ	
64	38	鉢(縄紋土器)	表採	21.4	2.6			良好	暗灰褐色	密1mm大砂粒含	内外共ケズリ口縁ナデ	
65	38	鉢(縄紋土器)	表採	21.4	2.2			良好	暗灰褐色	密細砂粒含	内外共ケズリ	
66	38	鉢(縄紋土器)	表採	21.2	2.6			良好	暗灰褐色	密0.5~2mm大砂粒多く含	内外共ケズリ	
67	38	鉢(縄紋土器)	表採		6.3			良好	灰褐色	密	外)擦痕後ナデ 内)炭化物付着	
68	38	鉢(縄紋土器)	表採		4.0			良好	灰褐色	密	外)擦痕後ナデ 内)ナデ	
69	38	鉢(縄紋土器)	表採		10.7		42.0	良好	灰褐色	密	外)縄紋・貝殻文・沈線・列点文 内)条痕	
70	41	甕(弥生土器)	SD04	12.4	3.2			良好	暗褐色	密3.2mm大砂粒含	外)ナデ・ハケ目 内)ナデ	
71	41	甕(弥生土器)	SD04	19.6	1.2			良好	暗褐色	密2~3mm大砂粒多く含	内外共ナデ・口縁端部刻目	
72	41	甕(弥生土器)	SD04	23.6	1.4			良好	暗褐色	密0.5~2mm大砂粒多く含	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ	炭化物付着
73	41	甕(弥生土器)	SD04	21.0	3.6			良好		密	外)ハケ目 内)ハケ目	
74	41	甕(弥生土器)	SD04	19.0	2.8			良好	褐色	密1~2mm大砂粒多く含	調整不明	
75	41	壺(弥生土器)	SD04	16.7	3.6			良好	褐色	密	内外共ナデ	
76	41	甕(弥生土器)	SD04	20.6	6.5			良好		密	内外共ナデ	
77	41	甕(弥生土器)	SD04		2.7			良好		密	外)ナデ 口縁端刻み 沈線 内)ナデ	
78	41	甕(弥生土器)	SD04		2.1	6.8		良好	暗褐色	密1~3mm大砂粒多く含	外)ナデ 内)調整不明	
79	41	甕(弥生土器)	SD04		2.5			良好	淡褐色	密細砂粒含	外)ナデ・刻目貼付突帯 内)ケズリ	
80	41	甕(弥生土器)	SD04	21.2	6.0		20.4	良好	暗灰褐色	密1~4.5mm大砂粒含	外)ケズリ4条沈線 内)ナデ	
81	41	甕(弥生土器)	SD04		2.5			良好	暗灰褐色	密0.2~4mm大砂粒含	外)ミガキ 内)ナデ	
82	41	甕(弥生土器)	SD04	12.8	1.9			良好	暗灰褐色	密0.2~1.5mm大砂粒含	調整不明	
83	41	甕(弥生土器)	SD04	13.6	1.9			良好	暗褐色	密3mm大砂粒含	内外共ナデ	
84	41	甕(弥生土器)	SD04	24.0	7.0			良好		0.5~2mm大の白色砂粒多量に含	外)炭化物付着 内)ナデ・ハケ目	
85	41	甕(弥生土器)	SD04	25.6	2.6			良好	暗褐色	密0.5~1mm大砂粒含	内外共ナデ	
86	41	甕(弥生土器)	SD04	20.0	6.5			良好		密	外)12条沈線・鋸歯文 内)ナデ	炭化物付着
87	41	壺(弥生土器)	SD04	16.0	3.5			良好	黒褐色	密	内外共ナデ	
88	41	壺(弥生土器)	SD04		3.0			良好		密	内外共ナデ・口縁端部刻目	
89	41	壺(弥生土器)	SD04	15.7	4.1		16.2	良好	淡灰褐色	密0.5~3mm大砂粒含	内外共ナデ	
90	42	甕(弥生土器)	SD04	16.8	3.5			良好		密	内外共ナデ 貼付突帯	
91	42	甕(弥生土器)	SD04	23.8	7.5			良好	茶褐色	密	外)ナデ・ハケ目・貼付突帯 内)ナデ	
92	42	甕(弥生土器)	SD04	27.0	4.7			良好	茶色	密	外)ナデ・貼付突帯 内)ナデ・ハケ目	
93	42	甕(弥生土器)	SD04		5.0			良好		密	内外共ナデ・外)貼付突帯	
94	42	甕(弥生土器)	SD04	16.5	4.2			良好		密	外)ナデ・ハケ目 内)ナデ	
95	42	甕(弥生土器)	SD04	15.8	6.5			良好	黒褐色	密	内外共ナデ	
96	42	甕(弥生土器)	SD04	18.8	5.2			良好	暗褐色 黒褐色	密	外)ナデ 内)ナデ・ハケ目	
97	42	甕(弥生土器)	SD04	13.0	1.7			良好		密	内外共ナデ	
98	42	甕(弥生土器)	SD04		1.4			良好	黒褐色	密	調整不明	
99	42	甕(弥生土器)	SD04		1.1			良好	褐色	密	調整不明	
100	42	甕(弥生土器)	SD04		1.0			良好	褐色	密	内外共ナデ	
101	42	甕(弥生土器)	SD04		0.8			良好	褐色	密	内外共ナデ	
102	42	壺(弥生土器)	SD04		3.0			良好	赤黒色	密	内外共漆塗 内)ハケ目	
103	42	壺(弥生土器)	SD04	20.0	2.5			良好		緻密	外)調整不明 口縁端刻み 内)ナデ	
104	42	壺(弥生土器)	SD04		1.2			良好	褐色	密	外)波状紋 内)ナデ	
105	42	壺(弥生土器)	SD04		1.0			良好	褐色	密	調整不明・口縁端部刻目	
106	42	壺(弥生土器)	SD04		1.2			良好		密	内)格子紋・口縁端部刻目	
107	42	壺(弥生土器)	SD04		3.5			良好	黒褐色	密1~3mm大の白砂粒多量含	調整不明	
108	42	壺(弥生土器)	SD04		7.4			良好	暗褐色	密	外)ナデ・羽状紋 内)ナデ	
109	42	壺(弥生土器)	SD04		5.9			良好	灰褐色	密2mm大砂粒多く含	外)ハケ目・沈線 内)ナデ	
110	42	甕(弥生土器)	SD04		3.6	7.0		良好	外)灰色 内)暗灰色	密砂粒多く含	内外共ナデ	
111	42	甕(弥生土器)	SD04		5.4	5.5		良好		密	内外共ナデ	円孔
112	42	甕(弥生土器)	SD04		4.5	3.5		良好	茶褐色	密0.5~3mm大砂粒多く含	調整不明	
113	42	甕(弥生土器)	SD04		4.1	5.0		良好	褐色	密細砂粒含	外)ケズリ 内)ナデ	
114	42	甕(弥生土器)	SD04		3.3	5.7		良好	淡灰褐色	密細砂粒含	内外共ケズリ	

S H . . . 第23層青灰色砂層

遺物 番号	補図 番号	種別	層位	法量 (cm)		焼成	色調	胎土	調整	備考	
				口径	残高 底径						
115	42	甕(弥生土器)	SD04	2.5	5.4	良好	暗褐色	緻密	内外共ナデ		
116	42	甕(弥生土器)	SD04	2.6	7.2	良好	暗褐色	密2mm大砂粒多く含	調整不明		
117	42	甕(弥生土器)	SD04	1.7	4.6	良好	灰褐色	密砂粒多く含	内外共ナデ		
118	42	壺(弥生土器)	SD04	4.5	11.0	良好		0.5~2mm大の砂粒多量に含	調整不明		
119	43	高坏(弥生土器)	SD04	11.0		良好	灰褐色	密	外)カキ目・ナデ 内)ナデ・シボリ	円孔	
120	43	高坏(弥生土器)	SD04	4.0		良好		密	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ		
121	43	高坏(弥生土器)	SD04	3.0		良好	褐色	密	調整不明 外)格子紋		
122	43	高坏(弥生土器)	SD04	4.3	13.0	良好	茶褐色	密	外)ナデ 内)ケズリ		
123	43	高坏(弥生土器)	SD04	3.0	10.0	良好	褐色	密	外)ハケ目・炭化物付着 内)ナデ・ケズリ		
124	43	高坏(弥生土器)	SD04	2.0	13.0	良好	黒褐色	密	外)ナデ 内)ハケ目		
125	43	甕(弥生土器)	SD04	21.0	1.2	良好	淡黒褐色	密	内外共ナデ・頸部外)刻目		
126	43	甕(弥生土器)	SD04	18.8	9.0	良好	黒褐色	密	外)ナデ 内)ナデ・ハケ目		
127	43	壺(弥生土器)	SD04	1.5		良好	外)灰褐色 内)黒褐色	密1mm前後の砂粒含	内外共ナデ・口縁端部櫛描紋		
128	43	甕(弥生土器)	SD04	4.9	10.1	良好	淡灰褐色	やや粗1~2mm大砂粒多く含	外)ハケ目 内)調整不明		
129	43	甕(弥生土器)	SD04	3.2	7.8	良好	淡褐色	密細砂粒含	外)ケズリ 内)ナデ		
130	43	甕(弥生土器)	SD04	4.5	5.1	良好	褐色	密白砂粒含	内外共ナデ		
131	43	甕(弥生土器)	SD04	5.8	3.5	良好	灰褐色	密1~2mm大砂粒多く含	内外共ケズリ		
132	43	甕(弥生土器)	SD04	15.0	8.5	良好	褐色	密0.5~2mm大砂粒含む	外)ナデ・ハケ目 内)ミガキ		
133	43	甕(弥生土器)	SD04	5.1	19.0	良好	暗灰褐色	密1~2mm大砂粒多く含	調整不明		
134	43	甕(弥生土器)	SD04	15.0	5.5	良好	黒褐色	密	内外共ナデ		
135	43	壺(弥生土器)	SD04	28.0	2.6	良好	暗褐色	密	内外共ナデ・口縁端部凹線・貼付突帯		
136	43	壺(弥生土器)	SD04		1.7	良好	褐色	密	内外共ナデ・口縁端部凹線		
137	43	壺(弥生土器)	SD04	3.7		良好	茶褐色	密	内外共ナデ・口縁端部櫛描紋・突帯		
138	43	壺(弥生土器)	SD04	8.0		良好	黒褐色	密	外)ハケ目・貼付突帯 内)調整不明		
139	43	甕(弥生土器)	SD04	5.9	4.6	良好	暗灰褐色	密	外)ハケ目 内)ケズリ		
140	43	壺(弥生土器)	SD04	3.0	12.4	良好	暗灰褐色	密0.5~2mm大砂粒多く含	調整不明		
141	43	甕(弥生土器)	SD04	1.5	6.5	良好	暗褐色	密2mm大砂粒多く含	外)ハケ目 内)ナデ		
142	44	鉢(縄紋土器)	K C	30.0	7.6	良好	褐色	密2mm大砂粒含	内外共ナデ・外刺突文・口縁刻目		
143	44	鉢(縄紋土器)	K C	24.2	10.4	24.2	良好	暗褐色	1mm大の砂粒含む	内外共擦痕後ナデ	
144	44	鉢(縄紋土器)	K C	25.0	4.7		良好	黒褐色	密	外)調整不明 内)擦痕後ナデ	
145	44	鉢(縄紋土器)	K C	17.7	3.8		良好	暗褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
146	44	鉢(縄紋土器)	K C		5.6		良好	暗褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
147	44	鉢(縄紋土器)	K C		5.0		良好	灰褐色	密0.3~1.5mm大砂粒含	外)ケズリ 内)ナデ	
148	45	鉢(縄紋土器)	K C	32.4	6.9	32.8	良好	暗褐色	密	内外共ケズリ	
149	45	鉢(縄紋土器)	K C	29.8	3.0	30.5	良好	黒褐色	密	外)擦痕後ナデ 内)ナデ	
150	45	鉢(縄紋土器)	K C	23.3	2.4		良好	外)暗灰褐色 内)灰褐色	密0.3mm大砂粒含	内外共ナデ	
151	45	鉢(縄紋土器)	K C		4.1		良好	暗灰色	密細砂粒含	内外共条痕	
152	45	鉢(縄紋土器)	K C	18.8	3.1		良好	暗灰褐色	密	外)擦痕 内)条痕	
153	45	鉢(縄紋土器)	K C	18.8	2.8		良好	灰褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
154	45	鉢(縄紋土器)	K C	25.0	3.3	25.6	良好	暗褐色	密	内外共擦痕後ナデ・口縁ナデ	
155	45	鉢(縄紋土器)	K C	15.8	3.4		良好	灰褐色	密	外)ケズリ 内)ナデ	
156	45	鉢(縄紋土器)	K C	25.2	3.1		良好	暗灰褐色	密細砂粒多く含	内外共ケズリ	
157	45	鉢(縄紋土器)	K C		3.4		良好	暗褐色	密	外)擦痕後ナデ 内外共炭化物付着	
158	46	鉢(縄紋土器)	K C	29.2	8.8		良好	灰褐色	密砂粒含	内外共ケズリ(外具殻ケズリ)	
159	46	鉢(縄紋土器)	K C	28.7	4.7		良好	褐色	密	内外共ナデ	
160	46	鉢(縄紋土器)	K C	28.8	7.0		良好	暗灰褐色	密0.5~1.5mm大砂粒含	内外共ケズリ	
161	46	鉢(縄紋土器)	K C		4.5		良好	暗灰色	1mm~4mm大の砂粒含む	内外共ナデ	
162	46	鉢(縄紋土器)	K C		2.9		良好	褐色	密1~2mm大砂粒含	擦痕後ナデ	
163	46	鉢(縄紋土器)	K C		4.3		良好	灰褐色	密0.5~1mm大砂粒多く含	内外共ナデ	
164	46	鉢(縄紋土器)	K C		2.8		良好	暗灰褐色	密1~2mm大砂粒含	外)擦痕後ナデ 内)ナデ	
165	46	鉢(縄紋土器)	K C	17.4	3.7		良好	灰褐色	密0.3~0.5mm大砂粒含	内外共ナデ	
166	46	鉢(縄紋土器)	K C	26.0	2.8		良好	灰褐色	密0.5~1mm大砂粒含	内外共ケズリ・口縁ナデ	
167	47	鉢(縄紋土器)	K C	21.0	4.3	21.6	良好	暗褐色	密1mm大砂粒多く含	外)ケズリ 内)調整不明	
168	47	鉢(縄紋土器)	K C		3.6	12.8	良好	灰褐色	密1mm大砂粒含	外)ナデ 内)擦痕	
169	47	鉢(縄紋土器)	K C	23.8	4.3		良好			内外共擦痕後ナデ	
170	47	鉢(縄紋土器)	K C	27.0	5.1	27.2	良好	暗褐色	密	内外共具殻擦痕後ナデ	
171	47	甕(弥生土器)	K C	27.6	3.8		良好	淡橙褐色	密0.5~2mm大砂粒含	外)ナデ・ハケ目 内)ハケ目	
172	47	甕(弥生土器)	K C	21.2	4.2		良好	褐色	密白砂粒含	外)ナデ・沈線 内)ナデ	
173	47	甕(弥生土器)	K C	14.6	4.4		良好	褐色	密白砂粒含	調整不明	
174	47	甕(弥生土器)	K C	20.6	3.7		良好	暗褐色	密1mm大砂粒含	内外共ナデ	
175	47	甕(弥生土器)	K C	25.4	4.3		良好	暗灰褐色	密1~2mm大砂粒多く含	外)ケズリ後ナデ 内)ナデ・ケズリ	
176	47	甕(弥生土器)	K C	25.6	4.1		良好	暗褐色	密4mm大砂粒少量含	調整不明	

遺物 番号	挿 号	種 別	層位	法 量 (cm)				焼成	色 調	胎 土	調 整	備 考
				口径	残高	底径	径					
177	47	甕(弥生土器)	K C	18.6	3.1			良好	暗褐色	密2mm大砂粒含	外)ハケ目 内)ナデ・ケズリ	
178	47	甕(弥生土器)	K C		3.8		20.0	良好	暗褐色	密1.5mm大砂粒含	内外共ナデ・ケズリ	
179	47	甕(突帯文土器)	K C		4.3			良好	外)黒褐色 内)灰褐色	密砂粒含	外)調整不明 内)ハケ目	煤付着
180	47	甕(突帯文土器)	K C		2.9			良好	灰褐色	密6mm大砂粒含	内外共ナデ	
181	48	甕(突帯文土器)	K C	33.9	4.2			良好	外)暗褐色 内)褐色	密0.2~4mm大砂粒含	外)ハケ目 内)ハケ・ケズリ後ナデ	
182	48	甕(突帯文土器)	K C		3.2			良好	黒褐色	密	内外共ハケ目	
183	48	甕(突帯文土器)	K C		3.6			良好	暗灰褐色 褐色	密	外)ハケ目 内)ナデ	
184	48	甕(突帯文土器)	K C	36.8	4.7			やや粗		密0.5~3mm大砂粒含	内外共ケズリ	
185	48	甕(突帯文土器)	K C		3.2			良好	外)黒色 内)暗褐色	密砂粒含	外)調整不明 内)ケズリ	炭化物付着
186	48	甕(突帯文土器)	K C		2.9			良好	暗褐色	密2mm大砂粒含	調整不明	
187	48	甕(突帯文土器)	K C		7.2			良好	褐色	密1mm大砂粒多く含	外)調整不明 内)ケズリ・ナデ	炭化物付着
188	48	甕(突帯文土器)	K C		4.7			良好	灰褐色	密1mm大砂粒含	内外共ケズリ	
189	48	甕(突帯文土器)	K C	36.0	4.2			良好	暗褐色	密0.3~1.5mm大砂粒含	内外共ケズリ	
190	48	甕(突帯文土器)	K C	25.2	4.5			やや粗	褐色	密1mm大砂粒多く含	外)ケズリ 内)調整不明	
191	48	甕(突帯文土器)	K C		4.9			良好	外)黒褐色 内)褐色	密0.5~2mm大砂粒含	外)ケズリ 内)ケズリ後ナデ	
192	48	甕(突帯文土器)	K C		5.3			良好	灰褐色	密白砂粒含	外)ケズリ 内)ナデ	
193	48	甕(突帯文土器)	K C		5.8			軟質	暗褐色	密0.5mm大砂粒多く含	内外共条痕	
194	48	甕(突帯文土器)	K C		5.6			良好	灰褐色	密1mm大砂粒多く含	調整不明	
195	49	甕(突帯文土器)	K C	33.8	24.0		39.6	良好	外)褐色 内)黒褐色	密	外)ケズリ後ナデ・ケズリ 内)調整不明	
196	49	甕(弥生土器)	K C		2.0	10.0		良好	褐色	密0.5~2mm大砂粒含	調整不明	
197	50	鉢(粗製土器)	K N	41.0	30.8			良好	灰褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
198	50	鉢(粗製土器)	K N	24.0	8.0		24.0	良好	暗褐色	1mm~4mm大の砂粒含む	内外共擦痕後ナデ	
199	50	鉢(粗製土器)	K N	14.4	5.4			良好	灰褐色	密砂粒含	外)擦痕 内)擦痕後ナデ	
200	50	鉢(粗製土器)	K N		3.2			良好	褐色	密1~2mm大砂粒含	外)ナデ 内)擦痕後ナデ	
201	50	鉢(粗製土器)	K N	25.9	5.6		16.2	良好	外)暗褐色 内)褐色	密	内外共擦痕後ナデ	
202	51	鉢(粗製土器)	K N		4.2			良好	暗灰褐色	密0.5~1mm大砂粒多く含	調整不明	
203	51	鉢(粗製土器)	K N	11.7	2.2			良好	褐色	密	調整不明	
204	51	甕(縄紋土器)	K N		1.5			良好	暗灰色	密細砂粒含	外)調整不明 内)擦痕後ナデ	
205	51	甕(縄紋土器)	K N	19.6	2.2			良好	暗灰褐色	密細砂粒含	内外共ナデ・ケズリ	
206	51	鉢(縄紋土器)	K N		26.6		33.0	良好	黒褐色・茶褐色	1mm~2mm大の砂粒含む	内外共ケズリ	炭化物付着
207	51	鉢(縄紋土器)	K N		3.0			良好	褐色	密0.3~2.5mm大砂粒含	外)ナデ・ケズリ 内)ナデ	
208	51	鉢(粗製土器)	K N		3.2			良好	褐色	密	内外共ナデ	
209	51	鉢(粗製土器)	K N	19.0	5.7			良好	暗灰褐色	密0.5~1mm大砂粒多く含	外)擦痕 内)擦痕後ナデ	
210	51	鉢(縄紋土器)	K N		12.1			良好	灰褐色	密砂粒含	内外共擦痕後ナデ	
211	51	鉢(縄紋土器)	K N		6.7	7.6	21.3	良好	外)褐色 内)黒色	密	外)ミガキ 内)ケズリ後ナデ	
212	52	甕(突帯文土器)	K N	37.8	30.4			やや粗	褐色	密0.5~1mm大砂粒含	内外共ナデ・ケズリ	
213	52	甕(突帯文土器)	K N	37.6	6.1			良好	灰褐色	密0.5~1.5mm大砂粒多く含	内外共ケズリ	
214	52	甕(突帯文土器)	K N		3.6			やや粗	暗褐色	密0.5~1.5mm大砂粒多く含	内外共ケズリ	
215	52	甕(突帯文土器)	K N		4.1			良好	淡褐色	密2mm大砂粒少量含	内外共ハケ目後ナデ	
216	52	甕(突帯文土器)	K N		7.7			良好	外)暗褐色 内)褐色	密0.5~3mm大砂粒含	外)ケズリ 内)ナデ	
217	52	甕(突帯文土器)	K N		4.5			良好	暗褐色	密	外)ハケ目 内)ナデ	
218	53	甕(突帯文土器)	K N		4.9			良好	外)黒色 内)暗褐色	密2mm大砂粒少量含	内外共ケズリ	
219	53	甕(突帯文土器)	K N	25.4	5.1			良好	外)暗褐色 内)褐色	密0.2~3mm大砂粒含	外)ナデ 内)ケズリ後ナデ	
220	53	甕(突帯文土器)	K N	30.6	18.5		32.0	良好	暗褐色	密	外)ケズリ後ナデ 内)ナデ	
221	53	壺(弥生土器)	K N		10.5		24.0	良好	褐色・黒褐色	1mm~2mm大の砂粒含む	外)ミガキ・刺突文 内)ハケ目・ミガキ	4条沈線
222	53	甕(弥生土器)	K N		6.0	8.0		良好	褐色	密	内外共ハケ目	
223	53	甕(弥生土器)	K N		6.8	12.4		良好	暗褐色	密1~2mm大砂粒多く含	外)ケズリ 内)ハケ目	
224	53	甕(弥生土器)	K N		2.9	5.4		良好	暗褐色	密0.5mm大砂粒多く含	外)ハケ目 内)ケズリ・ナデ	
225	53	壺(弥生土器)	K N		2.3	6.6		良好	外)暗褐色 内)褐色	密0.3~2mm大砂粒含	外)ミガキ 内)ケズリ	
226	53	甕(弥生土器)	K N		4.3	10.0		良好	褐色	密	内外共ミガキ	
227	55	甕(弥生土器)	K Z	15.6	5.6			良好		密	内外共ナデ・ハケ目	
228	55	甕(弥生土器)	K Z		10.4		10.2	良好	外)黒色 内)内橙褐色	密	外)ハケ目・刺突文 内)ケズリ後ナデ	
229	55	甕(弥生土器)	K Z		3.0	3.8		良好	暗灰褐色	密1.5mm大砂粒多く含	調整不明	
230	58	甕(弥生土器)	D D	20.6	2.0			良好	暗褐色	密1mm大砂粒少量含	外)ナデ 内)ナデ	2条沈線
231	58	甕(弥生土器)	D D	21.6	2.4			良好	灰褐色	密	内外共ナデ	
232	58	甕(弥生土器)	D D		3.0			良好	褐色	密0.5~3mm大砂粒含	外)波状紋 内)ナデ	沈線
233	58	甕(弥生土器)	D D	13.6	7.9		18.8	良好	灰褐色	密細砂粒含	外)ハケ目・ナデ 内)ナデ・ケズリ	

K C・・・第13層暗濃層茶色粘土層 K N・・・第11層黒色粘土層 K Z・・・第4層洪水堆積層 D D・・・第27層遺物包含層

遺物番号	挿図番号	種別	層位	法量 (cm)				焼成	色調	胎土	調整	備考
				口径	残存高	底径	径					
234	58	壺(弥生土器)	DD		5.5	9.8		良好	暗灰褐色	密0.5~1mm大砂粒多く含	外)ミガキ 内)ハケ目	
235	58	甕(弥生土器)	DD		3.9	5.0		良好	暗褐色	密1mm大砂粒含	内外共ナデ	
236	58	甕(弥生土器)	DD		2.1	4.0		良好	暗褐色	密	外)ミガキ 内)調整不明	炭化物付着
237	58	壺(弥生土器)	DD		2.9	9.6		軟質	暗褐色	密2mm大砂粒含	外)ハケ目 内)ナデ	
238	58	甕(弥生土器)	DD		3.4	8.0		軟質	淡褐色	やや粗1mm大砂粒多く含	外)ハケ目 内)調整不明	
239	58	甕(弥生土器)	DD	16.0	4.7			良好	褐色	密0.5~1mm大砂粒含	外)ナデ 内)ケズリ後ナデ	
240	58	甕(弥生土器)	DD	20.0	3.2			良好	褐色	密	外)調整不明 内)ナデ・ケズリ	炭化物付着 5条沈線
241	58	甕(弥生土器)	DD		5.9	4.5		軟質	外)褐色 内)淡褐色	やや粗細砂粒含	外)調整不明 内)ナデ	
242	58	甕(弥生土器)	DD		4.4	8.4		良好	暗灰褐色	密0.5mm大砂粒多く含	調整不明	
243	58	壺(土師器)	DD	14.4	14.9		19.6	良好	黒褐色	密	外)ナデ・カキ目 内)ナデ・ケズリ	
244	58	甕(土師器)	DD	18.8	3.1			良好	褐色	密	外)ナデ 内)ハケ目	
245	58	甕(土師器)	DD	15.0	4.5			良好	黒褐色	密	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ	
246	59	台付壺(土師器)	DD	8.3	14.2	9.2	13.8	良好		密	内外共ナデ	
247	59	小型丸底壺(土師器)	DD	10.7	8.9			良好	褐色	密	外)ハケ目 内)ハケ目・ナデ	
248	59	甕(土師器)	DD		2.7			良好	褐色	密	内外共ナデ	
249	59	小壺(土師器)	DD	11.2	11.6			良好	淡茶褐色	密	外)ナデ・ヘラ痕跡 内)ナデ・ケズリ	炭化物付着
250	59	甕(土師器)	DD	18.7	2.5			良好	褐色	密	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ後ナデ	
251	59	甕(土師器)	DD	17.5	3.3			良好	外)暗褐色 内)褐色	密0.5~5mm大砂粒含	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ	5条沈線
252	59	甕(土師器)	DD	17.0	5.0			良好	褐色	密	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ	
253	59	甕(土師器)	DD	15.0	15.5			良好	灰褐色	密1mm大砂粒含	内外共ナデ・ハケ目	
254	59	甕(土師器)	DD	28.0	3.8			良好	褐色	密	内外共ナデ	
255	59	甕(土師器)	DD	23.6	6.8			良好	褐色	密	外)ナデ・ハケ目 内)ナデ・ケズリ	
256	59	甕(土師器)	DD	20.8	7.5			良好	赤褐色	密0.5mm大砂粒多く含	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ	
257	59	碗(土師質土器)	DD	16.5	3.2			良好	丹彩	密		丹彩
258	59	碗(土師質土器)	DD	15.0	3.2			良好	丹彩	密		丹彩
259	59	鉢(土師質土器)	DD		3.3			良好	丹彩	密	内外共ナデ	
260	59	小壺(土師器)	DD		5.2			良好	淡褐色	密	外)ナデ 内)ナデ・ケズリ	
261	59	壺(土師質土器)	DD	11.6	2.5			良好	丹彩	密	内外共ナデ	
262	59	皿(土師質土器)	DD	15.8	4.9			良好	丹彩	密		丹彩・内)暗
263	59	高台付鉢(土師質土器)	DD		2.9	8.2		良好	丹彩	密		炭化物付着
264	59	皿(土師質土器)	DD	16.0	2.1			良好	丹彩	密		丹彩
265	60	坏蓋(須恵器)	DD	13.0	4.4			良好	灰色	緻密	外)ナデ・ケズリ 内)ナデ	
266	60	坏蓋(須恵器)	DD	13.4	3.7			良好		密8mm大の砂粒含	外)ケズリ・ナデ 内)ナデ	
267	60	坏蓋(須恵器)	DD	16.0	2.6			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
268	60	坏身(須恵器)	DD	14.0	2.1			良好		密	内外共ナデ	反り付
269	60	坏蓋(須恵器)	DD	13.0	3.0			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
270	60	坏身(須恵器)	DD	12.6	3.6	6.6		良好		緻密	内外共ナデ	糸切り
271	60	坏蓋(須恵器)	DD	16.0	2.6			良好		緻密	外)ケズリ・ナデ 内)ナデ	輪状つまみ
272	60	坏蓋(須恵器)	DD	15.2	2.2		4.6	良好	濃灰色	緻密	外)ナデ・ケズリ後ナデ 内)ナデ	
273	60	坏蓋(須恵器)	DD	15.8	1.5			良好		緻密	内外共ナデ	
274	60	壺(須恵器)	DD	10.0	3.5			良好		緻密	内外共ナデ・タタキ目	
275	60	埴輪	DD					良好		緻密	内外共カキ目	
276	60	埴輪	DD		5.5			良好	淡茶褐色	密	内外共カキ目	
277	69	甕(土師器)	KS		5.8			良好	褐色	密	内外共ナデ	
278	69	鉢(土師質土器)	KS	18.0	3.3			良好	丹彩	密	内外共ナデ	丹彩
279	69	皿(土師質土器)	KS	12.0	2.0			良好	黄土色	密	内外共ナデ	
280	69	鉢(土師質土器)	KS		2.2			良好	褐色	密	内外共ナデ	
281	69	口(土師質土器)	KS	18.0	2.4			良好	褐色丹彩	密	内外共ナデ	
282	69	皿(土師質土器)	KS	17.5	2.6			良好	丹彩	密	外)ハケ目 内)ハケ目	炭化物付着 暗紋
283	69	坏(土師質土器)	KS		1.5	7.0		良好	淡褐色	密	内外共ナデ	底部糸切り
284	69	高坏(土師器)	KS		3.0	11.6		良好	淡褐色	密	調整不明	
285	69	埴輪	KS		5.5			良好	淡茶色	密	外)ハケ目 内)ナデ	
286	69	把手	KS		7.0		5.5	良好	褐色	密		
287	69	坏蓋(須恵器)	KS	13.0	3.3			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
288	69	坏蓋(須恵器)	KS	16.0	2.8			良好	濃灰色	緻密	内外共ナデ	
289	69	坏蓋(須恵器)	KS	14.0	4.1			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
290	69	坏蓋(須恵器)	KS	15.0	3.4			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
291	69	坏身(須恵器)	KS	9.3	3.4			良好	灰色	緻密	外)調整不明 内)ナデ	自然釉
292	69	坏身(須恵器)	KS	13.0	3.6	7.5		良好	内)茶褐色 外)茶灰色	密	内外共ナデ	底部糸切り
293	69	碗(須恵器)	KS	14.0	2.3			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
294	69	碗(須恵器)	KS	15.0	3.7			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	

DD・・・第27層遺物包含層 KS・・・第2層黒色砂混り粘土層

遺物番号	挿図番号	種別	層位	法量 (cm)				焼成	色調	胎土	調整	備考
				口径	残存高	底径	径					
295	70	坏蓋(須恵器)	K S	15.0	1.6			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
296	70	坏蓋(須恵器)	K S	17.0	1.3			良好	濃灰色	緻密	内外共ナデ	
297	70	坏蓋(須恵器)	K S	15.0	1.4			良好	濃灰色	緻密	内外共ナデ	
298	70	坏蓋(須恵器)	K S	17.0	1.5			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
299	70	高台付坏(須恵器)	K S	12.8	4.7			良好	濃灰色	緻密	内外共ナデ	
300	70	高台付坏(須恵器)	K S		1.5	7.4		良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
301	70	高台付坏(須恵器)	K S		2.1			良好	灰色	緻密	内外共ナデ	
302	70	甕(須恵器)	K S	14.0	6.2			良好	濃灰色	緻密	内外共ナデ・タタキ目	外)自然釉
303	70	壺(須恵器)	K S	17.8	3.6			良好	灰色	緻密		自然釉
304	70	甕(須恵器)	K S	12.0	2.9			良好	灰色	緻密	内外共ナデ・タタキ目	外)自然釉
305	70	壺(須恵器)	K S	8.1	12.5			良好	灰色	密	外)ナデ・カキ目・竹管紋	自然釉
306	70	壺(須恵器)	K S	12.0	2.7			良好	灰色緑色自然釉	緻密	調整不明	自然釉

K S・・・第2層黒色砂混り粘土層

石器一覧表

No.	器種	層位	法量				備考	No.	器種	層位	法量				備考
			最大長	最大幅	最大厚	重さ					最大長	最大幅	最大厚	重さ	
S 1	石鏃	R D	3.0	1.8	0.5	2.6	黒耀石	S 14	石錘	R D	5.1	1.5	4.9	73.7	
S 2	搔器	R D	5.6	6.4	1.3	43.2	黒耀石	S 15	石錘	R D	7.0	6.2	1.5	112.6	
S 3	搔器	R D	3.2	4.1	0.6	5.5	黒耀石	S 16	石錘	R D	6.8	2.7	7.7	178.7	
S 4	スクレイパー	R D	6.7	10.0	1.0	69.4	サヌカイト	S 17	石錘	R D	7.5	6.3	1.7	133.0	
S 5	敲石	R D	9.7	4.6	7.8	477.1		S 18	石錘	R D	8.3	8.1	1.7	180.0	
S 6	石錘	R D	10.4	9.8	2.2	232.9		S 19	石錘	R D	11.0	9.5	4.5	607.6	
S 7	石錘	R D	8.6	6.9	1.2	98.2		S 20	石錘	R D	8.9	6.5	2.0	175.3	
S 8	石錘	R D	7.4	6.6	2.1	140.7		S 21	石錘	R D	8.1	7.8	2.4	199.3	
S 9	石錘	R D	7.0	5.3	2.3	103.1		S 22	石鏃	SD04	2.3	1.6	0.3	0.7	サヌカイト
S 10	石錘	R D	8.2	5.2	1.3	101.7		S 23	石鏃	K N	2.1	1.5	0.3	0.7	黒耀石
S 11	石錘	R D	6.4	5.3	1.7	96.0		S 24	磨製石斧	K N	6.1	6.2	3.0	150.9	
S 12	石錘	R D	6.1	1.1	5.1	63.2		S 25	搔器	D D	3.4	5.5	0.9	13.1	黒耀石
S 13	石錘	R D	8.1	4.8	1.8	104.4									

R D・・・第26層礫溜層 K N・・・第11層黒色粘土 D D・・・第27層遺物包含層

その他の遺物一覧表

No.	器種	層位	法量				備考	No.	器種	層位	法量				備考
			長径	短径	厚み	重さ					長径	短径	厚み	重さ	
Q 1	紡錘車	D D	6.0	1.5	2.7		Q 2	耳環	D D	3.0	2.7	0.8	21.2		

D D・・・第27層遺物包含層

木器一覧表

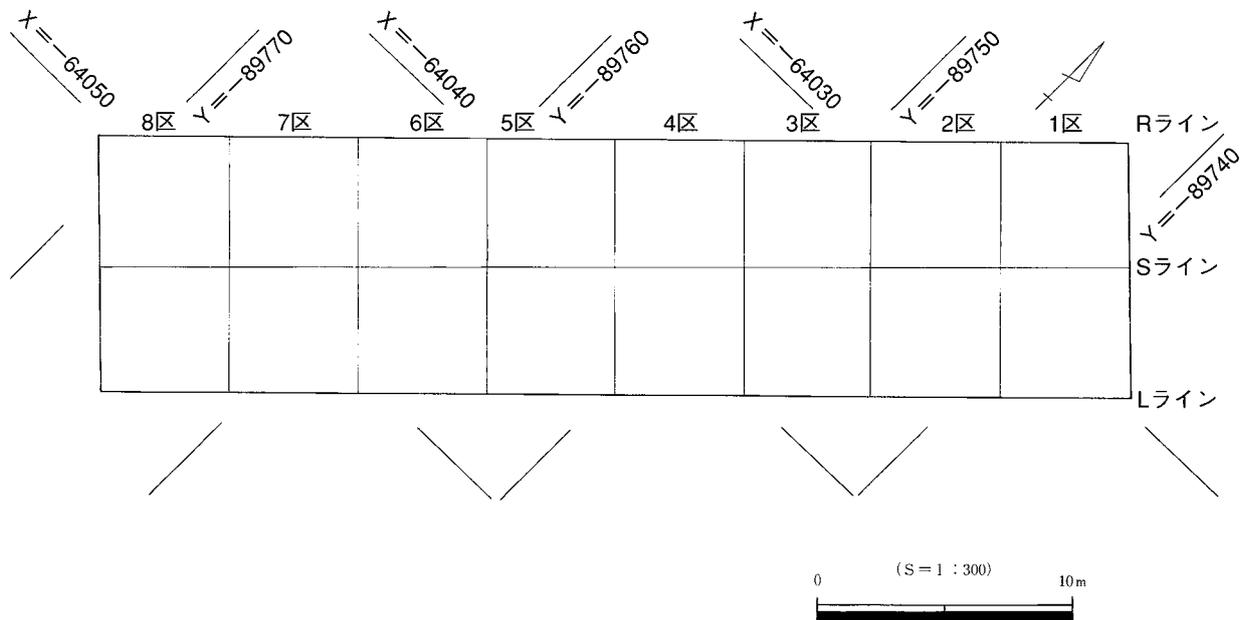
No.	器種	層位	法量			備考	No.	器種	層位	法量			備考
			最大長	最大幅	最大厚					最大長	最大幅	最大厚	
W 1	柱	H N	45.8	10.6	7.0	ブナ科シイ属	W 25	杭	D D	5.0	径3.7		
W 2	板材	H N	66.4	4.8	2.3		W 26	杭	D D	13.2	5.8	3.8	
W 3	板	H N	137.0	19.0	2.3		W 27	杭	D D	14.8	2.3	2.6	
W 4	盾	K Z	48.3	5.9	0.9	マツ科モミ属	W 28	杭	D D	85.0	径3.2		
W 5	大足	K Z	25.3	4.8	0.8	ヒノキ科アスナロ属	W 29	杭	D D	83.8	径2.0		
W 6	下駄	K Z	23.6	9.6	1.3	スギ科スギ属スギ	W 30	杭	D D	103.0	径5.2		
W 7	杭	K Z	113.6	3.2	5.6		W 31	杭	D D	90.0	5.4	6.0	
W 8	鍬	D D	80.5	13.7	1.2	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W 32	杭	D D	74.5	径4.5		
W 9	鍬	D D	64.0	3.9	1.4	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W 33	杭	D D	26.5	径3.8		
W 10	鍬	D D	47.1	4.2	1.3	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W 34	?	D D	53.0	5.0	2.1	
W 11	杭	D D	89.8	径2.3			W 35	杭	D D	40.0	4.9	2.4	
W 12	大足	D D	34.9	9.1	1.4		W 36	杭	D D	53.2	径6.2		
W 13	大足	D D	25.3	2.4	1.1	スギ科スギ属スギ	W 37	杭	D D	34.6	5.9	5.3	
W 14	杭	D D	23.4	4.5	2.4		W 38	建築材	D D	35.8	9.2	5.4	
W 15	鍬	D D	57.8	11.2	1.4	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W 39	建築材	D D	25.0	3.4	2.2	
W 16	鍬	D D	36.0	11.5	1.2	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W 40	蓋	D D	32.3	10.2	0.7	
W 17	鍬	D D	15.8	3.9	1.4		W 41	鍬刃	D D	17.7	3.5	0.8	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
W 18	鍬刃	D D	35.7	4.0	0.7	スギ科スギ属スギ	W 42	大足	D D	51.5	2.6	1.7	ヒノキ科アスナロ属
W 19	鍬刃	D D	11.7	3.4	1.2		W 43	鍬刃	D D	21.9	1.25	3.3	
W 20	鍬刃	D D	17.7	3.0	0.8		W 44	鍬	D D	43.1	12.0	1.5	スギ科スギ属スギ
W 21	鍬	D D	27.0	11.1	0.8		W 45	建材	D D	74.5	10.5	6.9	
W 22	杭	D D	15.5	4.9	3.8		W 46	鍬	D D	11.0	3.6	1.4	
W 23	有頭棒	D D	54.3	2.6	2.8		W 47	蓋	D D	12.8	6.0	0.8	
W 24	杭	D D	83.8	径4.8									

H N・・・第10層黒灰色粘土層 K Z・・・第4層洪水堆積層 D D・・・第27層遺物包含層

第5章 目久美遺跡第10次調査（第2工区）

第1節 調査の経過と方法

現地調査は、2002年9月20日に着手し、同年12月18日に完了した。調査地が低湿な環境に位置していることから、安全対策のために調査区内に鋼矢板を打ち込み、調査区を囲んだ上で、H鋼による補強を行い調査を実施した。調査面積は400m²である。調査地点は、個人住宅の跡地にあたり、調査区の南側にはかつて猿ヶ土手と呼ばれた堤防状の高まりが存在した地点に位置している。調査区の東側は2001年度に実施した目久美遺跡第9次調査地点に、西側は2002年度に実施した目久美遺跡第10次調査第1工区に接している。このため、本調査区の名称は、目久美遺跡第10次調査第2工区とした。遺跡の略号は、「ME10-2」である。調査区の地区割りは、方位を無視して、一辺5mの正方形グリッドを16区画設定した。調査は、全て人力にて行い、排土の搬出はベルトコンベアと重機を用い、ダンプカーにて調査区外に移動させた。調査区内は、湧水が著しかったため、水中ポンプによる排水を行い、吸い取った水はノッチタンクを通過させて土砂を除去してから、隣接する用水路へと排出させた。遺物の取り上げは、グリッド単位で行い、光波測距機とレベルを使用した。また水田畦畔は2cmのコンターラインを設定して平面図を作成した。遺構面は7面検出したが、最深部の調査は、面積を狭くし、階段状に掘り進めることで、安全面に配慮した。調査深度は最も深い地点で標高マイナス2mである。現地調査終了後は直ちに整理作業を進め、2003年3月末日までに報告書の作成事業を完了させた。遺構図は、20分の1から200分の1での第2原図を作成し、トレースを行った。出土遺物は、土器を3分の1スケールで、木製品は8分の1スケールで、石製品、銅製品は1分の1スケールにて図示した。写真撮影は、現地では35mmのリバーサル、モノクロフィルムを用い、遺物の撮影は、モノクロブローニーフィルムを用いた。墨書土器については、鳥取県教育文化財団、湯川善一氏よりご教示を頂いたほか実測図の作成についても協力を得た。



第71図 10次調査第2工区グリッド配置図

第2節 調査区内の堆積 (第72図)

調査区内の表土付近の土は、調査以前に実施された鋼矢板の設置工事のため、大半が削平されており、中近世の遺構や遺物はほとんど残っていない状況であった。以下に土層の詳細を示す。

第1層 水路3埋土

- 1-1層 黄色粘土
- 1-2層 暗黒灰色粘土
- 1-3層 灰色粘土
- 1-4層 灰色細砂
- 1-5層 淡黒色粘土

第2層 水路1埋土

- 2-1層 茶色粘土
- 2-2層 黒色粘土

第3層 黒灰色粘土

第4層 灰色粘土 (白色の砂粒を含む)

第5層 黒色粘土 (白色の砂粒を含む)

第6層 灰色粘土 (上部に炭酸鉄の集積有り)

第7層 水路2埋土

- 7-1層 黒色砂質土中に黄灰色粘土のブロックを多く含む
- 7-2層 白色細砂
- 7-3層 灰色粘土
- 7-4層 暗灰色粘土

第8層 暗灰色シルト (土坑1埋土)

第9層 シルトの卓越する洪水堆積層

- 9-1層 灰色シルト
- 9-2層 灰色細砂
- 9-3層 黒灰色粗砂
- 9-4層 暗灰色シルト

第10層 粗砂の卓越する洪水堆積層

- 10-1層 暗灰色粗砂
- 10-2層 灰色粗砂
- 10-3層 灰色シルト
- 10-4層 白灰色粗砂
- 10-5層 茶色粗砂
- 10-6層 灰色粗砂

第11層 暗灰色粘土

第12層 茶褐色粘土 (植物の腐食を多く含む)

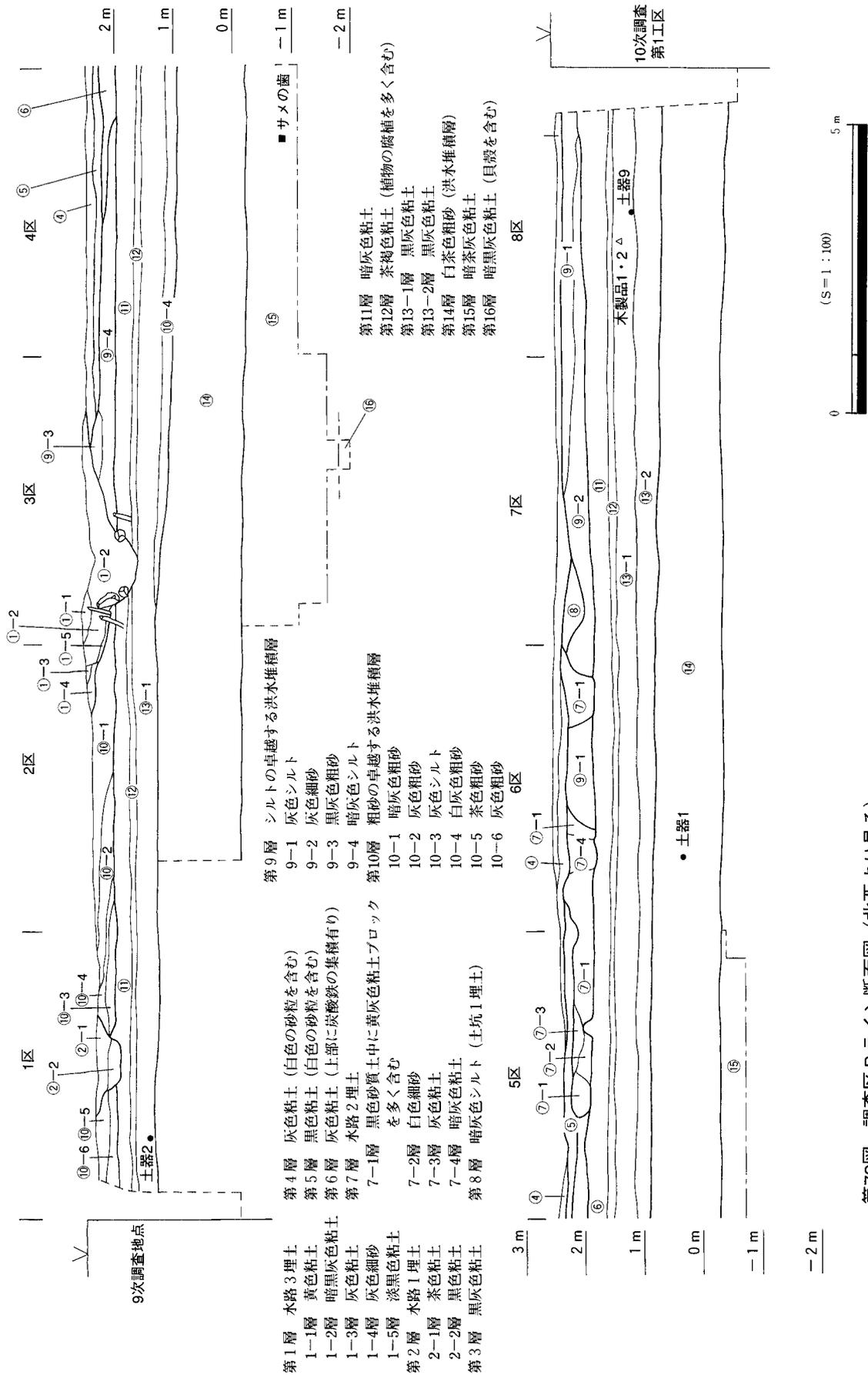
第13-1層 黒灰色粘土

第13-2層 黒灰色粘土

第14層 白茶色粗砂 (洪水堆積層)

第15層 暗茶灰色粘土

第16層 暗黒灰色粘土（貝殻を含む）



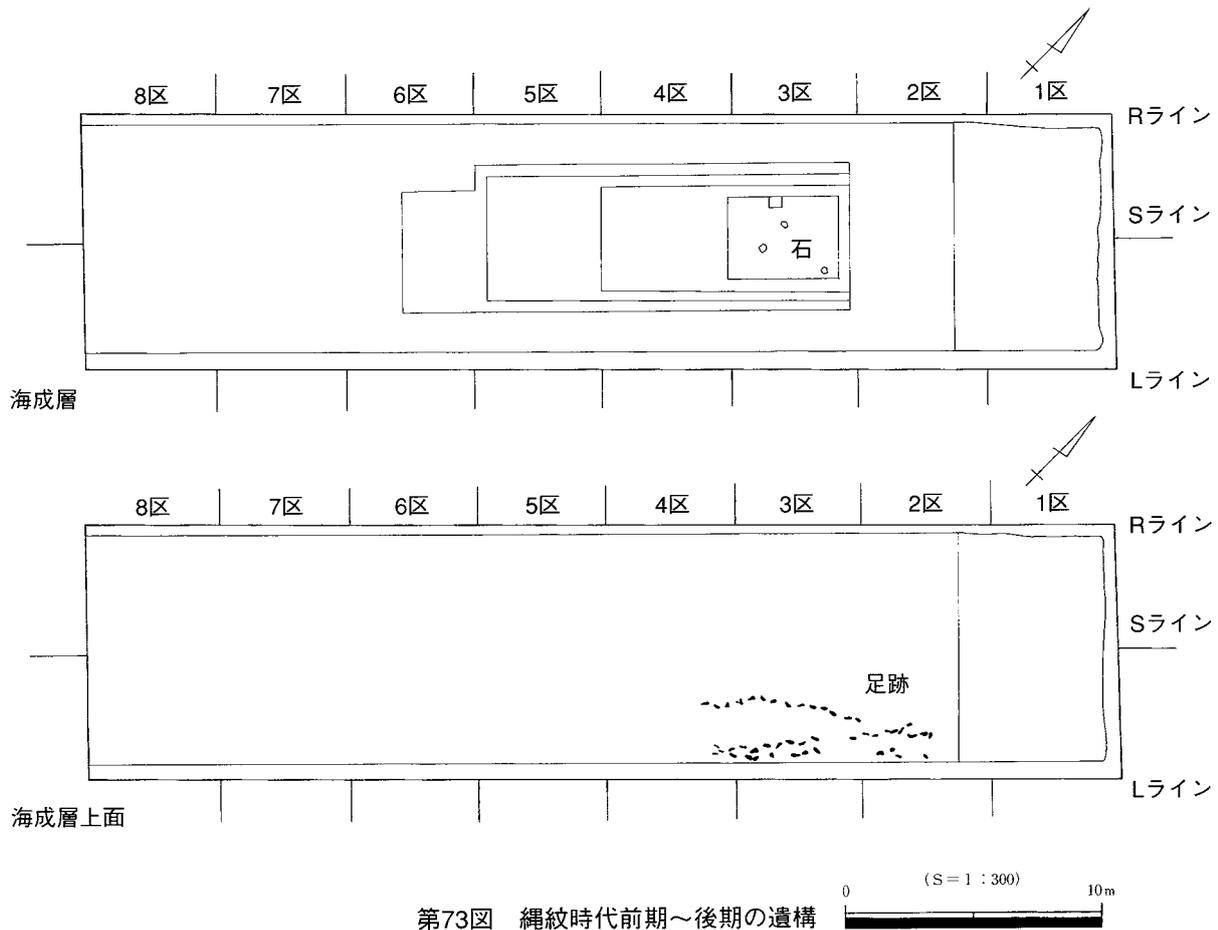
第72図 調査区Rライン断面図（北西より見る）

第3節 縄紋時代前期～後期の調査 (第73～75図)

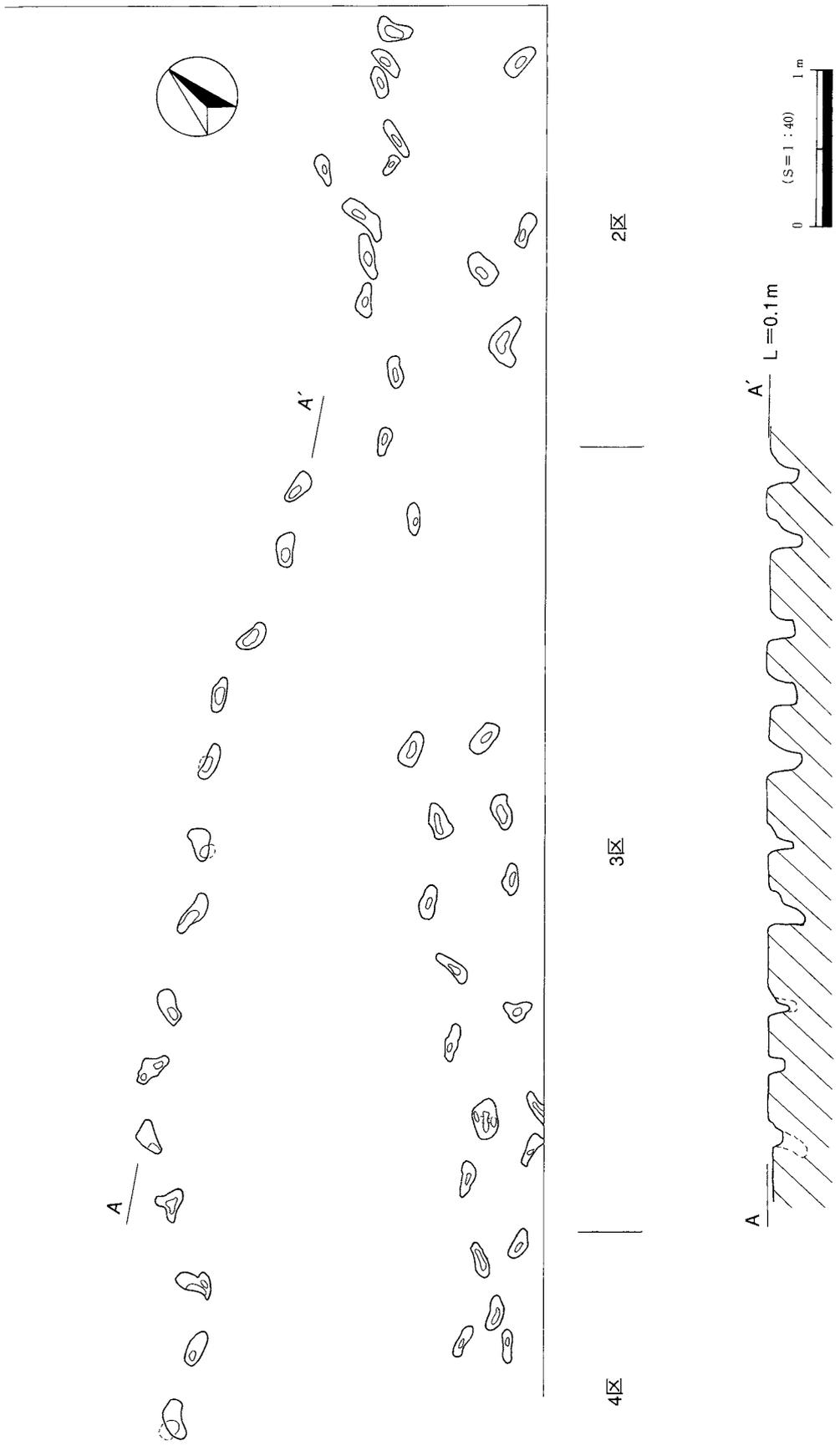
黒灰色粘土層(13層)を除去すると、深さ1.5メートルにわたって白茶色の粗砂が堆積しており、その下層には暗茶褐色の粘土層(15層)が存在する。遺構は、この暗茶褐色粘土層の上面において検出した。また暗茶色粘土層は科学分析の結果、海退に伴って堆積した海成層であると推定されることから、この足跡の形成時期は縄紋中期から後期の時期が考えられる。また白茶色粗砂層中に粘土がラミナ状に堆積しており、洪水等の流水作用によって堆積したものと考えられた。

足跡 (第74図) 暗茶褐色粘土層の上面において、48個検出した。足跡は、北東方向に向かって直線的に伸びており、複数の人間が歩行した結果、残されたものと考えられる。足跡のサイズは長さ20～30cm、幅10～15cm、深さは10～30cm程度である。足跡の型が潰れてしまったものが多いことや、検出面から下方へ相当深く伸びているものがあることから、軟弱な地盤状態での歩行が想定される。潮が引いた後の干潟を歩行したような印象を受けるものである。

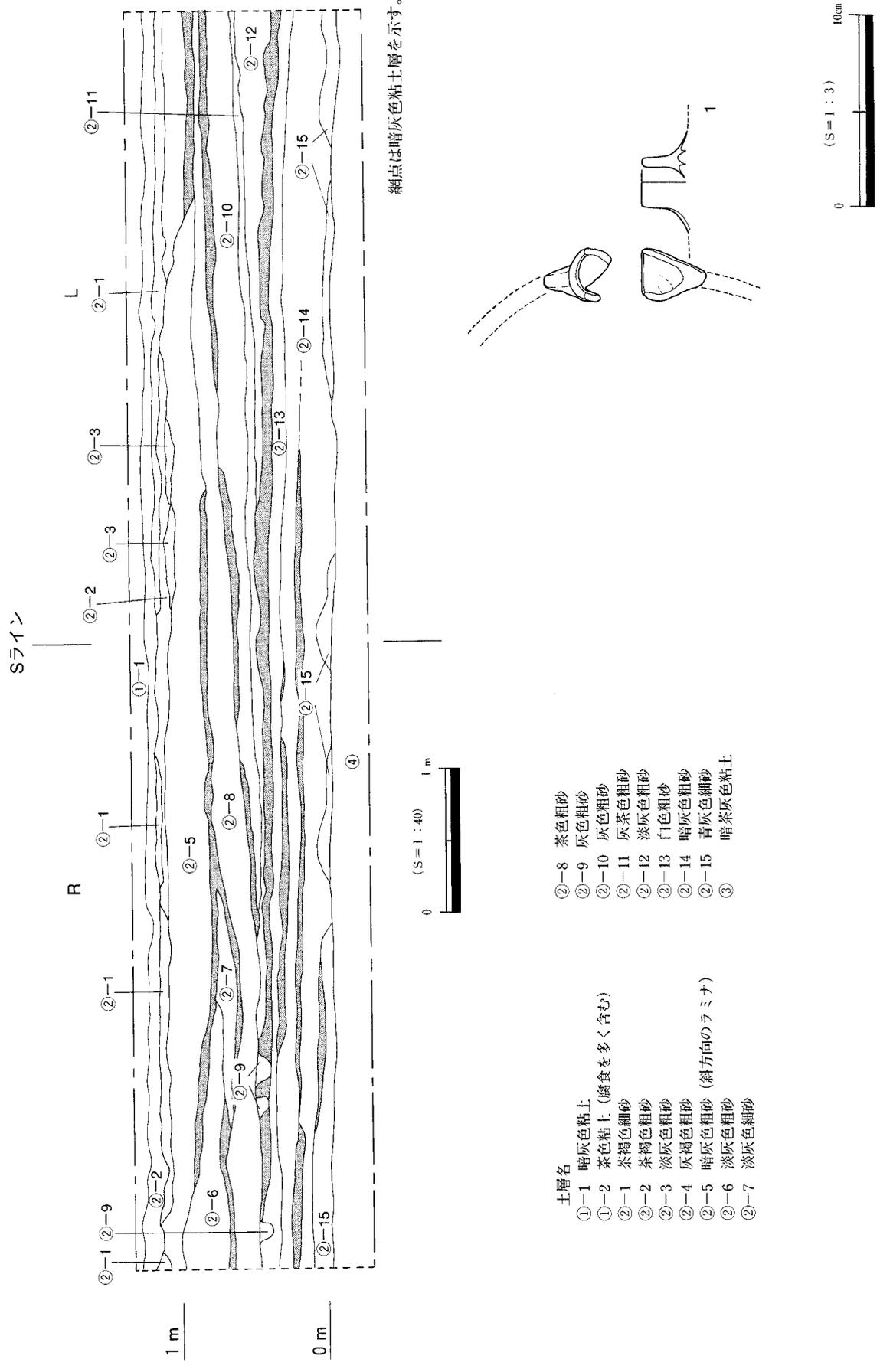
洪水堆積層 (第75図) 1ラインにおいて、白茶色粗砂層(14層)の断面を観察し、堆積状態を記録した。白茶色粗砂層の層中には、所々暗灰色の粘土層が堆積しており、流水の激しかった時期と、安定した時期があったことを示している。また、粗砂の断面には流水によるものと思われる斜め方向のラミナ状の堆積が確認されたほか、粗砂の断面に、縦方向に走る黒い筋状の粘土が多く確認されたが、これは腐食した植物根の痕跡であった。この洪水層の堆積した時期は、この層中から縄紋後期に相当する土器1が出土したことや、上層の黒灰色粘土層から突帯紋土器が出土したことから、縄紋時代後期頃に相当するものと考えられる。



第73図 縄紋時代前期～後期の遺構



第74図 海成層上面遺構図



Sライン

R

L

網点は暗灰色粘土層を示す。



- | 土層名 | |
|------|-----------------|
| ①-1 | 暗灰色粘土 |
| ①-2 | 茶色粘土 (腐食を多く含む) |
| ②-1 | 茶褐色細砂 |
| ②-2 | 茶褐色粗砂 |
| ②-3 | 淡灰色粗砂 |
| ②-4 | 灰褐色粗砂 (斜方向のラミナ) |
| ②-5 | 暗灰色粗砂 |
| ②-6 | 淡灰色粗砂 |
| ②-7 | 淡灰色細砂 |
| ②-8 | 茶色粗砂 |
| ②-9 | 灰色粗砂 |
| ②-10 | 灰茶色粗砂 |
| ②-11 | 淡灰色粗砂 |
| ②-12 | 白色粗砂 |
| ②-13 | 暗灰色粗砂 |
| ②-14 | 青灰色粗砂 |
| ②-15 | 暗茶灰色粘土 |
| ③ | |

第75図 縄紋時代洪水堆積層断面図・出土遺物図



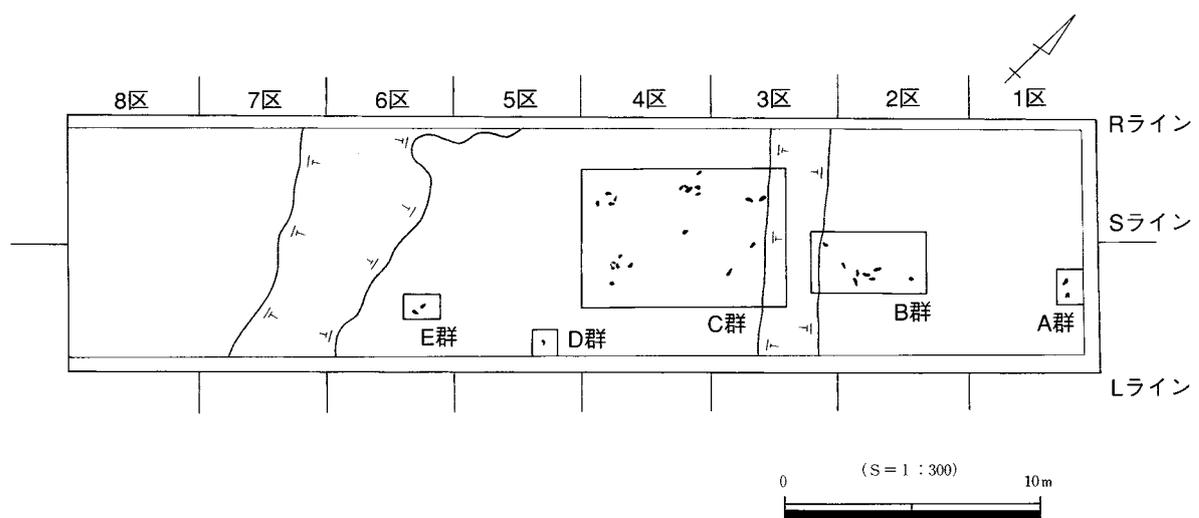
出土遺物（第75図） 暗茶褐色粘土層からは、土器片、サメの歯、貝殻、人頭大の石が出土した。貝殻は、ハイガイなどが標高マイナス1.8m以下の層から出土しており、殻を閉じたままのものが多いことから、自然に堆積した貝層と見られる。石は、暗茶褐色粘土層中の標高マイナス1.6m付近にて3個検出した（写真図版25-1）。石には人為的な加工痕は見られなかったものの、目久美遺跡第6次調査でも同様な状況で海成粘土中から礫石が出土しており、追い込み漁などで用いられたものと考えられている。サメの歯は4区の暗茶灰色粘土層、標高マイナスの1m地点から出土した。14層の白茶色粗砂中からは、縄紋土器片が出土した。第75図の1は中津式の深鉢の口縁部につける装飾の破片と考えられる。表面は風化が激しく、砂粒が浮き出ており、水に流されて運ばれてきた状況を窺わせるものである。

第4節 縄紋時代晩期～弥生時代中期中葉の調査（第76～79図）

標高2m付近まで堆積している砂層（9層、10層）を除去すると暗灰色の粘土が平面的に堆積しており、上面から足跡が検出された。また粘土下層には茶褐色の粘土層（植物腐食層）を挟んで、突帯紋土器、弥生土器、木製品が分布していた。上層の砂層の形成時期が弥生中期中葉以降と考えられることから、足跡の形成は、弥生前期以降、中期中葉までの期間が考えられる。

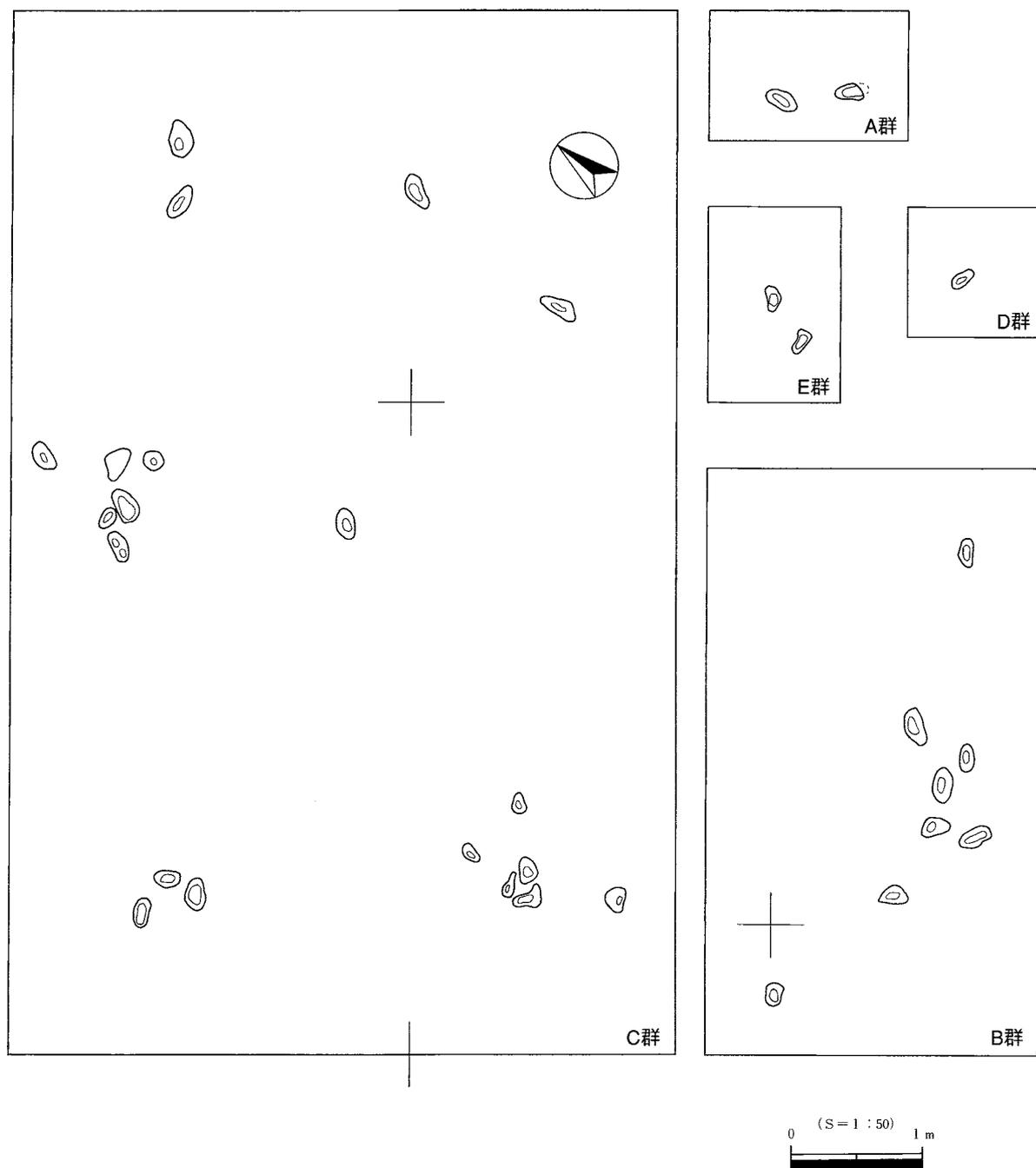
足跡（第77図） 11層上面において、1区から6区にかけての範囲で検出した。全部で33個あり、まとまった分布はなく、まばらに散在している状況である。足跡の大きさは、長さ15～30cm、幅10cm前後、深さ2～5cmで、内部には灰茶色の細砂が埋まっている。隣接する9次調査地点では、同一層において、イネ科花粉が検出されており、水田の存在が推定されている。調査では、足跡のほかには遺構は検出できなかったが、足跡検出面の上層は、粗砂によって被覆されており、激しい流水によって埋没したものと考えられる。このため、畦畔が浸食され遺存しなかった可能性も考えられる。

出土遺物（第78・79図） 黒灰色粘土層中から土器、木製品が出土している。第78図の2は、弥生土器の蓋である。口径25.5cm、器高13cmで、天井部を窪ませる。5、6は口縁端部に接して突帯が付けられる突帯紋土器で、突帯の断面は三角形を呈する。7、8は口縁からやや下がった位置に突帯が付けられるもので、7は刻目が施される。9は、2条の突帯を巡らす突帯紋土器である。胴部に最大径があり、口縁は外反する。突帯には刻目は施

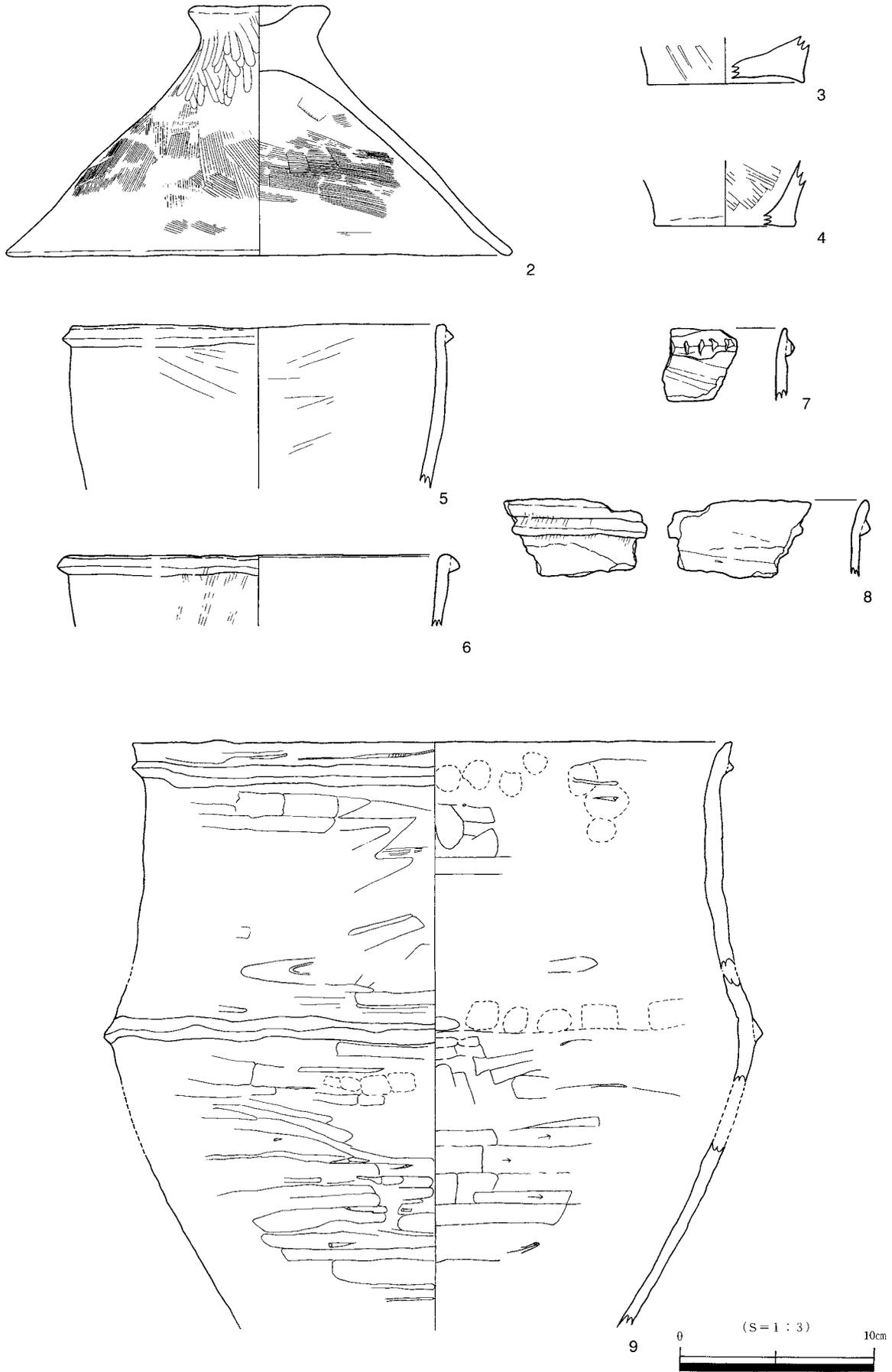


第76図 縄紋時代晩期～弥生時代中期中葉の遺構図

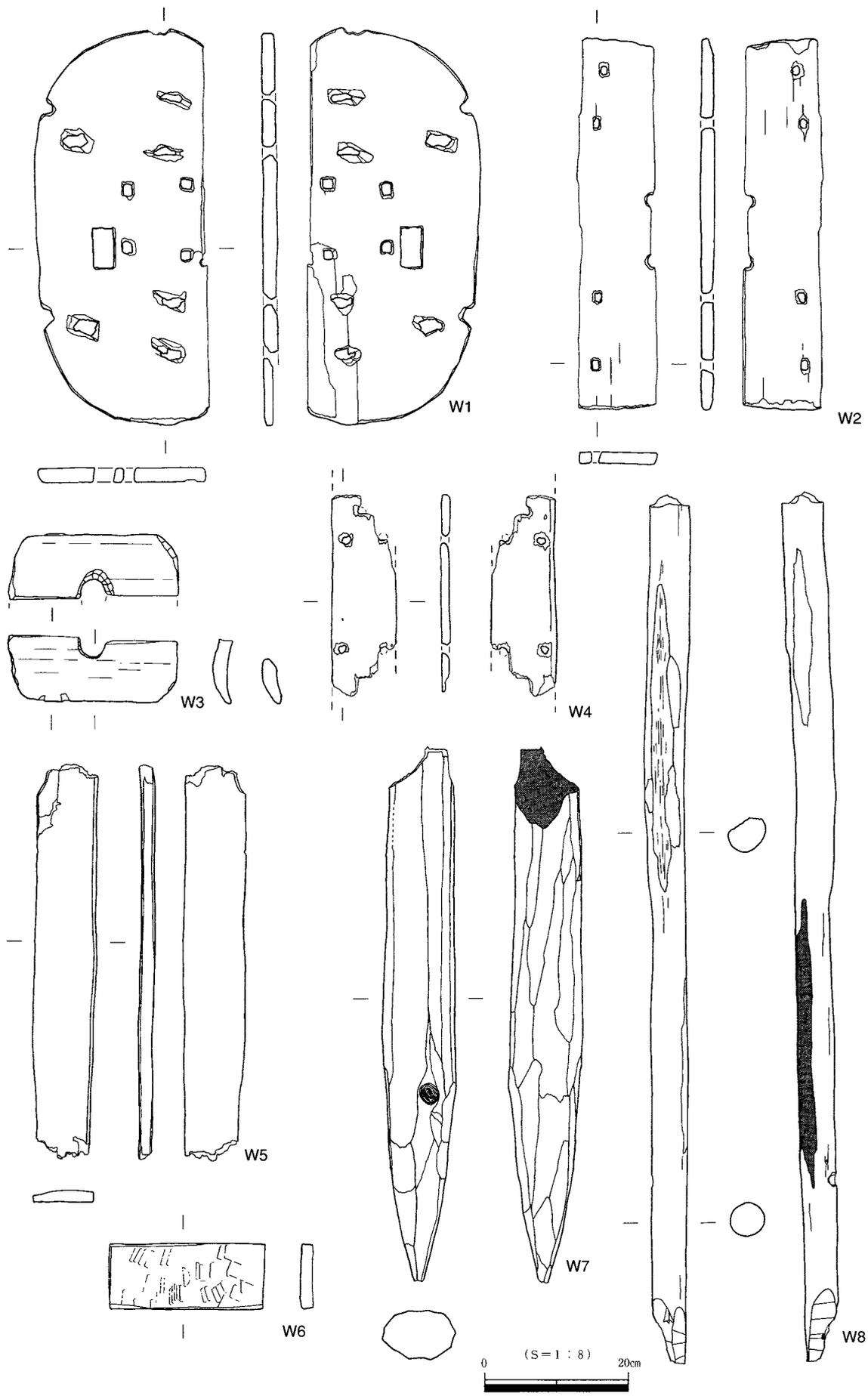
されない。復元口径は30.6cmで、器高は40cmを越える大形の深鉢である。木製品は、杭と用途不明の板材が出土している。第79図のW 1は欠損している個所があるが、楕円形の板材で、長方形の穴が1個と不整形な穴が6個、正方形の穴が4個開けられている。田下駄に転用されたものか。W 2は、長方形の板材で、4個の穴と、側面に2箇所抉りを入れる。この2点は同じ地点で見つかり、組み合わせて使われた可能性も考えられる。W 3は湾曲する板材に丸く穴を開けたもので、農耕具の一種であろうか。W 4は長方形の板材に4個の穴を開ける。W 5、W 6は用途不明の板材である。W 7は残存長75.4cmの杭で、端部に焼け焦げた痕跡が残る。W 8も側面に焼け焦げた痕跡が残る。残存する長さは122.4cmである。



第77図 弥生時代中期の足跡平面図（11層上面）



第78图 ⑬層出土遺物実測図1



第79図 ⑬層出土遺物実測図 2

網点は焼痕を示す。

第5節 弥生時代中期の調査 (第80・81図)

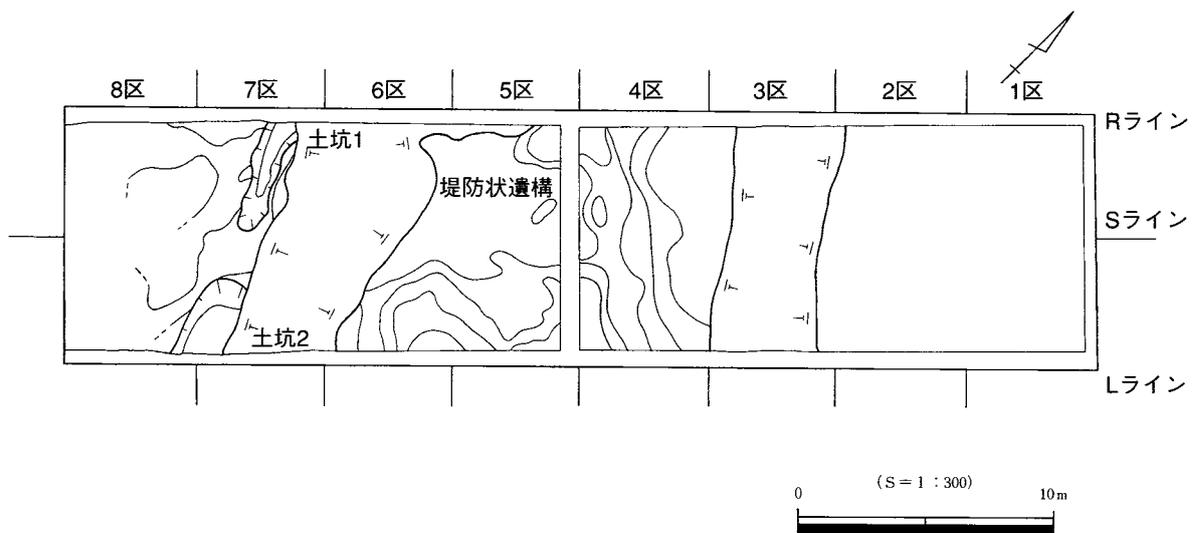
4区から8区までの地点では、水田土を除去すると、灰色のシルトと粘土、細砂がラミナ状に堆積していた。地形的には池ノ内側へ傾斜しており、洪水の作用で形成された自然堤防の一部と見られる。また1区から3区までは、住宅の撤去工事によって水田土は除去され、砂層が露出している状況であったため、既に削平されてしまったものと考えられる。自然堤防状の地形は、第81図に10cmコンターにて、その地形を表現している。この遺構面では、7区において土坑2基を検出した。

堤防状遺構 (第81図) 4区より南西側で検出した砂の盛り上がりである。コンターラインを見ると東側へと傾斜しており、堤防状の形態をなしている。堤内の構造は粘土、シルト、細砂がラミナ状の堆積しており、洪水によりもたらされた砂の堆積層と見られる。このような状況から、この遺構は自然堤防の可能性が考えられる。この砂層中からは弥生中期中葉の甕口縁部片 (11) が1点出土している。この堤防状遺構は、弥生時代中期中葉以降に形成されたものと考えられる。

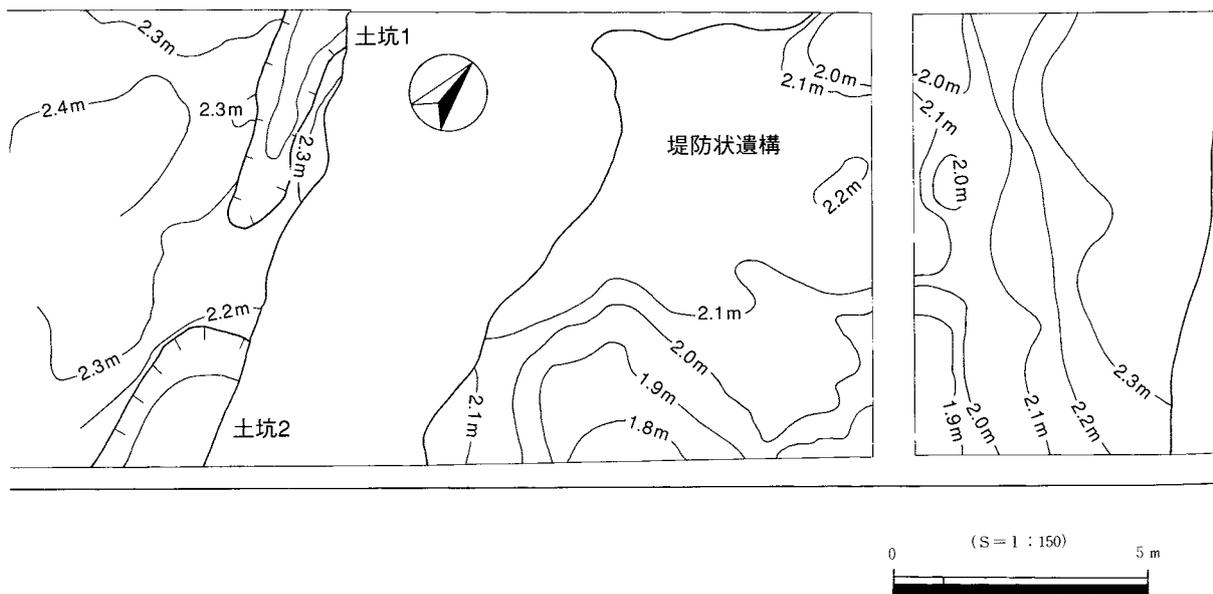
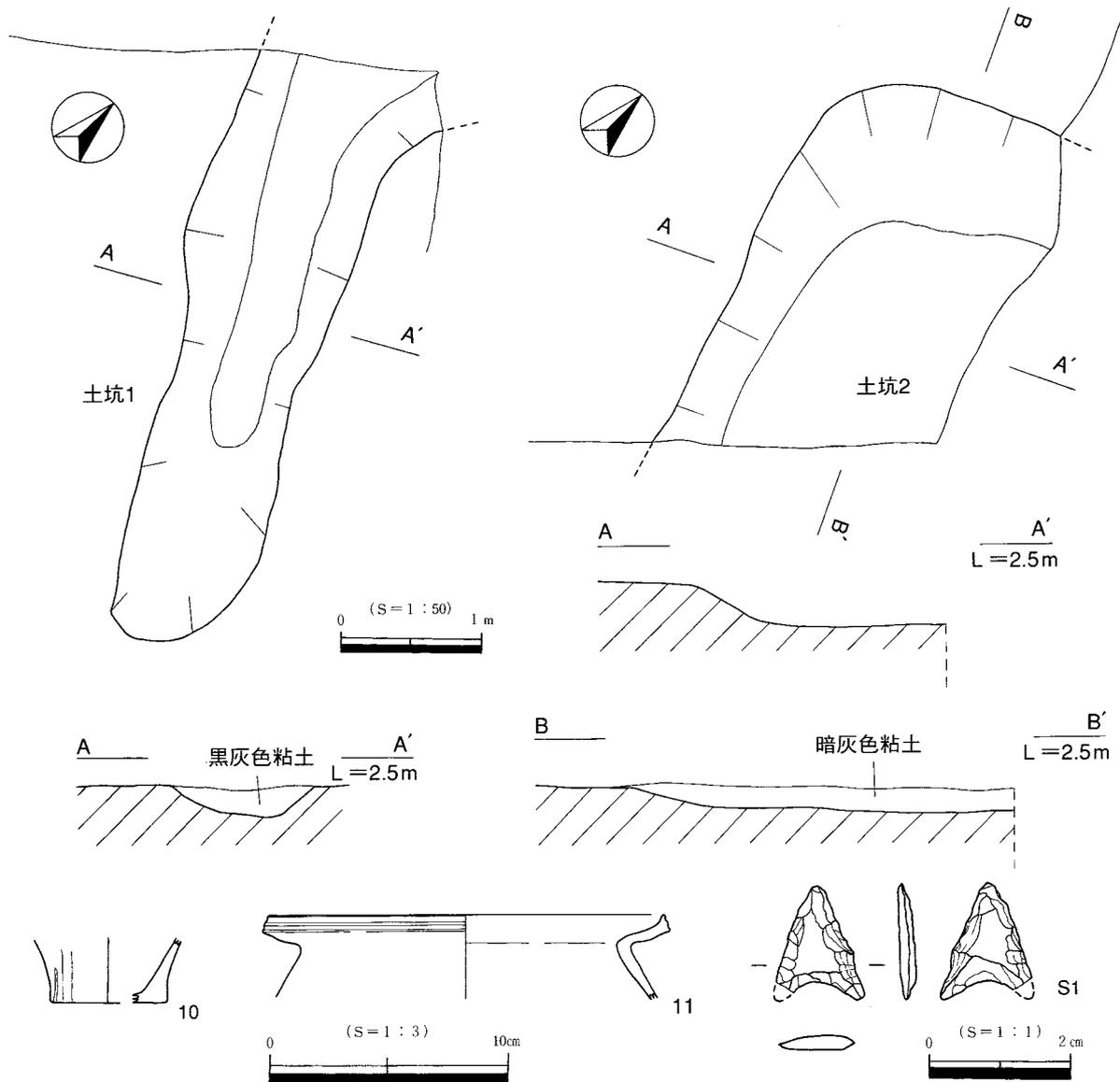
土坑1 (第81図) 7区において検出した水路状の遺構である。検出した長さ4.3m、幅1.2m、深さ0.2mで、断面形は「U」字形を呈する。出土遺物は、底面から弥生土器の細片が出土している。この遺構の性格は不明であるが、砂層に掘り込まれていることから、弥生時代後期頃の年代が想定される。

土坑2 (第81図) 遺構の大半が調査区外に伸びるほか、古代の水路2にも切られている。形態は方形を呈するものと考えられる。検出長さ3m、幅1.8m、深さ0.2mである。遺構底面から弥生土器底部片 (10) が出土している。遺構の性格については不明である。

出土遺物 (第81図) 11は弥生土器甕口縁部である。8-L区の⑨-2層から出土した。口縁は2条の凹線が巡り、端部をつまみ上げる。頸部の屈曲は激しいが、内面にはヘラ削りの痕跡は見られない。中期中葉の後半段階のものと考えられる。S1は、1-L区の粗砂層から出土したサヌカイト製の石鏃である。長さ1.6cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重さは0.4gである。



第80図 弥生時代中期中葉～後期の遺構図

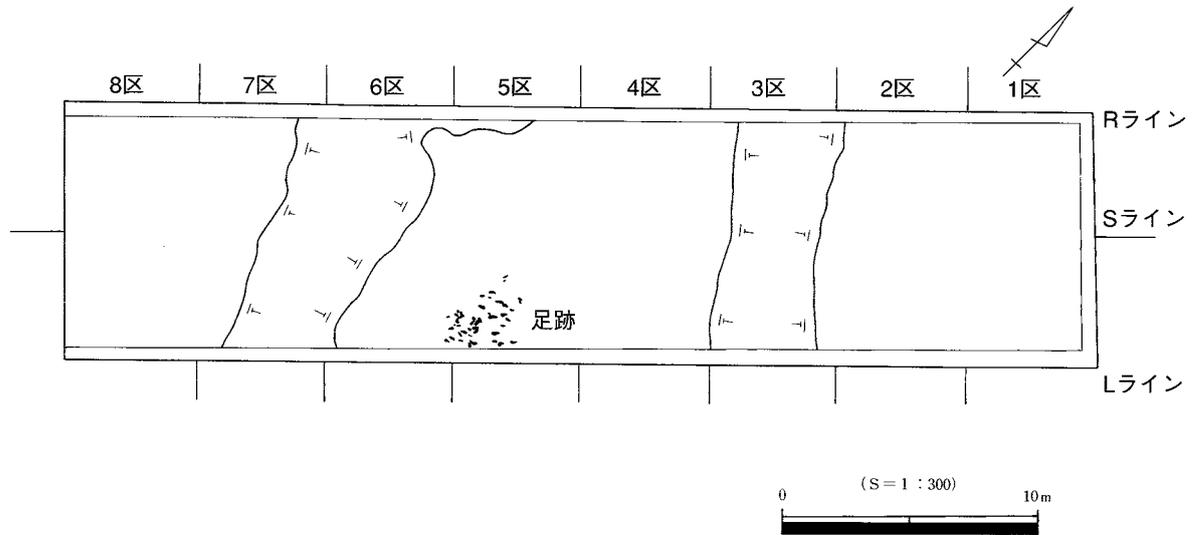


第81図 土坑1・2・堤防状遺構図、出土遺物図

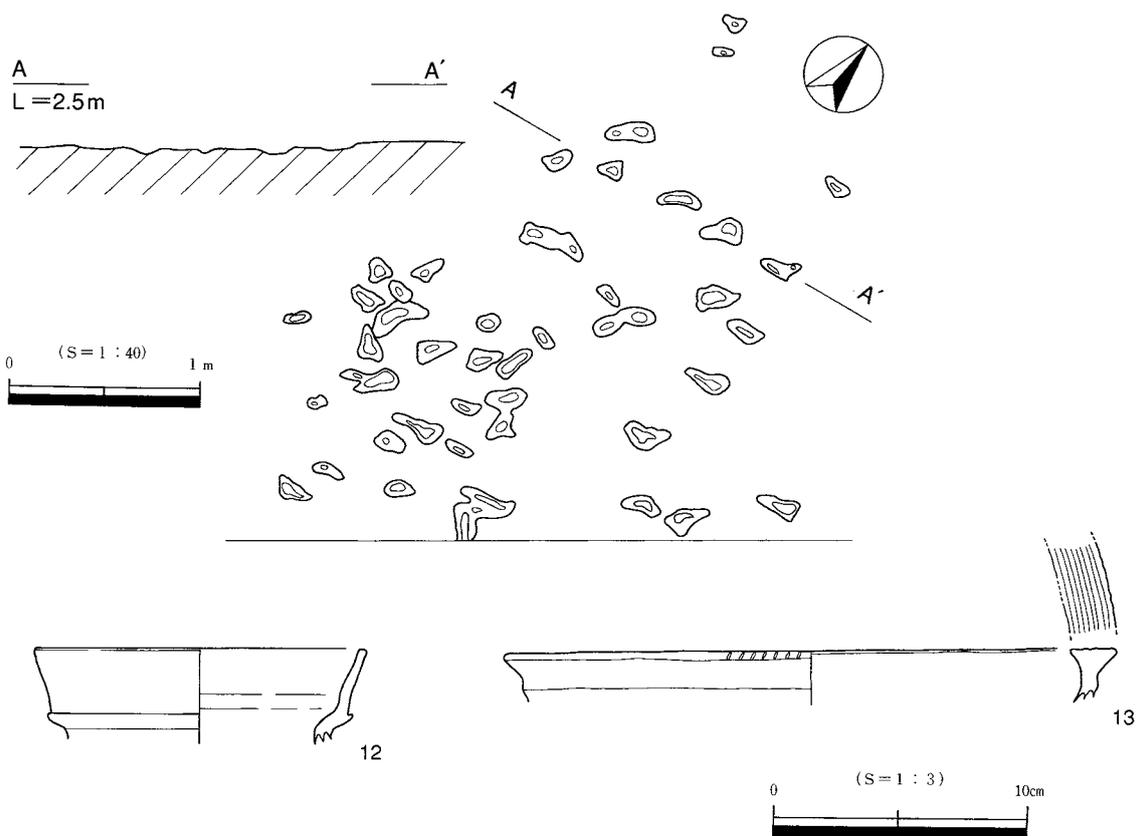
網点は焼痕を示す。

第6節 古墳時代前期の調査 (第82・83図)

古墳時代後期の水田耕作土と考えられる黒色粘土層を除去した後、標高2.2mの付近において、灰色粘土層が水平堆積しており、その上面を精査したところ、この粘土層の上面に無数の足跡が密集している状況が確認された。



第82図 古墳時代前期の遺構図



第83図 古墳時代前期の足跡平・断面図、出土遺物図

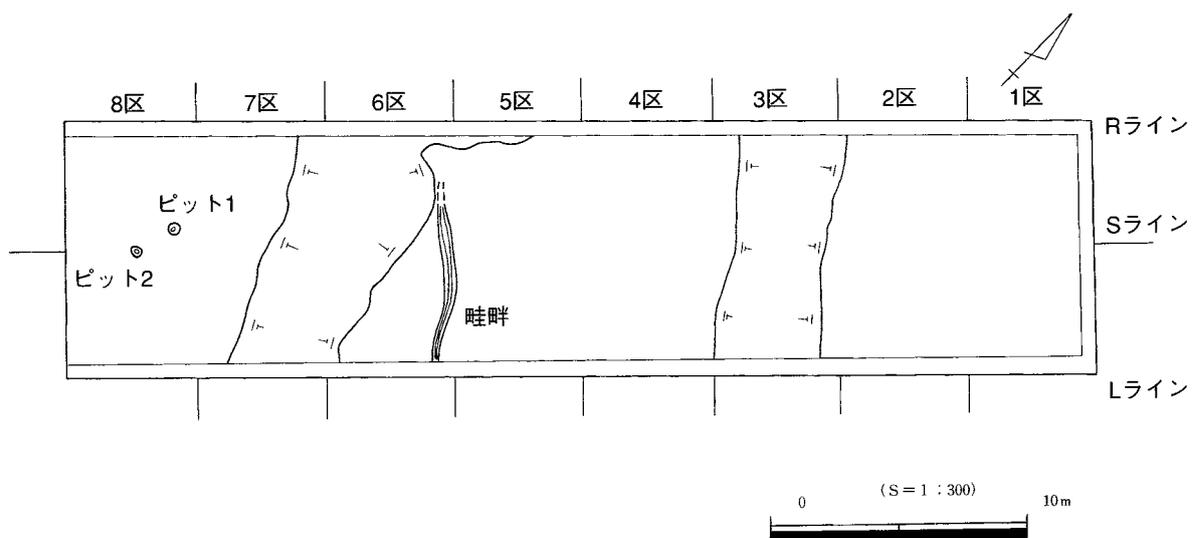
足跡（第83図） 5区において、47個確認された。4 m四方の範囲に密集して分布しており、歩行した方向や人数などは判然としない。足跡のサイズは、長さ10～30cm、幅10cm程度、深さ5cmで、内部は白色の粗砂で満たされていた。足跡の形成された時期は、はっきりしないものの、検出面から古墳時代前期の土器が出土していることから、古墳時代前期以降に埋没したものと考えられる。またこの足跡に伴う畦畔や水路などは検出されなかったため、これが水田に伴う足跡であったかどうかは分からない。また、この地点から南東へ200 m程の地点に所在する池ノ内遺跡では、古墳時代前期の水田遺構が検出されており、この足跡もその水田と同時期に形成された可能性も考えられる。

出土遺物（第83図） 12は土師器甕で、古墳時代前期のものである。復元口径は12.6cmで形態は2重口縁形となる。口縁端部はシャープさに欠け、二重口縁の接合部の処理も甘い。色調は赤褐色を呈する。13は、足跡の検出された灰色の粘土層中から出土したもので、弥生時代の高坏もしくは鉢の口縁部片と見られる。口縁端部が「T」字状に肥厚し、凹線と刻みが巡る。弥生中期後葉のものか。

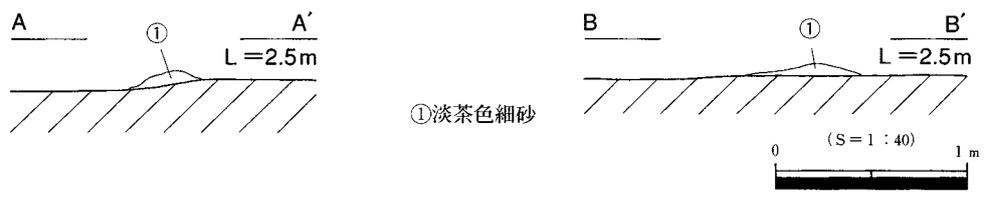
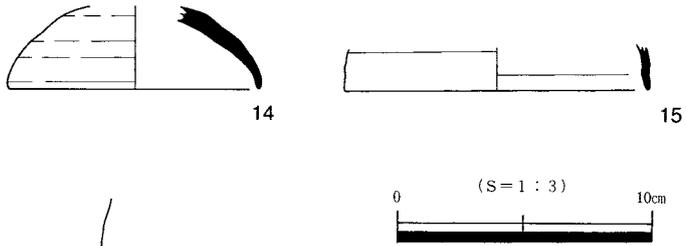
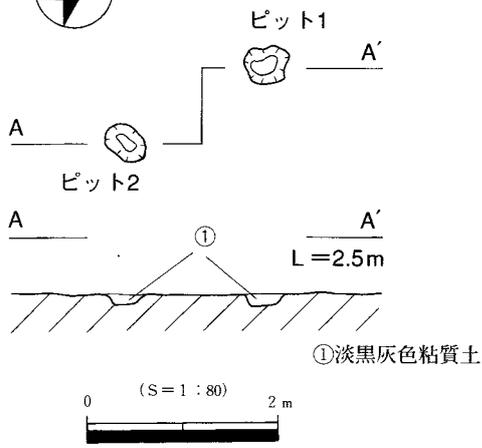
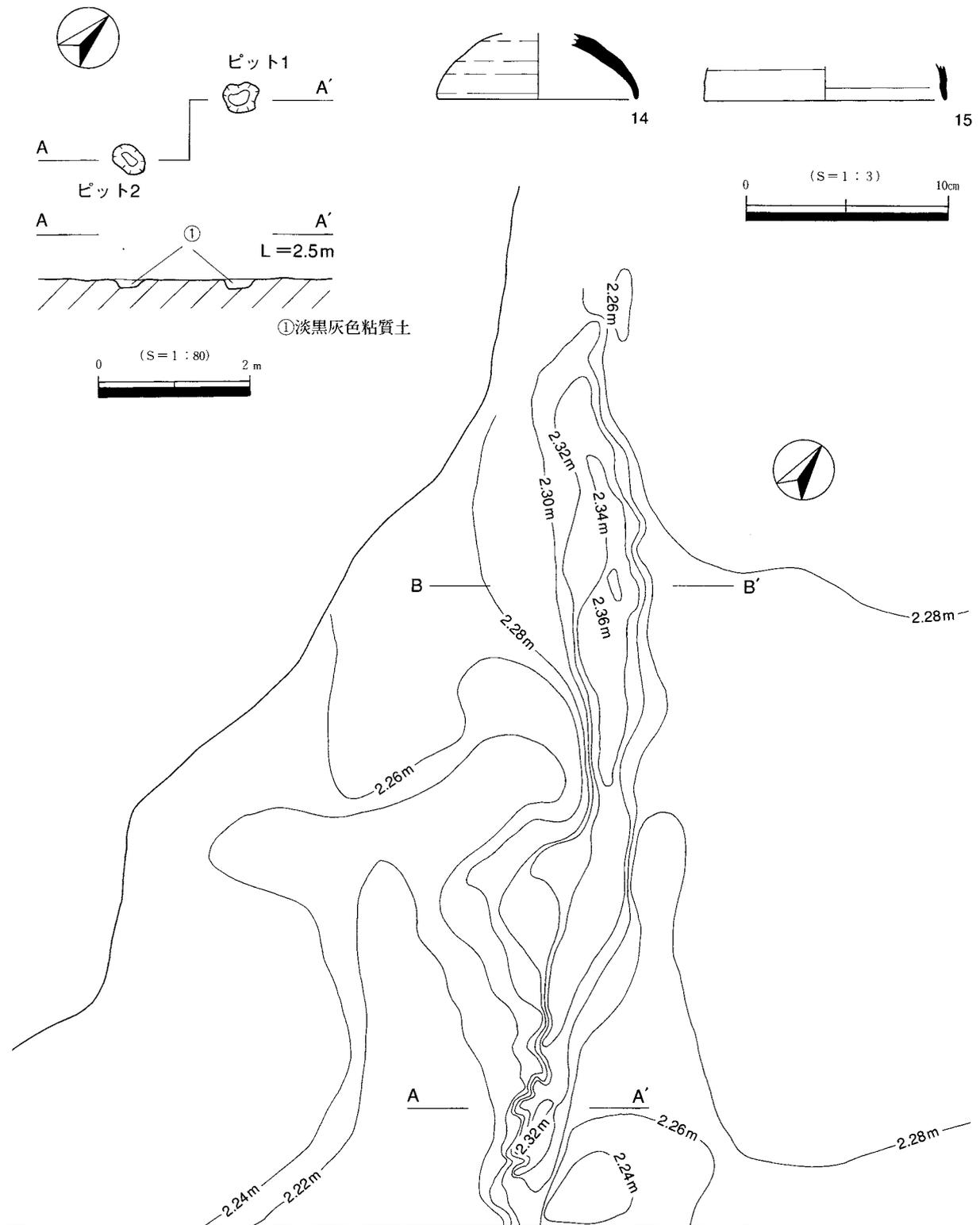
第7節 古墳時代後期の調査（第84・85図）

6区南側の断面において、淡茶色細砂がカマボコ状に盛り上がっている状況を確認したため、面的に精査したところ、淡茶色細砂が線状に伸びる遺構であることが分かった（写真図版27-1）。この遺構は、形態的な特徴から水田の畦畔と考えられる。また4区より北東側は、粗砂の堆積層があるため水田遺構は存在せず、6区より南西側はS X 0 3の攪乱により、遺構は消滅していた。

畦畔（第85図） 検出した長さ6.5m、幅30～60cmで、高さ10cm程度の断面カマボコ形の畔である。黒色粘土層の上面に淡茶色の細砂を盛り上げて作っている。畦畔の内部には、木片などは埋め込まれていなかった。砂盛の畦畔は、池ノ内遺跡からも同様の畦畔が検出されている。水田の時期は、水田面から出土した遺物から古墳時代後期頃に使われていたものと考えられる。



第84図 古墳時代後期の遺構図



第85図 ピット1・2・畦畔コンター図・出土遺物図

ピット1 (第85図) 8区の上面において検出された、小穴である。直径20cm、深さ5cmである。ピット内からは遺物は出土しなかった。

ピット2 (第85図) ピット1から約1m離れた地点で検出された小穴である。直径20cm、深さ5cmである。ピット内からは遺物は出土しなかった。ピット1、2とも遺構の形成時期、性格とも不明であるが、形態的に似通っており、柱穴などの遺構の可能性も考えられる。

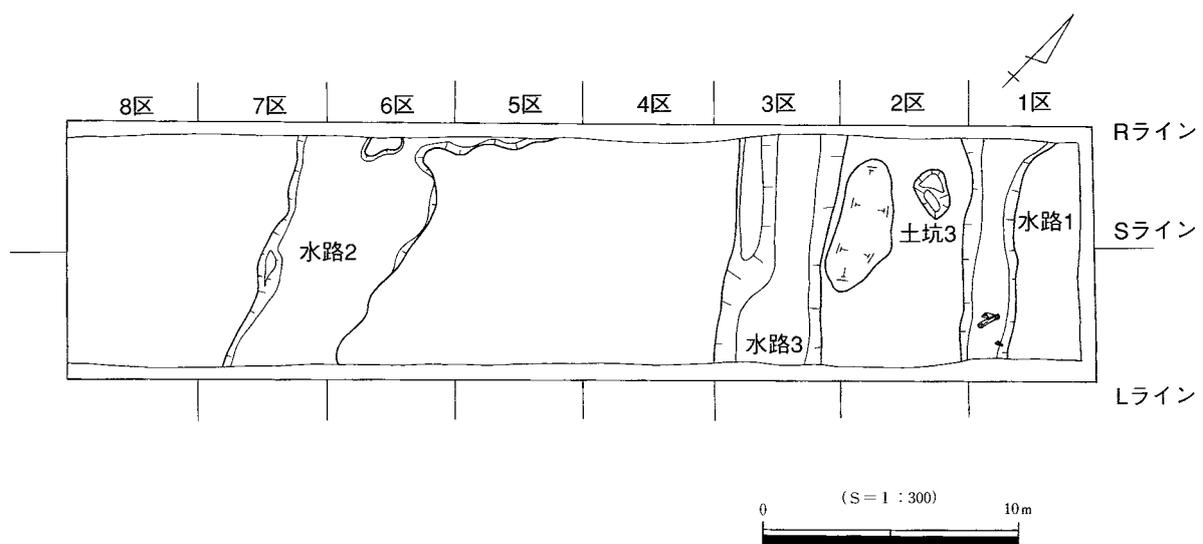
出土遺物 (第85図) 14は須恵器坏蓋片である。復元口径9.8cmで、内外面とも回転ナデ調整される。天井部は欠損しているため、調整は不明である。時期は7世紀前葉から中葉に相当する。15は須恵器坏蓋である。復元口径11.8cmで、口縁端部内面に段を持たせている。胎土は緻密で、よく焼き締まっている。時期は6世紀末頃と考えられる。

第8節 奈良時代から近代の調査 (第86~91図)

調査区上面を被覆していた造成土を除去すると、4区より北東側ではすぐに灰褐色の粗砂が検出され、検出面から土坑1基と水路2条を検出した。5区よりも南西側には黒色、および灰色の粘土層が堆積しており、その下層において、水路1条を検出した。

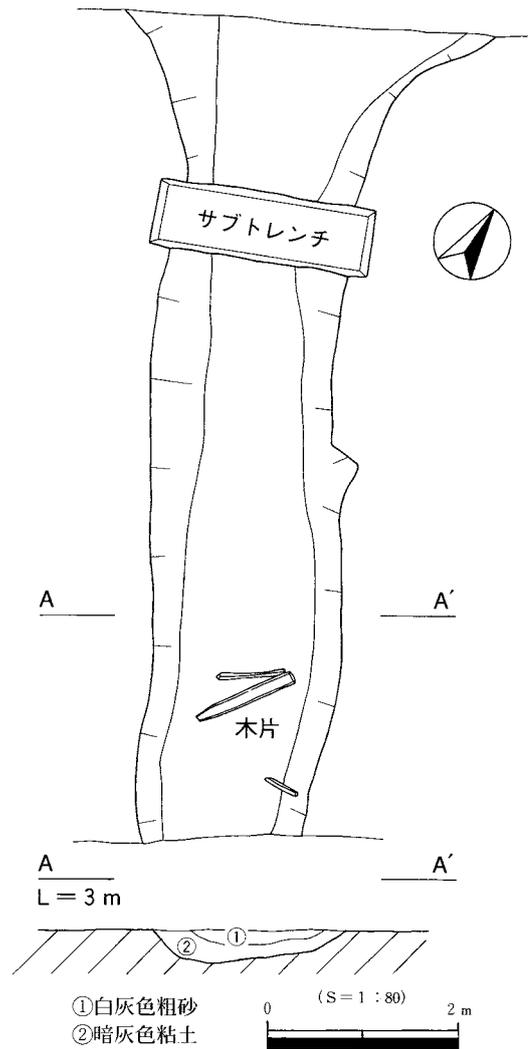
水路1 (第87図) 1区において検出された水路である。検出長8.8mで、幅は2m、深さ20cmで断面形は緩やかな「U」字形を呈する。内部からは木片のほか、須恵器の細片が出土している。この水路の埋没時期は、奈良時代以降と考えられる。

土坑3 (第88図) 2区の粗砂上面において検出した不整形の土坑である。長さ1.8m、幅1.2m、深さ30cmである。内部から遺物が出土しなかったため、この遺構の時期、性格とも不明である。



第86図 古代~近代の遺構図

水路2（第88図） 6区から7区にかけて検出した水路状の遺構である。検出した長さ10m、幅5.6m、深さ50cmで、内部は付近の山を削って得たと思われる、白茶色ブロックの混じる灰色の粘土で埋められていた。東側の岸部はオーバーハングしている所もあるため、激しい流水によって浸食された後に埋め立てられたものと考えられる。この水路が恒常的に機能していたものか、あるいは自然災害によって生じた流水痕跡かどうかは検出された状況だけでは判断できなかった。また、埋め立てられた土の中からは、それほど摩滅していない埴輪片も出土していることから、土取りの際に、付近に所在した古墳の墳丘が削られているものと考えられる。この遺構からは、円筒埴輪、須恵器、土師器が出土した。第89図の16、17は円筒埴輪である。タガの断面は台形を呈し、内外面とも斜め方向のハケ調整がなされる。胎土は土師質で、表面に黒斑は見られない。18は底部を糸切する須恵器坏身で、底部外面に「堤」と墨書される。19は口径15cmの坏身で焼成は甘く、土師質に近い。底部は糸切後未調整のままである。20、21は須恵器坏身の、口縁部小片。22、23は返りを持つ須恵器坏蓋である。24は甕口縁部片で、全体に緑色の自然釉が掛かる。25、26、27は土師器坏身で、27は底部をヘラケズリした後にナデ調整する。28は土師器甕口縁部片で、大きく外反する口縁の端部を上方へ屈曲させる。

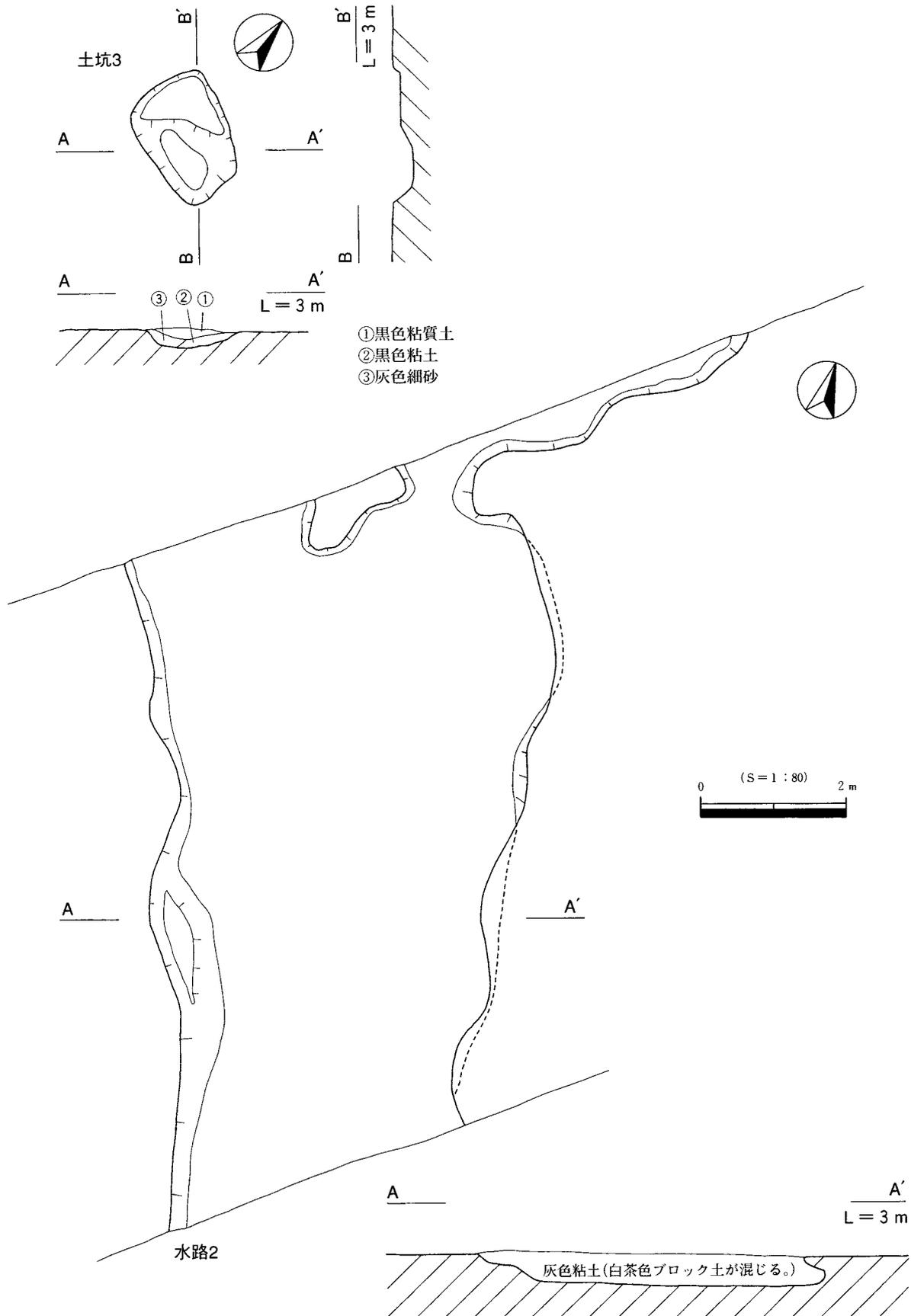


第87図 水路1の遺構図

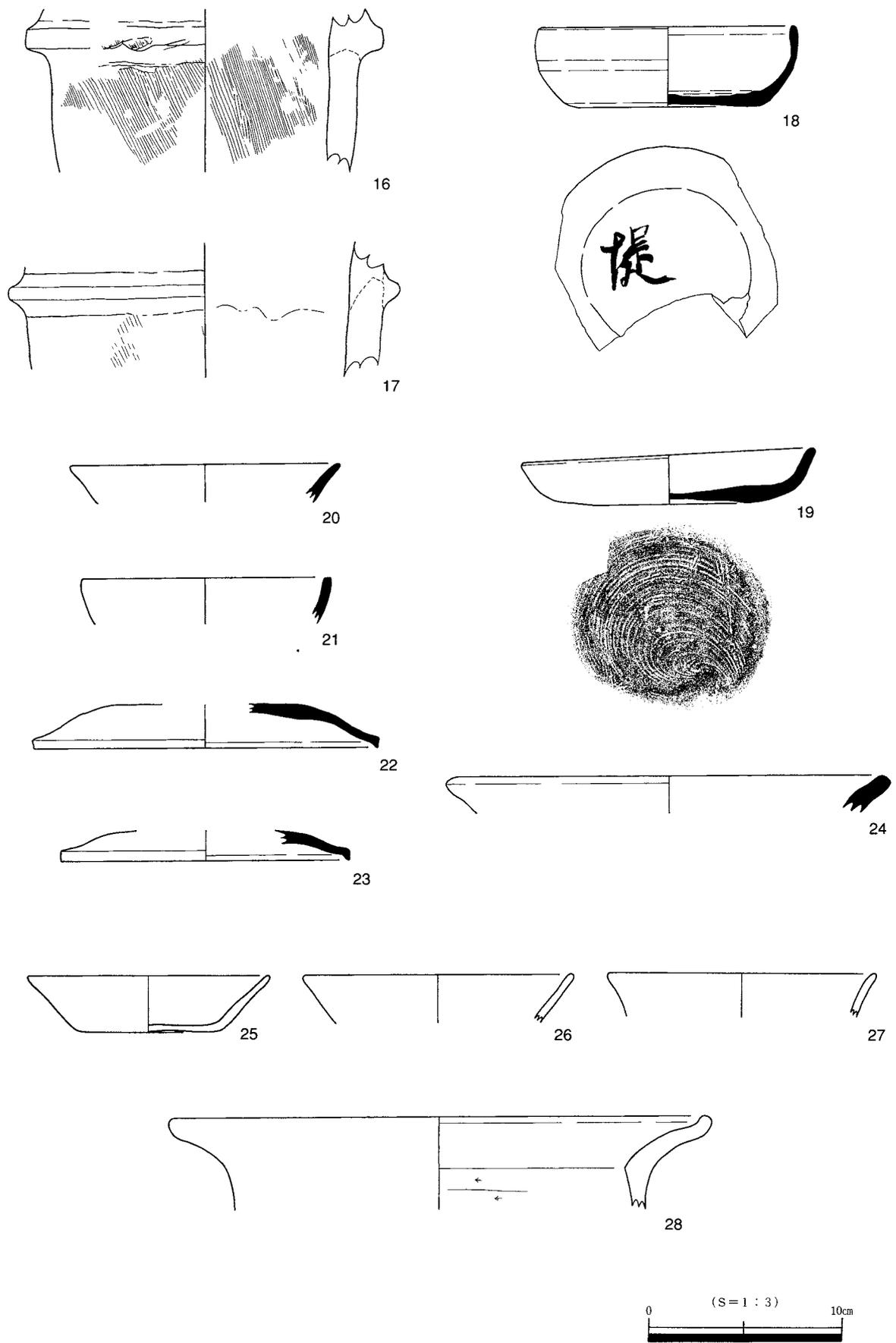
水路3（第90図） 3区において検出された水路である。検出長9m、幅4m、深さ80cmで、岸面は人頭大の石と杭で補強されていた。出土遺物は、陶器、磁器、ガラス製品である。G1は「MITSUYA SAUCE」銘と三本の矢を配したトレードマークが陽刻されている。栓は王冠式を採用しており、明治40年代以降の製品と考えられる。G2は、気泡を多く含む薄緑色のガラスを用いた容器で、団子状に膨れた形状がユニークである。ニッキ水などの飲料水を入れていたのであろうか。栓の部分は欠損している。29は磁器の碗で、表面は淡灰色を呈し、呉須の発色は悪い。30は磁器の徳利で、赤、緑、金色を用いて植物の文様を描く。胎土は光沢があり、瀬戸産の可能性が考えられる。31は土瓶蓋。32は甕の口縁で、全体に赤褐色の釉が掛かる。胎土は灰色を呈し、緻密である。この水路の埋没時期は、出土遺物から明治時代以降の時期が想定できる。またこの水路は、米子市史（註1）に掲載されている明治時代の水路と同一の可能性があり、地籍図などとの照合をする際のポイントとして重要な遺構となる。

第9節 遺構に伴わない遺物（第91図）

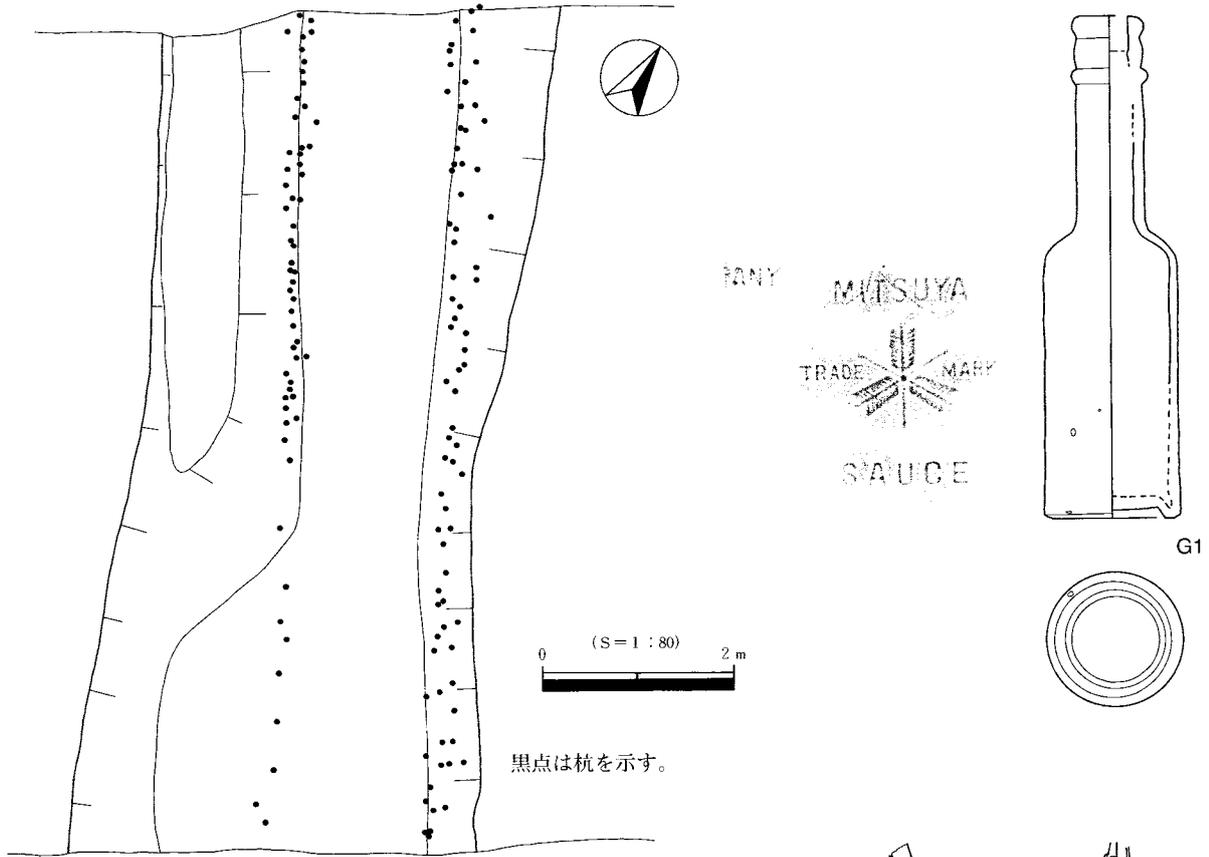
第91図41～44、B1は、全て調査区の周囲に巡らした排水溝の掘削中に出土した遺物である。41は土師器坏身片。42は須恵器坏蓋で。43は宝珠摘みを持つ坏蓋である。出土地点から、本来は水路2に伴っていた遺物と考えられる。B1は銅銭である。半分欠損しているが、北宋の「皇宋通宝」（初鑄1038年）と見られる。



第88図 土坑1・水路2の遺構図

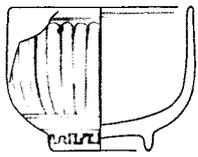


第89図 水路2出土遺物図



水路3

黒点は杭を示す。

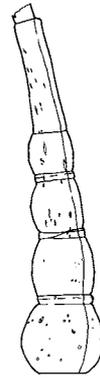


29

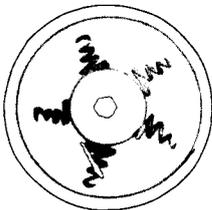
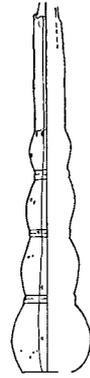


30

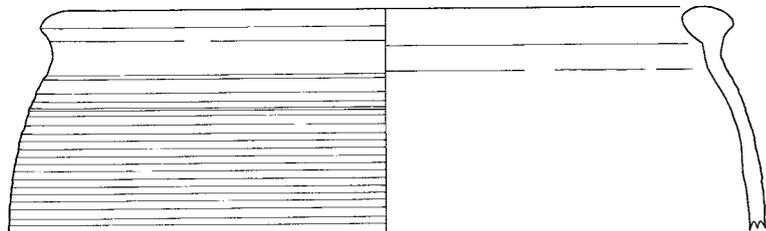
軒茶
袋



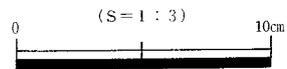
G2



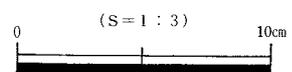
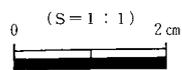
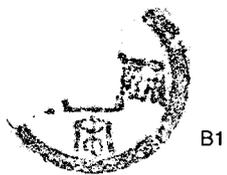
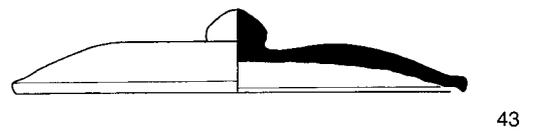
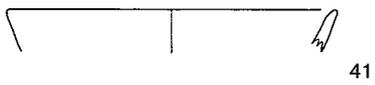
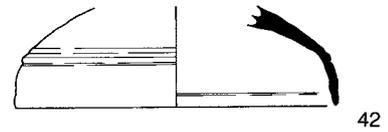
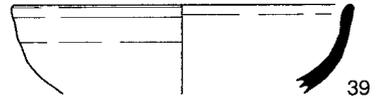
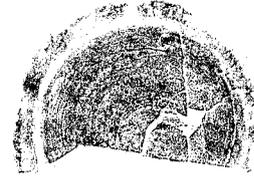
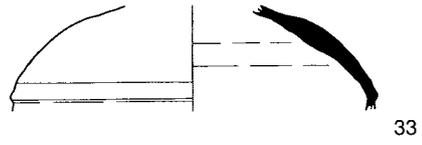
31



32



第90図 水路3 平面図・出土遺物図



第91図 遺構外出土遺物図

第10節 小結

第2工区の調査では、縄紋時代の海成層、古墳時代後期の水田畦畔、奈良時代から平安前期の不明遺構、近代の水路跡などを検出した。また遺物としては、2条突帯を持つ深鉢が出土したほか、墨書土器の出土が目を引く。

古墳時代後期の畦畔は、砂をカマボコ状に盛り上げて形成されている点が特徴的である。このように砂を用いて畦畔を作る例は、池ノ内遺跡の古墳時代後期の水田でも検出されており、地域的な特徴と考えられる。こうした砂盛りの畦畔は、検出の段階で認識できなければ、飛ばしてしまう可能性もあるため、今後の調査でも注意する必要があるだろう。

黒灰色粘土層（13層）から出土した突帯紋土器（9）は、口縁端部に接して断面三角形の突帯を貼り付けるもので、胴部の突帯を境に屈曲する。形態的な特徴から山陽、近畿地方の影響を窺わせるものである。突帯に刻目を施さない点は、在地的な要素として考えられるのだが、山陰地方ではこのような二条突帯を持つ土器は出土例が少なく、突帯紋土器の伝播経路などの問題について、新たな問題を投げかける資料となった。残念ながら共伴する土器がなく、年代的な位置付けを行うのは難しい状況であるが、隣接する第1工区では、同一層にて突帯紋土器と弥生前期土器が共伴して出土しており、弥生時代前期まで下るのではないだろうか。

水路2から出土した墨書土器（18）は、底部外面に「堤」と墨書されており、目久美遺跡第5次調査でも同様の資料が出土している。この「堤」という文字については、人名を示すという考えと、堤防などの構築物に関わるものという二通りの解釈がある。前者については、米子平野で活躍した古代豪族の詳細が伝わっていないという事情があるため断定できないが、後者の説ではこの地点にかつて猿ヶ土手という堤が存在したという伝承があり興味深い。この猿ヶ土手については、現在も一部が調査地点の東側に堤防状の高まりとして残っており、地形的な状況から判断して、池ノ内側への洪水を防ぐ堤防として造成された可能性が考えられる。こうした堤防の実例としては、米子市内では江戸時代に城下町への洪水を防ぐ目的で、勝田町に新土堤（註2）が作られたほか、法勝寺川左岸に構築された兼久土手などの治水事業が知られている。ところで、今回出土した墨書土器は、平安前期の段階にまで猿ヶ土手の起源が遡ることを示唆するものなのだろうか。今回の調査で流水跡として報告した水路2は、埋土中に埴輪片などが含まれており、近隣の山や古墳を削って埋めたと思われる状況を呈しているため、平安期にここで災害復旧を目的とした、大規模な土木工事が実施された可能性が考えられる。今回の調査では、堤の本体部分を発掘していないため、断定できないのだが、この地点において、人為による積極的な土木事業が行われていたことを示すものとして評価できよう。また隣国の出雲国風土記には、堤に関する記述が随所に見られることから、古代社会において堤が重要な施設として扱われていたことが推察される。今回出土した墨書土器は、断片的な資料でしかないが、古代米子平野の開発史を紐解くためにも、猿ヶ土手の実態解明を進めていく必要があるだろう。

（註1） 「新修米子市史」

（註2） 「新土堤調査報告」1990年 米子市教育委員会

目久美遺跡第10次調査（第2工区）出土土器・陶磁器観察表

反射復元による推定値は（ ）で示した。

番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)	特徴	胎土	色調
1	5R	14層	縄紋土器	深鉢	残存高3.3	口縁端部の装飾断片。風化著しい。	やや粗	暗黒褐色
2	1L	13-1層	弥生土器	蓋	口径 (25.5) 器高13.0	内面ハケ調整。外面ハケ、ミガキ調整。	密	茶褐色
3	6L	13-1層	弥生土器	底部	底部径 (8.0) 残存高2.4	内面風化。外面はナデ調整。	やや粗	灰褐色
4	1L	13-1層	弥生土器	底部	底部径 (7.2) 残存高3.4	内面ハケ調整。外面風化。	やや粗	暗褐色
5	1L	13-1層	縄紋土器	深鉢	口径 (19.0) 残存高8.4	突帯は、断面三角形で口縁直下を巡る。内外面ともケズリ調整。外面には煤が付着する。	やや粗	暗褐色
6	1L	13-1層	縄紋土器	深鉢	口径 (19.0) 残存高3.7	突帯は、断面三角形で口縁直下を巡る。内面はナデ調整。外面はやや風化している。	密	暗褐色
7	7R	13-1層	縄紋土器	深鉢	残存高4.8	突帯は、断面三角形で口縁直下を巡る。突帯には板状工具によるキザミが付けられる。内面風化。外面はケズリ調整か。外面には煤が付着する。	やや粗	灰茶色
8	5R	13-1層	縄紋土器	深鉢	残存高4.0	突帯は口縁から下がった位置に付けられる。外面はケズリ調整。胎土は石英粒を多く含む。	粗	茶褐色
9	8L	13-1層	縄紋土器	深鉢	口径 (30.6) 胴部径 (33.8) 残存高30.6	2条の突帯を持つ。胴部に最大径があり、頸部はくびれて、口縁が外反する。口縁の突帯はやや下がった位置に付き、キザミは施されない。全体にケズリによる調整が顕著である。外面は黒化しており、内面の底部付近には炭化物が付着している。	密	暗茶褐色
10	土坑1	埋土中	弥生土器	底部	底部径 (4.8) 残存高2.8	底部小片。外面は上下方向のミガキ調整が見られる。	密	暗褐色
11	7L	9-2層	弥生土器	甕	口径 (16.4) 残存高3.6	口縁端部は鋭く、上方へ伸びる。表面には砂粒が浮き上がり、摩滅している。	やや粗	淡黄褐色
12	5L	5層	土師器	甕	口径 (12.6) 残存高3.8	二重口縁を呈する甕。	密	赤褐色
13	4R	5層	弥生土器	高坏	口径 (23.8) 残存高2.1	「T」字状に肥厚する口縁に凹線紋と刺突が巡る。	密	灰茶色
14	4R	4層	須恵器	坏蓋	口径 (9.8) 残存高3.3	内外面ともナデ調整。	緻密	灰色
15	4R	4層	須恵器	坏蓋	口径 (11.8) 残存高2.3	口縁端部内面に段を持つ。	緻密	灰色
16	水路2	埋土中	埴輪	円筒	残存高8.6	内外面ともナメハケ調整。タガの断面は台形を呈する。	密	灰褐色
17	水路2	埋土中	埴輪	円筒	残存高7	内外面とも風化。タガの断面は緩い台形を呈する。	密	淡赤褐色
18	水路2	埋土中	須恵器	坏身	口径 (13.2) 底部径9.4	口縁端部は内湾気味に肥厚する。内面はナデ調整するが、粘度の継目が明瞭に残る。底部は糸切後未調整、「堤」の墨書が残る。	緻密	暗赤灰色
19	水路2	埋土中	須恵器	坏身	口径15 残存高2.9	内面ナデ調整。底部は糸切。焼成はやや不良。	密	灰褐色
20	水路2	埋土中	須恵器	坏身	口径 (13.8) 残存高2	口縁部の小破片。内外面ともナデ調整。	密	灰色
21	水路2	埋土中	須恵器	坏身	口径 (12.9) 残存高2.4	口縁部の小破片。内外面とも風化。	密	灰色
22	水路2	埋土中	須恵器	蓋	口径 (17.6) 残存高2.3	内外面ともナデ調整。端部は返りを持つ。胎土は白色の砂粒を多く含む。	密	暗灰色
23	水路2	埋土中	須恵器	坏蓋	口径 (15) 残存高2.1	内外面ともナデ調整。端部は返りを持つ。胎土は白色の砂粒を多く含む。	密	淡灰色
24	水路2	埋土中	須恵器	甕	口径 (22) 残存高2	甕の口縁小破片。全体に緑色の自然釉が掛かる。	緻密	灰色
25	水路2	埋土中	土師器	坏身	口径 (12.4) 底部径 (7.8) 器高3	内外面ともナデ調整。底部はヘラ切後ナデか。	密	淡灰褐色
26	水路2	埋土中	土師器	坏身	口径 (13.6) 残存高2.5	内外面ともナデ調整。	密	淡灰褐色
27	水路2	埋土中	土師器	坏身	口径 (13.6) 残存高2.3	内外面ともナデ調整。	密	淡灰褐色
28	水路2	埋土中	土師器	甕	口径 (27.4) 残存高4.9	口縁は大きく外反し、端部は上方へ立ち上がる。頸部内面はケズリ調整。外面には煤付着。	やや粗	淡灰褐色
29	水路3	埋土中	磁器	碗	口径 (7.0) 器高5.7 底部径3.8	小ぶりな湯呑茶碗。胎土は砂っぽく、生地はくすんだ灰色を呈する。	密	灰色
30	水路3	埋土中	磁器	德利	底部径5.8 残存高9.5	赤、緑、金で花を描く。底部に文字あり。	光沢有	白色
31	水路3	埋土中	陶器	蓋	口径 (6.0) 残存高2.3	生地は赤褐色で、白灰色の釉を掛け、紋様を描く。	緻密	灰色
32	水路3	埋土中	陶器	蓋	口径 (26.0) 残存高8.9	口縁は「T」字に肥厚し、肩部に沈線が巡る。在地産か。	緻密	暗赤褐色

番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)	特徴	胎土	色調
33	4L	第1遺構面	須恵器	坏蓋	残存高4.0	内外面ともナデ調整。天井部ヘラケズリ。	緻密	暗灰色
34	4L・4R	第1遺構面	須恵器	坏身	口径 (12.9) 器高3.7 底部径8.0	内外面ともナデ調整。天井部回転ヘラケズリ。	緻密	灰色
35	5L	第1遺構面	須恵器	坏身	底部径7.4 残存高2.0	内面ナデ調整。底部糸切。焼成不良。	密	淡赤褐色
36	5L	第1遺構面	須恵器	坏身	底部径 (7.2) 残存高1.3	内外面とも風化。	やや粗	淡灰色
37	4L	第1遺構面	須恵器	坏身	底部径9.7 残存高1.8	内外面ともナデ調整。	緻密	淡茶灰色
38	6R	第1遺構面	須恵器	坏身	底部径 (8.2) 残存高1.7	内面ナデ調整。底部糸切。	緻密	灰色
39	8R	第1遺構面	須恵器	坏身	口径 (13.2) 残存高3.5	内外面ともナデ調整。外面に重ね焼きの痕跡が残る。	緻密	暗灰色
40	6R	第1遺構面	土師器	坏身	口径 (12.4) 残存高2.6	内外面ともナデ調整。	密	淡茶褐色
41		排水溝	土師器	坏身	口径 (12.8) 残存高1.7	内外面とも風化。	粗	赤褐色
42		排水溝	須恵器	坏蓋	口径 (12.4) 残存高4.0	内外面ともナデ調整。外面は2条の沈線が巡る。	密	暗灰色
43		排水溝	須恵器	坏蓋	口径17.5 残存高3.3	宝珠つまみを持つ。内外面ともナデ調整。	緻密	灰色
44		排水溝	須恵器	坏蓋	口径 (17.6) 残存高1.4	内外面とも風化。	密	暗灰色

目久美遺跡第10次調査第2工区 出土木製品観察表

遺物番号	出土地点	層位	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	残存厚 (cm)	特徴
W 1	8L	13-1層	不明	56	24	2	楕円形の板材に11個の穴を開ける。半分欠損。
W 2	8L	13-1層	不明	52.6	10.8	1.9	長方形の板材に6個の穴を開ける。大半欠損。
W 3	8R	13-1層	不明	23.6	9.5	2.7	湾曲する板に穴を開ける。
W 4	4L	13-1層	不明	25.4	9	1.3	長方形の板材に4個の穴を開ける。
W 5	6L	13-1層	不明	55.6	8	1.6	長方形の板材。
W 6	8L	13-1層	不明	21.7	9.3	1.8	長方形の板材。
W 7	6L	13-1層	杭	122.4	6	4.5	棒の先端をケズリ、尖らせる。焼痕あり。
W 8	6R	13-1層	杭	75.4	10.2	7	棒の先端をケズリ、尖らせる。焼痕あり。

第6章 特論

第1節 目久美遺跡第8～10次調査における古環境解析

はじめに

目久美遺跡は鳥取県西部米子市目久美町地内に立地する遺跡であり、1933年に発見されて以降、発掘調査が続けられている。特に1982年以降、米子市教育委員会、財団法人米子教育文化事業団により、河川改修工事、道路改良工事などに伴う発掘調査が数年置きに実施されており、2002年度で10次調査に至っている。また、米子市教育委員会、財団法人米子教育文化事業団による10次に渡る調査の内、1次調査（大西，1985）、6次調査（中村ほか，1998）において花粉分析を中心とした古環境解析が実施・報告されている。その後、6次調査の結果が修正再検討され、1次調査および、大西ほか（1990）との対比がなされた（図2～5，渡辺：投稿中）。

本報では、道路改良工事に伴い2000～2002年度にかけて実施された8～10次調査において実施された古環境解析調査（花粉分析・CHNS化学分析・珪藻分析・ ^{14}C 年代測定）について報告する。

試料について

第3図（8頁）に示す各地点において、試料を採取した。各地点の層相・試料採取層準・出土遺物からの推定堆積年代を、第96図以降の各種ダイアグラム左側に模式柱状図として示している（柱状図凡例は第100図に示す）。ただし、 ^{14}C 年代測定試料採取層準には、直接測定年代値（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值、誤差 1σ ）を示してある。

各種分析方法

花粉分析処理は渡辺（1995）、CHNS化学分析は三瓶ほか（1999）、珪藻分析方法は鹿島（1985）の過酸化水素水処理法に従い実施した。 ^{14}C 年代測定は株式会社パレオ・ラボ、Beta Analytic Inc.に委託し、AMSおよび β 線計数法を用いて測定している。花粉分析・珪藻分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じて600倍あるいは1000倍を用いて行っている。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・孢子化石の同定も行っている。またイネ科花粉を中村（1974）に基づき、イネを含むイネ科（40ミクロン以上）と、栽培種を含む可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分した。ただし、多くの試料で花粉化石の含有量が少なく、木本花粉を200個体検出することができなかった。珪藻分析では原則的に、検出総数が200個体以上になるまで同定を行っている。

各種分析結果

第96～113図に示す各種ダイアグラム、および表1に分析結果を示す。

第96～101図の花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。検出量の少ない試料については出現した種類を*で示している。ただし、検出量が少なくとも上下のデータ間で整合性が認められる場合には、出現率をスペクトルで示している。また、花粉ダイアグラム右側に「針葉樹花粉」、「広葉樹花粉」、「草本花粉」に「孢子」を加えた総合ダイアグラムを示している。総合ダイアグラムでは、計数値の合計を基数にそれぞれの百分率を算出し、累積百分率で示してある。

第102～107図の化学分析ダイアグラムでは、各測定要因毎の%、およびそれぞれの比を折れ線で示している。

第108図、第110図、第112図の珪藻ダイアグラムでは検出総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、白抜きスペクトルで示している。検出量の少ない試料については出現した種類を*で示している。

第109図、第111図、第113図の珪藻総合ダイアグラムで表した5つのグラフの内、左端の「生息域別グラフ」

では同定した全ての種類を対象にそれぞれの要因（生息域）毎に百分率で表した。そのほかの4つのグラフでは、淡水種についてそれぞれの要因毎に百分率を算出し、累積百分率で示してある。

花粉分帯

花粉組成の特徴から以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。また、大西ほか（1990）との対比結果も示している。

(1) (M8, 9, 10-) VI帯（カシ・シイ帯カシ亜帯）：10次東壁試料No.17、16

アカガシ亜属が卓越し、コナラ属、ムクノキ属—エノキ属を伴う。マツ属（複維管束亜属）、クマアシデ属—アサダ属、シイノキ属—マテバシイ属、ニレ属—ケヤキ属も他の種類に比べ高率を示す。草本花粉はほとんど出現しない。

アカガシ属の卓越傾向、シイノキ属—マテバシイ属が上位のV帯で高率になることから、大西ほか（1990）のカシ・シイ帯カシ亜帯に対応する。

また、今回同層準から得られた¹⁴C年代は5940±50yrBPであり、従来6150±60yrBPの値が得られている。

(2) (M8, 9, 10-) V帯（カシ・シイ帯シイ亜帯）：8次No.2地点試料No.3、8次No.3地点試料No.8、6、10次東壁試料No.14、12

8次調査ではシイノキ属—マテバシイ属が卓越し、アカガシ属を伴う。一方、1、10次調査ではアカガシ属が卓越するものの、シイノキ属—マテバシイ属は上下の層準に比べ高率を示す。

シイノキ属—マテバシイ属が高率を示すことから、大西ほか（1990）のカシ・シイ帯シイ亜帯に対応する。

また従来、4510±180yrB、P4050±50yrBPの¹⁴C年代値が得られている（中村ほか、1998）。

(3) (M8, 9, 10-) IV帯（カシ・シイ帯マキ亜帯）：8次No.3地点試料No.4～2、10次東壁試料No.10～6

アカガシ亜属が卓越する。シイノキ属—マテバシイ属は減少し、マツ属（複維管束亜属）やスギ属、ブナ属が上下の花粉帯に比べ微増する。

マキ属花粉の出現率が宍道湖地域に比べ低い傾向にあり、中間温帯、あるいは冷温帯に生育する種が増加する傾向にある。しかし、カシ・シイ帯マキ亜帯に相当する時期であることから、大西ほか（1990）のカシ・シイ帯マキ亜帯に相当すると考えられる。

(4) (M8, 9, 10-) III帯（カシ・シイ帯マキ亜帯）：8次No.2地点試料No.5～13、9次試料No.2—2、1、10次東壁試料No.15、14

アカガシ亜属が卓越し、コナラ亜属を伴う。下位のIV帯に比べブナ属は低率となる。クルミ属—サワグルミ属、ハンノキ属、ムクノキ属—エノキ属、ニレ属—ケヤキ属がやや高率を示すようになる。

IV帯同様にマキ属花粉の出現率が宍道湖地域に比べ低い傾向にあるが、スギ属が増加傾向を示さないこと、カシ・シイ帯マキ亜帯に相当する時期であることから、大西ほか（1990）のカシ・シイ帯マキ亜帯に相当すると考えられる。

また、今回同層準得られた¹⁴C年代は2920±40yrBP、3045±40yrBP、3280±50yrBPであり、従来2890±110yrBPの値がマキ亜帯で得られている（中村ほか、1998）。

(5) (M8, 9, 10-) II帯（イネ科帯スギ亜帯）：8次No.1地点試料No.4、3、9次試料No.1—11～6、10次北壁試料No.13～9

アカガシ亜属が卓越するものの、スギ属が増加傾向を示す。

スギ属が増加傾向を示し始めることか、大西ほか（1990）のイネ科帯スギ亜帯に対応する。

詳細に検討すると、さらに共通した花粉組成変遷が認められることから、c～a亜帯に細分した。

① c亜帯：8次No.1地点試料No.4、9次試料No.1—11～9、10次北壁試料No.13

スギ属に加え、マツ属（複維管束亜属）も増加傾向を示す。

- ② b 亜帯：8次No.1 地点試料No.3、9次試料No.1-8、7、10次北壁試料No.12、11

スギ属は引き続き増加傾向を示し、マツ属（複雑管束亜属）は小ピークを成し減少傾向に転ずる。

- ③ a 亜帯：9次試料No.1-6、10次北壁試料No.9

スギ属の増加傾向が鈍くなり、マツ属（複雑管束亜属）は減少する。

- (6) (M8, 9, 10-) I 帯（イネ科帯スギ亜帯）：8次No.1 地点試料No.1、9次試料No.1-5~1、10次北壁試料No.7~1

スギ属が卓越傾向にあり、アカガシ属を伴う。

スギ属が卓越傾向にあることから、大西ほか（1990）のイネ科帯スギ亜帯に対応する。

これらのうち9次調査では、有意と考えられる微細な花粉組成変遷が認められた。このことから、c~a 亜帯に細分した。ただし、他の各地点との対応は付いていない。以下に各花粉亜帯の特徴を示す。

- ① c 亜帯：9次試料No.1-5~3

スギ属がII帯から引き続き増加傾向を示す。草本花粉の割合が高くなり、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

- ② b 亜帯：9次試料No.1-2

スギ属が微減するほか、イネ科（40ミクロン以上）が減少する。

- ③ a 亜帯：9次試料No.1-1

スギ属が引き続き微減するのに対し、アカガシ亜属は微増する。草本花粉の割合は低下し、イネ科（40ミクロン以上）はさらに減少する。

珪藻分帯

- (1) D-VI帯：8次No.3 地点試料No.8~4、8次No.2 地点試料No.2、3

珪藻殻の保存状態は非常に悪いが、若干量の珪藻遺骸殻が観察された。優占種は海生種の *Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunow である。本層準には生痕が多く見られることから、生物活動による物理的な珪藻殻の破壊が行われたと考えられる。顕著な生痕と海生珪藻の産出から、海水域で堆積したものと推定される。

珪藻化石の含有量が少ないことの原因の一つとして、当時の水理環境の悪さが考えられる。一般に、珪藻類は水分の存在するあらゆる環境に適応して分布しているが、湿地周辺であっても完全に離水した環境では群落を形成しない場合が多い (Nelson and Kashima, 1993; Hemphill-Haley, 1995)。また堆積物の乾燥による珪藻殻の溶解も、海成層中の珪藻化石が消失する原因としてあげられる。多量の塩類 (NaCl, Na₂CO₃ など) を含んだ堆積物の乾燥化が進んだ場合、そこに含まれる珪藻遺骸殻の周辺にミネラルが濃集し、珪藻殻の化学的な溶解を促進させるのである (Fritz et al., 1999)。これらの原因に加え今回の場合、試料採取を行った層準に多くの植物根が見られた。これは、珪藻遺骸殻が堆積した後に生物擾乱作用を受けたことを示しており、これによって酸化が促進されて殻が溶解した可能性もある。また、堆積後の圧密作用によって物理的に破碎が進む場合もあり (Beyens and Denys, 1982)、詳しい原因については詳細な検討が必要である。

- (2) D-V帯：8次No.3 地点試料No.3、2、8次No.2 地点試料No.5、6

海生種の *Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunow が優占種として観察された。一方、これらの珪藻殻の保存状態は非常に悪く、堆積当時は海水の影響を強く受けていたことが推定される。しかし、前述のように続成作用によって珪藻殻が消失した可能性がある。本層準に見られる植物根は、生物擾乱作用による珪藻殻の物理的破壊および酸化促進が起きたことを示唆している。

- (3) D-IV帯：8次No.2 地点試料No.8

下位の層準と同様に珪藻殻の保存状態が悪く、観察される珪藻種は海生のものが多い。優占種は海草類に付着して生活する *Cocconeis scutellum* Ehrenberg、海生種の *Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunow であり、調査地域付近は海水の影響を強く受け、海藻・海草類が繁茂する環境であったと推定される。

(4) D-Ⅲ帯：8次No.2地点試料No.11、13、8次No.1地点試料No.4

D-Ⅳ帯と同様に、海藻・海草類に付着して生活する *Cocconeis scutellum* Ehrenberg, 海生種の *Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunow が優占する。さらに、海～汽水浮遊生の *Paralia sulcata* (Ehr.) Cleve、汽水生の *Pinnularia elegantoides* (Hustedt) Krammer が随伴する。以上の産出状態から、調査地域付近は海水の影響を強く受け、海藻・海草が繁茂する環境であったと推定される。また、浮遊生珪藻である *Paralia sulcata* (Ehr.) Cleve も多産することから、D-Ⅳ帯よりも海水の影響を強く受けていたと推定される。

(5) D-Ⅱ帯：8次No.1地点試料No.3

本層準の上位で優占した珪藻種 *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia acrosphenia* が引き続き多産する。またこれに随伴して汽水生珪藻 *Pinnularia elegans*、*Pinnularia elegantoides*、海生珪藻 *Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunow が産出する。本試料中の珪藻化石群集は、淡水種、汽水種、海生種が混在しており、淡水、海水の影響を同時に受ける沿岸環境であった可能性がある。

(6) D-Ⅰ帯：8次No.1地点試料No.1

淡水域に生息する珪藻類が多く産出する。中でも乾燥環境に耐性を持つ *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia acrosphenia*、*Pinnularia hemiptera* などが特徴的に産出することから、当時の環境はある程度乾燥した淡水環境（湿地？）であったと考えられる。また、本試料中の珪藻遺骸殻は保存状態が非常に悪く、擾乱作用を強く受けている可能性もある。

古環境変遷

花粉帯毎に、遺跡周辺の高植生を中心とした古環境を推定する。

(1) VI帯（カシ・シイ帯カシ亜帯）期：縄紋時代前期

①堆積環境

化学分析でTSが2%を超え、海成層であることが解る。同層準からはハイガイ (*Tegillarca granosa*)、サルボウ (*Scapharca subcrenata*)、ヒメシラトリガイ (*Macoma incongrua*) などの貝化石も多数検出される。日野川、加茂川の砂州もまだ発達せず、調査地点付近は美保湾の一部で、奥に広がる入り江の入り口付近であったと考えられる。

②周辺の植生

照葉樹林要素のアカガシ亜属花粉やシイノキ属-マテバシイ属花粉が卓越することから、遺跡近辺の丘陵には、カシ類やシイ類を主とする照葉樹林が広がっていたと考えられる。またシイ属-マテバシイ属花粉は、6次および8次調査の際により高率を示しており、今回はさほど高率を示さなかった。このことから、8次調査地点付近（目久美神社）の立地する丘や、今は削平されている対面の凸地を中心に成育していたと予想される。

またアカガシ亜属花粉などの照葉樹林要素に付随して、マツ属（複維管束亜属）花粉、クマシデ属-アサダ属花粉、コナラ亜属花粉、ムクノキ属-エノキ属花粉、ニレ属-ケヤキ属花粉などが検出されている。マツ属（複維管束亜属）、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属などはいわゆる「二次林要素」であり、入り江周囲の丘陵上で土壌の未発達な場所に林を形成していた可能性がある。また、照葉樹林に混在していた可能性も指摘できる。ムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属などは「河畔林」要素であり、加茂川流域や奥の入り江周辺あるいは流入する小河川沿いに林を形成していたと考えられる。

草本花粉の検出量は少ないが、花粉の検出されたガマ類やイネ科のアシなどが、岸辺に成育していたと考えられる。

(2) V帯（カシ・シイ帯シイ亜帯）期：縄紋時代前期から中期？

①堆積環境

化学分析でTSが5%を超え、8次調査の珪藻分析（D-VI帯）では海水種の*Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunowが卓越するなど、海成層であることが解る。また、同層準ではC/Nも低いことから、前時期に比べ海水準が上昇し、陸域から離れた可能性が指摘できる。

②周辺の植生

照葉樹林要素のアカガシ亜属花粉やシイノキ属-マテバシイ属花粉が卓越することから、遺跡近辺の丘陵には、カシ類やシイ類を主とする照葉樹林が広がっていたと考えられる。また前述のように、シイ属-マテバシイ属花粉は6次および8次調査の際により高率を示しており、目久美神社の立地する丘や、今は削平されている対面の凸地を中心に成育していたと予想され、VI帯期に比べ照葉樹林中でシイ類が多くなったと考えられる。シイ林は、垂直分布でカシ林の下位に位置し、より温暖になった可能性が指摘される。また湿潤環境を好むことから、雨量が増えたとも考えることも可能である。

(3) IV帯（カシ・シイ帯マキ亜帯）期：縄紋時代中期から後期？

①堆積環境

化学分析でTSが減少傾向を示すが3~5%を示すほか、8次調査の珪藻分析（D-V帯）では海水種の*Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunowが卓越するが、汽水種も認められるようになるなど、やや汽水域の影響を受ける海水域で堆積したことが解る。同層準では、C/N、C/Sともに増加傾向にあり、前の時期に比べ陸域に近づき、河川の影響を受けるようになっていったと考えられる。

②周辺の植生

シイノキ属-マテバシイ属花粉が減少することから、照葉樹林内でのシイの割合が減少したと考えられる。一方、マツ属（複維管束亜属）花粉やスギ属花粉、ブナ属花粉が下位のV帯に比べ微増する。これらの種類は、中間温帯林、冷温帯林として、垂直分布で照葉樹林の上位に位置することから、山地上部でこれらの森林が拡大（より低いところへ進出）したと考えられる。

したがってV帯からIV帯への変化は、冷涼化に伴った植生の変化である可能性が高い。

(4) III帯（カシ・シイ帯マキ亜帯）期：縄紋時代後期～晩期？

①堆積環境

化学分析ではTSが1%程度まで下がる。一方8次調査の珪藻分析（D-V~III帯）では海水種が減少傾向を示し、汽水種や淡水種も認められるようになるなど、海水域ではあるが、汽水、淡水の影響を徐々に強く受けるように変化したことがわかる。花粉分析結果では草本花粉の割合が低いものの、C/Nが高くなり堆積物も中~粗粒砂を主体とし粘土の薄層を狭在するなど、陸域からの流入量が増加していることが明らかである。このことから、（海水準が低下し）より陸域に近づいた可能性が指摘できる。一方で、降水量が増え細屑物の流入量が増えたとも考えることも可能である。

②周辺の植生

9、10次調査ではアカガシ亜属花粉、コナラ亜属花粉が引き続き高率を示し、8次調査以前ではシイノキ属-マテバシイ属がこれに加わる。IV帯で微増したマツ属（複維管束亜属）花粉やスギ属花粉、ブナ属花粉が低率となる。一方、クルミ属-サワグルミ属、ハンノキ属、ムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属がIV帯に比べ増加する。

III帯を構成する堆積物に注目すると、中~粗粒砂を主体とし粘土の薄層を狭在している。分析試料は、この中の粘土薄層から採取している。III帯で増加傾向を示す種類は主に河川沿いに生育する種類であり、奥の入り江への流入小河川、あるいは加茂川、日野川から調査地近辺への碎屑物の流入量が増えたために、河川周辺の植生に由来する花粉粒が増加したと考えられる。

8次調査の結果、シイノキ属-マテバシイ属花粉がIV帯から引き続き減少することが分かり、引き続き冷涼化

が認められる。照葉樹林内でのシイ類の割合がさらに低くなったと考えられる。

(5) II帯（イネ科花粉帯スギ亜帯）；縄紋時代晩期以降弥生時代中期

①堆積環境

8、9、10次調査共に最下部のTSがやや高く、8次調査の珪藻分析（D-I帯）では海水種の*Grammatophora oceanica* (Ehr.) Grunowが卓越するが、汽水種も認められるなど、汽水域の影響を受ける海水域で堆積したことが解る。最下部の堆積物は、下位のIII帯を構成する中～粗砂主体の層と上位の腐植質粘土層の漸移的な様相を示している。一方上位の腐植質粘土ではTSが低く、淡水域での堆積が推定される。しかし8次調査の珪藻分析（D-II帯）では汽水種や海水種も検出されるなど異なる様相を示す。下位層同様に生物などによる擾乱の可能性が示唆される。III帯期に比べ（相対的な）海水準が低下し、調査地点は河口域の湿地となった可能性が高い。また9、10次調査の花粉組成では、II帯期以降草本花粉の割合が高くなり、このことを支持する。

②周辺の植生

シイノキ属—マテバシイ属花粉は、9、10次調査ではIV帯期ですでに低率になり、8次調査でもIII帯期には低率になる。照葉樹林要素としてアカガシ亜属が卓越するのみであり、遺跡周辺での丘陵上の植生はIII帯期後半とほとんど同じであったと考えられる。一方、V帯からIV帯への変化と異なり温帯針葉樹の内スギ属のみが増加傾向を示す。また、ブナ属などの冷温帯要素も目立った増加傾向を示していない。今回と類似した現象が、那須ほか（1980）により大阪平野で記載（スギのみではなく、温帯針葉樹が全般に増加）されており、温帯針葉樹が湿润気候を特に好むことから多雨化に起因すると推定されていた。温帯針葉樹の中でも特にスギは湿润環境を好むことから、IV帯期以降続いた冷涼化傾向に多雨化を伴った結果であると考えられる。

c～a 亜帯で認められる花粉組成の微細な変化は、冷涼化に伴う中間温帯、冷温帯要素の増加（c 亜帯）、その後の多雨化の始まり（b 亜帯）、多雨化の進行（a 亜帯）と考えることができる。

また8、10次調査では明瞭ではないが、1次から8次調査ではこの時期にハンノキ属花粉の出現率が增加する。海退に伴い入り江奥から拡大した湿地に、ハンノキ林が広がっていたと考えられる。

前述のように草本花粉の出現率が高まり、特にガマ属、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、ヨモギ属が高率を示す。また、一部ではイネの可能性のあるイネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、水田雑草の可能性のあるオモダカ属なども検出される。このことから湿地内にはガマ類や、カヤツリグサ類、ヨシなどが、微高地にはヨモギなどが生育していたと考えられる。また湿地の一部が開墾され、水田化した可能性もある。

(6) I帯（イネ科花粉帯・スギ亜帯）；弥生時代中期以降

①堆積環境

化学分析を実施した全ての試料でTSが低く、8次調査の珪藻分析（D-I帯）では淡水種がほとんどを占め、淡水で堆積したことが明らかである。また化学分析でC/Nが高いこと、層相観察、珪藻分析で*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia acrosphenia*、*Pinnularia hemiptera*などの乾燥環境に耐性を持つ種類が特徴的に産出することなどから、湿地での堆積が推定される。このことは、花粉分析で草本花粉が多産することと調和的である。

②周辺の植生

スギ属花粉が高率を示し、アカガシ亜属花粉の出現率をうわまる地点もあるなど、スギが低地にまで広がったことが示唆される。現在のスギの分布域が標高数100m以上であることから考えると、年平均気温で数度は低かった可能性が指摘できる。

スギは、多雨地域では尾根筋に生育するほか、山地斜面のような地下水位が高くしかも耐水しないような場所に生育する。一方で冠水するような湿地では生育不可能である。II帯期まではカシ類を主要素としていた照葉樹林は、この時期にはスギを混淆するようになっており、現在屋久島などで見られるような森になっていたのではなかろうか？

また一方で、海退に伴い広がった平野部への進入も推定される。1、6、8次調査では、Ⅱ帯期後半からⅠ帯期前半にかけてハンノキ属花粉が高率を示す。前述のように海退によってできた湿地へハンノキ林が形成されたものと考えられる。1、6、8次調査でのⅠ帯（あるいは相当する花粉帯）では、ハンノキ属花粉と入れ替わるようにスギ属花粉が高率を示すようになる。さらなる海退に伴い湿地の乾燥化が起これハンノキ林が衰退する。そこにスギが、ハンノキに変わって福井県三方町の平野部で発見された埋没スギ林の様な様相で進入した可能性もある。

全ての調査地点で草本花粉の出現率が高くなり、特にイネ科（40ミクロン以上）花粉が高出現率を示すようになる。また、水田雑草の可能性のあるオモダカ属花粉やセリ科花粉、キカシグサ属花粉なども検出されている。さらに調査区によっては水田遺構が検出されている。このように、遺跡内の多くの場所が開墾された可能性がある。一方で、イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が比較的低く、イネ科（40ミクロン未満）花粉やカヤツリグサ科花粉、ガマ属花粉が高率になるなど、廃棄され再び湿地へ戻ったと考えられる時期もある。

まとめ

目久美遺跡8～10次調査において自然科学分析（花粉分析・化学分析・珪藻分析・¹⁴C年代測定）を行い、以下のことを考察した。

- (1) 花粉分析から、Ⅰ～Ⅵ帯の局地花粉帯を設定した。
 - (2) 珪藻分析から、D-Ⅰ～Ⅵの珪藻帯を設定した。
 - (3) 花粉分析結果をもとに、同時に行った化学分析、珪藻分析、¹⁴C年代測定から縄紋時代前期～弥生時代後期にかけての遺跡周辺の古環境を推定した。特筆すべき点は、以下の事柄である。
- ① 縄紋時代前期から弥生時代後期にいたる気候変化を推定し、縄紋時代前期から中期頃（Ⅴ帯期）が最も暖かい（あるいは雨量の多い）時期であると推定した。また、縄紋時代中期頃（Ⅳ帯期）以降気温が低下し、縄紋時代晩期頃（Ⅱ帯期）以降、降水量が増加したと考えた。
 - ② 縄紋時代前期には、遺跡周辺は美保湾奥の水域であった。
 - ③ 8次調査までに確認されていたシイノキ属—マテバシイ属、ハンノキ属の卓越傾向は、9、10次調査では認められなかった。シイ林、ハンノキ林は遺跡南西部を中心として分布していたことが明らかになった。
 - ④ 縄紋時代晩期以降の遺跡周辺の森林植生は、カシ類などの常緑広葉樹にスギを混淆する温帯針広混淆林であった可能性がある。また、平野部でスギが純林を成していた可能性もある。
 - ⑤ 縄紋時代晩期～弥生時代中期（Ⅱ帯期）以降、調査地近辺に水田が存在した可能性がある。

※引用文献

Beyens, L., Denys, L. 1982. Problems in diatom analysis of deposits: allochthonous valves and fragmentation. *Geologie en Mijnbouw* 61, 159-162.

Denys, L., 1999. A diatom and radiocarbon perspective of the palaeoenvironmental history and stratigraphy of Holocene deposits between Oostende and Nieuwpoort (western coastal plain, Belgium). *Geologica Belgica* 2, 111-140.

Fritz, S. C., Cumming, B. F., Gasse, F., and Laird, K. R., 1999. Diatoms as indicators of hydrologic and climatic change in saline lakes. In: Stoermer, E. F., Smol, J. P. (Eds.), *The Diatoms. Applications for the Environmental and Earth Sciences*. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 41-72

Hemphill-Haley, E., 1995. Intertidal diatoms from Willapa Bay, Washington: Application to studies of small-scale sea-level changes. *Northwest Science* 69, 29-45.

鹿島 薫（1985）銚子半島高上低地の完新世における珪藻群集の推移と古海水準変動。第四紀研究, 24, .125-138.

中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として。第四紀研究, 13, 187-197.

中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克己・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳（1996）島根県東部の

完新世環境変遷と低湿地遺跡. LAGUNA (汽水域研究), 3, 9-11.

那須孝悌・坂本清子 (1980) 花粉分析. 亀井・城山-寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ上築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書, 423-431, (財)大阪文化財センター.

Nelson, A. R., Kashima, K., 1993. Diatom zonation in southern Oregon tidal marshes relative to vascular plants, foraminifera, and sea level. *Journal of Coastal Research* 9, 673-698.

大西郁夫, 1985, 中海・宍道湖湖底およびその周辺地域の最上部完新統の花粉分析. 島大地質研報, 4, 115-126.

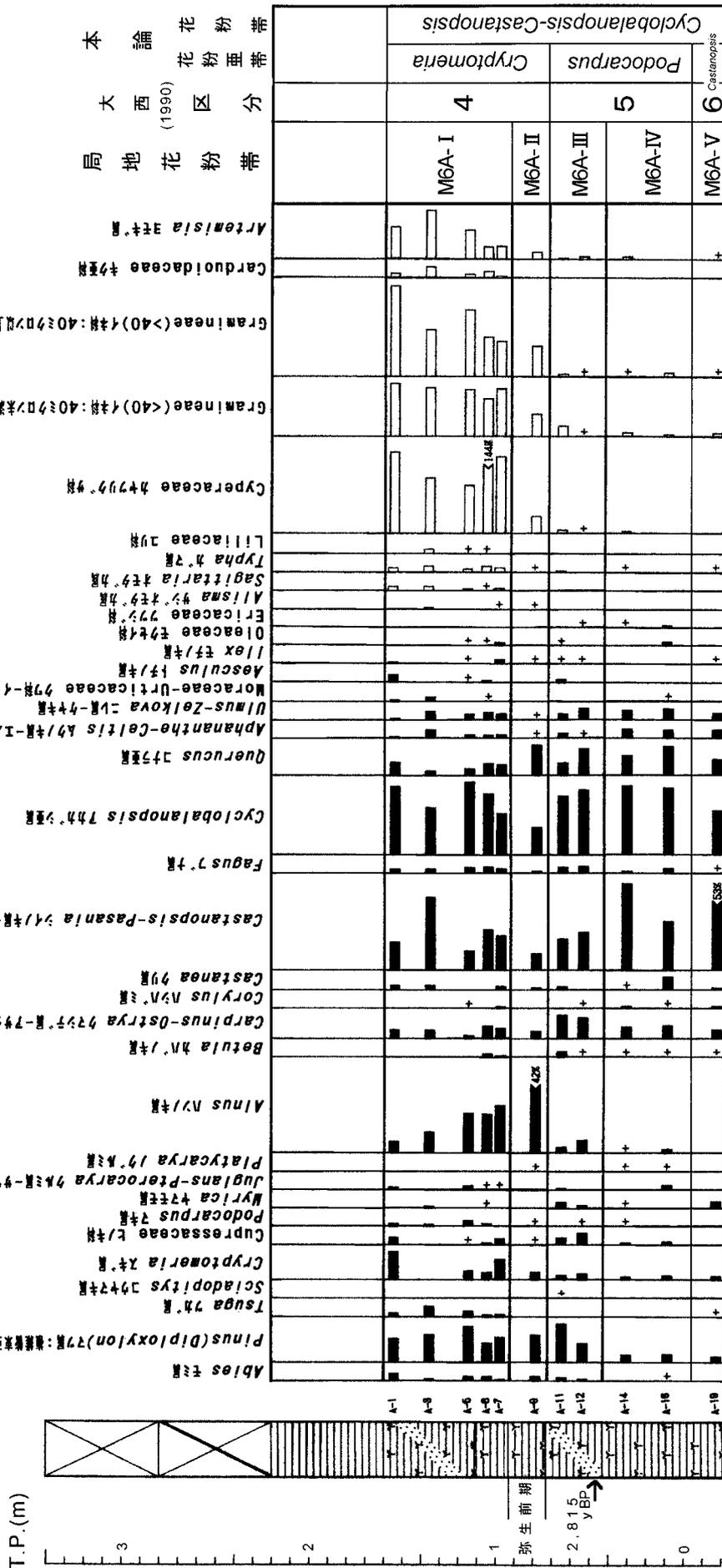
大西郁夫・干場英樹・中谷紀子 (1990) 宍道湖湖底下完新統の花粉群. 財団法人米子市教育文化事業団地質学研究報告, 9, 117-127.

三瓶良和・徳岡隆夫・藤森恒至・吉松康仁 (1999) 中海本庄工区の低質環境. LAGUNA汽水域研究, 6, 165-177.

徳岡隆夫・中村唯史・藤原真由美 (1998) 目久美遺跡の地質学的検討. 目久美遺跡V・VI-都市計画道路車尾目久美町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一, 財団法人米子市教育文化事業団文化財調査報告書, 25, 131-150.

渡辺正巳 (1995) 花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社

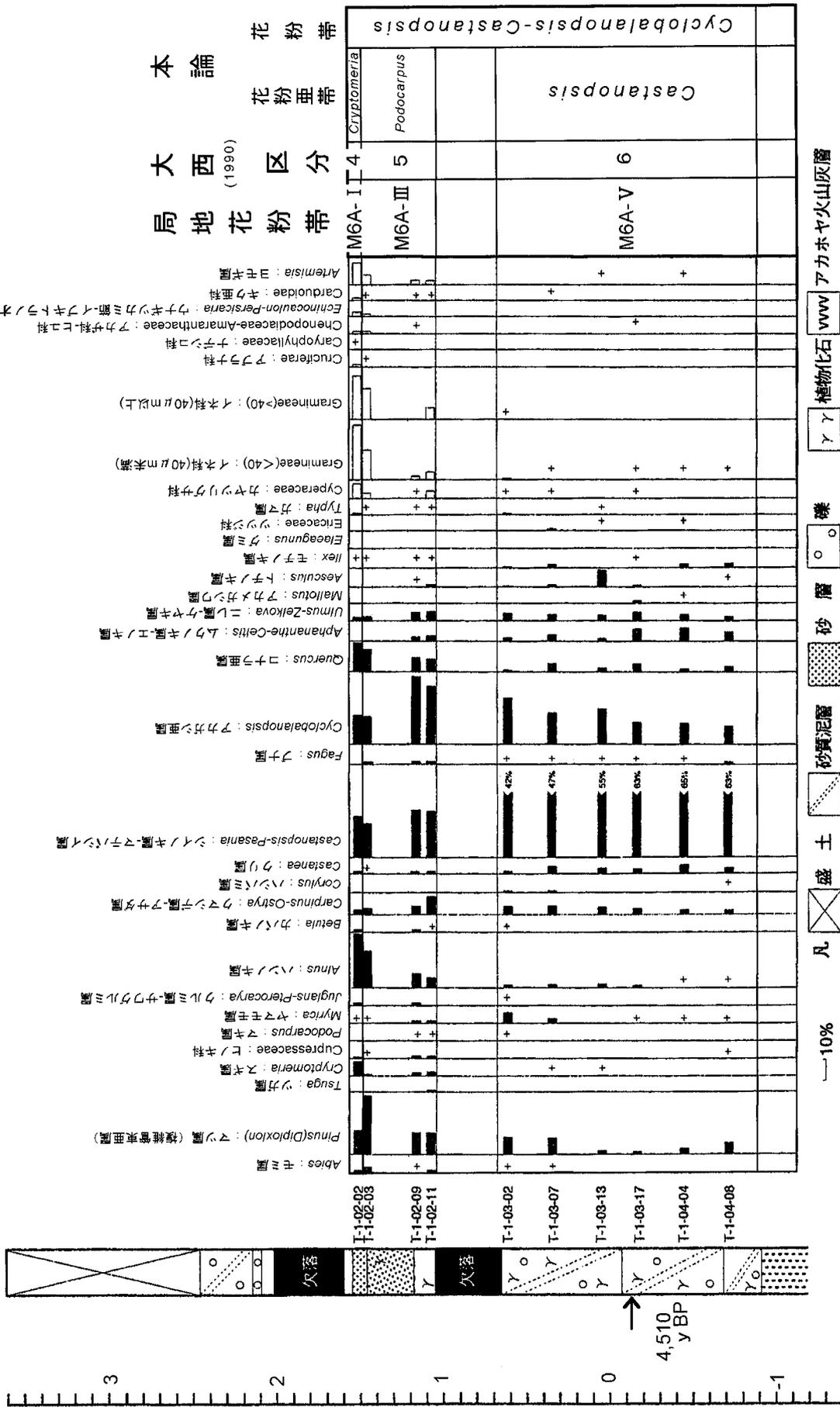
渡辺正巳 (投稿中) 山陰地域中央部における縄紋時代の花粉組成変遷—*Cyclobalanopsis*・*Castanopsis*帯の境界年代の再考と気候変化、野尻湖花粉層序との比較—, 野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告, 投稿中。



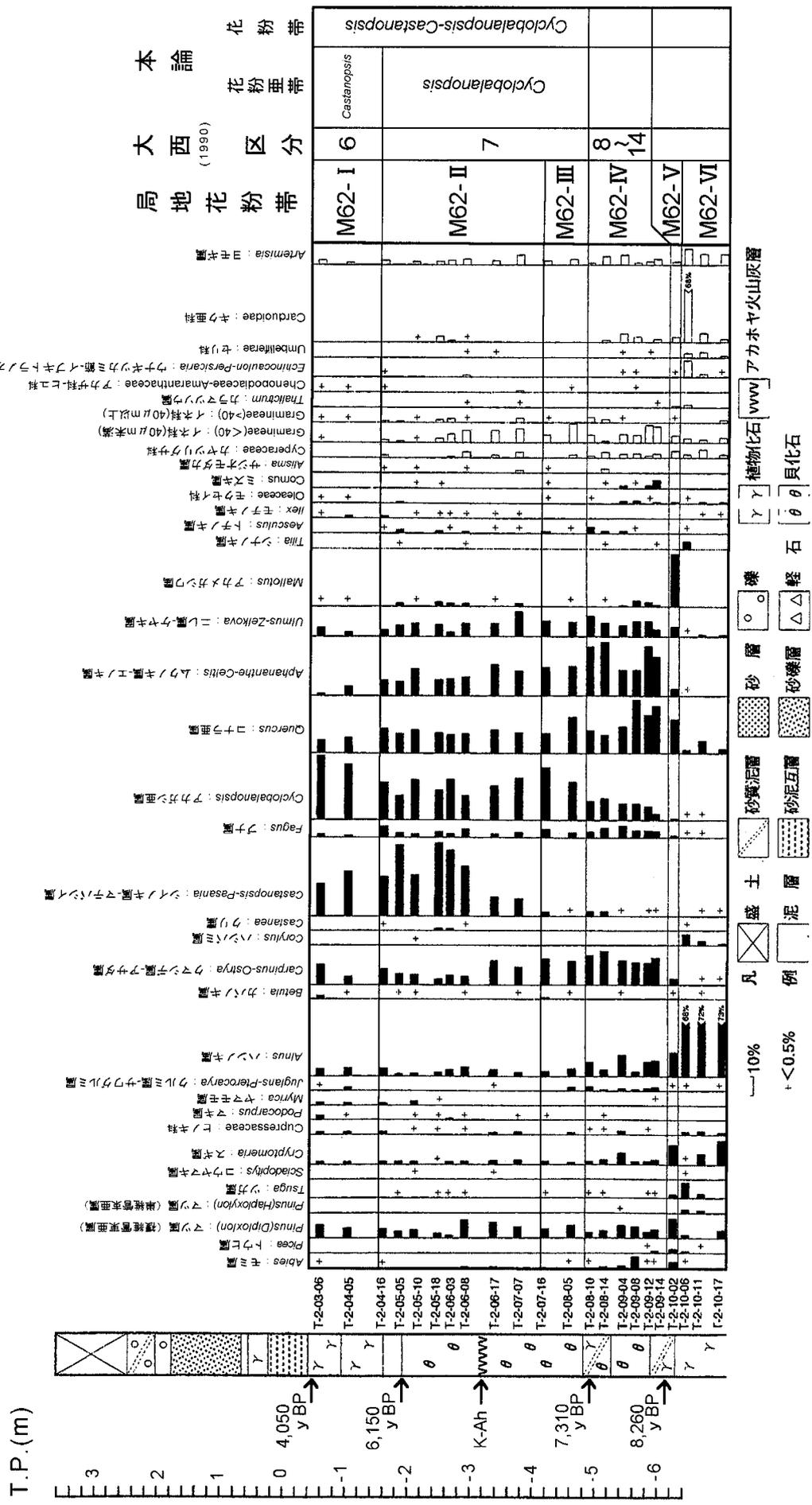
第93図 目久美遺跡6次調査Aトレンチの花粉ダイアグラム (渡辺, 投稿中)

— 10% + < 0.5%

T.P.(m)

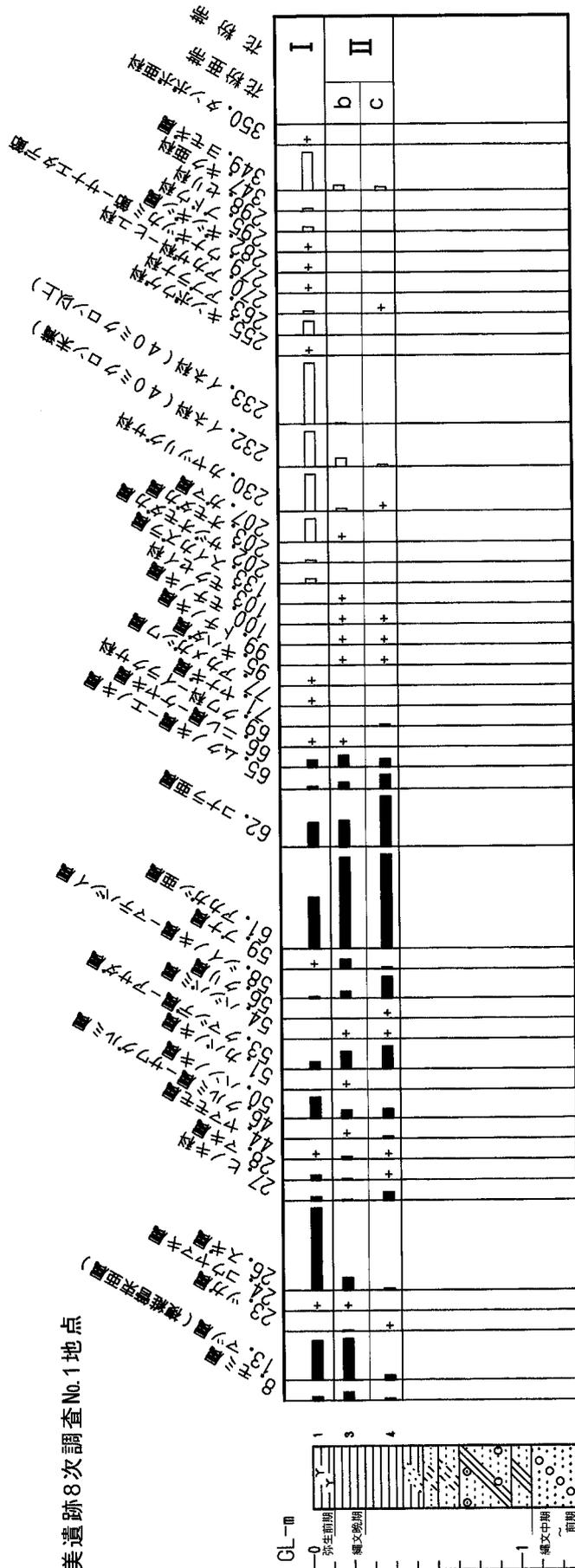


第94図 目久美遺跡6次調査No.1 ボーリングの花粉ダイアグラム (渡辺, 投稿中)



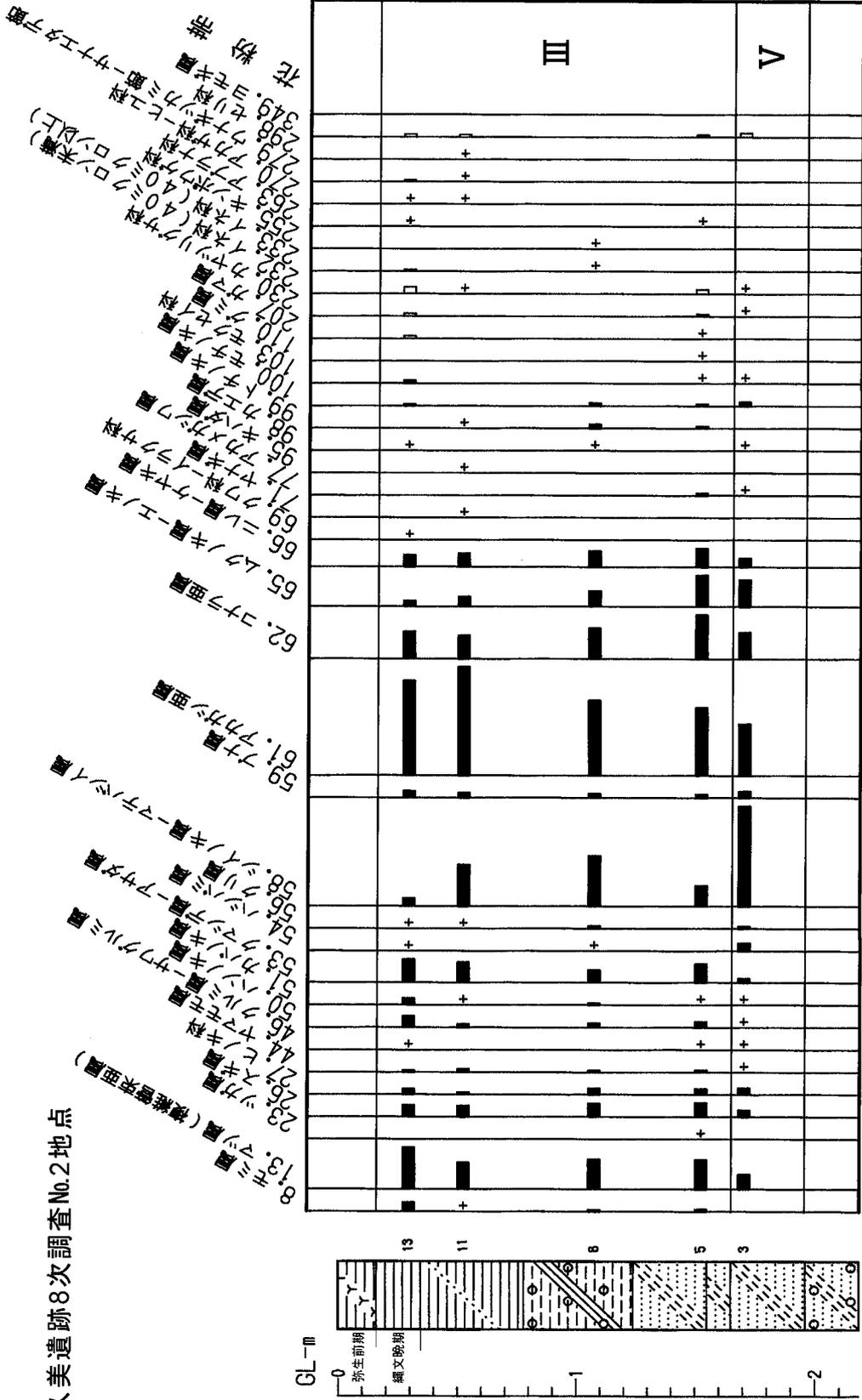
第95図 目久美遺跡6次調査No.2ボーリングの花粉ダイアグラム (渡辺, 投稿中)

目久美遺跡8次調査No.1地点



第96図 8次調査No.1地点の花粉ダイアグラム

日久美遺跡8次調査No.2地点

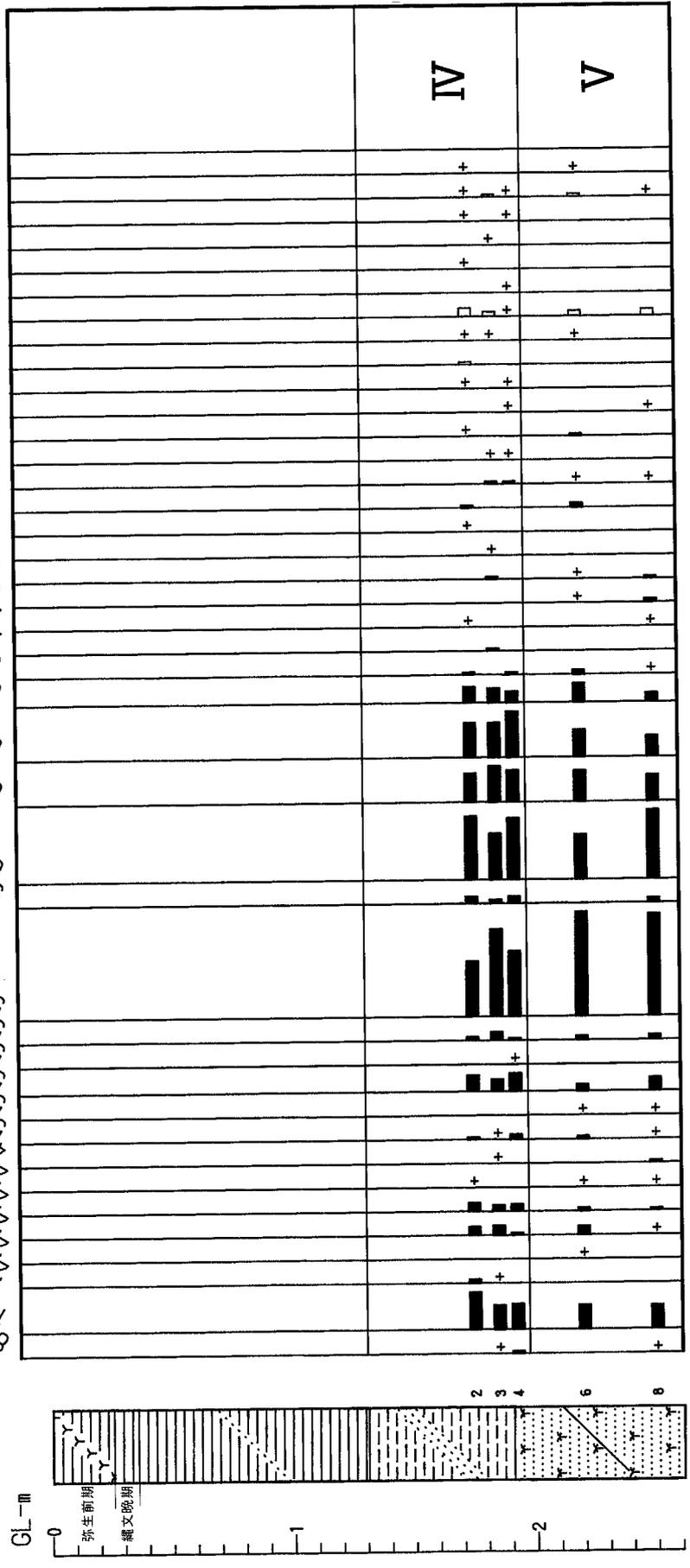


—10% + < 0.5%

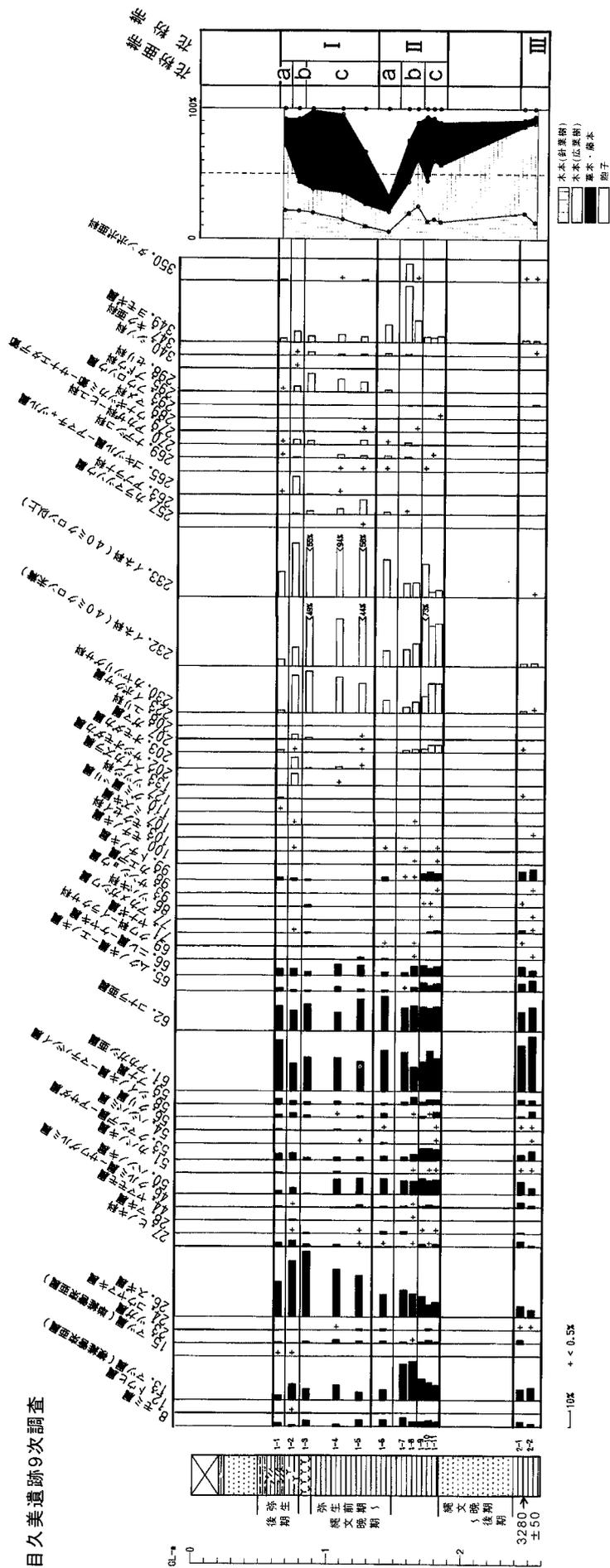
第97図 8次調査No.2地点の花粉ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.3地点

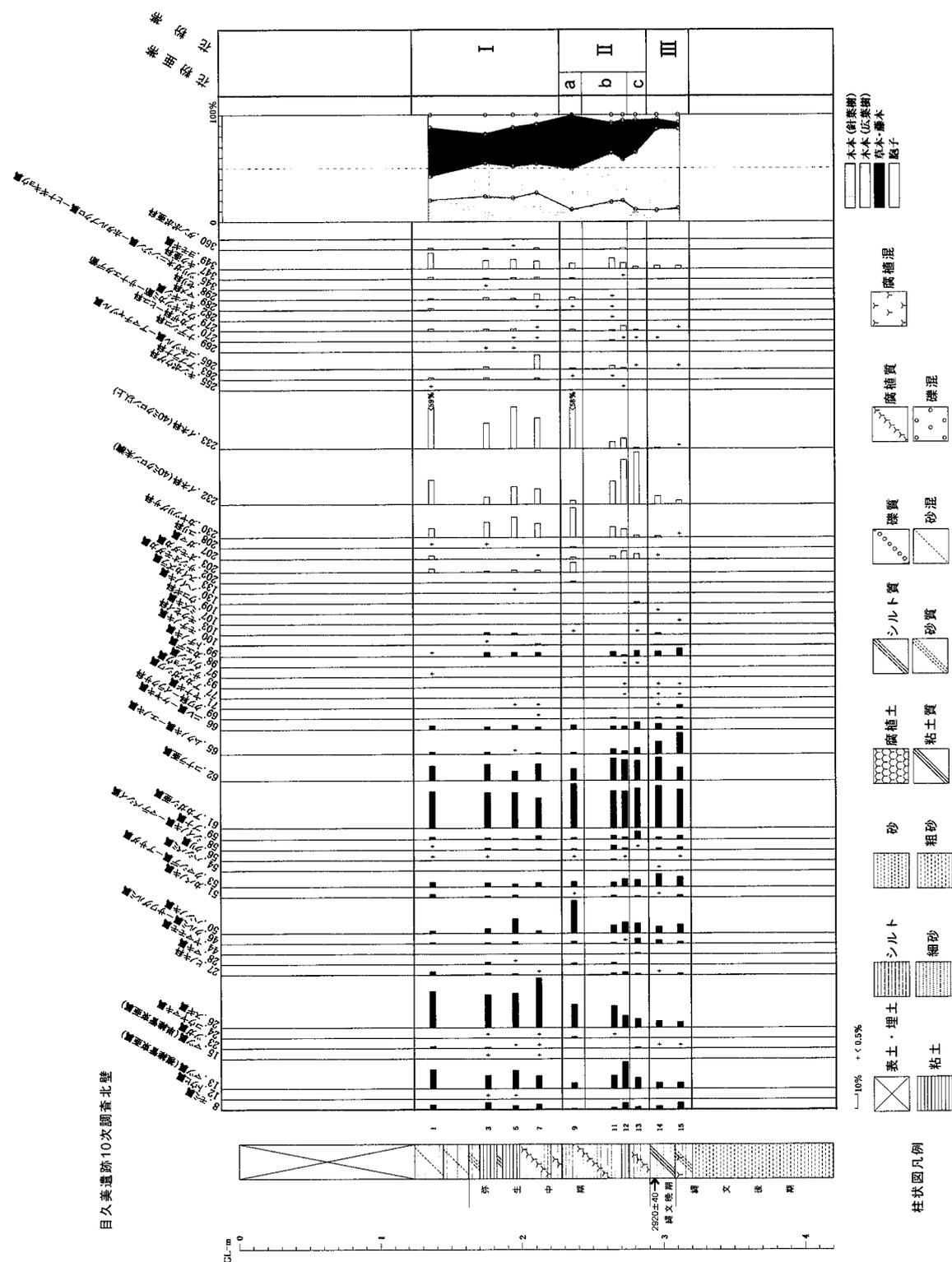
8. 3. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.



日久美遺跡9次調査



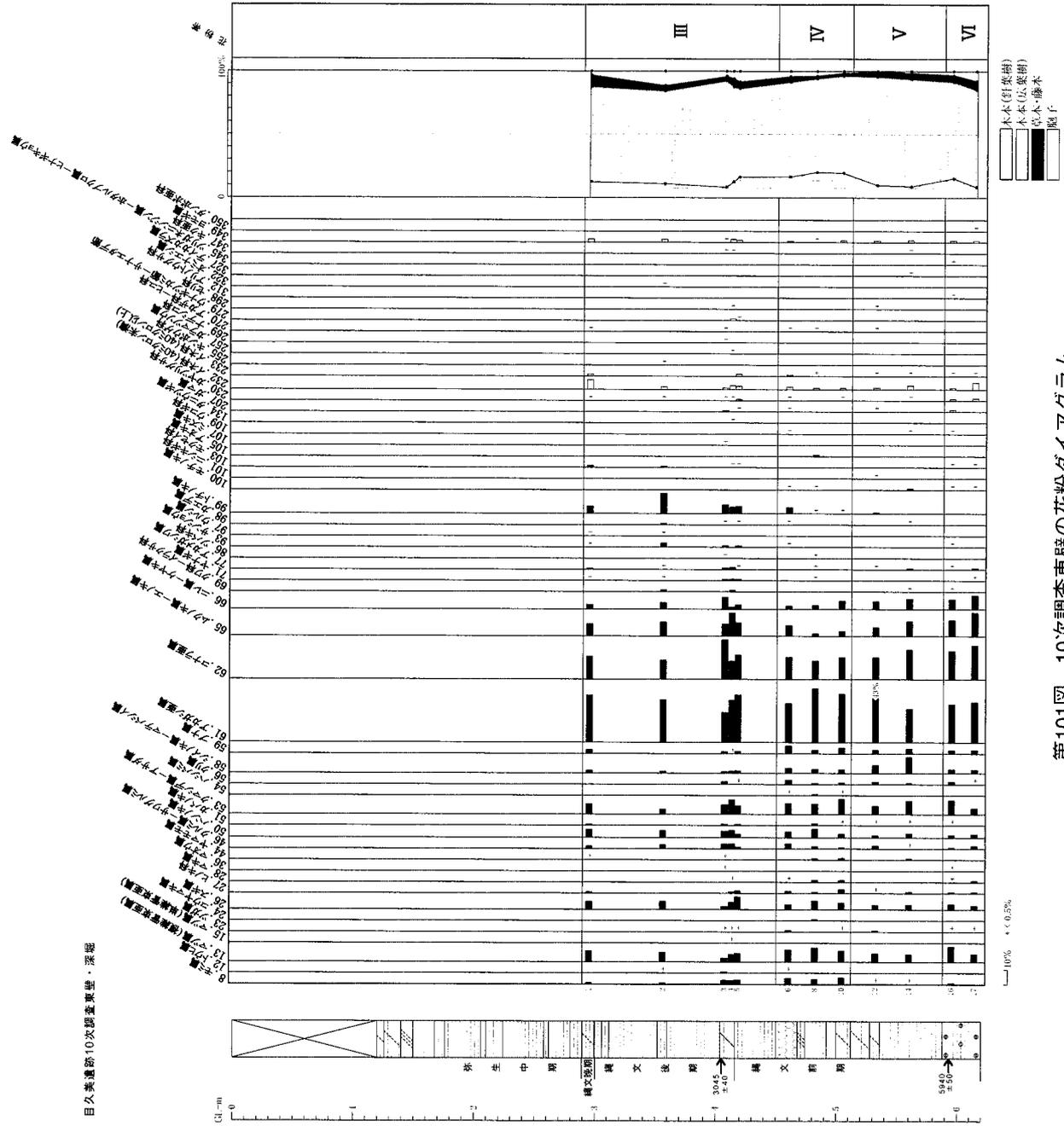
第99図 9次調査の花粉ダイアグラム



目久米遺跡10次調査北壁

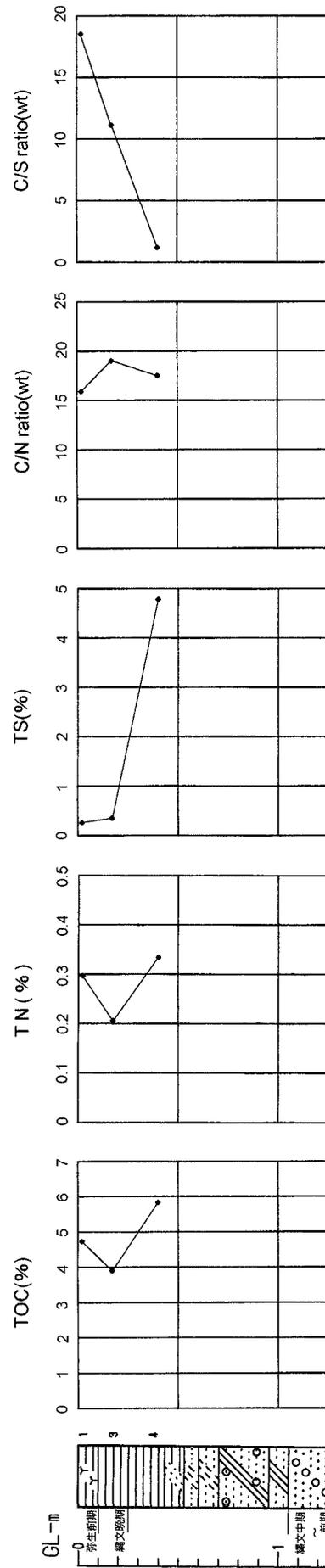
第100図 10次調査北壁の花粉ダイアグラム

目次表裏紙10次調査東壁・深壁



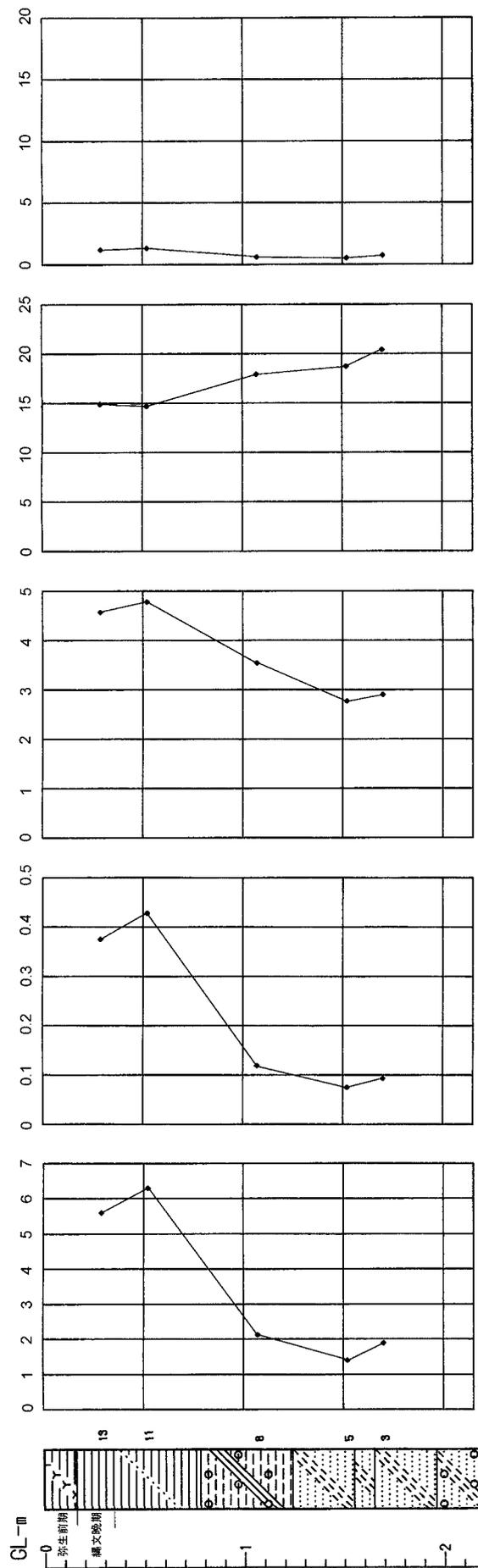
第101図 10次調査東壁の花粉ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.1地点



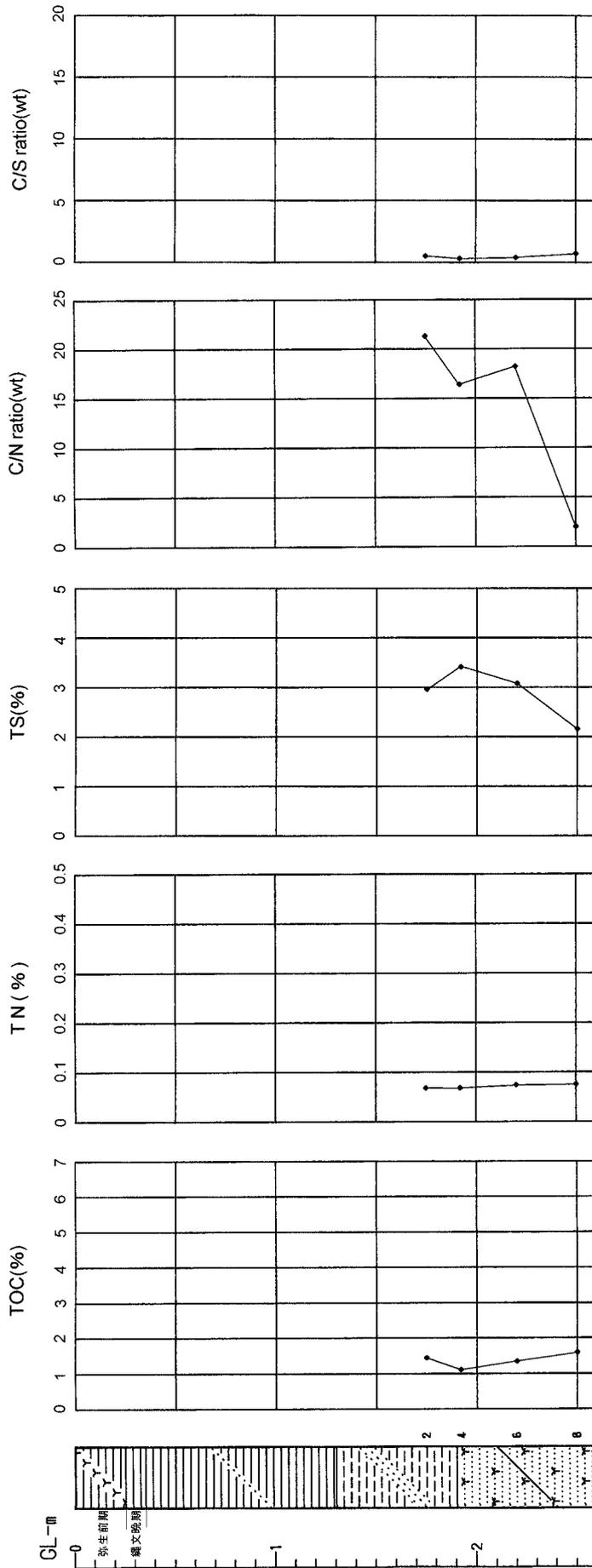
第102図 8次調査No.1地点の化学分析ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.2地点



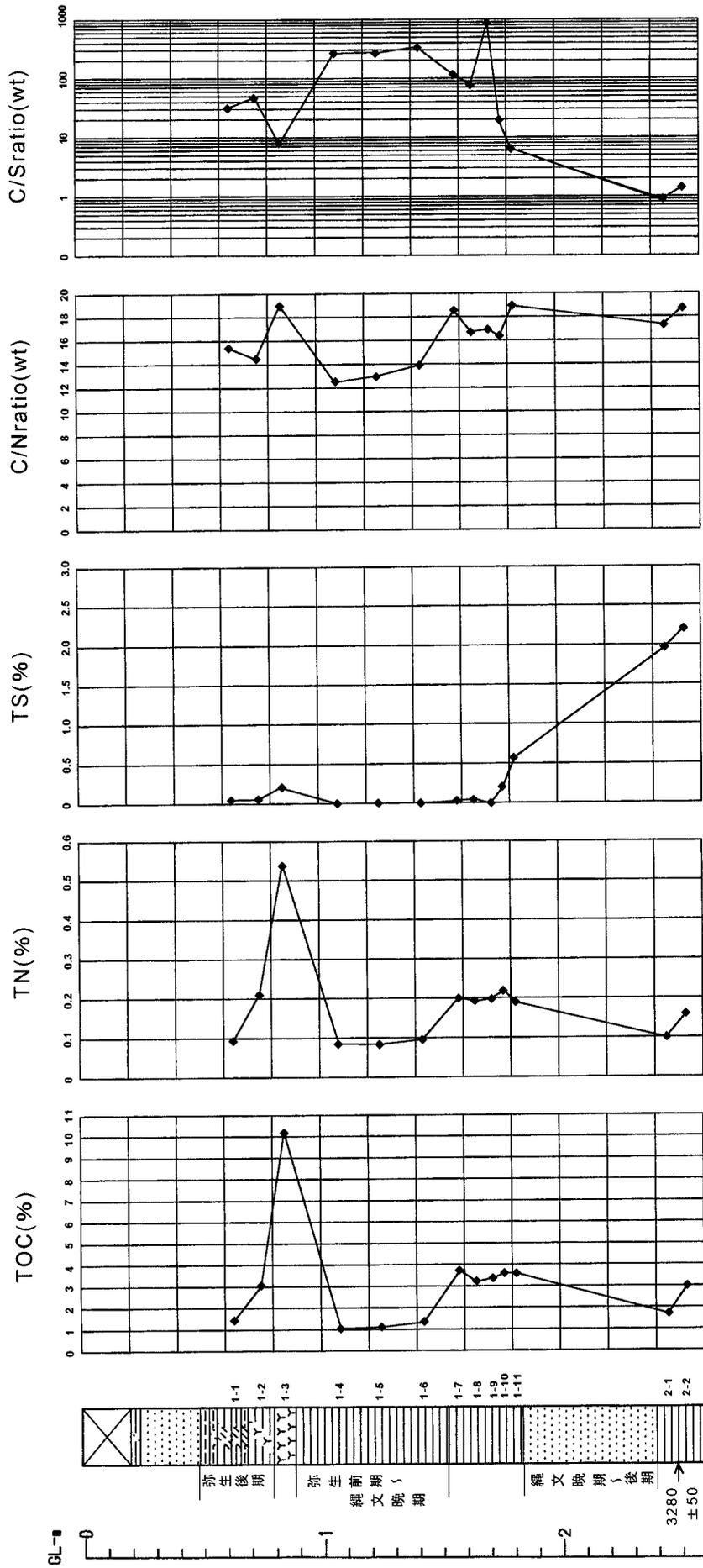
第103図 8次調査No.2地点の化学分析ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.3地点

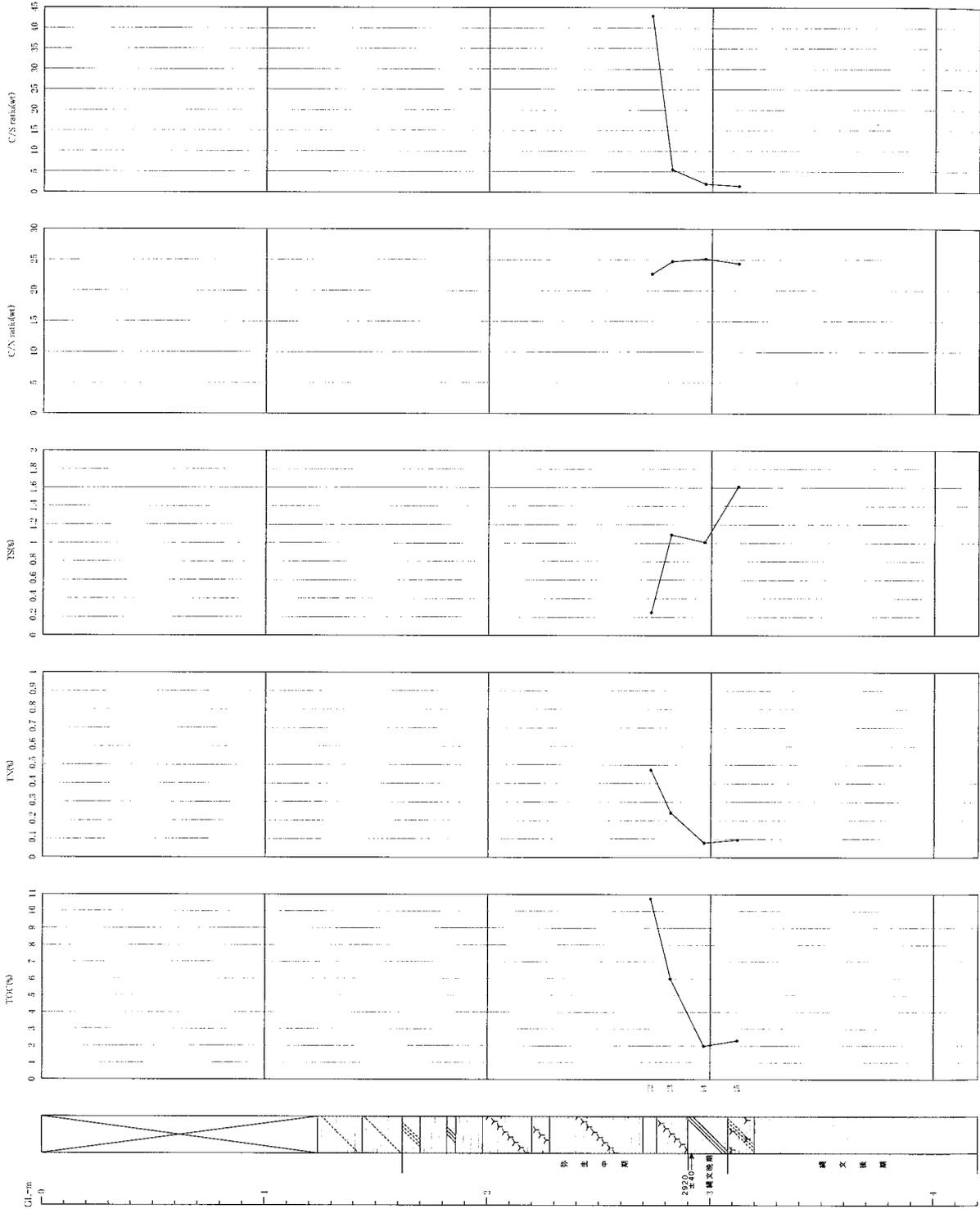


第104図 8次調査No.3地点の化学分析ダイアグラム

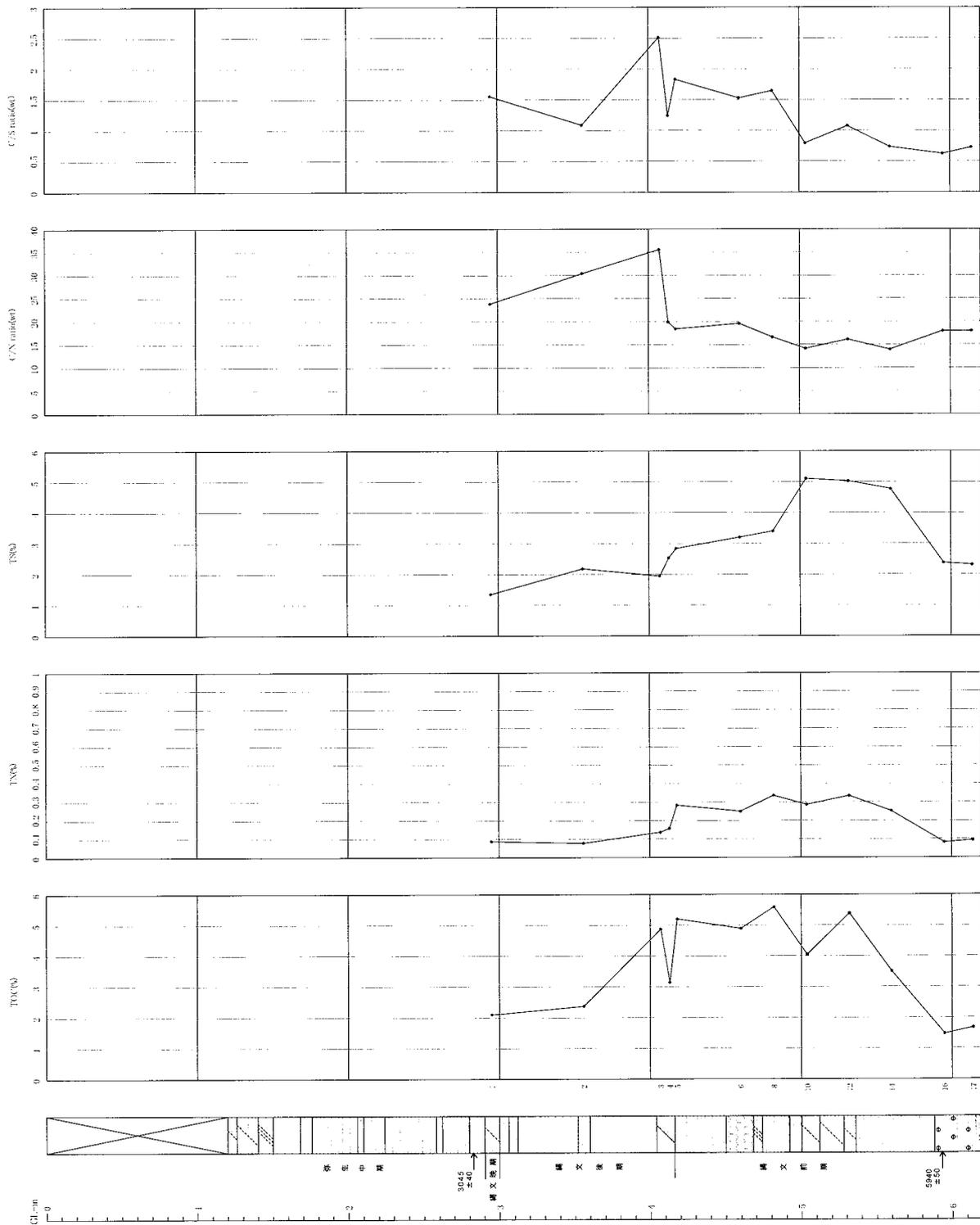
目久美遺跡9次調査



第105図 9次調査の化学分析ダイアグラム



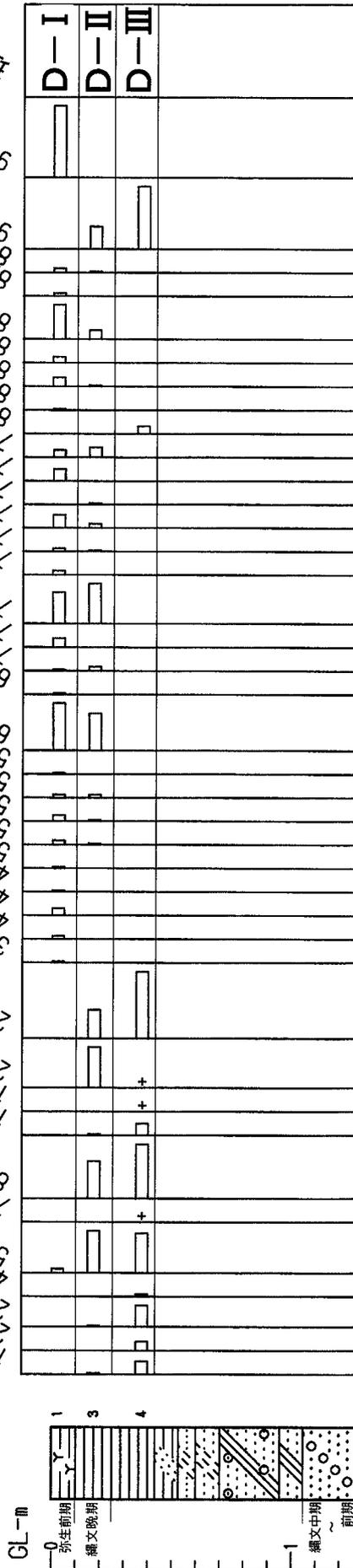
第106図 10次調査北壁の化学分析ダイアグラム



第107図 10次調査東壁の化学分析ダイアグラム

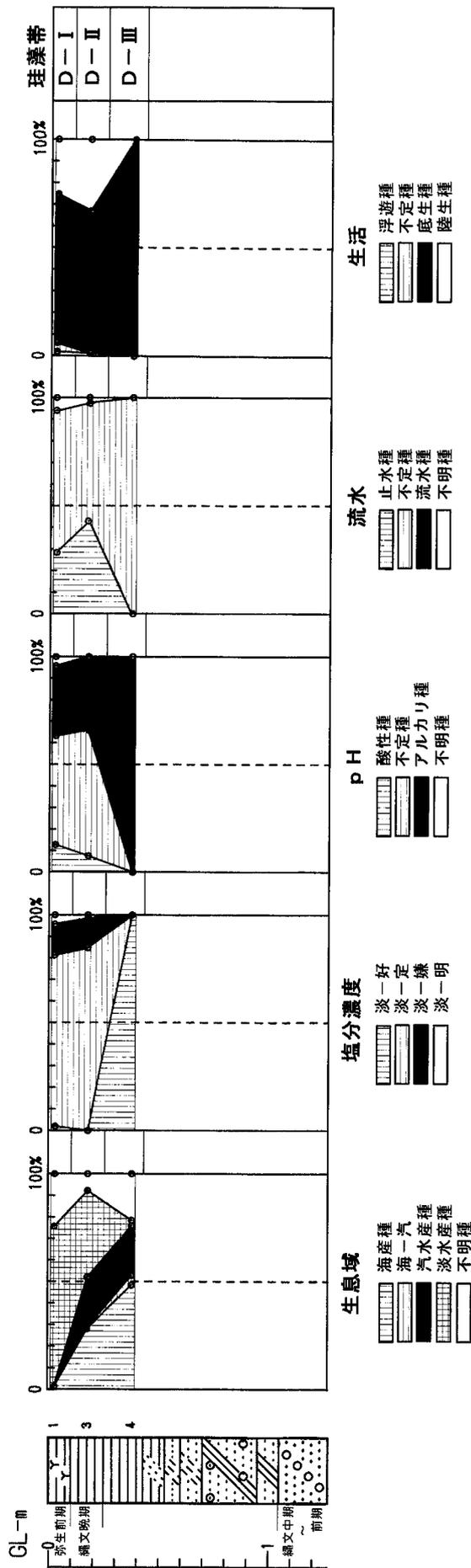
目久美遺跡8次調査No.1地点

- 珪藻帯
- 10 *Aulisculus sp.*
 - 20 *Campylodiscus scutellum*
 - 28 *Cocconeis scutellum*
 - 45 *Facilella pygmaea*
 - 50 *Grammatophora oceanica*
 - 70 *Donatella aurita*
 - 84 *Paratella sulcata*
 - 141 *Diploneis smithii*
 - 190 *Popalodia rumrichiae*
 - 271 *Pinnularia elegans*
 - 380 *Gratia elegantoides*
 - 401 *Cymbella asperata*
 - 437 *Cymbella navalis*
 - 480 *Diploneis formica*
 - 496 *Diploneis formica*
 - 510 *Eunotia praerupta*
 - 521 *Eunotia praerupta*
 - 523 *Eunotia praerupta*
 - 537 *Eunotia praerupta*
 - 539 *Eunotia praerupta*
 - 642 *Luticola munita*
 - 714 *Nelidium iridis*
 - 730 *Pinnularia sp.*
 - 737 *Pinnularia sp.*
 - 749 *Pinnularia sp.*
 - 751 *Pinnularia sp.*
 - 796 *Pinnularia sp.*
 - 800 *Pinnularia sp.*
 - 805 *Pinnularia sp.*
 - 812 *Pinnularia sp.*
 - 814 *Pinnularia sp.*
 - 820 *Stauroneis acuta*
 - 822 *Stauroneis acuta*
 - 847 *Stauroneis acuta*
 - 901 *Stauroneis acuta*
 - 903 *Pinnularia sp.*



第108図 8次調査No.1地点の珪藻ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.1地点

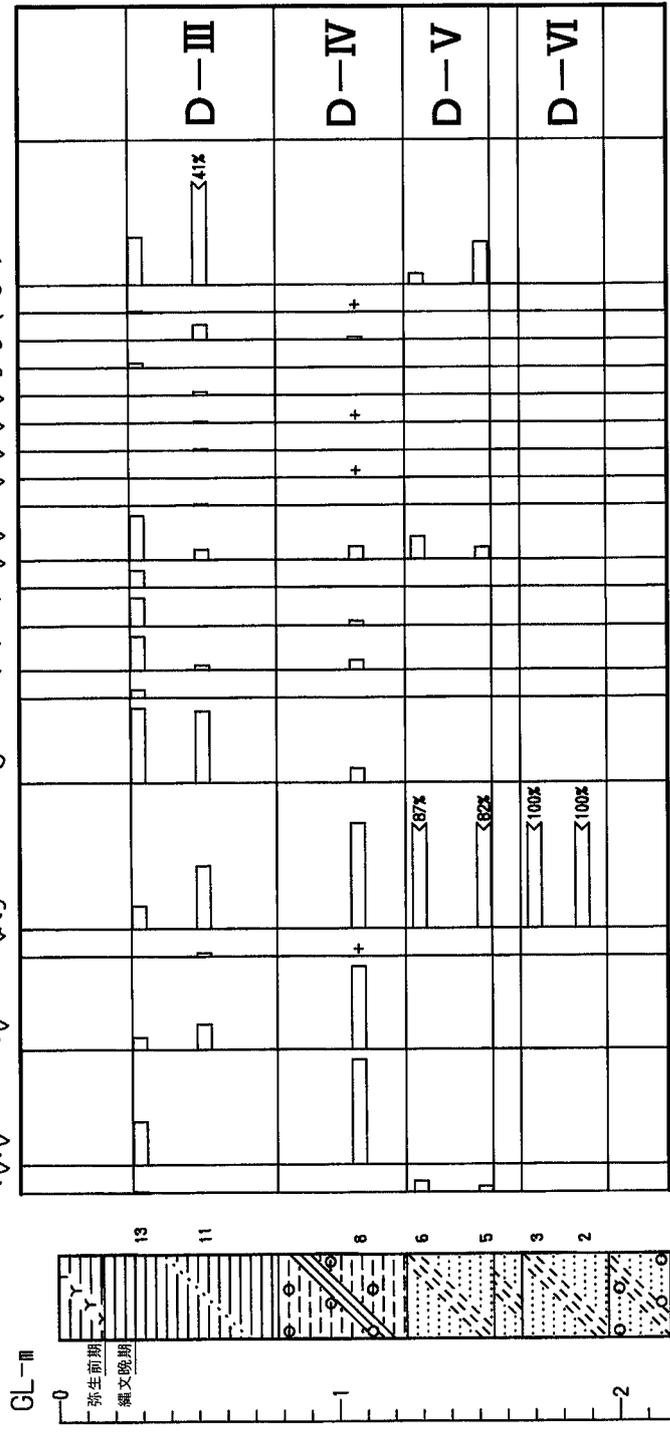


第109図 8次調査No.1地点の珪藻総合ダイアグラム

日久美遺跡8次調査No.2地点

珪藻

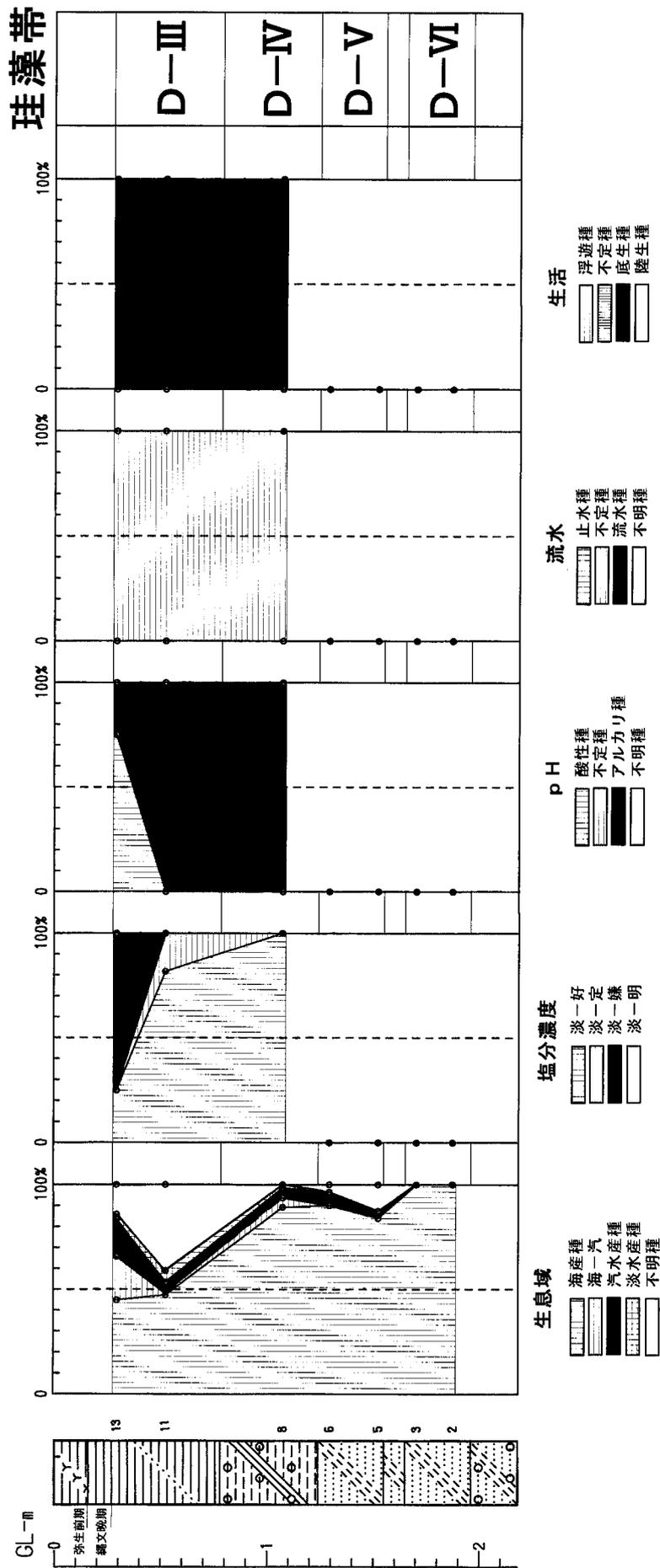
20. *Camphylodiscus spillum*
 28. *Cocconeis scutellum*
 29. *Cocconeis spp.*
 45. *Fallacia pygmaea oceanica*
 50. *Grammatophora oceanica*
 84. *Paralia sulcata*
 139. *Dicellogrma minor* var. r
 141. *Diploneis smithii*
 190. *Rhopalodia rumichiae*
 270. *Rhopalodia rumichiae*
 271. *Pinnularia elegans*
 280. *Rhopalodia musculus*
 294. *Thalassiosira elegantoides*
 297. *Pinnularia elegans*
 327. *Rhopalodia musculus*
 328. *Thalassiosira elegantoides*
 605. *Fragilariopsis placenta*
 606. *Fragilariopsis placenta*
 901. *Ardissonea? sp.*
 902. *Ardissonea? sp.*
 903. *Ardissonea? sp.*
 904. *Ardissonea? sp.*
 905. *Ardissonea? sp.*
 906. *Ardissonea? sp.*
 907. *Ardissonea? sp.*
 908. *Ardissonea? sp.*
 909. *Ardissonea? sp.*
 910. *Ardissonea? sp.*
 911. *Ardissonea? sp.*
 912. *Ardissonea? sp.*
 913. *Ardissonea? sp.*
 914. *Ardissonea? sp.*
 915. *Ardissonea? sp.*
 916. *Ardissonea? sp.*
 917. *Ardissonea? sp.*
 918. *Ardissonea? sp.*
 919. *Ardissonea? sp.*
 920. *Ardissonea? sp.*
 921. *Ardissonea? sp.*
 922. *Ardissonea? sp.*
 923. *Ardissonea? sp.*
 924. *Ardissonea? sp.*
 925. *Ardissonea? sp.*
 926. *Ardissonea? sp.*
 927. *Ardissonea? sp.*
 928. *Ardissonea? sp.*
 929. *Ardissonea? sp.*
 930. *Ardissonea? sp.*
 931. *Ardissonea? sp.*
 932. *Ardissonea? sp.*
 933. *Ardissonea? sp.*
 934. *Ardissonea? sp.*
 935. *Ardissonea? sp.*
 936. *Ardissonea? sp.*
 937. *Ardissonea? sp.*
 938. *Ardissonea? sp.*
 939. *Ardissonea? sp.*
 940. *Ardissonea? sp.*
 941. *Ardissonea? sp.*
 942. *Ardissonea? sp.*
 943. *Ardissonea? sp.*
 944. *Ardissonea? sp.*
 945. *Ardissonea? sp.*
 946. *Ardissonea? sp.*
 947. *Ardissonea? sp.*
 948. *Ardissonea? sp.*
 949. *Ardissonea? sp.*
 950. *Ardissonea? sp.*



—10% + < 0.5%

第110図 8次調査No.2地点の珪藻ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.2地点

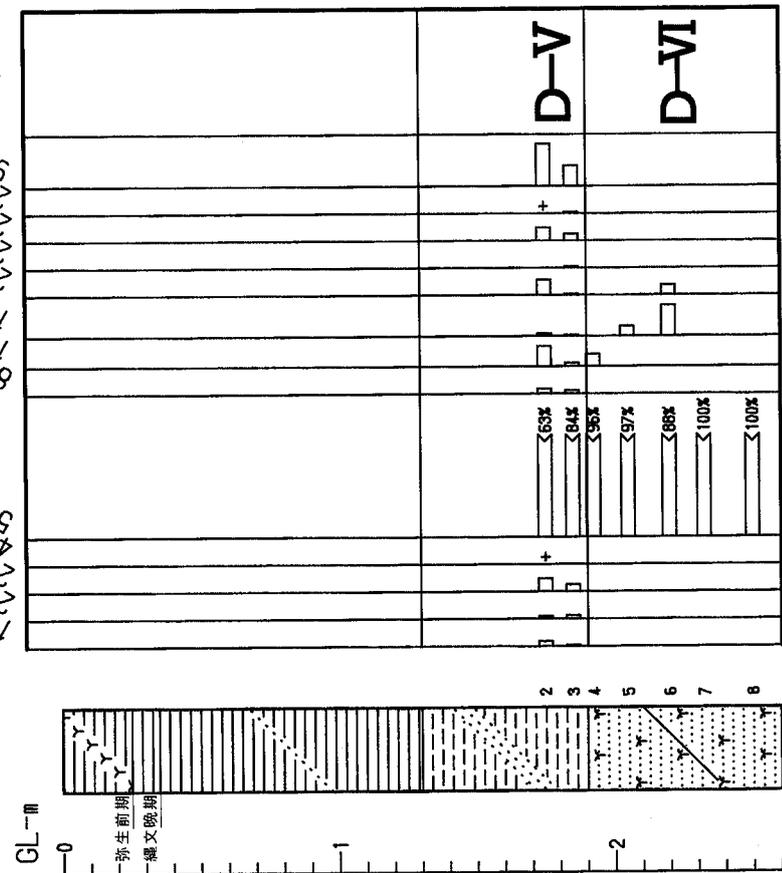


第111図 8次調査No.2地点の珪藻総合ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.3地点

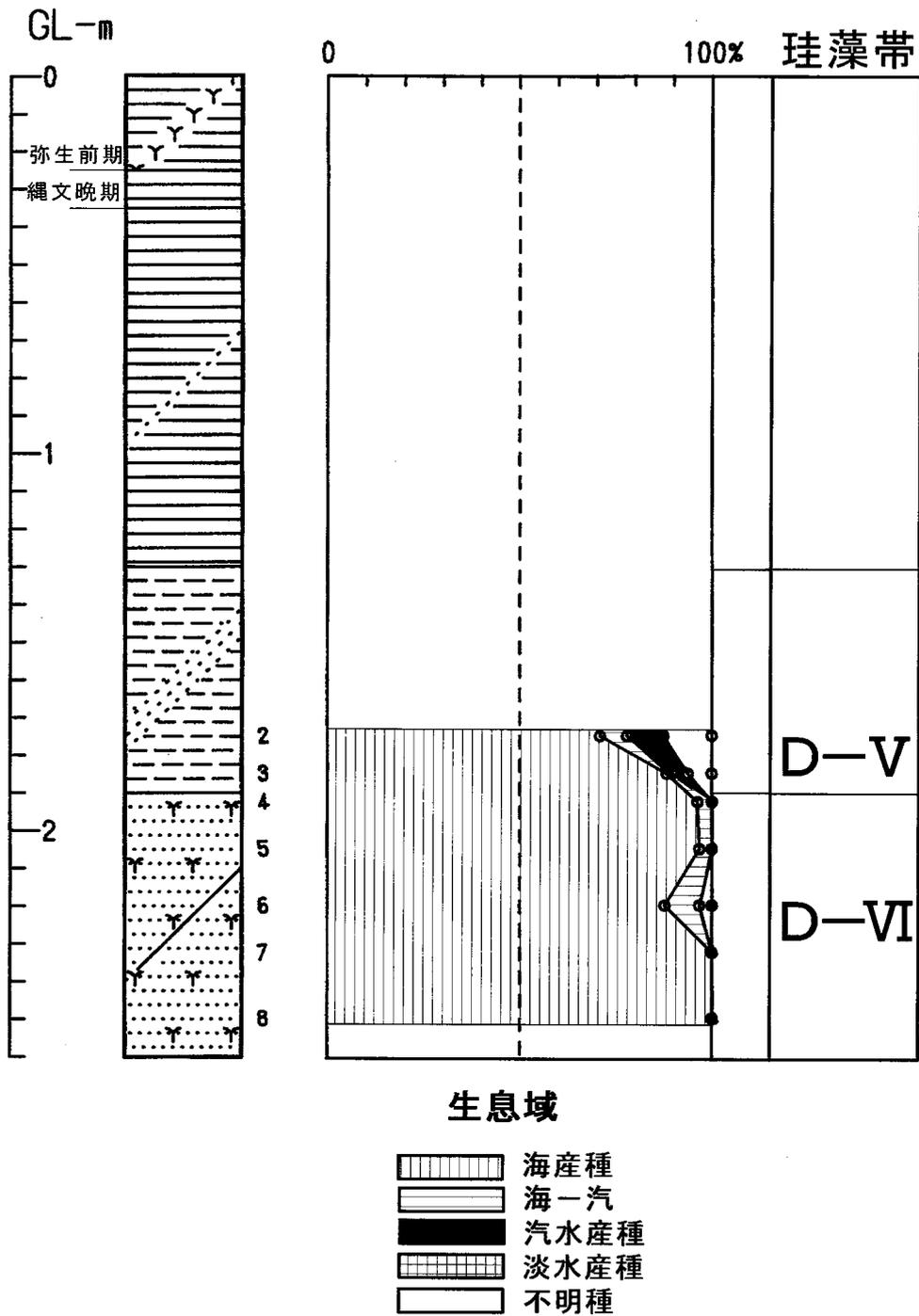
珪藻

10. *Aulisculus* sp.
 20. *Campylodiscus* sp.
 28. *Camphylodiscus* sp.
 45. *Calacis* sp.
 50. *Grammatophora* sp.
 84. *Paralia sulcata* var. r.
 171. *Diploneis smithii*
 27. *Diploneis smithii*
 280. *Pinnularia elegantulus*
 296. *Pinnularia elegantulus*
 901. *Ardissonea* sp.
 901. *Ardissonea* sp.



第112図 8次調査No.3地点の珪藻ダイアグラム

目久美遺跡8次調査No.3地点



第113図 8次調査No.3地点の珪藻総合ダイアグラム

表 1 ^{14}C 年代測定結果

| 試料名 | 測定年代
(y. B. P.) | $\delta^{13}\text{C}$
PDB (‰) | $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代
(y. B. P.) | 暦年代
(cal age, $2\sigma^{*1}$) | 測定番号 |
|---------|--------------------|----------------------------------|--|-----------------------------------|-------------|
| YM09-01 | 3310 \pm 50 | -26.9 | 3280 \pm 50 | BC1680~1440 | Beta-164296 |
| YM-3 | 2950 \pm 40 | -27.0 | 2920 \pm 40 | BC1220~1000 | PLD-1828 |
| YM-3-3 | 3105 \pm 40 | -28.9 | 3045 \pm 40 | BC1410~1210 | PLD-1829 |
| YM-5-11 | 5940 \pm 50 | - 1.5 | 6310 \pm 50 | BC4930~4700 | PLD-1830 |

第2節 目久美遺跡第10次調査SD04に見られる古流向について

田中里志（京都教育大学地学教室）

はじめに

目久美遺跡発掘調査に伴い検出されたSD04（第114図、第115図）について、トレンチ壁断面の堆積構造から古流向の解析を行なった。詳細に解析した箇所では地層の剥ぎ取りを行なっているが、それらについて便宜上、断面上部のセクションをA、断面下部をBとした。また各々のセクションA、Bに直行する断面をセクションA'、B'とした。すなわち、A・Bは南方向に露出した断面で、南側から北側断面を観察したものである。またA'・B'は東方向に露出した断面で、東側から西側断面を観察したものである（第116図）。詳細に観察したこれらの断面は、上部断面（A・A'）がおおよそ0.75m、下部断面（B・B'）が1.25mで、全体としておおよそ2mである。ここではそれぞれの断面A、Bにおける堆積相の解析を実施し、基本的な堆積相から推定できる古流向、堆積環境について報告する。

堆積相の特徴

2地点の断面A（A'）、B（B'）に見られる堆積相は、礫・砂・礫混じり砂ならびにそれらの混合層で構成される。それぞれの堆積物は、基本的に下位層の上面を侵食して接している。全体としてトラフ型斜交層理が発達しており、まれに平板型斜交層理もみられる。また、礫層から上方の砂層へと漸移的に粒径を減じる、上方細粒化堆積組相の構造を確認することもできる。

構成している礫は、淘汰は不良の角～亜角で、0.5cm～1cmの細礫で特徴づけられる。極まれに礫径3～4cmの亜円・中礫も見られる。全体として礫支持（クラスト・サポート）礫層の特徴を有し、礫層中に砂質薄層が狭在する場合がある。分布としては少ないが砂質部の淘汰は良好である。（図版33、34）

堆積環境

礫の特徴は、河川などの水流下で選択的に細礫が淘汰され堆積したもので、基質部をほとんど含まない部分の堆積相の存在は、碎屑粒子がベッドロードとして運搬・堆積したものであり、河道（チャンネル）あるいは河川砂州（バー）の堆積環境で碎屑粒子が水流による剪断力を受けながら形成されたものと推定できる。砂などの細粒堆積物は水流の流速の変化に対応したものである。

したがって、遺跡壁断面に認められる堆積物が示す堆積相は、河道（チャンネル）ならびに河川砂州（バー）の堆積物と認定することができる。また、断面B（B'）の下部近くに認められるシルト～極細粒砂で特徴づけられる堆積物は、碎屑物を運搬する流れが弱く、碎屑物の多くが河川水の氾濫に伴い供給され沈積した堆積物と解釈できる。すなわち洪水氾濫流とともに碎屑物が氾濫原上に堆積したものである。

古流向

2地点の断面A（A'）とB（B'）に認められる堆積構造は、トラフ型斜交層理が主である（図版35、36）。A・A'、B・B'を立体的に解析することにより、堆積当時のより詳細な古流向を明らかにすることができる。

[上部断面A・A']

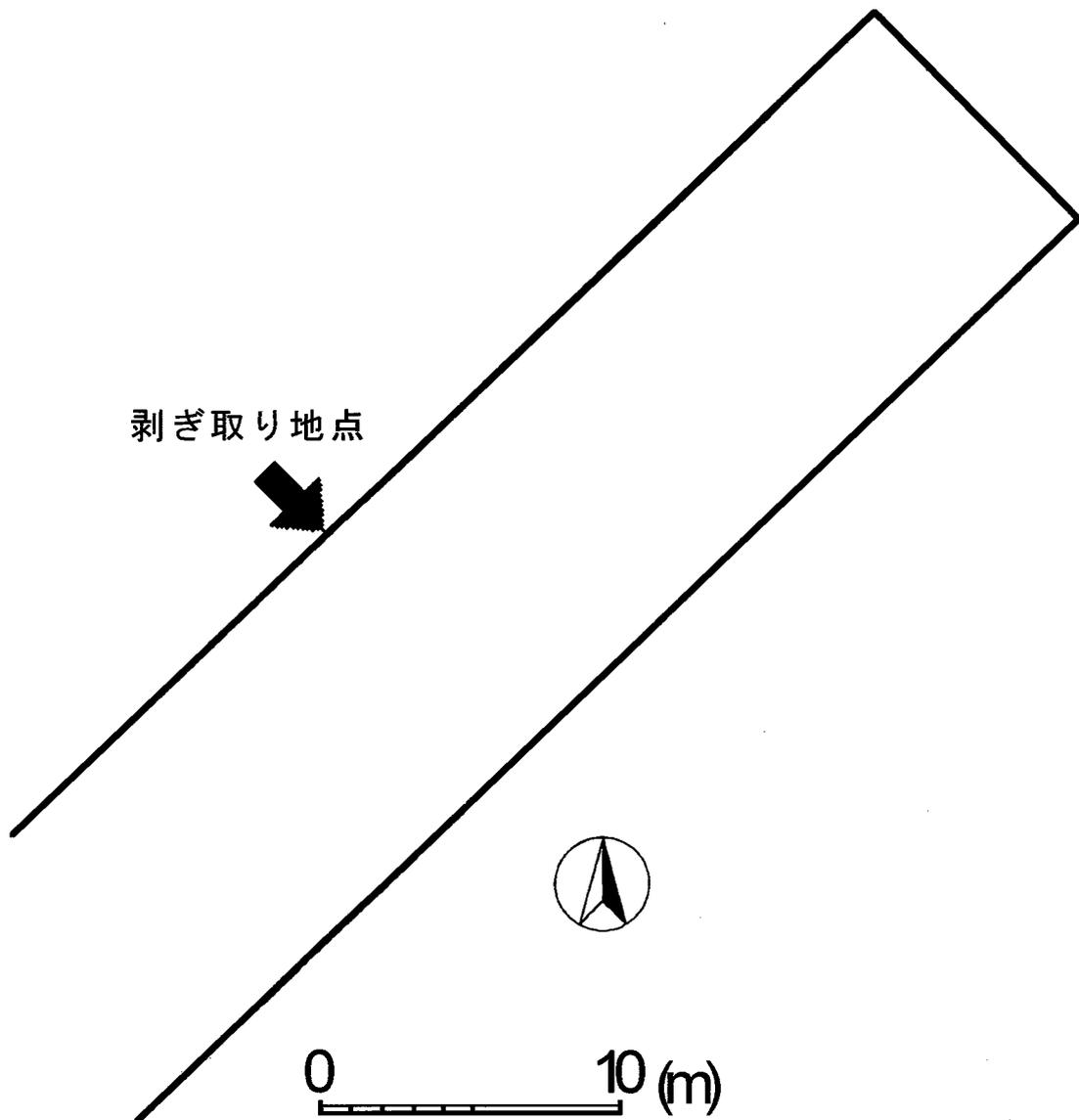
断面Aには、主にトラフ型斜交層理の横断面を見ることができ、顕著に発達しているトラフ構造を観察することができる。また、直行断面A'にはそれらの縦断面が主に観察できる。断面Aは南北成分の流向であることを示している。一方、縦断面が主に発達する断面A'では、見られる斜交層理はそのほとんどが右肩下がりで傾斜していることが分かる。このことは碎屑物を含む水流が傾斜方向へ流れながら地層を形成していったことを物語っ

ていて、地形図上では海跡湖跡から日本海側へ北流する河川が存在していたことを示唆しているといえる。(図版35)

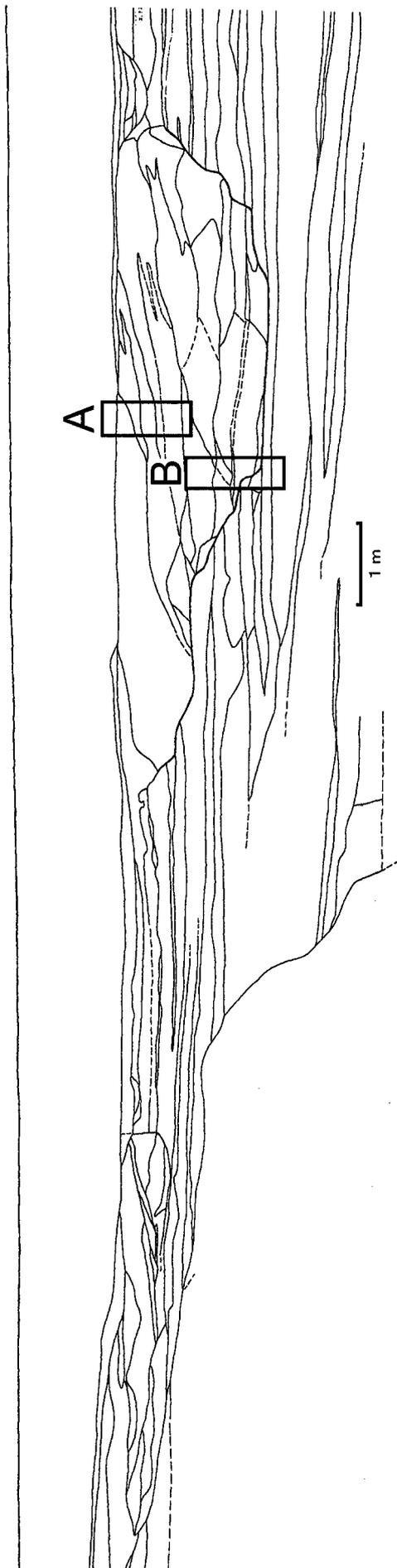
[下部断面B・B']

断面BならびにB' に認められる堆積構造も同様にトラフ型斜交層理が主であるが、まれに平板型斜交層理と判断できる堆積構造も見ることができる。一般的にはこれらの堆積構造が示す古流向は、上部同様に北流する流れが主であることを示しているが、まれに西（～北西）方向への流れと解釈できるものも見られる。

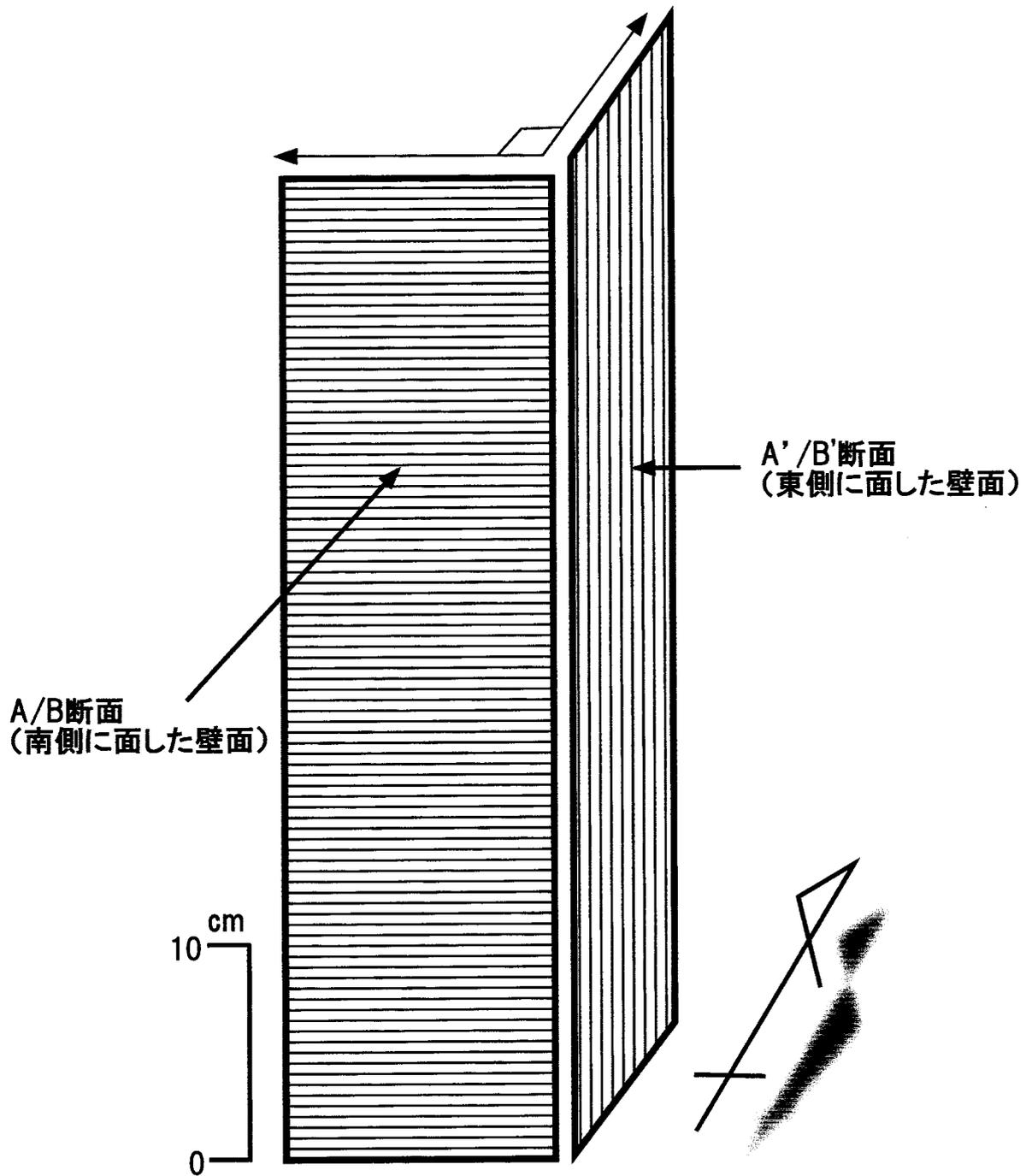
このように目久美遺跡壁面に見られる堆積物から解釈できる堆積環境は、河道ならびに河川州をもつ河川環境が推定でき、それらの古河川システムは内陸から北方への、すなわち日本海（一部西方～北西方）へ流れていたと推定できる。(図版36)



第114図 剥ぎ取り位置（平面図）



第115図 剥ぎ取り位置 (断面図)



第116図 堆積断面のインデックス

第3節 米子市目久美遺跡第9次調査出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所 汐見 真
京都造形芸術大学 岡田 文男

1. 試料

試料は米子市目久美遺跡から出土した農耕具6点、漁労具2点、建築材2点、用途不明品3点の合計13点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各断片を採取し、永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹5種、広葉樹4種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(遺物 No.1,6)

木口では仮道管をもち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁穴は典型的なスギ型で1分野に1～3個有る。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ブナ科シイ属 (*Castanopsis* sp.)

(遺物 No.7)

環孔性放射孔材である。木口では、口圏部の道管（ $\sim 300\mu\text{m}$ ）は単独でかつ大きい接線方向には連続していない。口圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では、道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では、多数の単列放射組織が見られる。ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為、スダジイとの区別は難しい。シイ属は本州、（関東以西）四国、九州、琉球に分布する。

3) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *cyclobalanopsis* sp.)

(遺物 No.3,4)

放射孔材である。木口では年輪に関係なく、まちまちな大きさの道管（ $\sim 200\mu\text{m}$ ）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射細胞は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平状細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

4) ツバキ科ナツツバキ属 (*Sutewartia* sp.)

(遺物 No.5)

散孔材である。木口では中庸の道管（ $\sim 140 \mu\text{m}$ ）が単独ないし2～4個複合して分布する。柾目では道管は段階穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平状と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の壁孔が段階上に並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ $\sim 400 \mu\text{m}$ からなる。ナツツバキ属はナツツバキ、ヒメシャラがあり、本州、四国、九州に分布する。

5) ツバキ科サカキ属サカキ (*Cleyera japonica* Thunb. pro parte emend. S. et Z.)

(遺物 No.8)

散孔材である。木口では極めて小さい道管（ $\sim 50 \mu\text{m}$ ）が単独ないし2～4個複合して平等に分布する。柾目では道管は段階穿孔と側壁に対列ないし段階壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平状、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし段階状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ $\sim 1.5\text{mm}$ からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州（茨城、石川以西南）、四国、九州に分布する。

※参考文献

島地 兼・伊藤隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1998）

島地 兼・伊藤隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）

伊藤隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社（1979）

※使用顕微鏡

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

第4節 米子市目久美遺跡第10次調査出土木製品の樹種調査結果

株式会社 吉田生物研究所

1. 試料

資料は米子市目久美遺跡から出土した農耕具10点、祭祀具1点、建築材1点、武器1点、用途不明品1点の合計14点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各断片を採取し、永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹5種、広葉樹4種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(遺物 No. 2, 4, 5, 7)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁穴は典型的なスギ型で1分野に1～3個有る。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(遺物 No. 3, 6)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数樹状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) ブナ科シイ属 (*Castanopsis* sp.)

(遺物 No. 1)

環孔性放射孔材である。木口では、口圏部の道管（ $\sim 300\mu\text{m}$ ）は単独でかつ大きい接線方向には連続していない。口圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では、道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では、多数の単列放射組織が見られる。ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為、スダジイとの区別は難しい。シイ属は本州、（関東以西）四国、九州、琉球に分布する。

4) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(遺物 No. 1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *cyclobalanopsis* sp.)

(遺物 №2, 3, 4, 5, 6, 7)

放射孔材である。木口では年輪に関係なく、まちまちの大きさの道管 ($\sim 200 \mu\text{m}$) が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平状組織からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型の間となる方の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

※参考文献

島地 兼・伊藤隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版(1998)

島地 兼・伊藤隆夫 「図説木材組織」 地球社(1982)

伊藤隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所(1999)

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社(1979)

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社(1997)

※使用顕微鏡

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

第5節 米子市目久美遺跡10次調査出土の盾表面の赤色顔料について

(株)吉田生物研究所 本吉恵理子
京都造形芸術大学 岡田 文男

1. はじめに

米子市に所在する目久美遺跡からは赤彩された盾が出土している。その赤色顔料が何かを明らかにする目的で顕微鏡観察を行なったので、以下に結果を報告する。

2. 調査資料

調査した資料は弥生時代の赤彩盾1点である。

3. 調査方法

資料の赤彩部分から直接数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、断面の薄片を作製した。これを落斜光ならびに透過光下で検鏡した。

4. 観察結果

木胎表層部に赤色顔料が付着している様子が観察された。明瞭な塗膜は構成しておらず、何らかの膠着剤によって赤色顔料粒子が定着していると推定される。赤色顔料はベンガラではなく朱であった。

5. 摘要

弥生時代の赤彩盾表面を顕微鏡で観察した。

漆などによる明瞭な塗膜は認められなかった。

何らかの膠着剤に、赤色顔料として朱を混和したものが盾表面に塗布されている。

第6節 目久美遺跡第9次・10次調査における種実同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

試料は、目久美遺跡第10次調査出土の試料1～11、第9次調査出土の試料12・13の計13試料である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

樹木17、草本24の計41が同定された。学名、和名および粒数を表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に主要な分類群の形態的特徴を記す。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 毬果・種子 マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

種子は倒卵形を呈し、やや扁平である。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核 クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。断面は円形である。

イヌシデ *Carpinus tschonoskii* Maxim. 果実 カバノキ科

果実は茶褐色で倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 殻斗・幼果 ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。

コナラ属 *Quercus* 堅果・幼果 ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。破片であり、属レベルの同定に留まる。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子・幼果 トチノキ科

黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

幼果は茶褐色で倒卵形を呈す。

サカキ *Cleyara japonica* 種子 ツバキ科

広卵状円形、円形、楕円形などを呈する。へその一端近くは嘴状。側面は狭倒卵形、倒卵形、長楕円形（やや両凸レンズ状）である。種皮は平滑で表皮下に楕円状の網目模様が見られる。

ヒサカキ属 *Eurya* 種子 ツバキ科

黄褐色で不整形を呈す。表面に多数の小孔がある。

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 核 エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

ハクウンボク *Styrax obassia* Sieb. et Zucc. 核 エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の浅い溝と、低い稜がある。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 種子 スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

[草本]

ミクリ属 *Spaganium* 果実 ミクリ科

淡褐色で側面観は倒卵形、上面観は円形。表面には縦方向に5本程度の筋が走る。

イバラモ属 *Najas* 種子 イバラモ科

黄褐色～灰褐色で長楕円形を呈す。表面には大きい網目模様がある。

ヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche 果実 オモダカ科

黄褐色で倒卵形を呈す。背部には縦方向に1本の深い溝がある。

オモダカ *Sagittaria trifolia* L. 果実 オモダカ科

淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状となり、上部は針状にとがる。

オモダカ科 *Alismataceae* 種子

茶褐色で逆U字状を呈する。種皮は薄く、半透明である。果実が欠落しているため、科レベルの同定にとどめる。or種子のみでは科レベルの同定にとどまる。

ウキヤガラ *Scirpus fluviatilis* A. Gray 果実 カヤツリグサ科

黒灰色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は三角形である。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色～黒色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

黒褐色で倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

黄褐色で広倒卵形を呈す。断面形は片凸レンズ状である。基部に針状の付属物を持つ。

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7～9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。

ミゾソバ *Polygonum Thunbergii* Sieb. et Zucc. 果実 タデ科

黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。

クサネム *Aeschynomene indica* L. 豆果 マメ科

果片であり、茶褐色の扁平四角形を呈す。表面にいぼ状の突起がある。

ツリフネソウ属 *Impatiens* 種子 ツリフネソウ科

赤褐色で長倒卵形を呈し、下端にはやや縦長のへそがある。表面には不規則な隆起があり、隆起の部分の光沢は特に強い。

ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* Trautv. var. *Heterophylla* Hara 種子 ブドウ科

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が2つあり、背面のカラザは長く伸びる。

セリ科 *Umbelliferae* 果実

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

ゴキヅル *Actinostemma lobatum* Maxim. 種子 ウリ科

黄褐色で卵形を呈し、断面は扁平である。表面は粗い。破片の状態であった。

キク科 Compositae 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。

5. 考察とまとめ

(1) 第10次調査

樹木ではアカメガシワが多く、クマノミズキとハクウンボクがやや多い。草本ではミクリ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、ノブドウが多く試料によってはオオバコ属やセリ科も多い。

アカメガシワは二次林性の樹木で、クマノミズキも二次林性である。草本ではノブドウが多い。ノブドウは林縁などの二次植生に多いため、周囲は二次林が分布していたと推定される。ハクウンボクは水辺に多く、ミクリ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、セリ科は、いずれも水生植物であることから、調査地は沼沢地などの環境であったことが示唆される。

(2) 第9次調査

試料13からはセリ科がやや多量に同定され、湿地の環境が示唆される。

※参考文献

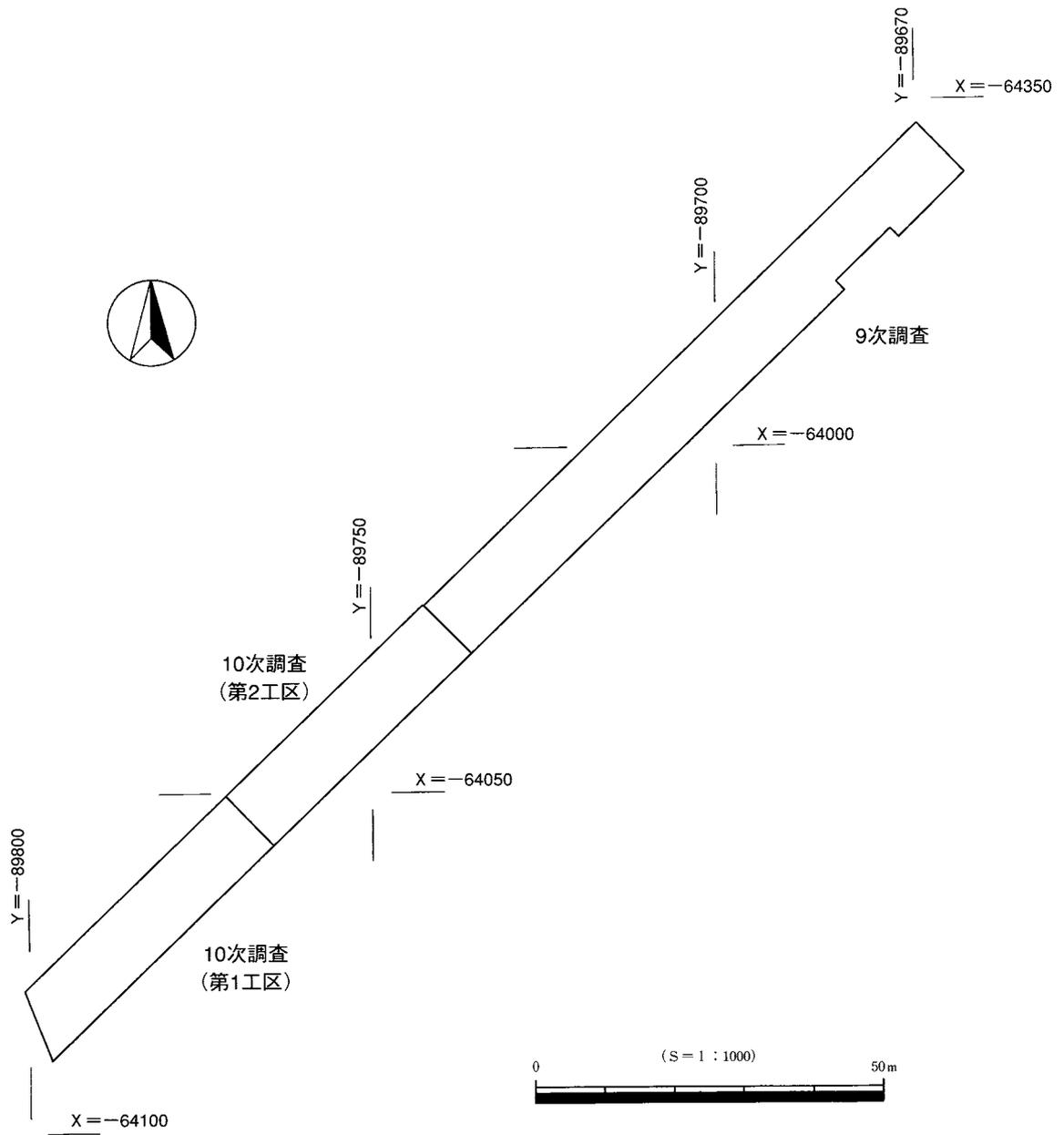
笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

南木陸彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165-174.

南木陸彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18-22.

南木陸彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.2-14.



第117図 調査地点座標図

圖 版



目久美遺跡第9次調査地点全景（南西側から）



目久美遺跡第9次調査地点全景（北東側から）

1. 石列
(西側より)



2. 石列除去後
(西側より)



3. SD-04 (北東側より)



4. SD-04 (南西側より)



1. 洪水堆積状況



2. 畦畔および足跡



3. 畦畔



4. 畦畔



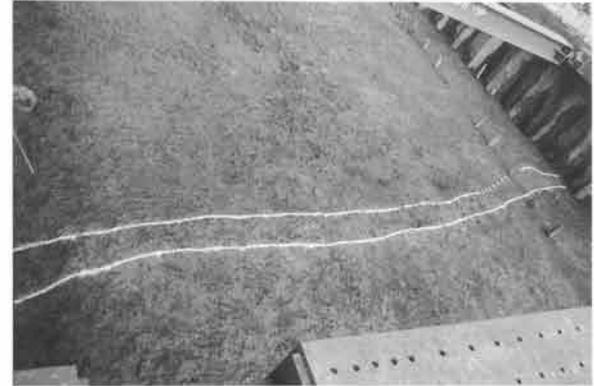
5. 足跡検出状況



6. 畦畔およびSD-05

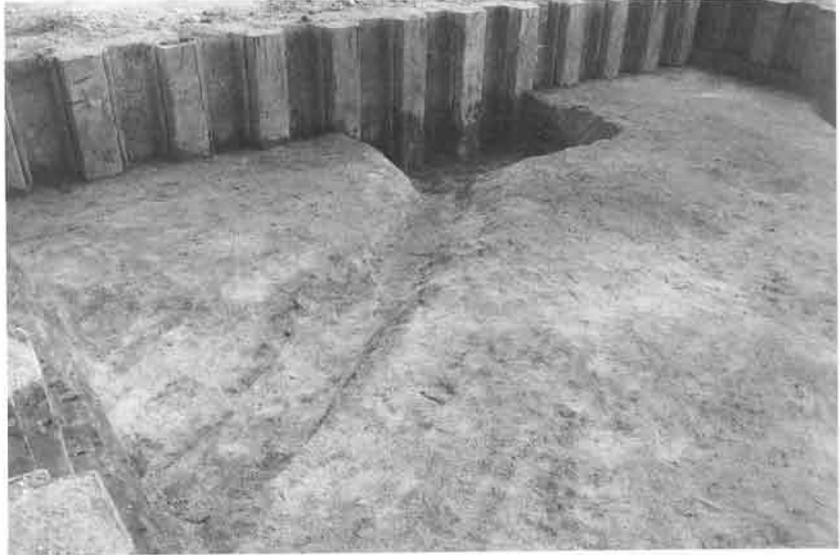


7. 種子出土状況 (カヤツリグサ)



8. 畦畔

1. SD-02
(西側より)



2. SD-02
(東側より)



3. SD-01





1. 遺物出土状況 (木製鋤)



2. 遺物出土状況 (田下駄)



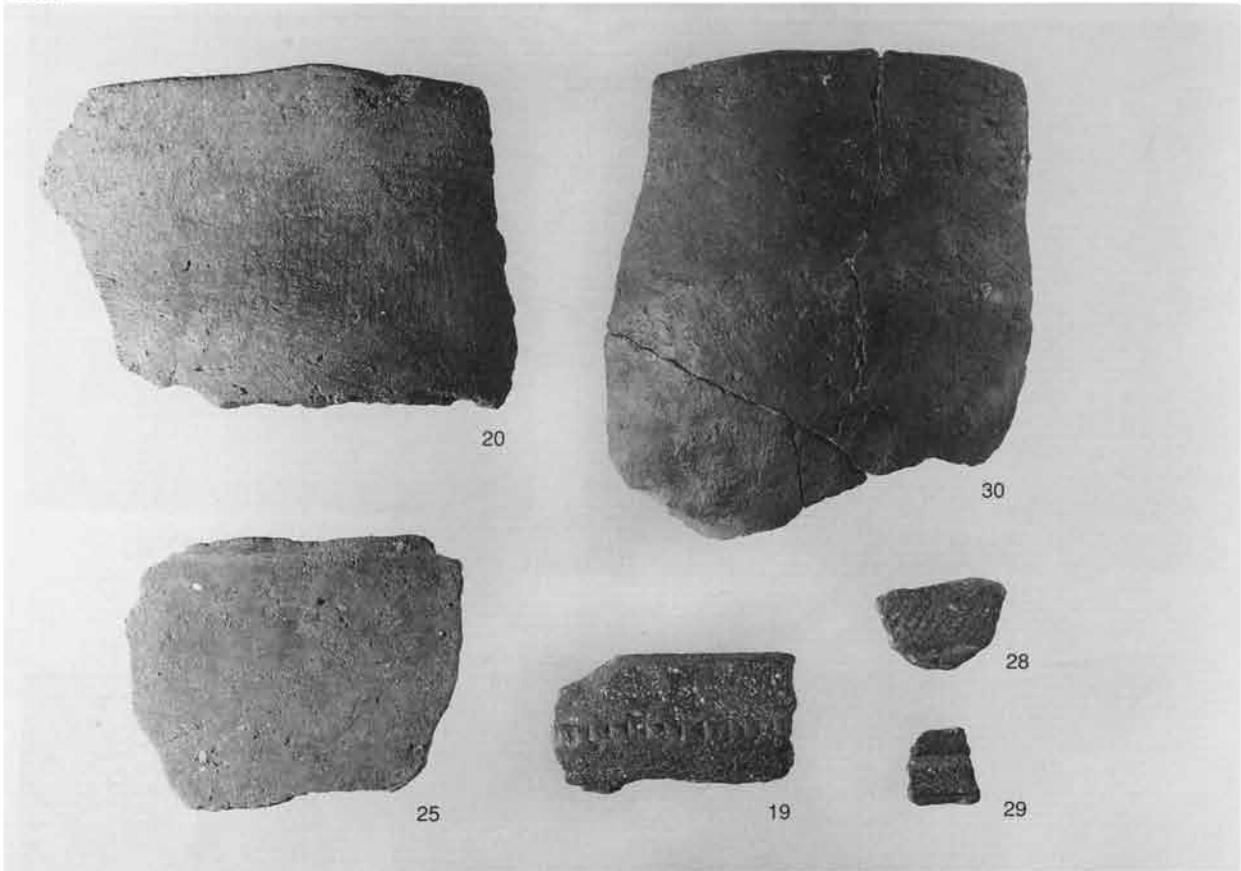
3. 遺物出土状況 (木製鋤)



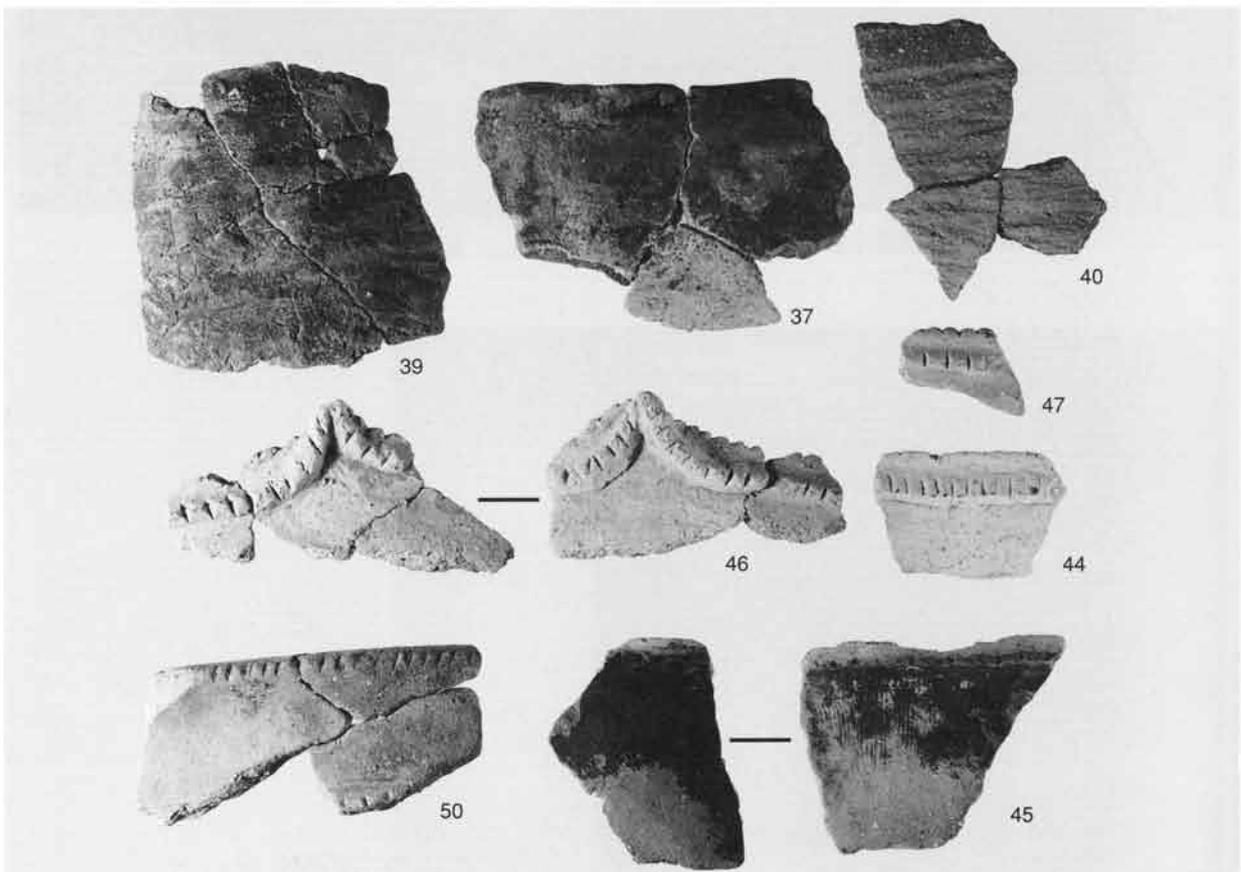
4. 遺物出土状況 (木槌)



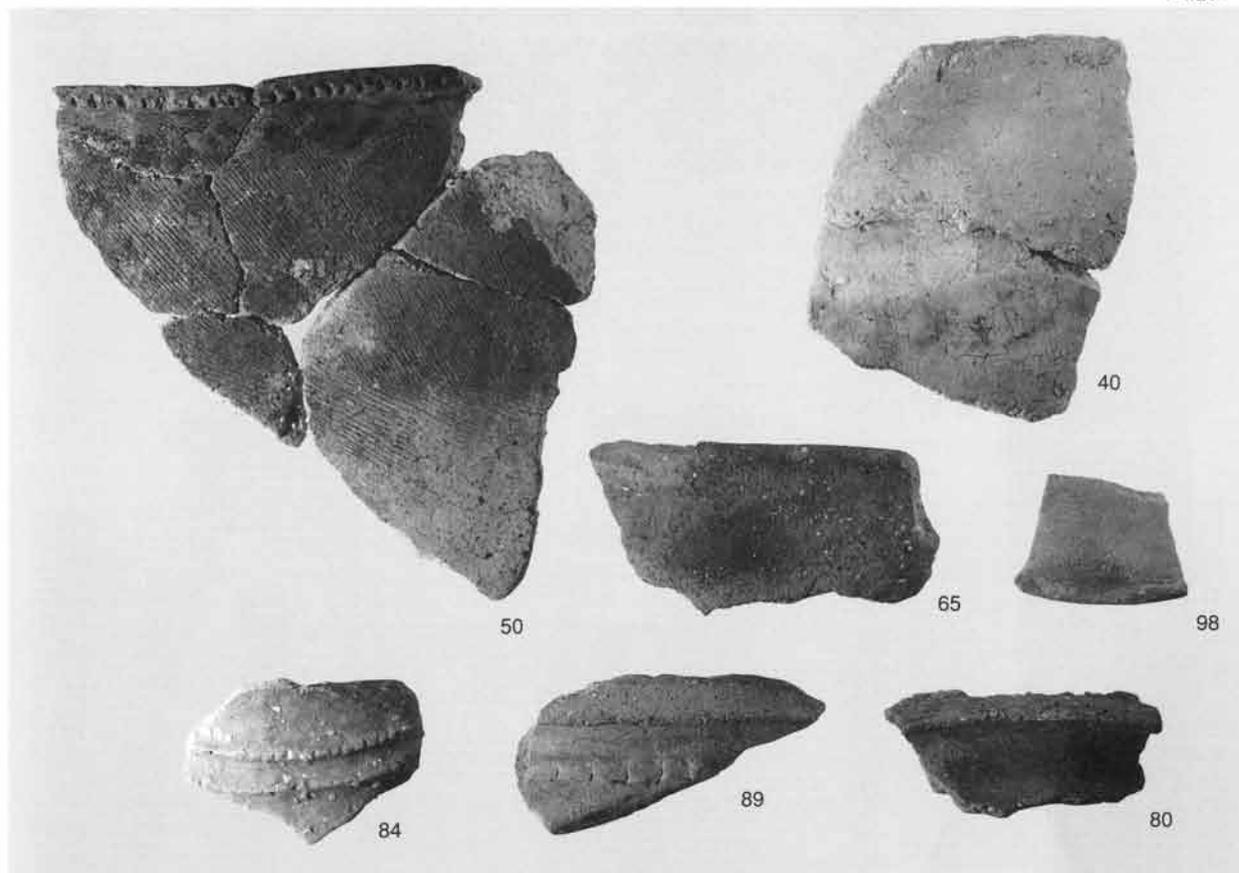
5. 遺物出土状況 (建築材)



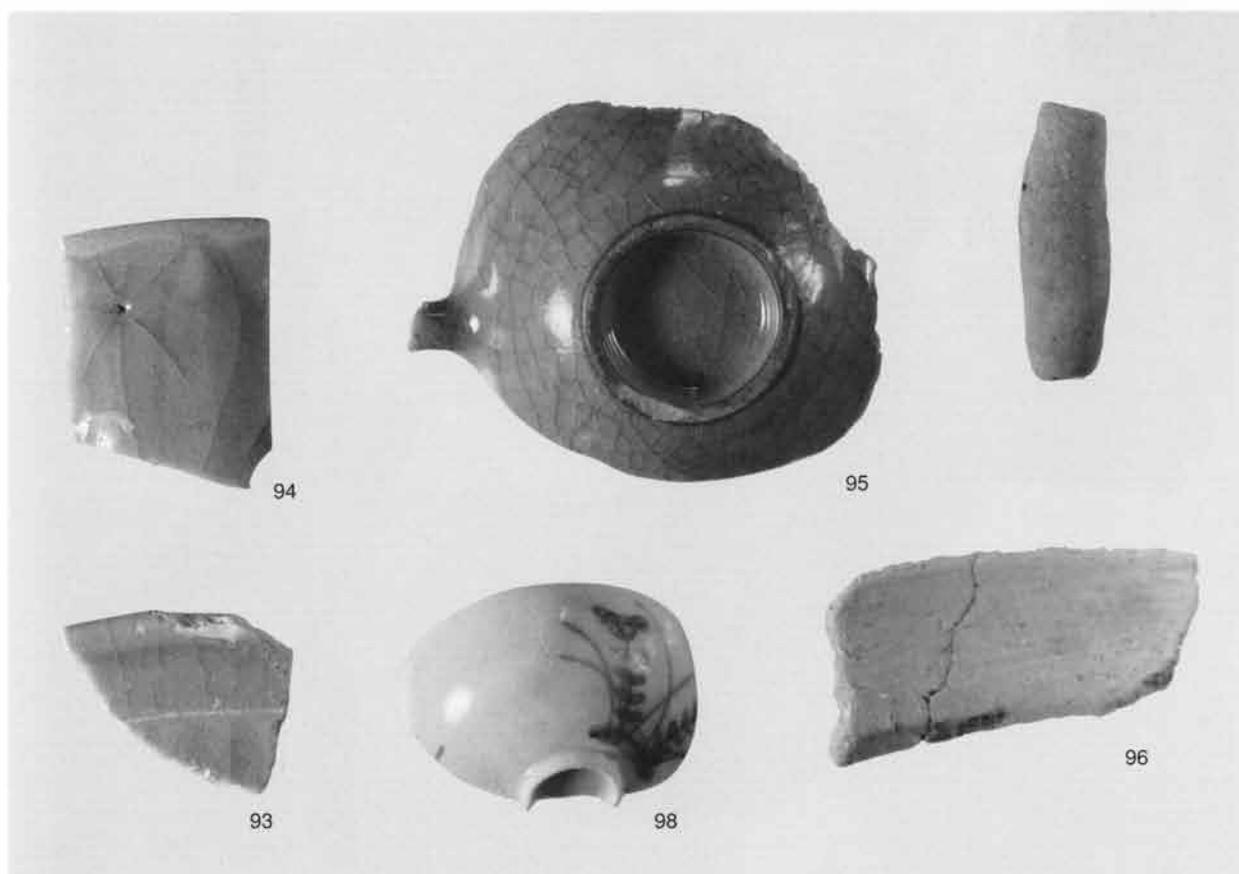
1. 9次調査出土遺物 1



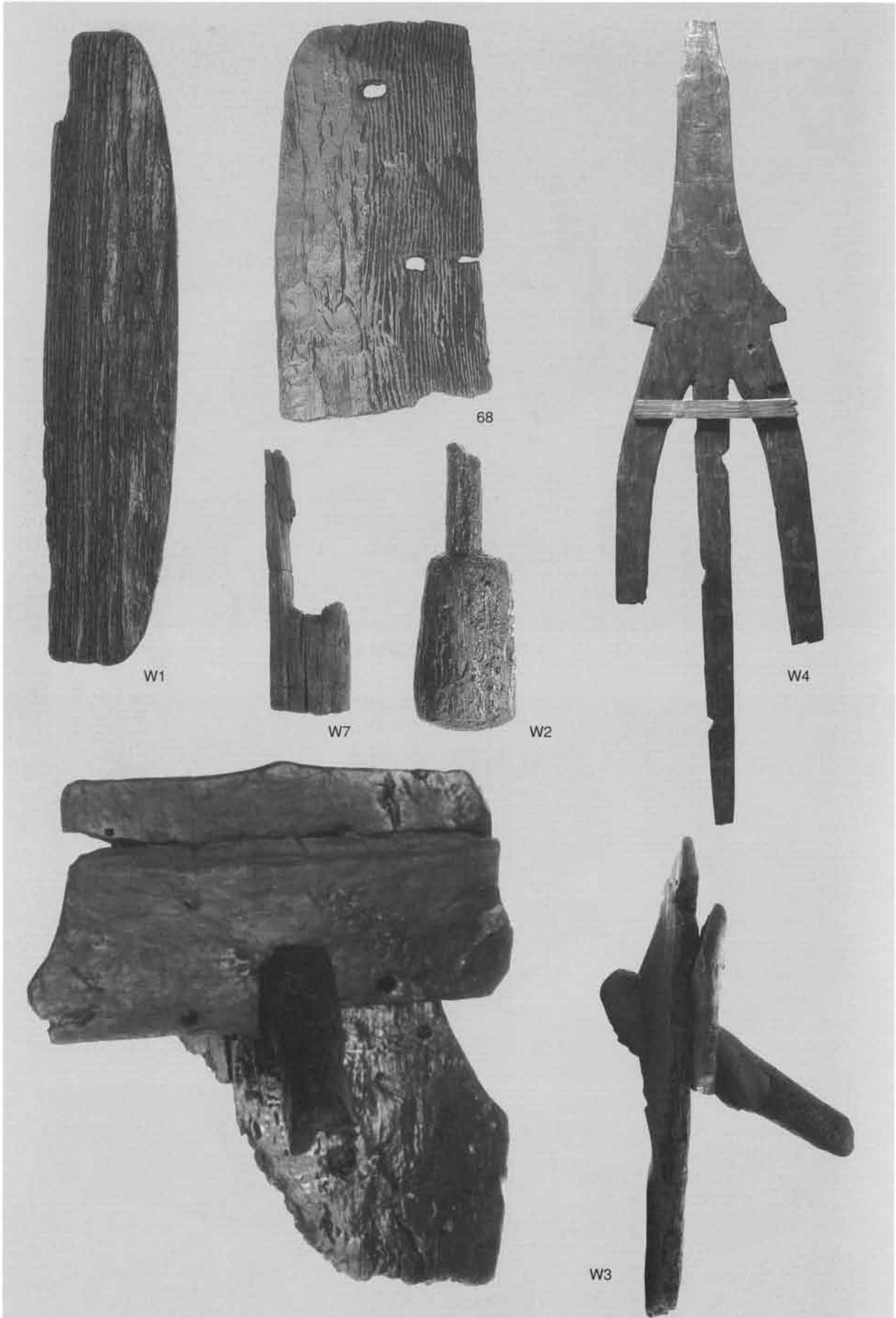
2. 9次調査出土遺物 2

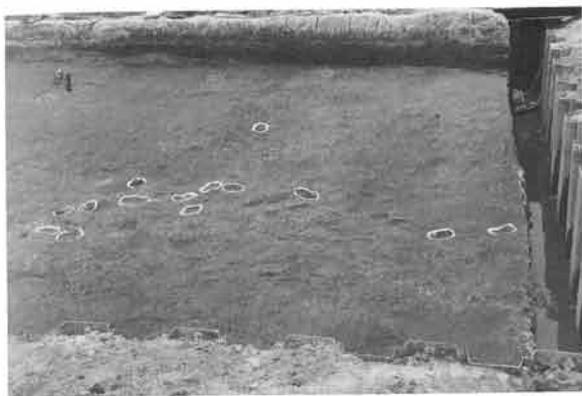


1. 9次調査出土遺物 3



2. 9次調査出土遺物 4





1. 足跡検出状況



2. 足跡検出状況 (木製鋤)



3. 足跡検出状況



4. 足跡検出状況



5. たき火跡状遺構



6. SK-01



7. 遺跡教室



1. SD-04 検出状況



2. SD-04 (北東側より)



3. SD-04 堆積状況



4. SD-04 (南西側より)



5. SD-04 石列



6. 目久美遺跡10次調査地点全景



1. SD-01



2. SD-02



3. SD-03



4. SD-05



5. SD-01、SD-02



6. SD-03



1. 岩盤検出状況



2. 岩盤検出状況



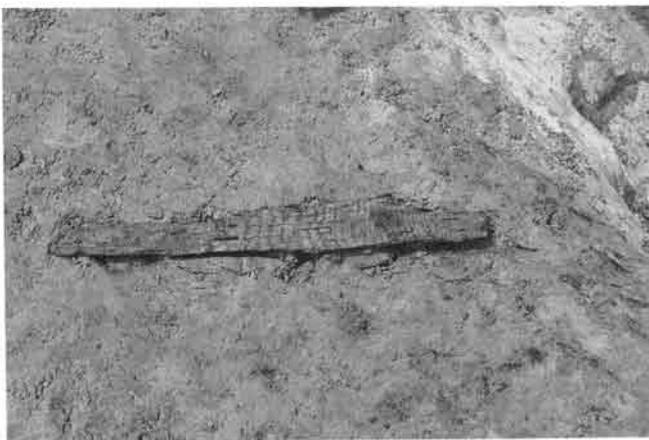
3. 遺物出土状況 (木製鋤)



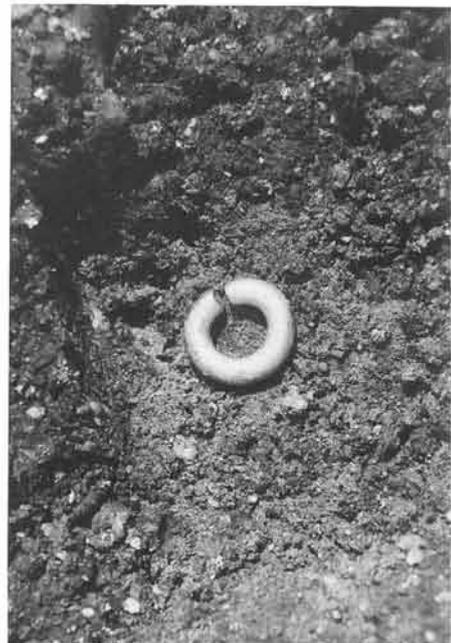
4. 遺物出土状況 (台付壺)



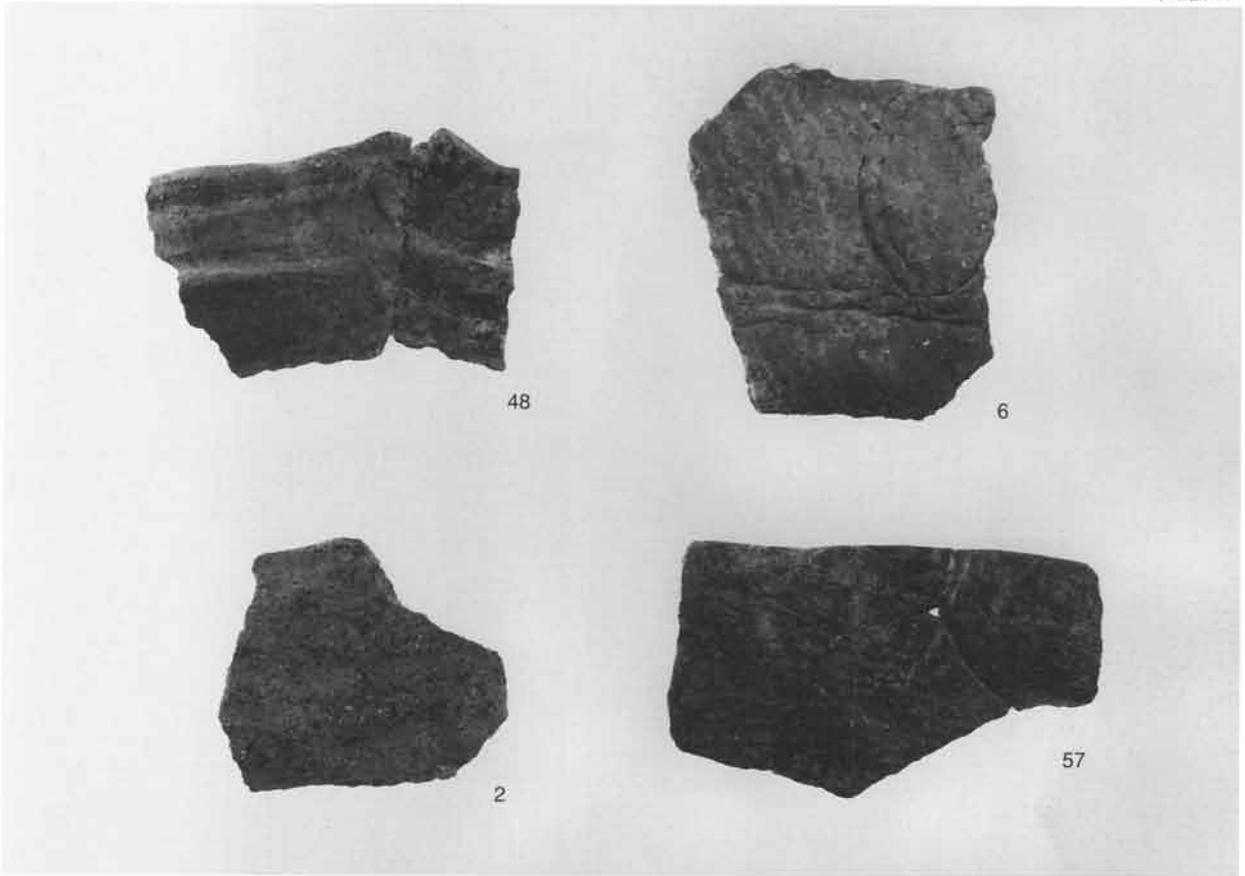
5. 遺物出土状況 (木製鋤)



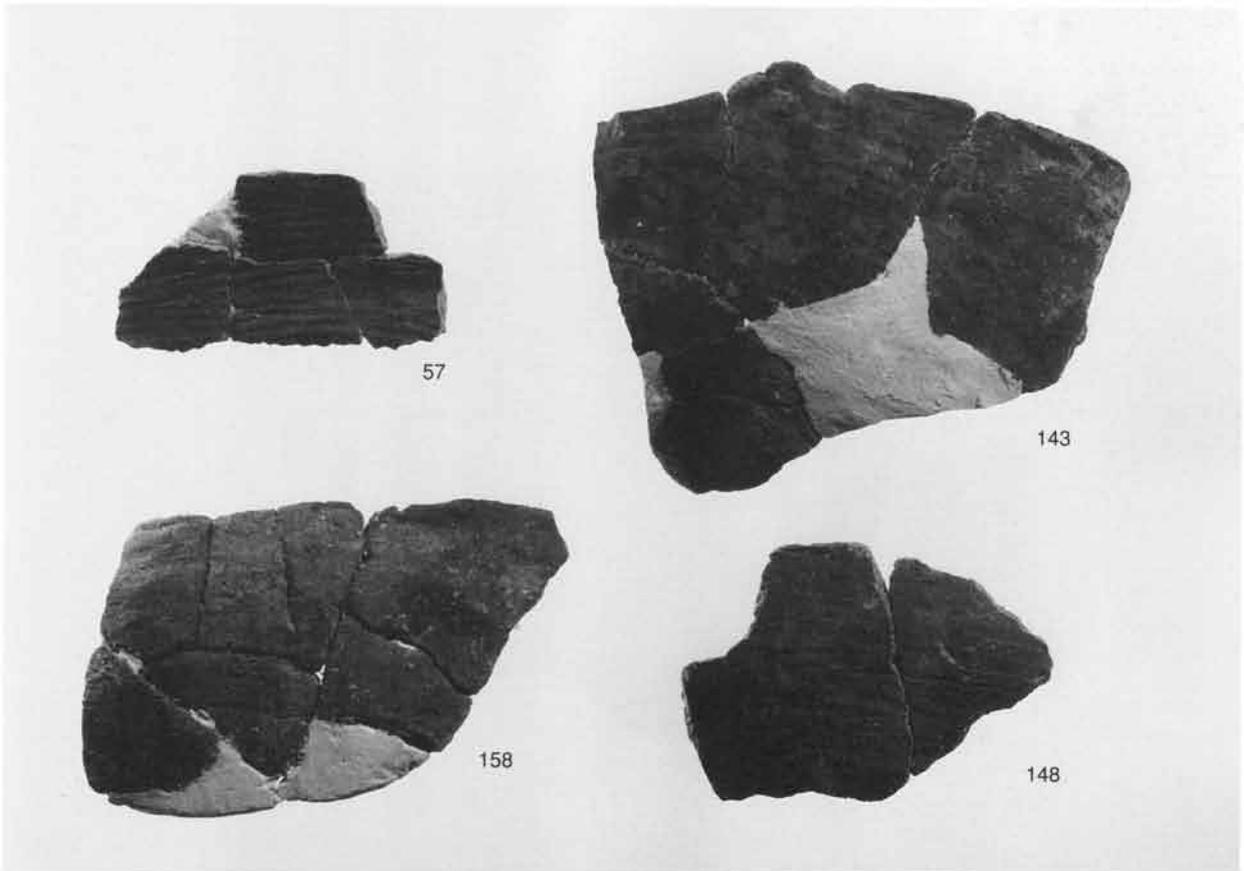
6. 遺物出土状況 (木製盾)



7. 遺物出土状況 (耳環)



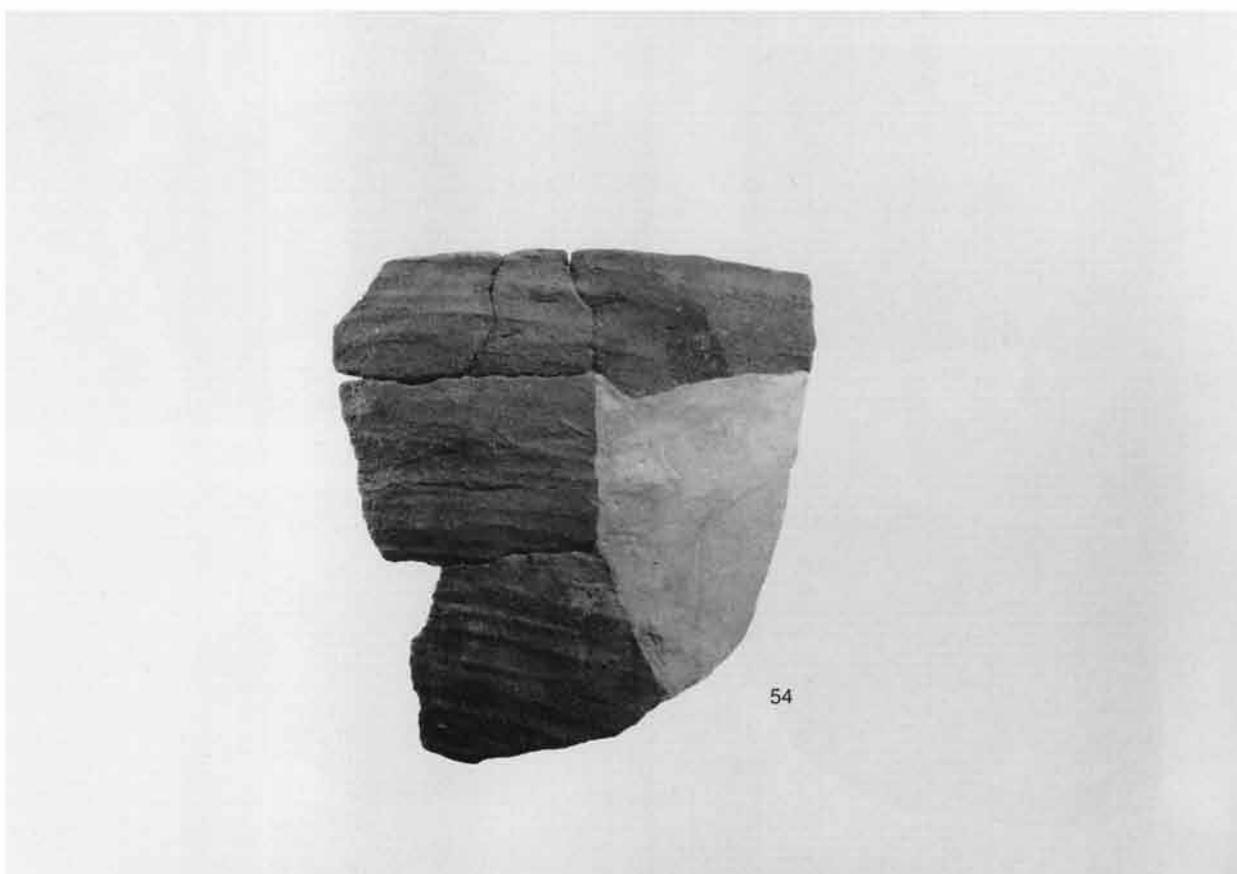
1. 10次調査出土遺物 1



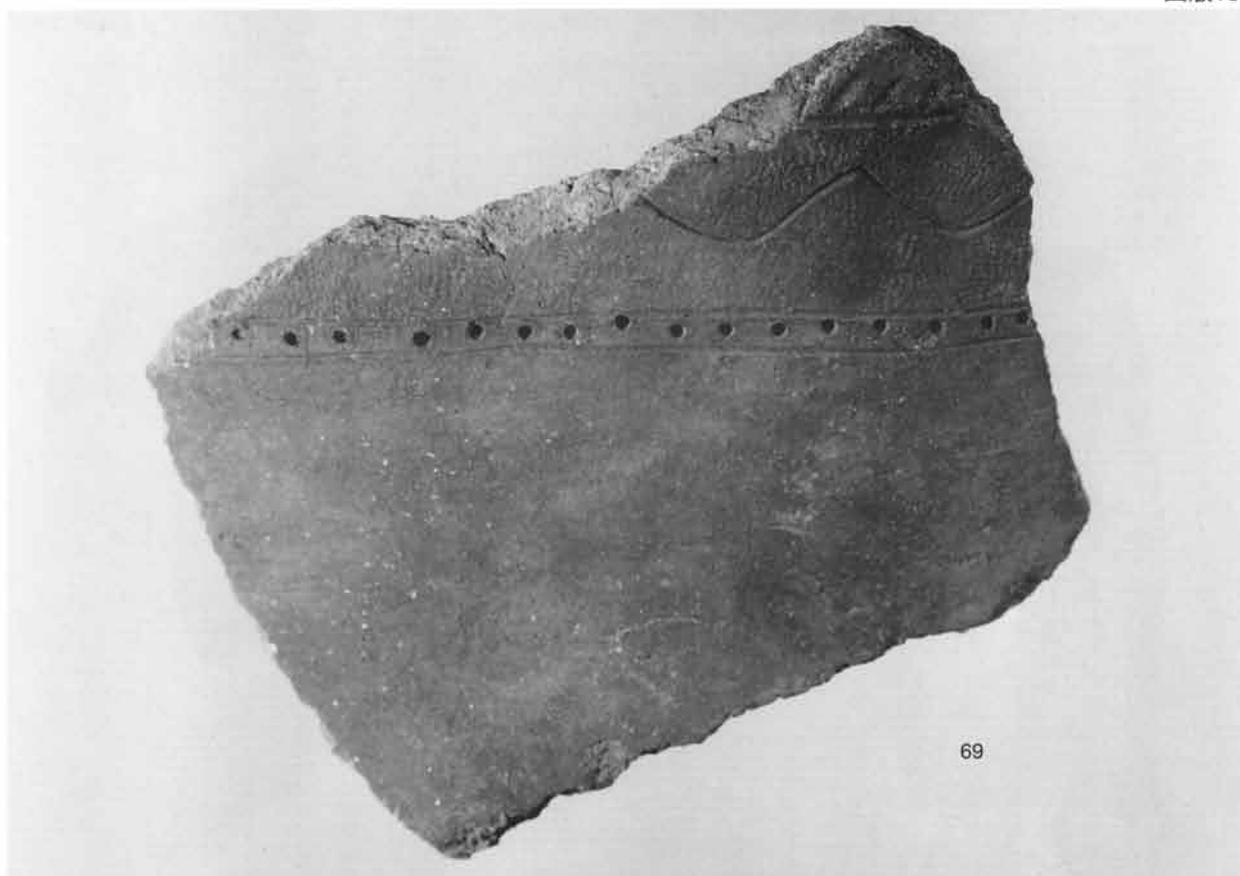
2. 10次調査出土遺物 2



1. 10次調査出土遺物 3

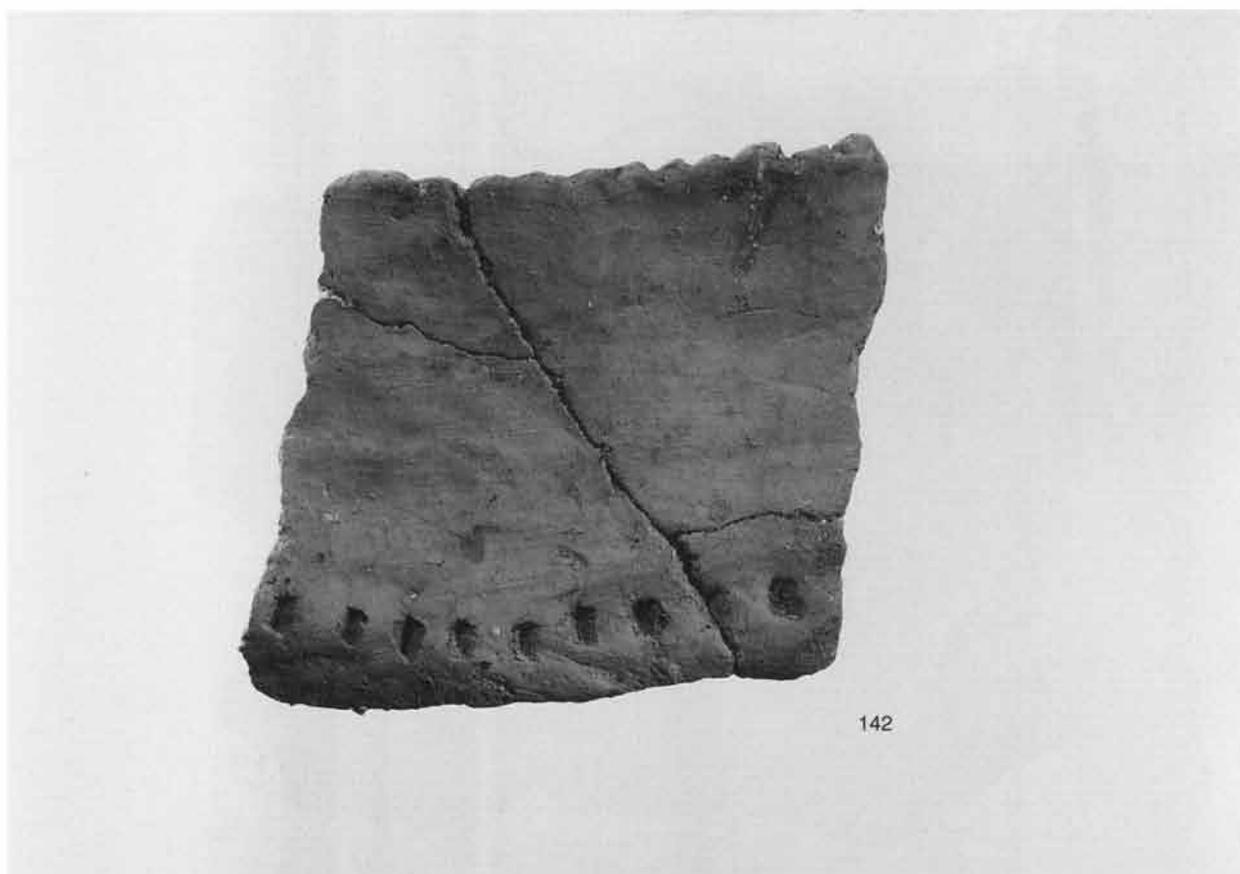


2. 10次調査出土遺物 4



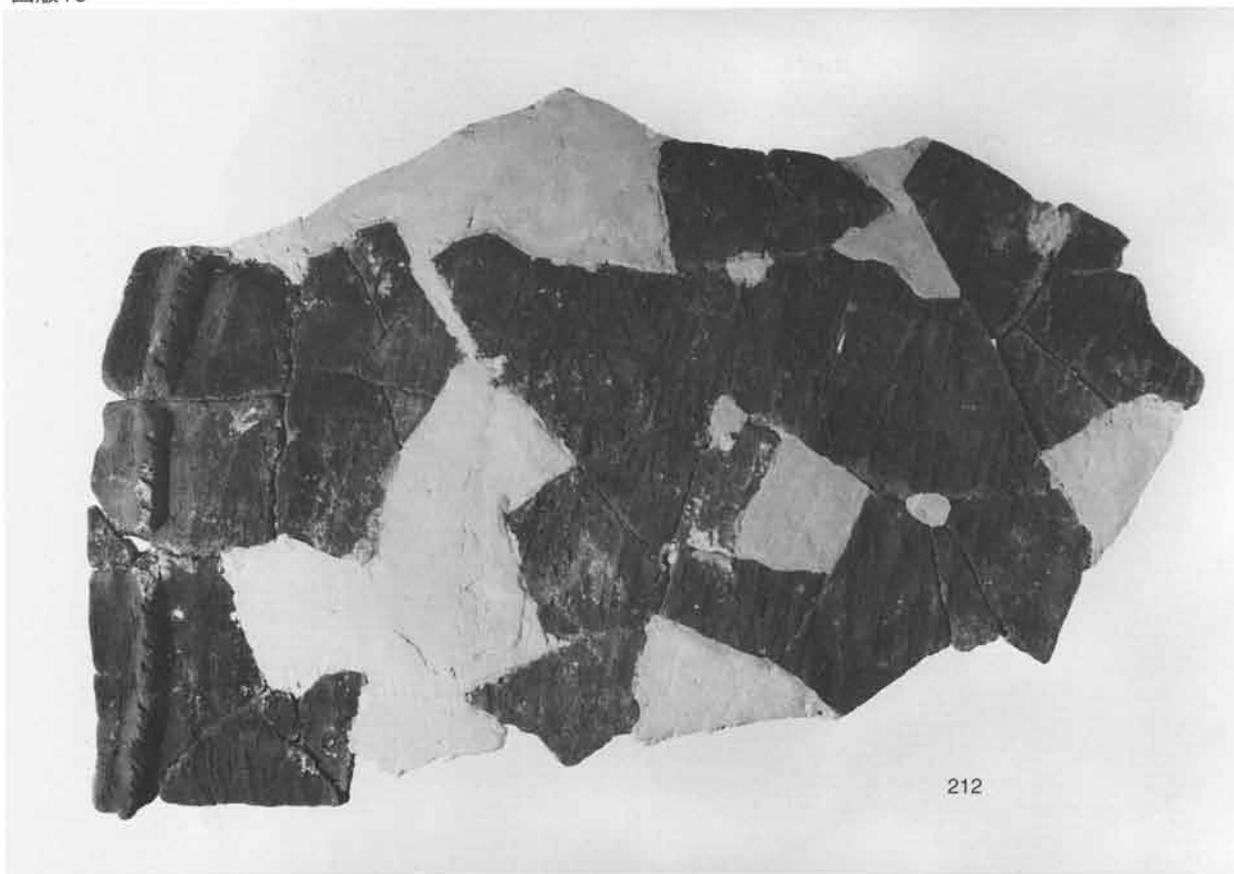
69

1. 10次調査出土遺物 5

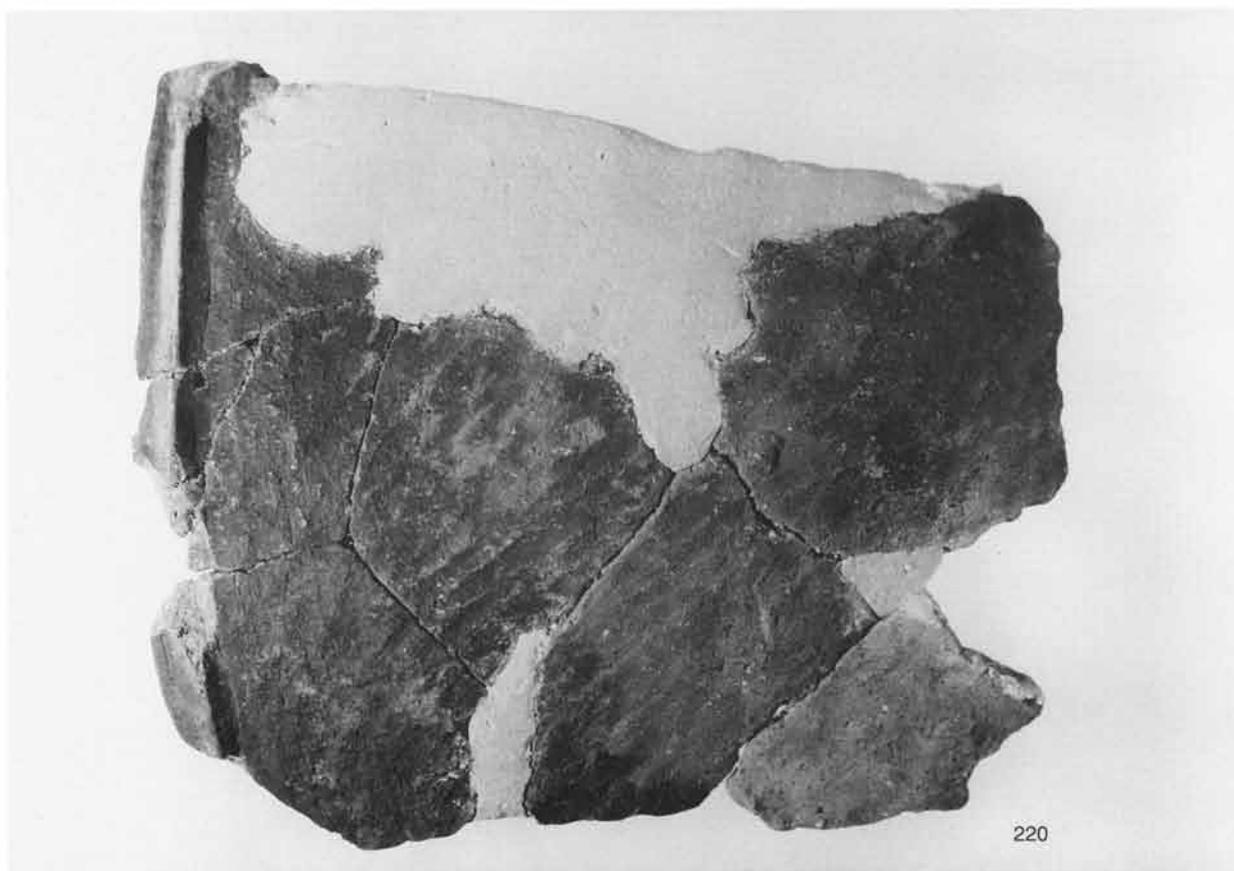


142

2. 10次調査出土遺物 6



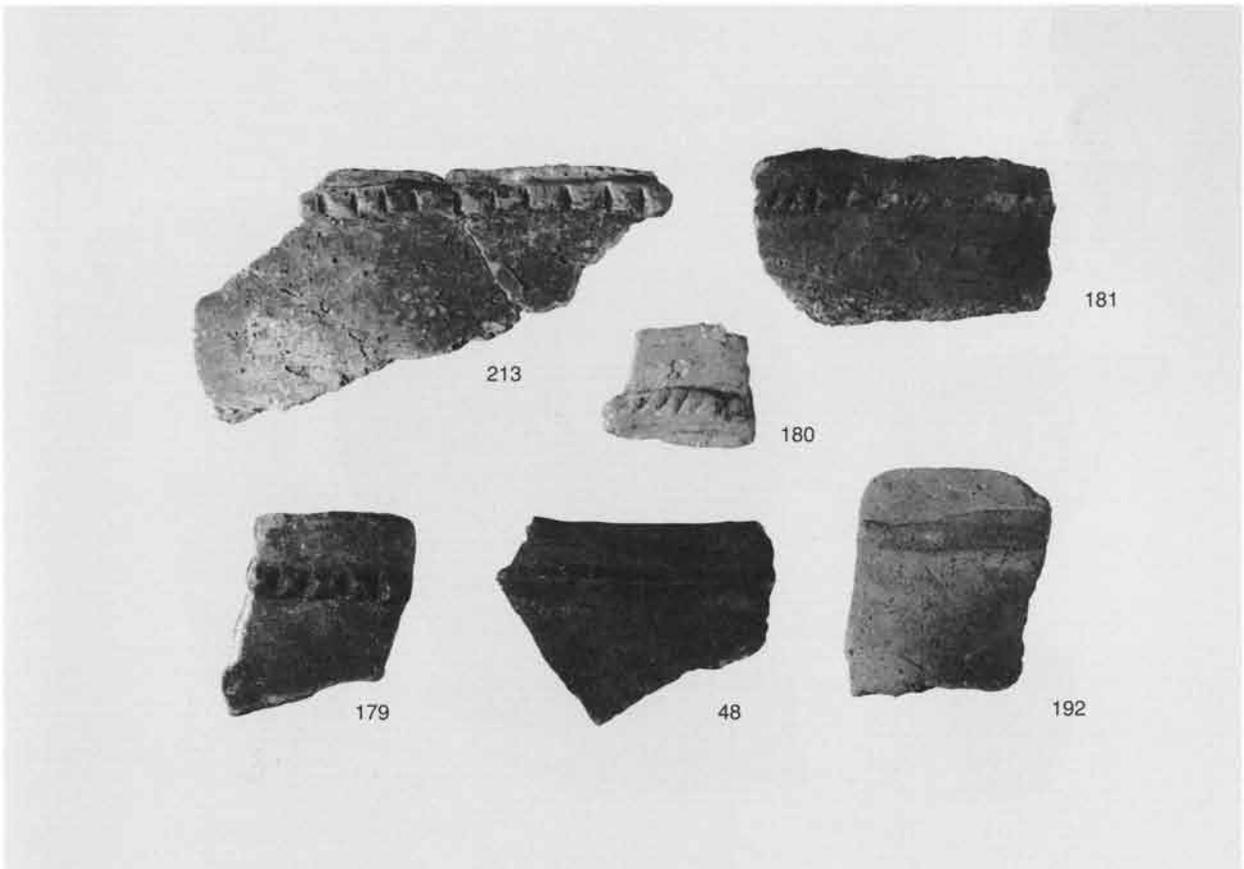
1. 10次調査出土遺物 7



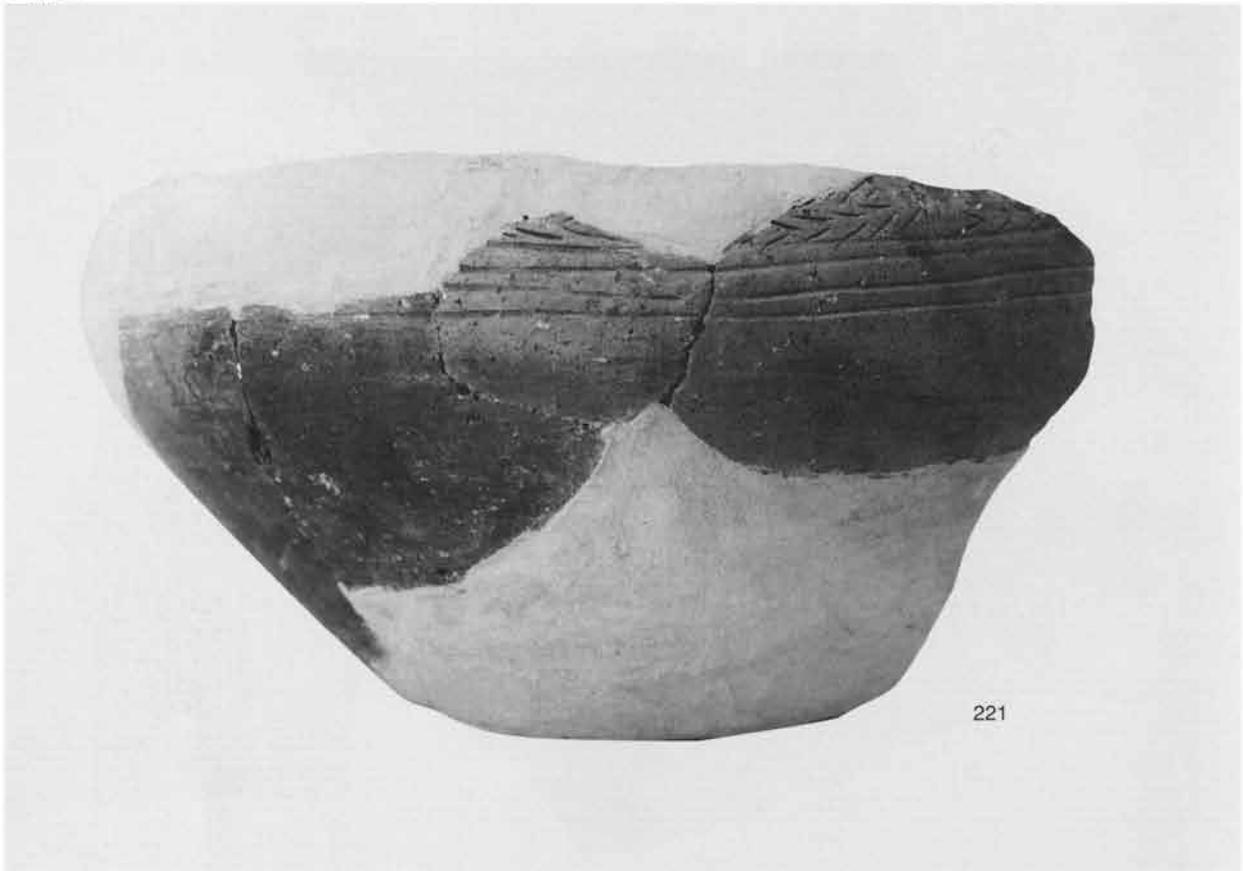
2. 10次調査出土遺物 8



1. 10次調査出土遺物 9



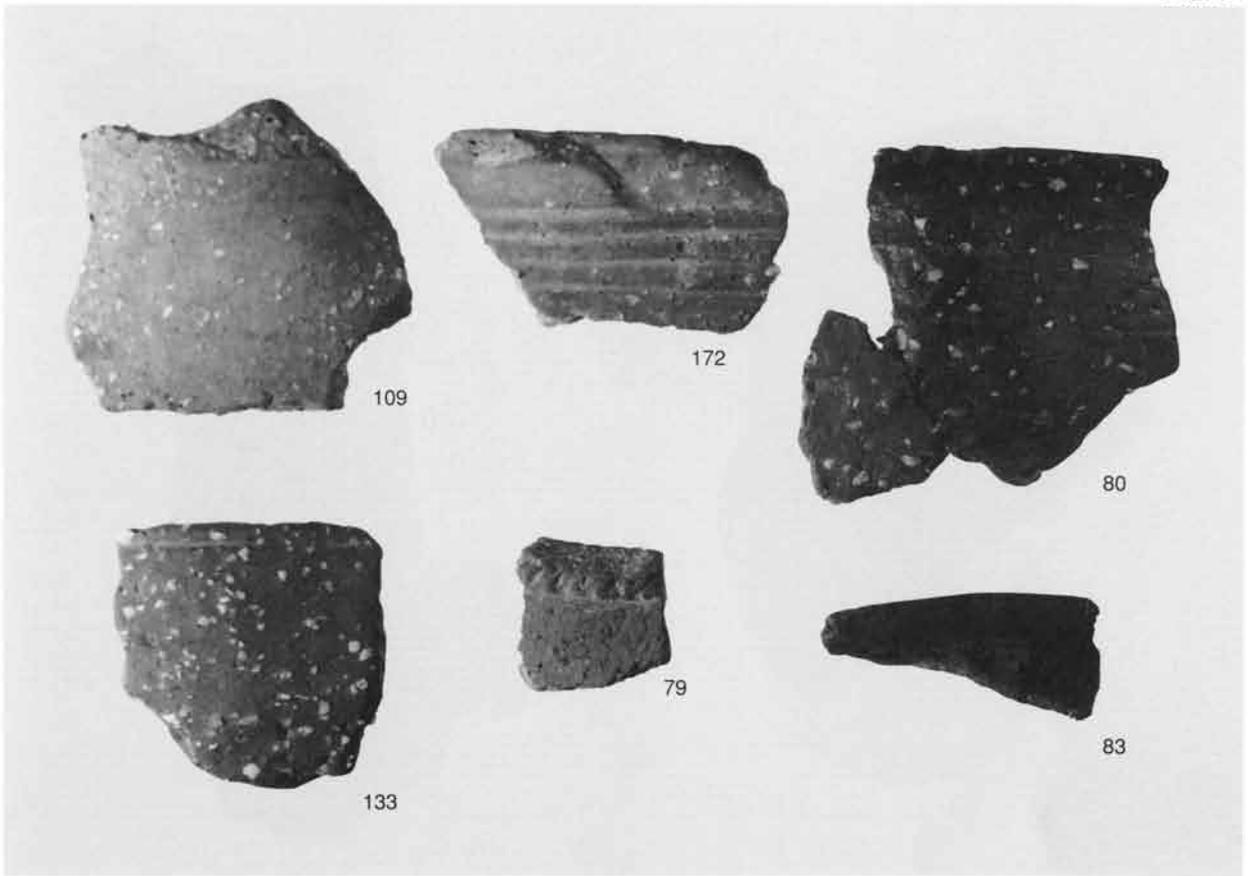
2. 10次調査出土遺物 10



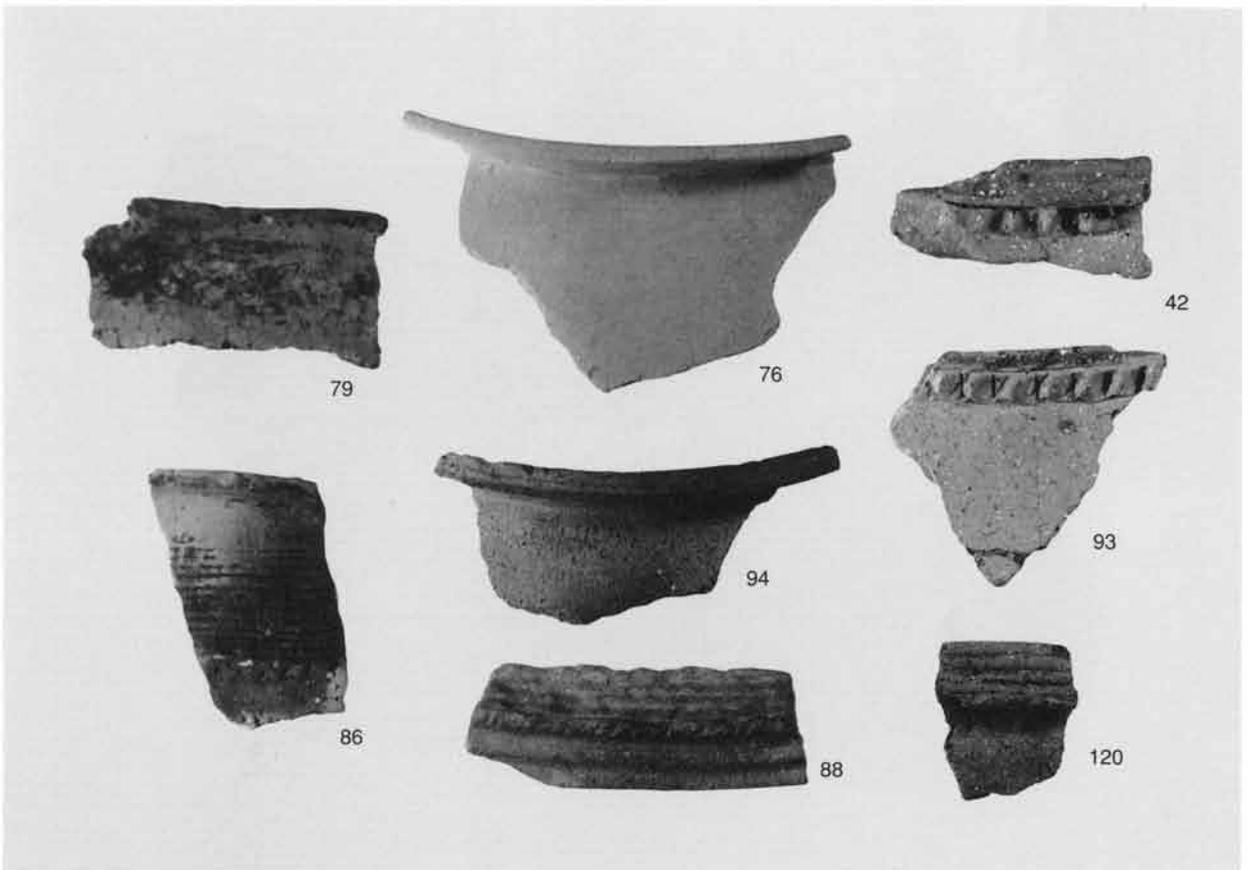
1. 10次調査出土遺物11



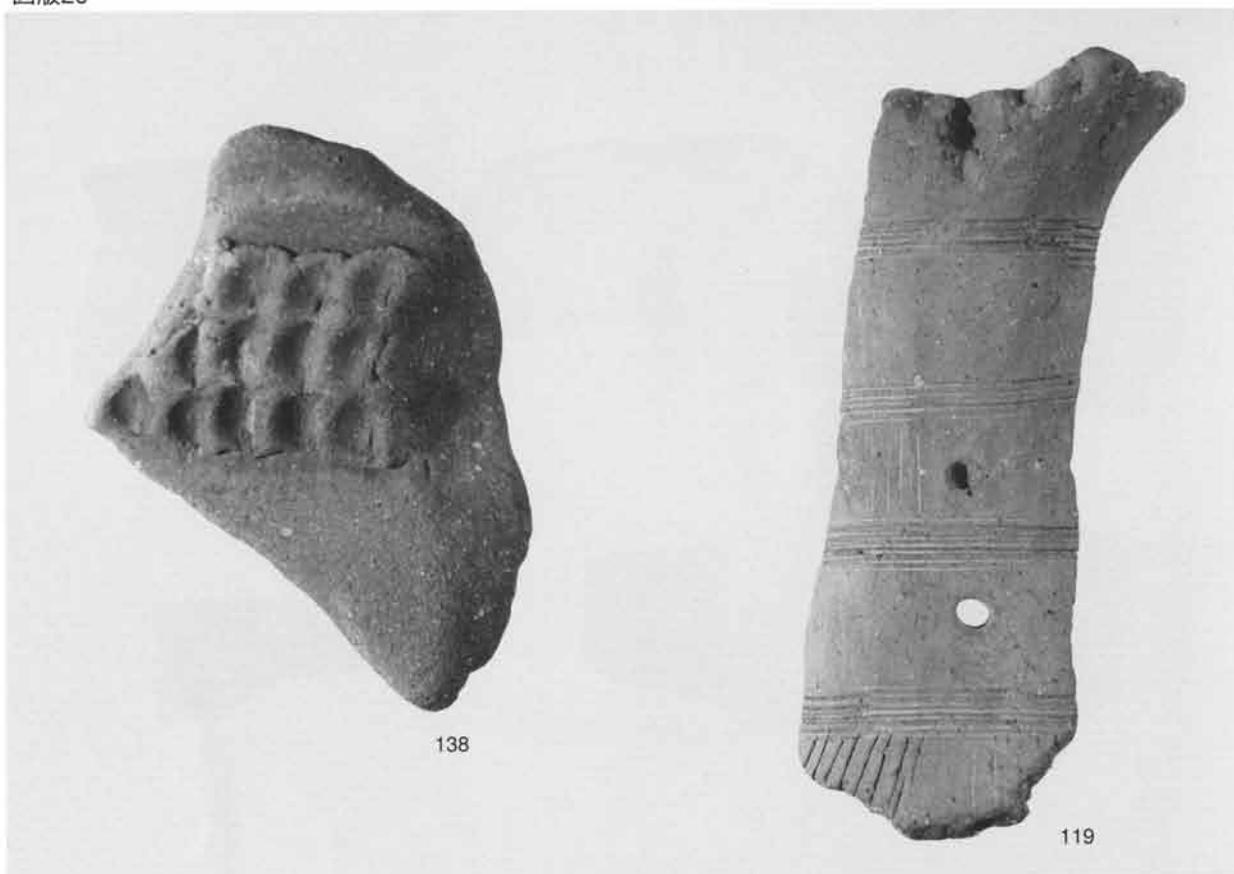
2. 10次調査出土遺物12



1. 10次調査出土遺物13



2. 10次調査出土遺物14



138

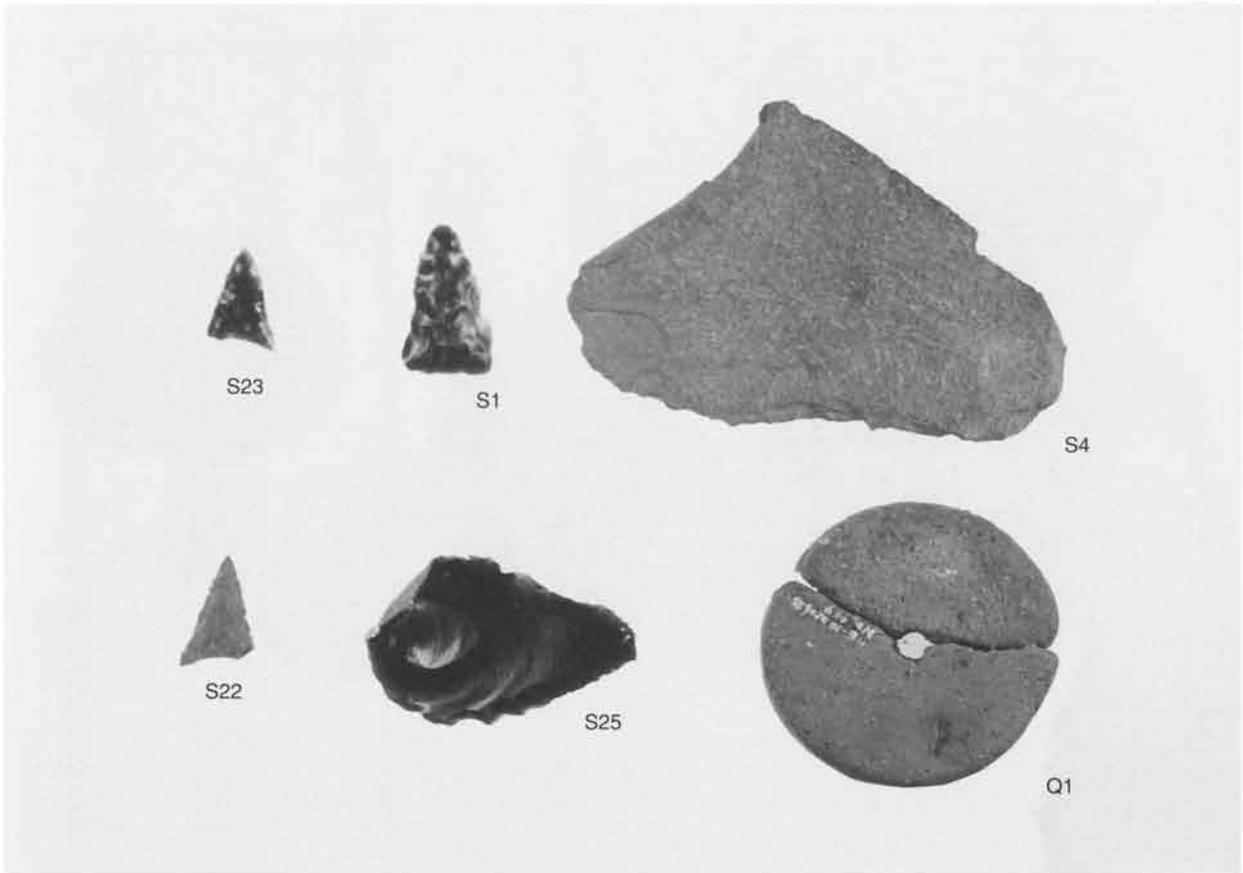
119

1. 10次調査出土遺物15

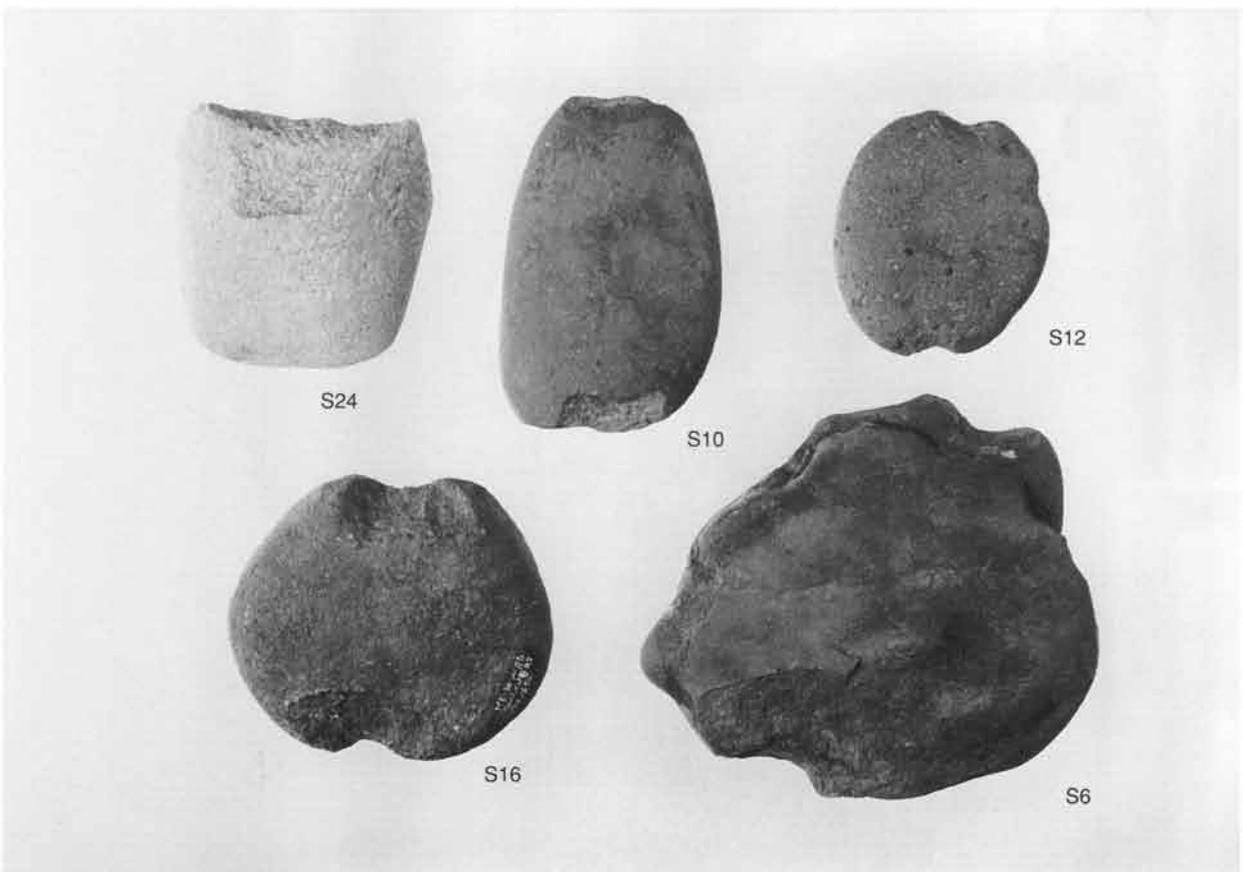


233

2. 10次調査出土遺物16



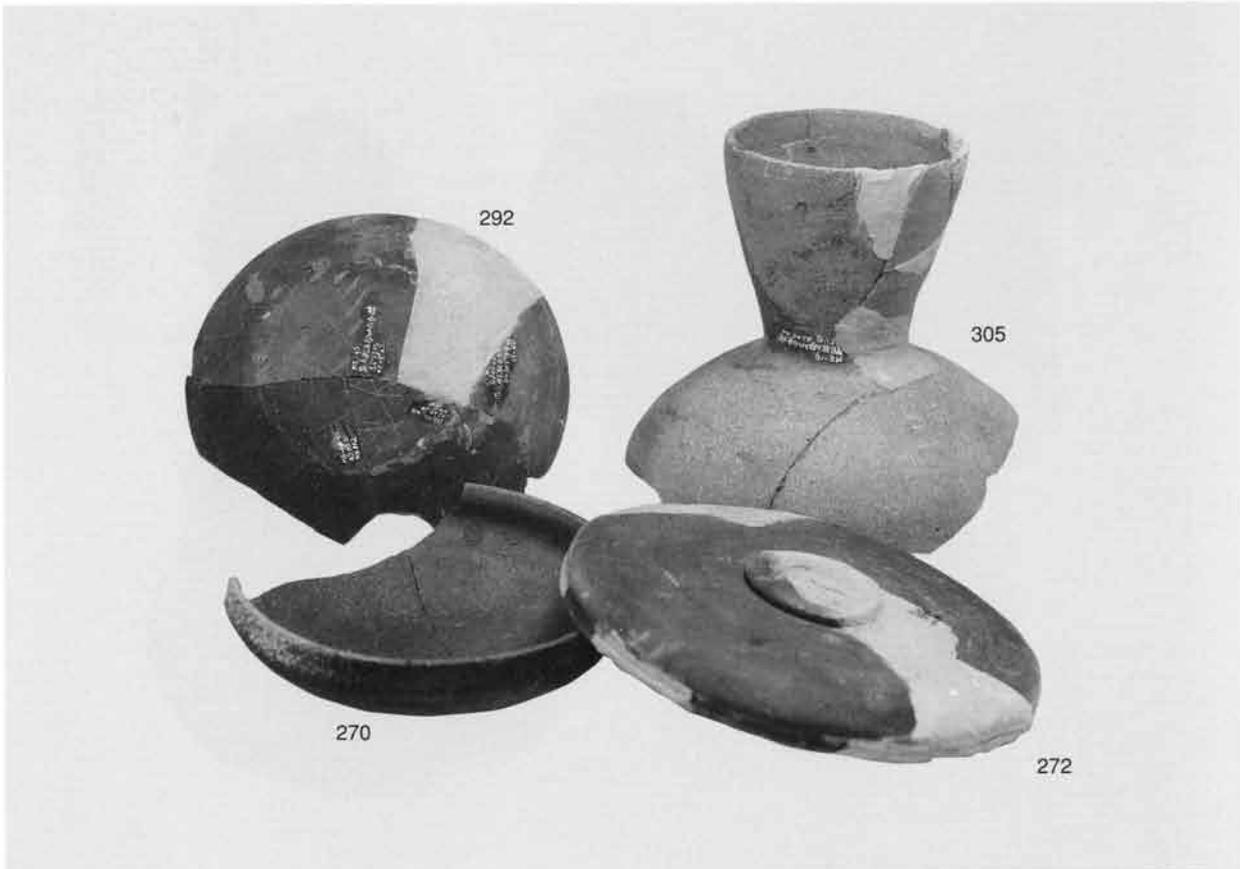
1. 10次調査出土遺物17



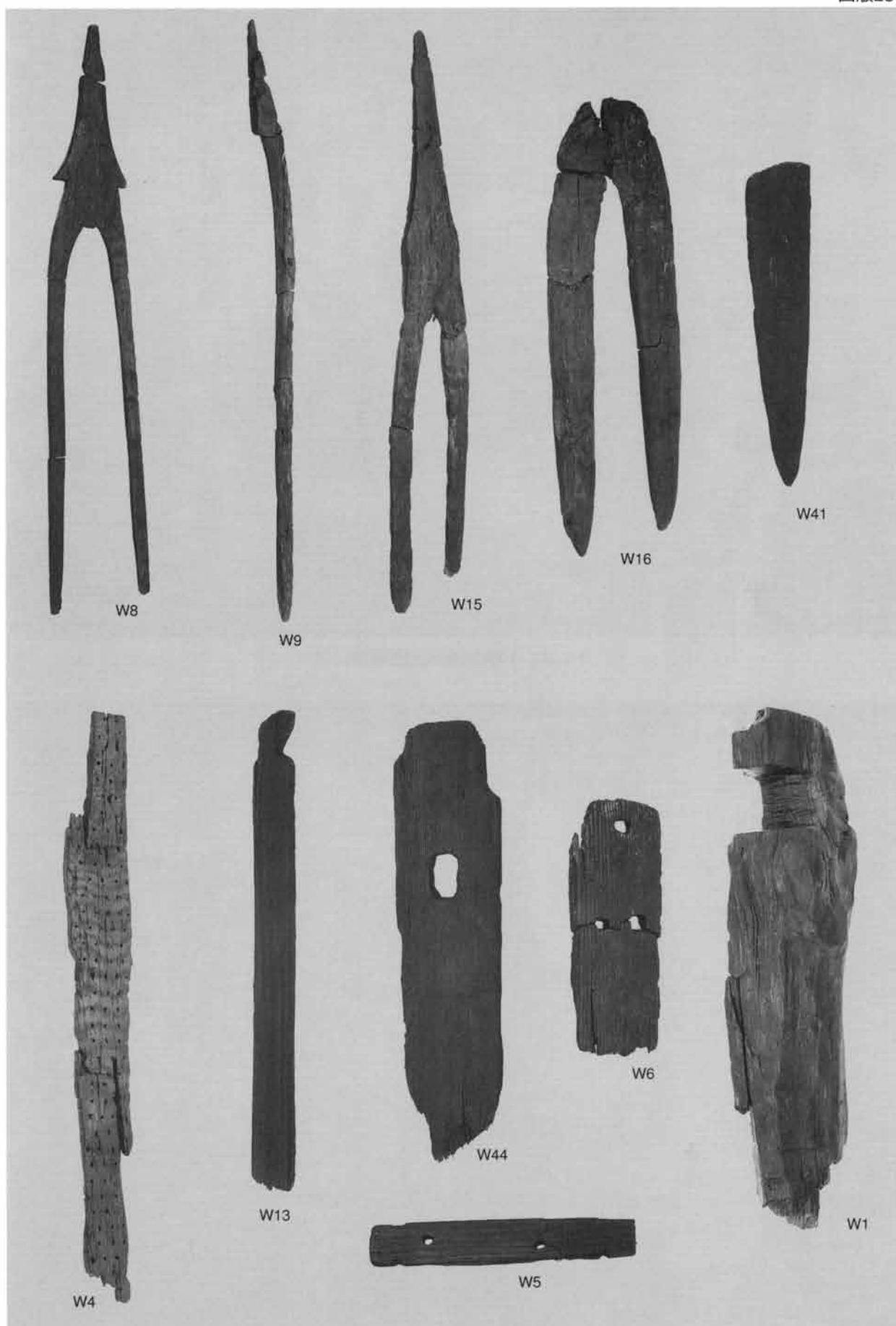
2. 10次調査出土遺物18



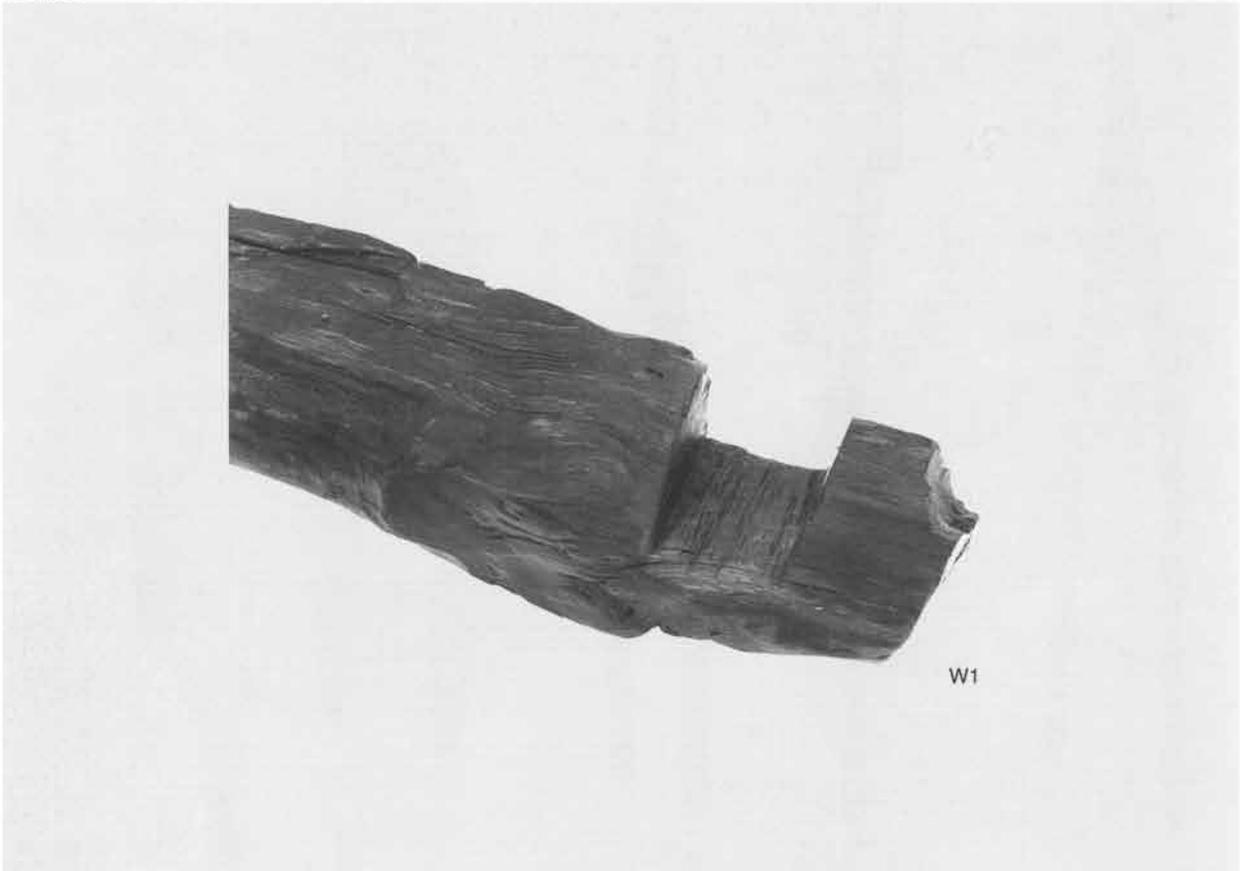
1. 10次調査出土遺物19



2. 10次調査出土遺物20



10次調査出土遺物21



1. 10次調査出土遺物22



1. 海成層中の石出土状況（西より）



2. 海成層上面の足跡（南西より）



1. 洪水堆積層断面 (南より)



2. 古墳時代前期の足跡 (北西より)



1. 古墳時代後期水田の検出状況（南東より）



2. 古墳時代後期水田の畦畔（南東より）



1. 海成層の調査状況（西より）



5. 土器9出土状況（北東より）



2. 海成層の断面（南より）



6. 土器2出土状況（南東より）



3. 海成層上面の足跡検出状況（南西より）



7. 木製品1、2出土状況（東より）



4. 海成層上面の足跡（南より）



8. 弥生時代の足跡（南東より）



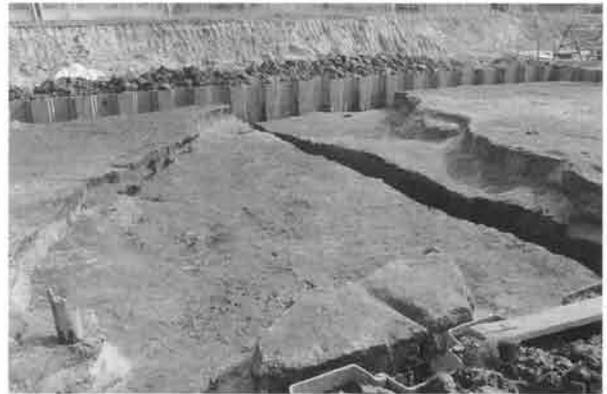
1. 古墳時代前期の足跡検出状況（南東より）



5. 水路1（北西より）



2. 古墳時代後期水田の畦畔検出状況（南東より）



6. 水路2（北より）



3. 土坑3（北より）



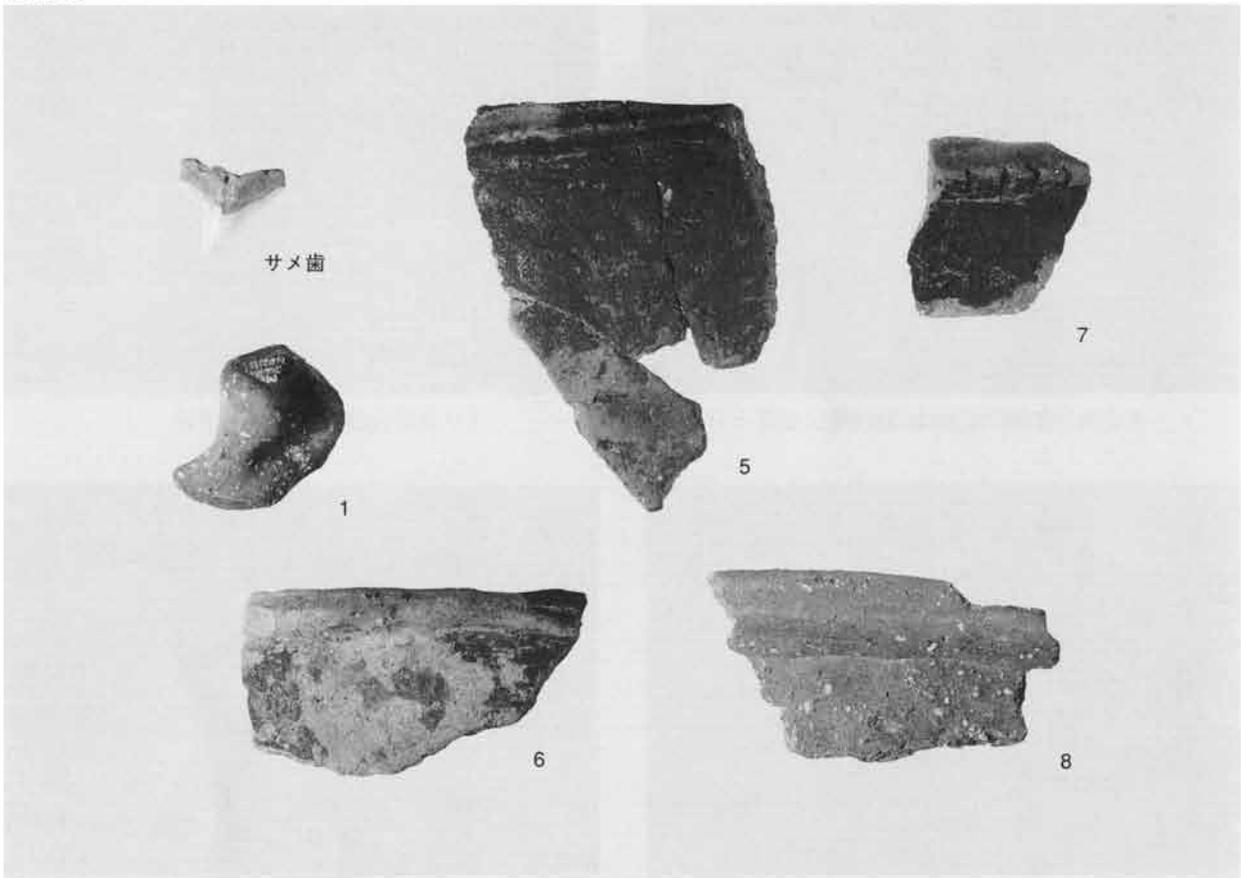
7. 水路3（北西より）



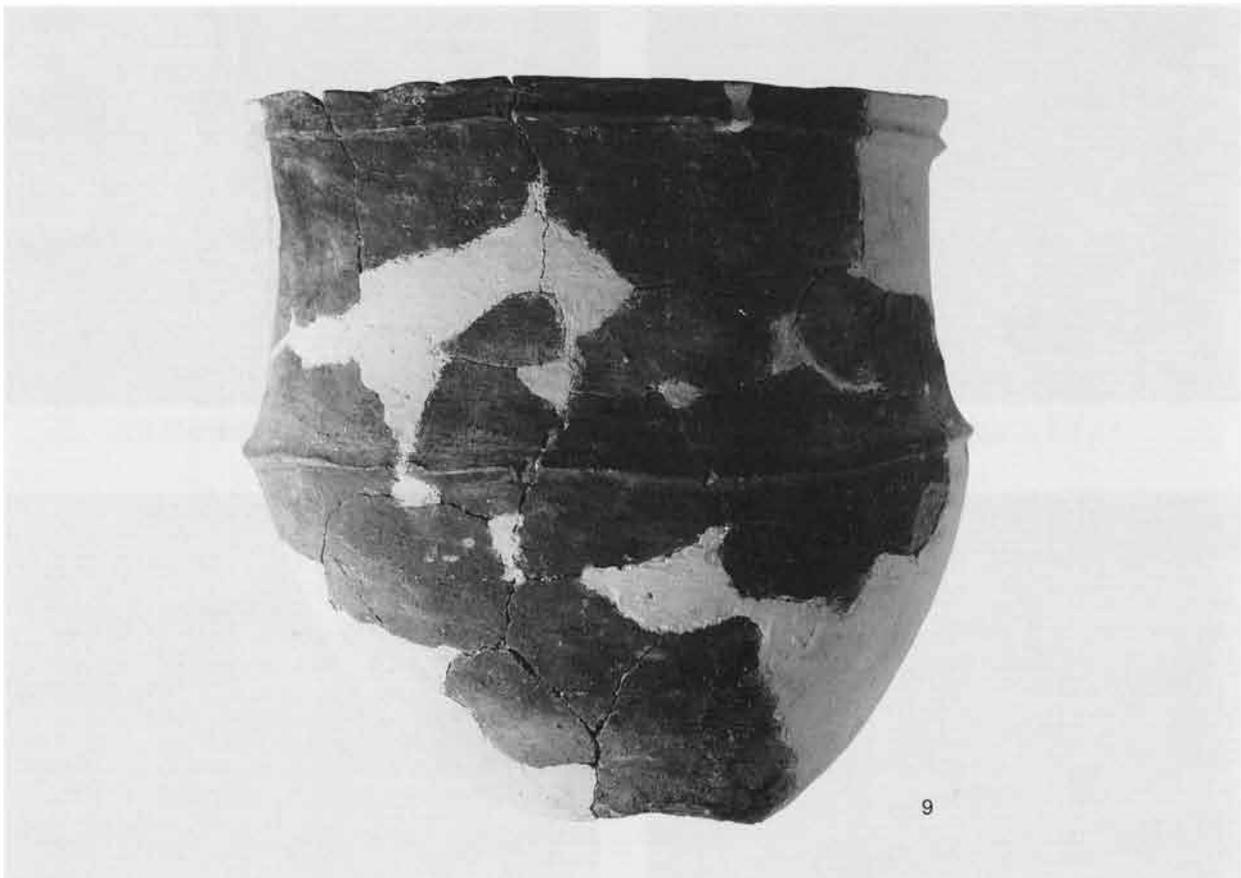
4. 土坑4（北より）



8. 調査地全景（南西より）



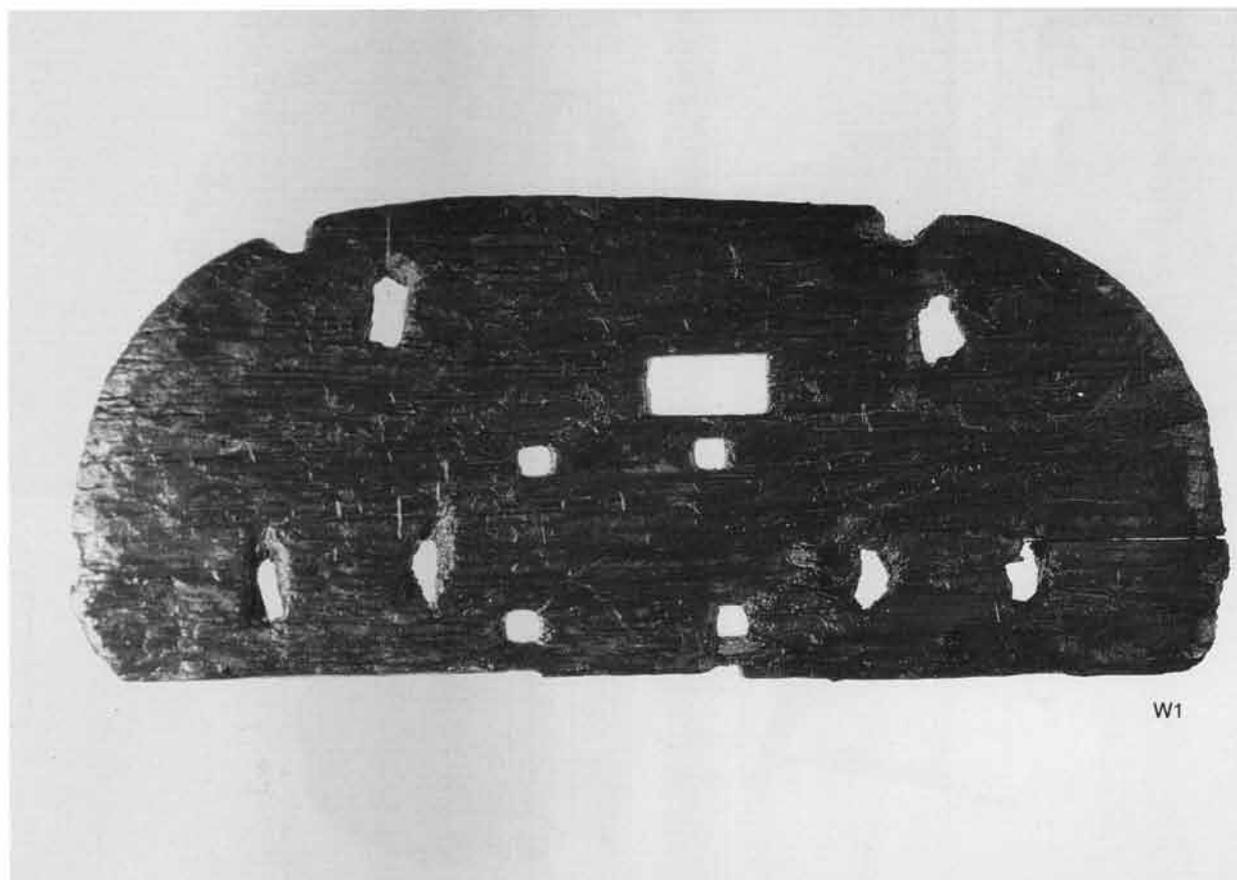
1. 第10次調査第2工区、13層出土遺物



2. 第10次調査第2工区、13層出土遺物



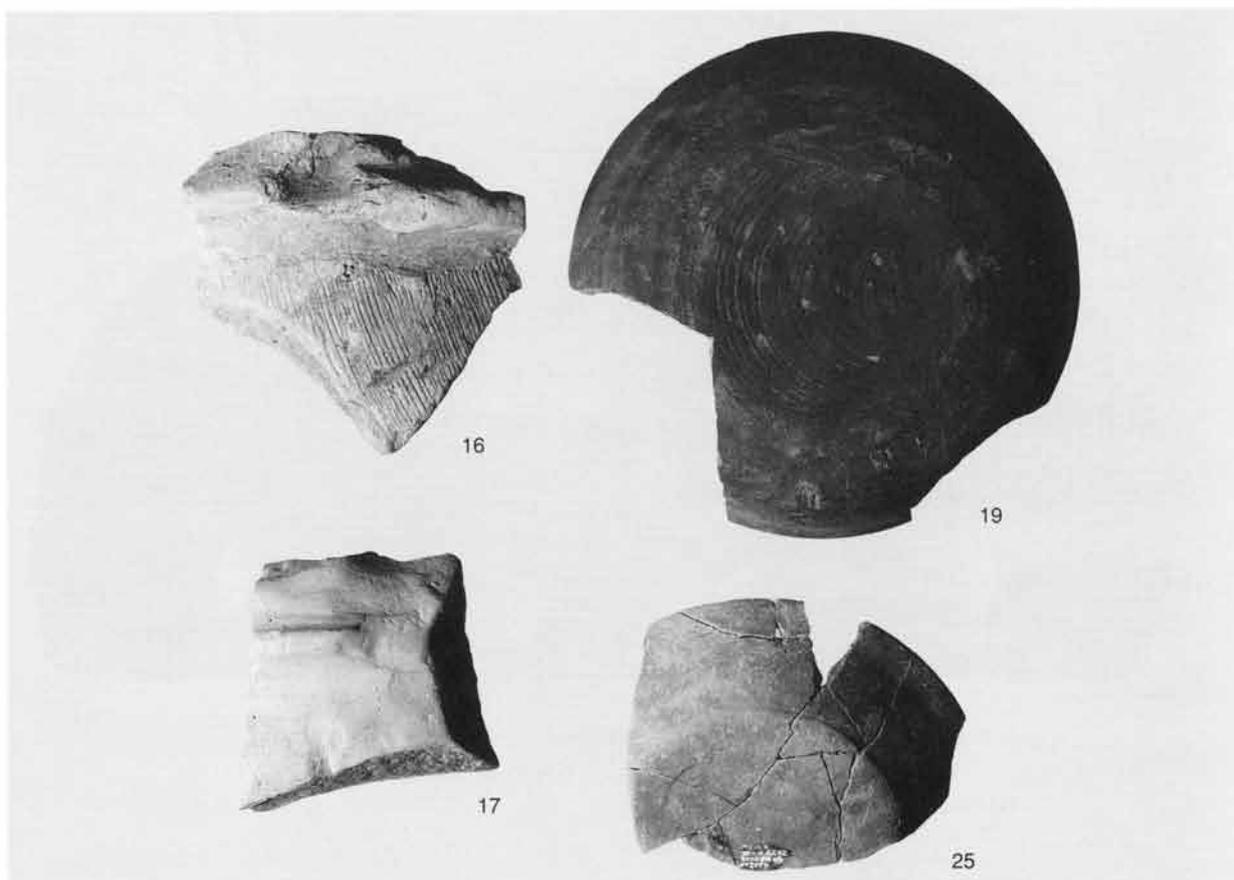
1. 第10次調査第2工区、13層出土遺物



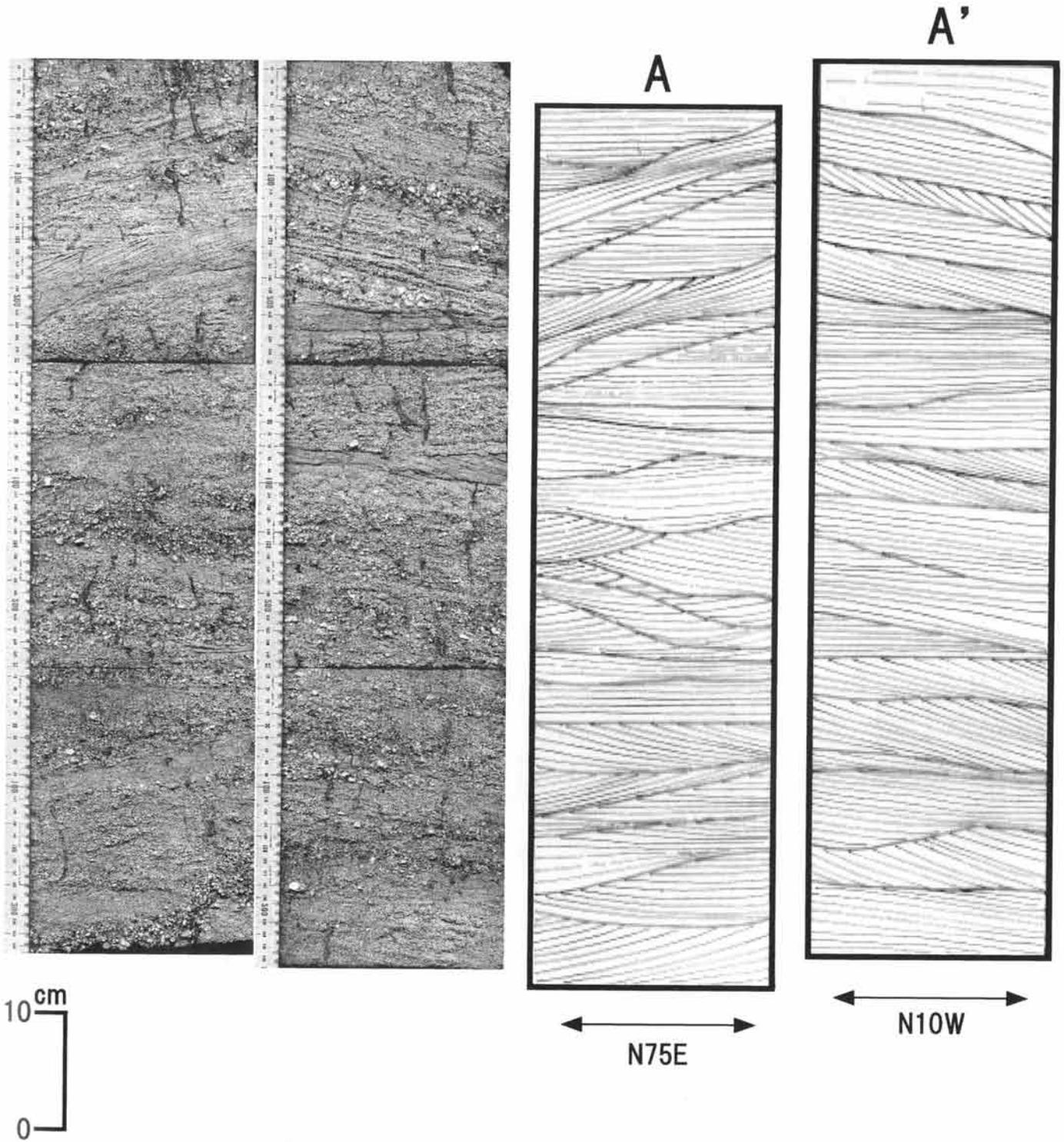
2. 第10次調査第2工区、13層出土遺物



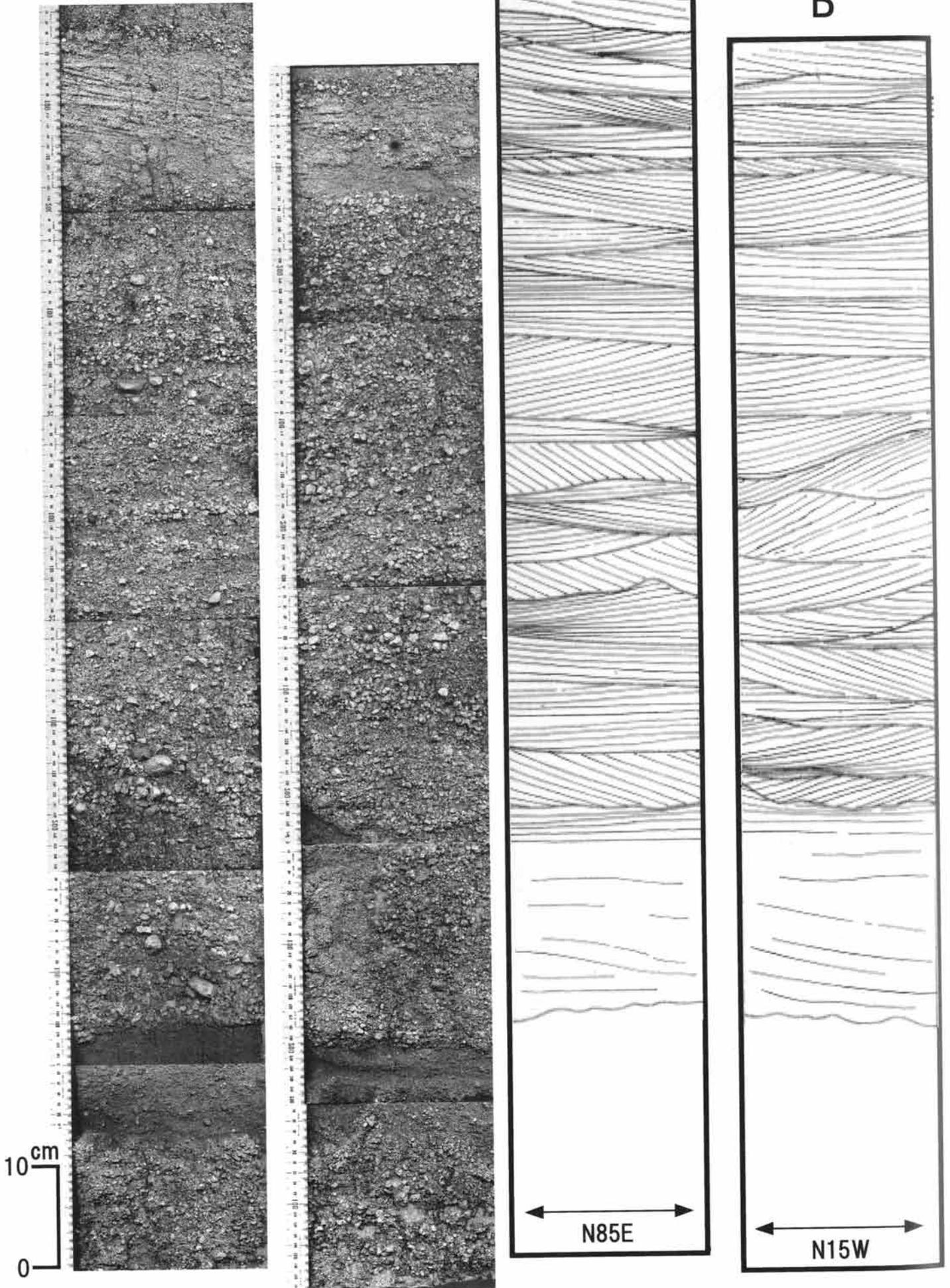
1. 第10次調査第2工区、水路2出土遺物



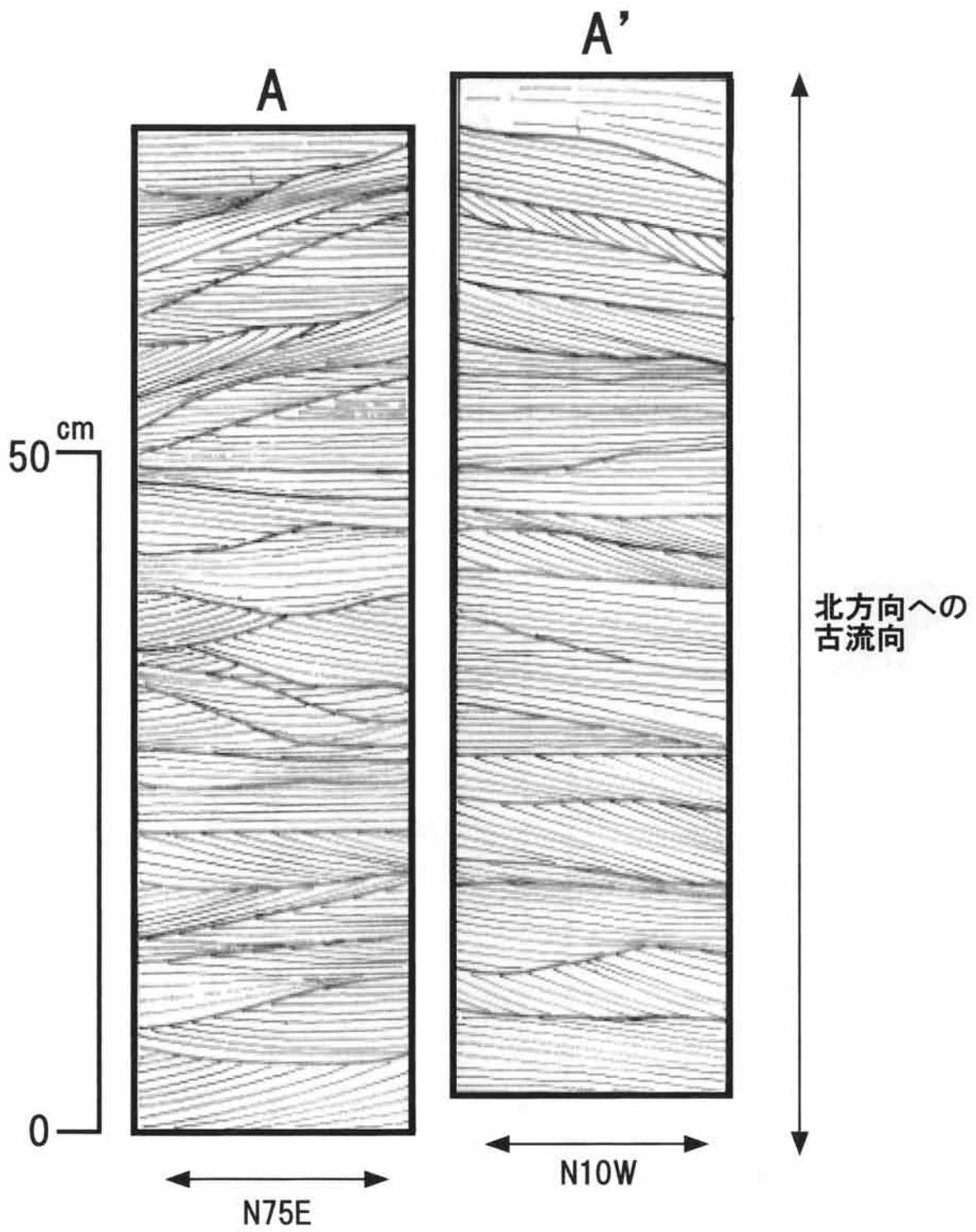
2. 第10次調査第2工区、水路2出土遺物



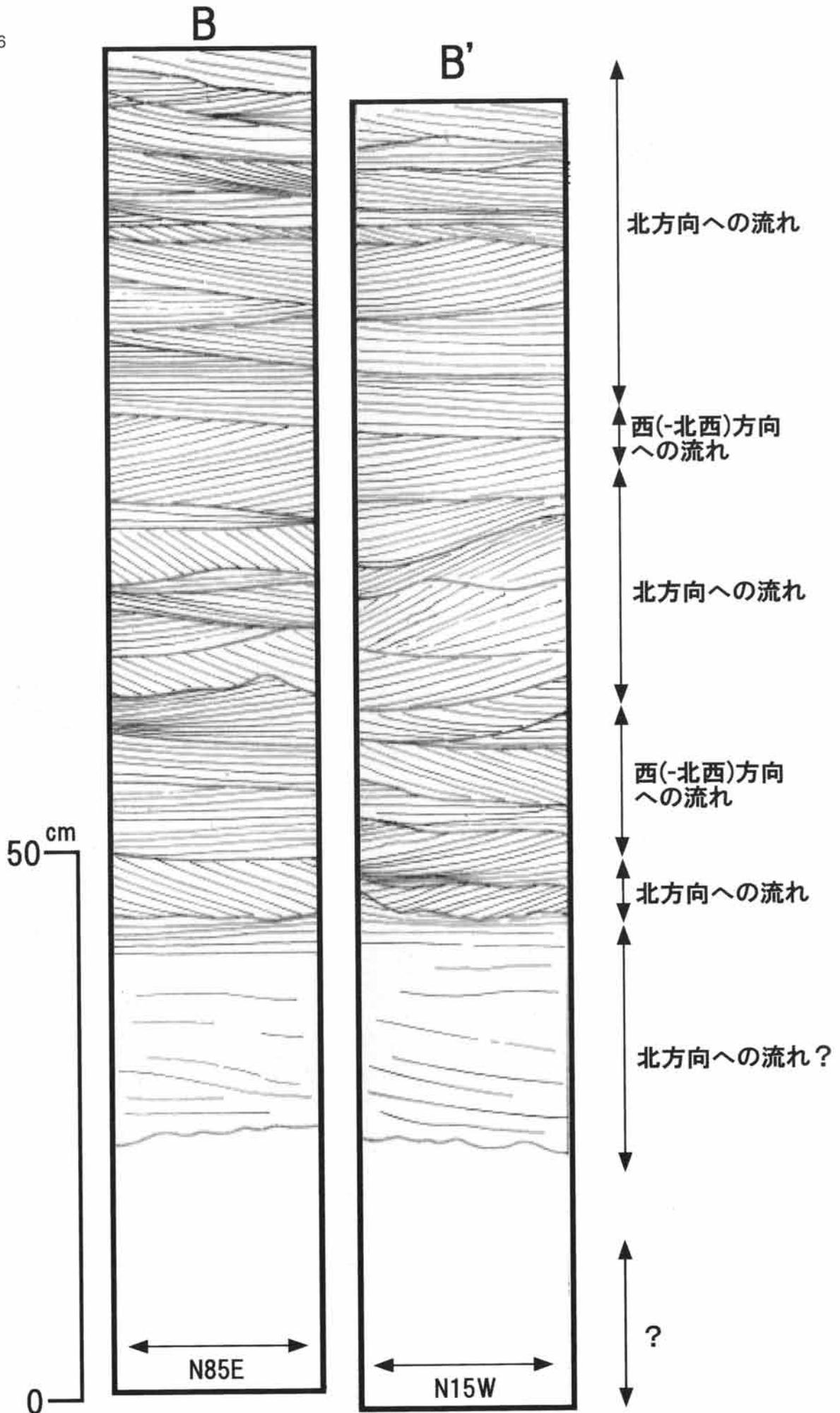
上部断面A・A'の地層の剥ぎ取り断面と堆積構造の特徴



断面B・B'の剥ぎ取り断面の様子と堆積構造の特徴

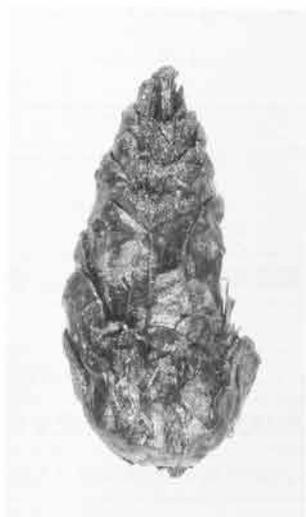


A・A' の堆積相と古流向





1 マツ属複維管束亜属毬果
——5.0mm



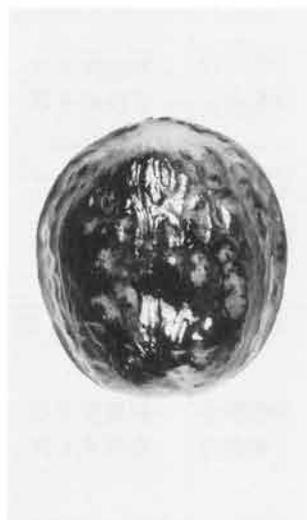
2 マツ属複維管束亜属毬果
——5.0mm



3 コナラ属アカガシ亜属果実
——5.0mm



4 コナラ属アカガシ亜属果実
——5.0mm



5 オニグルミ核
——5.0mm



6 オニグルミ核
——5.0mm



7 エゴノキ核
——5.0mm



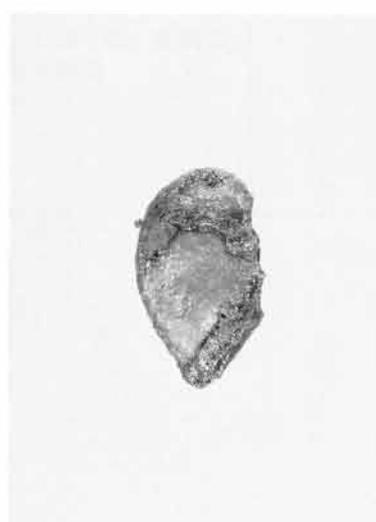
8 エゴノキ核
——5.0mm



9 ハクウンボク核
——5.0mm



10 ハクウンボク核
——5.0mm



11 ウリ科種子
——5.0mm

報告書抄録

| ふりがな | めぐみいせき区・X | | | | | | | |
|---------------------------|--|--|------|----------------------|--------------------|--|--------------------|------|
| 書名 | 目久美遺跡区・X | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | (財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 45 | | | | | | | |
| 編著者名 | 平木裕子 佐伯純也 | | | | | | | |
| 編集機関 | (財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1 TEL0859-22-7209 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2003年3月31日 | | | | | | | |
| 所在遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| めぐみいせき
目久美遺跡
第9次調査 | とっとりけんよなごし
鳥取県米子市
めぐみいせき
目久美町 | 31202 | 2-13 | 35度
25分
9秒 | 133度
20分
44秒 | 2001.05.01
}
2001.12.14 | 1000m ² | 道路建設 |
| めぐみいせき
目久美遺跡
第10次調査 | とっとりけんよなごし
鳥取県米子市
めぐみいせき
目久美町 | 31202 | 2-13 | 35度
25分
8秒 | 133度
20分
43秒 | 2002.04.26
}
2002.12.18 | 800m ² | 道路建設 |
| 所在遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 目久美遺跡
第9次調査 | 生産遺跡
散布地 | 縄文時代
弥生時代
古墳時代
古代中世
近世 | | 畦畔、水路、足跡、土坑、
石列 | | 縄文土器、弥生土器、
土師器、須恵器、陶磁
器、石器木器、金属器 | | |
| 目久美遺跡
第10次調査 | 生産遺跡
散布地 | 縄文時代
弥生時代
古墳時代
古代中世
近世近代
現代 | | 水田跡、水路、足跡、土坑、
焚火跡 | | 縄文土器、弥生土器、
土師器、須恵器、陶磁
器、石器木器、金属器、
ガラス製品 | | |

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 4 5

目久美遺跡Ⅸ・Ⅹ

2003年3月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団

〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1

TEL 0859-22-7209

印刷 (有)米子プリント社